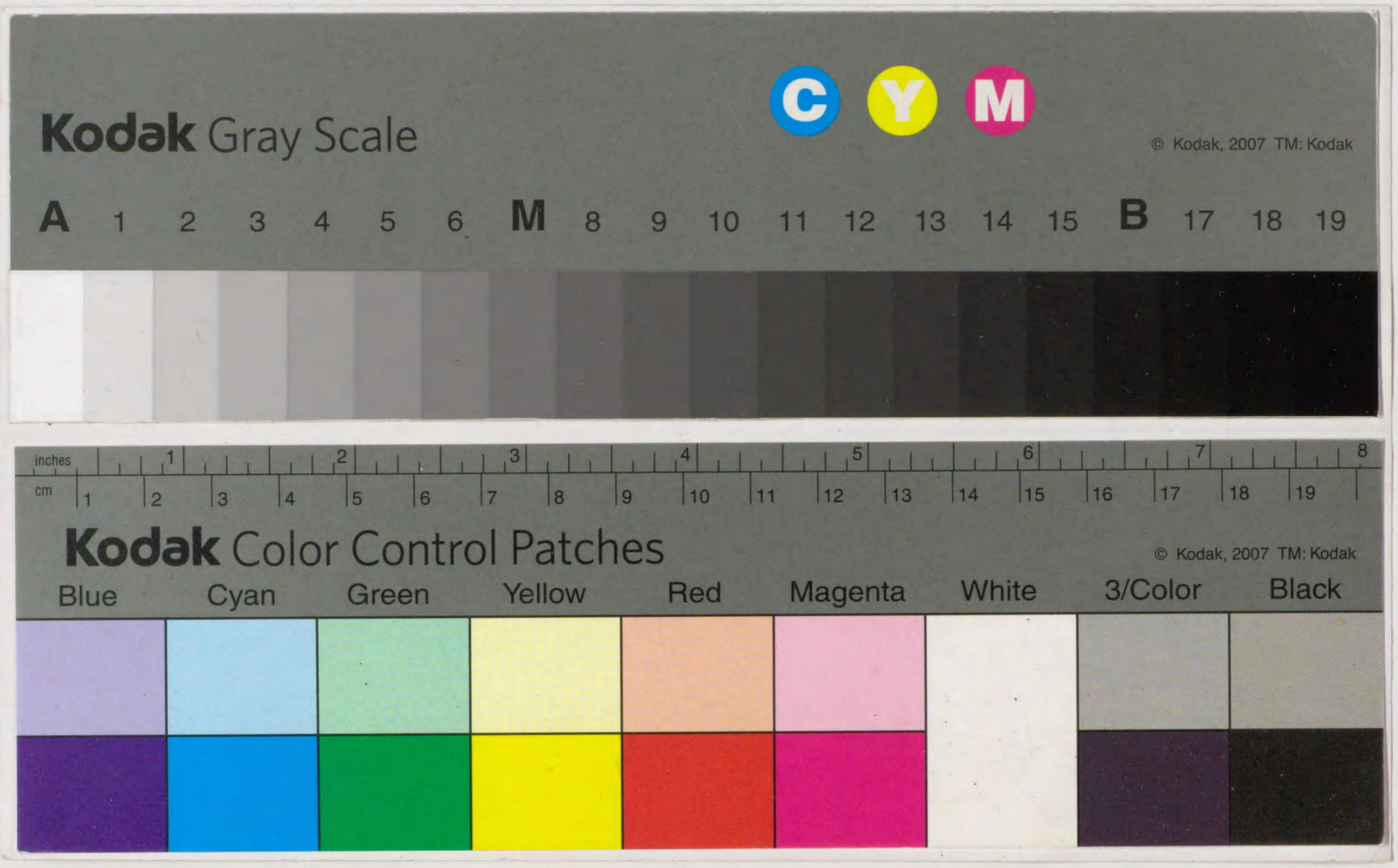

534
534-81
12005014988 68

200

批判研究 博士人物

醫科續篇

井關九郎著

昭和二十一年一月 帝國圖書

534-81

批判研究 博士人物 醫科續篇に就いて

井關九郎

本書は題して「批判研究・博士人物・醫科續篇」と云ふ。本書の前篇は先年既刊、絶大の禮讃と感激と期待とを以て嘖々たる好評を受け、本書の反響が、如何に學界乃至醫界に便益と刺戟とを與へ、又如何なるセンセーションを起したるか、且又、一般社會に如何に多大の稗益を與へたるかは、一般識者に普く認めらるゝ所にして、本書編纂の趣旨並びに刊行の目的に就ては、既に識者の諒解を得、前篇に遺憾なく愚見を細盡縷述しあれば、敢て玆に贅せざるまでも、本篇完成に當りて、所感の一片を披瀝して聊か之を補足せんとす、冀くば、幸に之を諒とせられんことを。

本篇は即ち其の續篇として、總て前篇の趣旨目的を踏襲せるが、更に其の内容を敷衍して學究的文獻に重きを置き加ふるに全科專門の大家たる各博士より寄與せられたる感想をも收錄せり。素より醫文化貢獻の意味に於て、淺學菲才を顧みず、公平愼重に執筆せるも、如何にせん、登場、員數壹千貳百拾壹名に上り、多士濟々たる大量人物評にして何人も追隨を許さゞる所なれば、其の複雜にして、各々學系專門分科を異にし、各人の性質、その形影同じからざるを、批判研究の態度を以て、銘々に就ての短評を試みたるは、門外漢たる著者に取りては、餘りに大膽にして、或

は粗漏の免かれざるを遺憾とすれども、大體に於て、夥しき材料より得たる、銘々の學歴、閲歴、學位主副論文、其他の研究事項等を根本資料とせり。

從つて各博士に就ての認識を得る上に便利にして、學究事項と併せて大體の輪廓及び性格の一班をも知るに足り、學者相互の相識上絶好の參考資料たるは勿論、所謂、溫古知新の眞髓に觸れて、學者相互の理解と尊重心とを一層濃厚ならしめ、又獨學奮鬪、立派なる篤學者として、立志傳的典型たる人物も亦尠かざるを以て、頂門の一針として、後學の採つて學ぶべき後進誘拔の活資料たるもの決して少しとせず。殊に又臨床家に取りては、一體誰は如何なる研究にて學位を得、如何なる領域に就てどれだけの經驗あり手腕あるか、またその履歴は必ずしも臨床の力と比例するものにあらざるまでも、或は相互に患者を紹介し、或は相談を受けることある場合の如きは、相互に非常に不利不便を感じつゝありとは、是迄多くの博士より異口同音に屢々聞及び居る所なれば、相互にその大體を相識し得らるゝことは、頗る力あることにして、學者同士未知の間にも相互に利せらるゝこと尠かざるを信ず。況んや各博士が研鑽多年、努力の結晶たる、貴重なる研究業績の對比檢索の必要なるは論を俟たざるに於てをや。

一面には又た現代の一般家庭が要望しつゝある、未知の各科專門博士に就ての認識を最も正確に得せしむる上に、無言の指導者ともなり、相談相手ともなり、顧問ともならしめて、良醫撰擇上の調査資料として、一般社會にも普く本書を提供せんとする所以也。由來新聞、雜誌其他にて多く聽く所なるが、往々醫師の誤診又は誤まりたる診斷手術を受けたる爲め、却つて病氣を難病に導き、甚だしきに至つては死にいたらしめたる事實再三ならず、畢竟患者が其の醫師に就ての專門、學歴、閲歴等々知らずして、認識の不足より生ずる失態に歸せざる可からず、此點に就ては患者自らが大に自覺反省するの必要あると同時に、診療を受けんとする前に先づ豫め此等の點につき下調べをなし、充分の認識を得ることの必要を痛切に感じ、一般家庭に深く警告する所以なり。

若し夫れ、各博士の感想に至りては、十人十色、いづれも其の言熱烈にして肺腑より出で、名論卓說、興趣津々として盡きず。要は現代學界乃至醫師界に對する、各博士の感想或は抱負を忌憚なく吐露せられたるものにして、現今凡ての世相が非常時に當りて、醫業も亦頗る苦境に直面して居る今日、學界の覺醒、並びに醫師界淨化の叫と共に尊嚴すべき學位に伴ふ人格尊重の聲は、最も心强く感ぜられ、期せずして殆んど一致せるが如く、何れも斯界の權威たるべき、博士界を代表せる名說にして、確かに世相に反影する代表的警句として、相互に研究的態度を以て三思傾聽すべきに値し、同時に一服の淸涼劑たるは、亦以て他山の石として、自他共に得る所尠しとせず。

如上の意味に於て、本書の厚生利用の途は、獨り學界乃至醫界のみと言はず、極めて廣汎なる範圍に亘りて、弘く一般社會に普及し活用せられんことを切望して止まざる也。

終りに臨み、今此に、滔々たる醫界の天下、濟々たる醫博人物の健在を祝し、幷せて今後多々益々、學位獲得者の續出せんことを、爲邦家學界、翹望して止まざる也。但だ此際、醫學博士の全部を登載執筆するまでの力遠く及ばず是にて擱筆の止むなきを遺憾とすれども、猶引續き、續々篇を執筆して、後日更に之を補充し、普く江湖に紹介せんことを期す。是れ蓋し、一に醫文化貢獻を事とするのみならず、又以て、博士の精華を天下に發揮すると同時に、一面また他山の戒とする所以ならずんばあらず。

昭和拾年歲暮

著者謹識

凡例

一、本篇は、去昭和七年八月、始めて之れが計畫を公表して以來、編纂に着手し、畢生の心血を注ぎ、不休の努力と誠意誠實を盡して、愼重執筆に沒頭せるも、斯間、多士濟々、極めて大量人物に亘る、資料の調査、其他に案外の苦心と、時日と、手數とを要せる爲め、完成までに、計らずも意外の遷延を來たせるを、甚だ遺憾とす。

二、本篇の根本資料は、著者が畢生の事業たる「大日本博士錄」の資料に併せて、更に新らしく博士諸賢より直接提供を受けたるものを基礎とせり。批判の繁簡、精疎、適否は、固より其の宜しきを得ざるものあるならんも、著者の立場より人物を本位として執筆せり。是れ蓋し、輓近、博士に對する人格の向上尊重を益々高調するの秋、著者としては、飽迄、人物本位を憧憬して止まざれば也。

三、尊重すべき感想に至りては、特に寄與せられたる博士諸賢の厚意に依るものにして、著者の最も光榮とする所也。著者は玆に謹みて、博士諸賢の厚意を多謝し、深甚の謝意を表す。

四、本篇は、舊臘中に刊行の豫定なりしを以て、本文記載中の年齢は、總て昭和十年を以て起算せるも、遺憾ながら印刷終に間に合ひ兼ねたれば、本年より觀れば年齢の計算上一歲少くなり居れり、幸に諒とせられよ。

五、記述は敬稱を廢し順序不同にして、分科專門別の中には、多少粗漏の免れざるものあるべしと雖も、多く專門中の特に長じたる方に編入することに努めたり。

昭和十一年一月

著者謹識

批判研究

博士人物

醫科續篇目次

（順序不同）

內科

胃腸病科、呼吸器病科、血行器病科、新陳代謝科、腎臟病科、神經精神病科、傳染病科、物理療法科、レントゲン科

佐藤幸三……一
齊藤精一郎……二
菅沼清次郎(呼)……四
横田道之助……五
千葉叔則……六
坂上弘藏(呼)……七
西方時雄……八
小峰茂之(神)……九
金井德二郎……一〇
內田三千太郎(傳)……一一
渡邊裕(呼、胃)……一三
戸山昂造(血)……一四
渡邊喜三(呼)……一五
鈴木芳夫(呼)……一七
大久保九平……一八
太細壽郎(呼)……一九
梅田嘉四郎……二〇
百瀨宗……二一
三木良英……二三
多田嘉德……二三
齊藤茂吉(精)……二三
野村禎一(呼)……二五
山口清治(血)……二六
小島克巳(傳)……二七
中島駒次郎(小、胃)……二八
野村仁(小)……二九
星野信夫(呼)……三〇
橋本久(小、レ)……三一
青山敬二(呼)……三三
小關光尙(精)……三三
加藤傳三郎……三四
飯田博……三五
加地義雄……三六
金子愼吾……三七
加藤普佐次郎(神)……三八
近衞忠實(血)……三九
宮下耕圃……四〇
荒木齊造(神)……四一
關忠英……四三
中澤房吉……四四
得田慶市(小)……四五
林良材……四六
田口議一郎……四七
前川齊……四八
加藤誠治(呼)……四九
名取博三(小)……五〇
鴻上慶治郎(呼)……五一
諫山直……五二
中西春一……五三
山本誠一……五四
前田實……五六
小川清次……五六
安藤克巳……五七
小畑郁(レ、物)……五八
服部旦(胃)……五九
卷勝之助(呼)……六〇
藤卷要……六一
空地純一(新)……六二
倉上由……六三
松山俊胤(小)……六三
一本杉虎二(物、傳)……六四
小口敏英……六五
住吉彌太郎(呼)……六六

萩原良一郎(呼、血)……六六
樋口榮……六八
甲斐惣太郎(呼、新)……七〇
田代重……七一
堀内潔(小)……七二
武部俊雄……七三
木村修三……七三
黒川清之……七四
千賀春吉(小)……七五
井關包奐……七六
神林美治……七七
木下友敬……七八
宮田訂……七九
菊地泰助……八〇
伊藤謙(呼)……八一
佐野金吾(胃)……八二
横尾秋夫……八三
小林幸治郎(胃)……八四
木村直樹(神、精)……八五
横田治郎(胃)……八六
田中朝三……八八
矢野中(呼、胃)……八九
加藤芳治……九一
青木甲午郎(胃、外)……九二
鈴江茂平……九三
道菅通久……九四
八木金之丞……九四
大村幸一(呼)……九五
佐伯貞七……九五
山崎翁……九六
高橋皓……九七
小山諒(小)……九八
鈴木元晴(物、レ)……一〇〇
野口猪之助……一〇一
小野健治……一〇二
南廣賛(呼)……一〇三
椎名泰三(呼、胃)……一〇五
井上門司(呼)……一〇五
高龜良樹(呼)……一〇七
福谷温……一〇八
山口友孝……一一〇
西村利雄……一一一
中村業藏……一一三
糸川欽也(呼)……一一三
日野三郎(胃)……一一四
中澤裕康(呼、新)……一一六
三澤敬義(物)……一一八
戸田亨……一一九
黒川惠寛(皇漢)……一二〇
久野脩三……一二二
井上猛夫(物、レ、新)……一二三
伊東常太郎……一二四
森半兵衞(神)……一二四
佐藤惇一(呼、神、レ)……一二五
小林安宅……一二五
渡邊治雄……一二六
內藤八郎……一二七
村田昇清(傳)……一二七
菅原正……一二九
太田賢一郎……一三〇
岩田三史(細)……一三一
松本憲夫……一三二
馬島廣(小)……一三三
井村英次郎(神)……一三四
渡邊卓郎……一三五
柳澤贊治……一三六
齋藤周藏……一三七
田村靜顯……一三八
奧田喜久三……一三九
佐藤要人……一三九
橋本欽治……一四〇
森文香(外、耳)……一四一
中山喜美雄……一四二
吉岡都……一四三
松本章太……一四四
古波倉正榮(小、レ)……一四四
宇賀田爲吉……一四六
松田正二(神)……一四六
大角眞八……一四八
劉陸一……一四八
恒次博四郎(胃)……一四九
柴山義雄……一五〇
細谷誠(神、精)……一五〇
服部彌二郎……一五一
柳金太郎……一五二
藤井靜雄(血)……一五三
小林藤治(呼)……一五四
龍治節三(血)……一五五
岡通……一五六
平川廣(胃)……一五六
山內正……一五七
若林英次(呼、胃)……一五八
鮫島啓之助……一五九
櫻井喜吉(呼、神、新)……一六〇
家弓茂吉……一六二
壁島美明(呼、胃、新)……一六二
河野三千代(呼)……一六三
谷高三郎(呼)……一六四
岡壽郎(呼、神)……一六五
森田澄一……一六六
小川東洋(呼)……一六七
中井龍彥(神)……一六八
古川利雄……一六八
前田毅(呼)……一六九
野嶽利七……一七〇
井原義定(呼)……一七〇
高橋喜一……一七一
井上健太郎(呼)……一七二

芳賀竹四郎……一七三
西村俊一(呼、新)……一七四
原志免太郎(灸)……一七五
石川友示(呼)……一七七
加藤勝三……一七八
松永茂助(呼)……一七八
奧田瑞穗(呼、胃)……一七九
尾河順太郎(血)……一八一
岡本壽太(呼、胃、新)……一八一
清水能澄(呼)……一八二
大沼貞藏……一八三
北村邦太郎……一八四
小山義作(呼)……一八五
吉住好夫……一八六
高良武久(精)……一八七
中條五六(小)……一八八
石山暢昂(新)……一八九
村上鼎(血)……一九〇
新谷實男(血、神、胃)……一九〇
小寺彌彥……一九一
土田均(小)……一九二
須之內權三……一九三
森本正好……一九四
河崎貫一(呼)……一九五
橫地紀一……一九六
土田誠一(神)……一九七
中島靜夫……一九七
村尾千之(呼)……一九八
湯淺大太郎(小)……一九九
式場隆三郎(精)……二〇〇
小今井本次……二〇一
河合信三(物)……二〇三
劉清井(小)……二〇四
小島井讓(神)……二〇五
西元彥衞……二〇五
宮寺耕一(呼、胃)……二〇六
辻川健次(呼)……二〇七
渡部喜平……二〇七
田村忠雄(神、精)……二〇八
三井田續(小)……二〇九
根本瑛(小)……二一〇
西尾恒敎(小)……二一一
林佐源次(レ)……二一二
齋藤平義智(神)……二一三
岩澤治義……二一三
藤崎公道……二一四
秋山寅雄(胃)……二一五
松永清夫(呼、血)……二一六
大鹿隆一……二一七
吉村重雄(呼、胃)……二一七
吉栖生一(呼、小)……二一八
瀧野憲照(神、精)……二二〇
岩井登門(胃、新)……二二一
本田建義(小)……二二三
戸早幾太郎(呼)……二二三
小田壽雄……二二四
伊藤幸雄……二二五
鳥居邦康……二二六
小延俊雄……二二六
玉木梧郎……二二七
金崎啓俊(物)……二二八
大橋矢(呼、レ、小)……二二九
吉澤五郎(胃)……二二九
松岡祐次……二三〇
佐藤要(血)……二三一
小堀卿太郎(胃)……二三三
塚本登(呼)……二三三
五十嵐久雄(胃)……二三四
有馬一雄……二三四
盛永新作(小)……二三六
內藤民治(呼、胃、小)……二三六
澁谷創榮(呼、小)……二三七
岡崎祇容(胃、呼)……二三八
八田俊之……二三九
小辰克平(呼)……二四〇
本田良靜……二四〇
原一雄(神、物)……二四二
白川玖治(小)……二四三
左座金藏(精)……二四四
井上高雄(小)……二四五
小田要……二四七
宮軒安太郎(神、精)……二四七
若月館一……二四八
井上隆朝……二五〇
神谷德雄(呼、血)……二五一
井田正二……二五一
白井豹(呼、血)……二五二
猪木脩治……二五三
鈴木達……二五四
岡本圭三(呼)……二五五
中川雅美(小)……二五六
三浦信之(神、精)……二五七
井上浩(呼)……二五七
仁藤隆作(呼、小)……二五八
佐藤千三郎……二五九
根本六郎……二六〇
木村亮藏(呼)……二六一
川勝龍三……二六二
松浦光清……二六二
廣川重男……二六三
茅野要治(胃、呼)……二六四
八木重喜(呼)……二六五
玉田政助……二六七
丹羽喜隆……二六七
河村敬吉……二六八
落合國太郎……二六九
鈴木武美……二七〇
坂田春男……二七一

梅田薫（物）……二七二
高岡重雄（胃）……二七三
釜谷俊郎……二七四
高村弘量……二七五
佐藤亭……二七五
末松務……二七六
倉島正平……二七七
小川篁……二七九
津田稔（呼）……二八〇
二本松錠（神、精）……二八一
成川權二郎……二八二
松野松治（小）……二八三
高須正末……二八四
劉先登……二八五
盧基舜（胃）……二八五
上沼健衞……二八六
平松洋平（呼）……二八七
奥村尙輔（傳）……二八八
宮城盛次（小）……二八九
伊東節（呼）……二九〇
前原義雄……二九一
吉川弘一……二九二
津下百太（呼、胃）……二九二
荒木英一……二九三
柳下彥雄……二九四
勝沼六郎……二九五
戴神庇（胃）……二九六
八木忠亮……二九八
柏木俊三……二九九
金子玄策……三〇〇
西村福太郎……三〇一
日下仙次（胃）……三〇二
阿部謙涉（物、レ）……三〇二
大堀泰一郎……三〇三
青井深（呼）……三〇四
堀田新三（神）……三〇五
濱邊正彥……三〇五
坪內直道（小）……三〇六
齋藤弘……三〇七
龜尾丹一……三〇八
梅野正巳……三〇九
武野一雄（精）……三一〇
岡田强（精）……三一一
櫻木茂……三一一
原田綱橋……三一二
佐久間太（小）……三一二
氏平繁……三一三
西脇得三……三一四
橋本廣次（外）……三一六
南義雄……三一六
平谷信三郎（呼）……三一七
朝山種光（神、精）……三一八
神宮良一（癩）……三一九
星多聞……三二〇
井林清治……三二〇
頴川尙和……三二一
石川景親（呼、傳）……三二三
遠藤仁一郎（呼）……三二四
鈴木定藏……三二五
西庵久楠（胃、神）……三二六
竹居光積……三二七
木下正之（呼）……三二八
中村英夫……三二九
大島芳生……三三〇
若井七郎（物、小）……三三一
橫田素一郎（物、新）……三三二
岡本广太……三三三
藤井正雄（小）……三三四
阿曾三樹……三三五
松枝新（胃、神）……三三六
杉本清治（神）……三四〇
桑島要……三四一
吉村藏……三四二
百瀨五郎……三四三
金東益（呼、胃）……三四四
中島忠……三四五
高須勇（小）……三四五
小菅賢……三四六
佐藤秋夫……三四六
小原敏雄……三四七
河西澄……三四八
高見亭……三四九
高橋省三郎（呼）……三五〇
金銓植（神）……三五一
手島五洲……三五二
高田重正（呼）……三五三
窪川經廣……三五四
中尾幸夫（胃、新）……三五五
仁科信太郎……三五五
後藤爲次（胃）……三五六
高楠了超……三五七
中山元太郎……三五七
山縣健二……三五八
大平昜……三五八
北村信治……三五九
柳澤德義（呼、胃）……三五九
川井銀之助（胃）……三六〇
池田東洋……三六一
鯛瀨國一（細）……三六二
藤原政雄……三六二
鈴木憲二……三六三
箱崎孝平……三六三
山本徹雄（呼、血）……三六四
上野俊昌（熱、衞）……三六五
羽鳥重郎（熱、衞）……三六七
田中吉左衞門（血管）……三六九
瀨木嘉一（理、レ）……三七〇
阿部政三（神）……三七一

田中一雄（呼）……三七三
皆見規夫（神）……三七四
五井義雄……三七五
岸田徵……三七五
薄元茂夫（レ）……三七六
小松原謙三……三七七
勝田功夫（胃、小、產）……三七七
田中健吉（胃）……三七八
湊川孟猷（呼）……三七九
池上芳次郎……三七九
佃毅……三八〇
伊藤久榮……三八〇
向野定一（物、レ）……三八一
西田芳雄……三八二
村木金之助……三八二
富澤鐵……三八三
幸島春夫……三八四
吉川新次郎（呼）……三八五
桑野佐源太（胃）……三八五
大井司……三八六
中村善雄（呼）……三八六
平井進……三八七
佐々木謙（呼）……三八七
小泉透（小）……三八八
齋藤齊……三九〇
豐島勝夫（小）……三九〇
田村實眞……三九一
海輪十二（レ、物）……三九二
工藤文雄（新）……三九三
荒川信次……三九四
野島泰治（癩）……三九五
大庭榮雄（細、免）……三九六
櫻井虎雄……三九七
島誠郁（呼）……三九七
吉田元昭（呼）……三九八
於保泰造（胃）……三九九
西郡彥嗣……四〇〇
宮本延（小）……四〇一
園田幸雄（胃）……四〇二
猪原清（精神）……四〇三
古屋貞造（小）……四〇三
林芳信（癩）……四〇五
高文龍……四〇六
關齋六……四〇七
中條元一（呼）……四〇八
大關幸一（呼、泌、血）……四〇九
山本清太郎（呼）……四一〇
堤貞雄……四一一
久野順二郎……四一二
田原利崇……四一二
家坂正淸（肛）……四一三
山崎達男……四一四
比企能達……四一四
量口憲三（呼）……四一五
筒井龍雄……四一七
持田治郎（精）……四一八
大山恭次郎（精）……四一九
若林宏（呼、レ）……四二〇
室勇三（小）……四二一
宮地伸一（呼）……四二三
福原文雄……四二三
山口夷甫（細）……四二四
吉野高善……四二五
駒井一雄（鍼、小）……四二六
柳澤朝一郎（外）……四二八
谷澤貞次郎（小、呼）……四二九
鈴木三郎……四三〇
重信正道（耳）……四三一
武田義男……四三二
藤田繁雄（呼）……四三二
本多秀貫（呼、胃、レ）……四三三
萱場次郎（呼）……四三四
加藤淸彥（物）……四三六
細見新治（精）……四三六
大竹藤一（胃）……四三七
牧野寅三（胃）……四三七
渡邊靜（呼）……四三八
矢野豐（呼）……四三九
叶山常吉（神、精）……四四〇
松野孝一（胃、小）……四四一
石田宏（胃）……四四二
城谷文四郎（傳）……四四三
螺良四郎……四四四
荒井惠……四四五
吾妻俊夫……四四六
菊池武彥……四四六
柴田博衞……四四七
高崎文雄……四四七
豐島順吉（胃）……四四八
鈴木正彥……四四九
日置陸奥夫（呼）……四四九
今川芳樹……四五〇
的場克巳（胃）……四五一
戶木田菊次（小）……四五二
平田梅治……四五三
渡邊鍵太郎（神、精）……四五四
津野田誠吾……四五五
新井寬治……四五五
神座李蹊……四五六
原田三代三……四五七
石田稻男……四五七
古澤平作（精）……四五八
中山幹（呼、胃）……四五九
木場武雄（胃）……四六一

外科

内臓外科、整形外科、腎臓外科、蟲様突起外科、軍陣外科

大野良藏（内臓）……一
柳壯一……二
桂三友（整）……三
七田龍雄（内臓）……四
首藤守彦（内臓）……五
西川義英……六
中村男也……七
石山福二郎（内臓）……八
鈴木諒爾（整）……九
河合五郎……九
細見憲（軍）……一〇
前田和三郎（整）……一一
赤松得二郎……一三
土屋直義……一三
清水亮（蟲、腎）……一四
中村愛助……一六
伊藤幸憲（泌）……一七
宮路善久……一九
藤田宗一……二〇
兒玉周一……二一
伊藤肇……二三
村尾圭介……二三
坂田敬之（レ）……二四
野村久中……二五
加藤豐彦（内臓）……二六
高木四郎……二七
筒井省二……二八
陰山実（整）……二八
藤田小五郎（創傷）……二九
石川一佐久（内臓）……三一
名倉英二（整）……三二
鈴木保壽……三三
木日文……三四
崔……三四
岡田實秋（蟲様）……三六
泉山幸吉……三七
渡邊完（内臓）……三八
松岡元治郎（整）……三九
卜部義雄（内臓）……四一
今吉政吉……四三
下川繁次（内臓）……四四
浦上愛夫（腹腔）……四五
小林大乘（内臓、整）……四六
目良亮衛（レ）……四七
闘市……四八
吉富正一……四九
岡崎儀四郎（内臓）……五一
別所正恭（整）……五二
劉四朗……五三
宮田量之助……五四
百瀬丑之助（内臓）……五五
來須正男……五六
下村一郎（肛）……五七
飯森正夫（レ）……五八
佐藤盛二（皮、泌）……五八
池田孝男……六〇
亀谷敬三……六一
佐伯正之進（レ、内、泌）……六三
城島千尋……六四
中島明……六四
長坂清人（内臓）……六五
吉川春次郎（内臓）……六七
阿部恭一（整）……六八
古川久米……六九
高橋渉……六九
久米久之（整）……七〇
柿田俊光（皮、泌）……七二
村手順吉……七一
堀田愼之（レ）……七三
佐田正人（内臓）……七四
川崎禎太郎……七五
平山利弘（レ）……七六
寺師正樹（内臓）……七七
後藤誠（内臓）……七七
奥田義正……七九
文穆圭（内臓）……八〇
牧野内良（整）……八一
堤丈夫（内臓）……八二
末岡悟（内臓、整）……八三
島居環（レ）……八四
高橋正義（整、レ）……八五
雨田……八六
賈……八七
得能倫二……八七
増田正德（内臓）……八八
神川一格（整）……九〇
佐藤英一……九一
笠原親之助（内臓）……九二
町井秀成……九三
溝口壽雄……九四
鈴木孝二……九四
木谷裕寛……九五
上田寛一……九五
塚本亮太郎……九六
角田靜男……九六
荒木豐吉……九七
萩崎爲行（内臓）……九八
井出欽一……九九
中野秀孝……一〇〇
吉葉庄作……一〇一
遠藤正人……一〇二
富士原誠一……一〇三
山川忠雄……一〇四

福島正（整）……一〇四
仙波嘉清……一〇五
田平榮造（整）……一〇六
野副道彦……一〇七
佐々木猛次……一〇八
黒田倭民（産）……一〇八
林文……一〇〇
菊地正三……一一一
大井不二夫（甲狀腺）……一一三
西郷一惠……一一三
大園正人……一一三
宮崎松記（癲）……一一四
後藤覺平……一一五
福島慶之助……一一六
佐藤義房……一一七
根岸喜代助……一一八
松尾弘……一一九
成松清敏（整）……一二〇
大槻正路……一二一
李祖蔚……一二二
中村友輔……一二三
松波賢吾（内臓）……一二三
安田陸郎……一二四
石川昇（内臓）……一二五
齊藤眞……一二七
野谷昌臣……一二七
鳥居武雄……一二八
尹治衡（結核）……一二九
松井權平……一三〇
上田溫良……一三〇
若山要二（レ）……一三一
飯島清（整）……一三一
村上德治……一三二
西田次麿（内臓）……一三三
角田博……一三四
桐原眞一……一三四
岩田清臣（整）……一三五
熊埜御堂進……一三五
加藤清一郎（整）……一三六
志村國作……一三七
新藤輝雄（内臓）……一三八
片山國幸（整）……一三九
小田敬進……一四〇
江守彌次郎……一四一
伊東一生……一四一
三村忠雄（整）……一四二
中村喜重……一四三
田中義憲……一四四
今牧甲子男……一四五
大武喜代治（耳、婦）……一四六
安達安……一四七
長井忠（整）……一四九
岩藤良秋（内臓、創傷）……一五〇
竹村文祥（内臓、産）……一五二
長峰恒信（内臓）……一五三
金澤哲郎（整）……一五五
篠原一幸……一五六
葛原輝（内臓、レ）……一五七
行岡忠雄（整骨）……一五八
中根太郎（輸血）……一五九
渡邊一九（内臓、肛）……一六〇
角田英……一六一
佐藤秋義（内臓、整、耳）……一六三
櫻井芳香……一六四
村田文雄（生化）……一六五
金澤信太郎……一六六
中島定次（内臓）……一六七
朝比奈德一（内臓）……一六八
吉田定男（内臓）……一六九
三宅坦（整）……一六九
沖井磯吉（生化）……一七一
住田立（耳）……一七一
大野捷助……一七三
林堅藏（腎）……一七四
三藤寛（内臓）……一七五
岡崎卓一……一七六
日域旭丸……一七七

産婦人科

福井正（政）憲……一
太田鑒吉……五
山田一夫……六
山崎義男……八
北井幾八……九
山田康……一二
德橋豐信……一四
佐藤美實……一五
二宮亮吉……一六
玉川和……一七
櫻林格造……一八
中本完二……一九
增本誠一郎……二〇
松本操一……二一
鈴木甚吉……二二
石原俊士……二三
堺純雄……二四
忽滑谷精一……二六
堤庸三（小）……二七
堤辰郎……二九
島田廣……三〇
林一治……三一
山崎庄吉……三三
太田耕作……三四
森棟賢隆……三四

近江湖雄三……三五
伊藤喜平……三七
織田良一……三七
秋葉隆……三八
柳井昌憲……三九
古田恒二……四〇
井關恒……四〇
洲崎隆一……四一
石川榮助……四二
大木常松……四五
福島四郎(内)……四五
竹内信行……四六
佐藤登……四七
朝岡稻太郎……四八
太田作治郎……四九
富永謙……五〇
松本清治……五一
針谷武夫……五一
松浦海三……五二
中野理……五三
井上秀夫……五四
横井鎌吉……五五
永井力……五六
早田五助……五八
細野尙是……五八
中井卓次郎……五九
飯野憲……六一
武田正房……六二
野木愛三……六三
福田正材……六四
石田嘉四郎……六四
物部馨(内)……六五
櫻井菊三……六八
橋本吉藏……六九
古川治……六九
岩島覺……七〇
飯島近治……七〇
塚田洋……七一
三島肅三……七三
小笠原清……七三
水美登……七三
莊……七三
村上正雄……七四
田中泰作……七四
渡邊達三郎……七五
前田實……七六
田口熊雄……七七
村松正雄(内)……七七
中村みかゑ……七八
岡村舜三……七九
柴生田鐵策……八〇
屋代周二……八一
田所豐……八二
立石彌七郎……八二
小屋經雄……八三
阿部喜市郎……八三
小倉清太郎……八四
直江六三郎(外)……八四
森田源平……八五
馬場武夫……八六
井出ひろ……八七
寺尾敏行……八八
古屋清……八九
岩島覺三……九〇
內野總二郎……九一
松田孟吉(內)……九二
中川潤一……九二
澤田退藏……九三
阿部守成……九四
樋口一……九五
上田清……九七
竹村鉦一郎……九八
室原農夫藏……九九
田中勉(內、外)……一〇〇
饒村佑一……一〇一
加藤清吾……一〇三
竹內茂代……一〇四
宇多潤造……一〇五
藤田九万龜……一〇六
山元清一……一〇七
竹田文雄……一〇七
藤野幸太郎(小)……一〇八
櫟本憲孝……一一〇
黃演愼(外)……一一一
八木義一(內、病)……一一一
垂井駿……一一三
本四郎……一一三
堺田博雄……一一四
篠田秀男……一一四
須原耕三……一一五
大塚喜久藏……一一六
內野總二郎……一一七
松田孟吉(內)……一一八
中川潤一……一一八
澤田退藏……一一〇
阿部守成……一一〇
樋口一……一一一
上田清……一一三
竹村鉦一郎……一一三
室原農夫藏……一一三
田中勉(內、外)……一一四
饒村佑一……一一五
加藤清吾……一一六
竹內茂代……一一七
宇多潤造……一一九
藤田九万龜……一一九
山元清一……一二一
竹田文雄……一二二
藤野幸太郎(小)……一二三
櫟本憲孝……一二四
黃演愼(外)……一二六

磯野隣夫……一二七
空閑重秋……一二八
澤崎嘉衞……一二九
高敬遠……一四〇
下平淑……一四一
渡邊二三男……一四三
飯尾秀平(內)……一四三
深町朗安……一四三

小兒科

永井靜……一
磯部正雄……二
藤井秀旭……三
島信……五
奥藤重二……五
原田達三……六
三原吉裕……七
谷平……八
富田定壽……一〇
佐野伴治……一一
豐田順爾……一二
早川朋光……一三
大藤昌美……一四
中本良春……一七
小松通允……一七
長濱宗佶……一八
多田鑾……一八
洲崎敬三……一九
星騰吾(內)……二一
高橋寛……二一
久保田實……二三
肥爪貫三郎……二三
大野內記……二三
田中利雄……二四
小坂禮二……二五
福田十郎……二六
金子甚藏……二六
早野實……二七
高橋保……二八
布瀨七一郎……二九
桂島忠良(內)……三〇
和田彌三郎……三〇
恩地功……三一
堀木勇治……三三
木外……三三
伊藤景一……三三
磯田仙三郎……三四
西正孝……三五
小縣汎……三五
內藤和三郎……三五
佐藤隆一……三五
地憲……三六
岩淵要……三七
森岡信太郎……三七
小田美穩……三八
稻留藤次郎(內)……三八
杉野龍藏……三三
井上一郎……三三
五島博……三四
齋藤眞文……三五
竹內正明(內)……三六
津田博通(內)……三六
龜田躍(內)……三七
平野忠七……三八
高階修……三八
德丸喬……三九
酒井潔……三九
大脇和夫……三〇
久保德彌……三一
高木秀雄……三一
橋本秀樹(內)……三一
川吉次(內)……三一
內藤和三郎……三三
小縣汎……三三
森岡信太郎……三三
岩淵要……三四
俣野純夫……三四
飯田三郎……三五
村田廣次……三五

泉仙助……七六
志摩次郎……七六
大月齋庵(産)……七七
林務……七六
宮崎森治……七九
小原芳樹……八〇

耳鼻咽喉科

脇田政孝……一
西田文治……三
山口競……四
富田治郎……五
島居惠二……六
神尾友修……七
辰巳庄太郎……八
小野鑛造……九
高木慎……一〇
本田雄五郎……一一
關川一郎……一二
田中達三郎……一三
鰐淵源……一六
原田三杉……一六
岩田誠久……一七
富岡末吉……一八
西端驥一……一九

笠井經夫……二〇
森川政三……二一
中村萬里……二一
中村桂……二二
牧野敏雄……二三
稻見光……二四
荻野朝一……二六
林外男……二七
加藤直吉……二八
片山一良(内、醫化)……二九
倉田包雄……三一
小田大吉……三二
村上幸次……三三
河野敏之……三三
富田靖……三四
宮島信……三五
福田美……三六
花田清(外)……三六
西村義太郎……三七
田中芳次郎……三九
上田隼人……四一
木豐……四一
立本嘉範……四二
寺本惣七……四二
岩田……四三
神林悌一(内)……四三
大藤敏三……四四
須田二……四四
豐田邦……四五
北野伊八郎……四六

岸祐雄……四八
片山正一……四八
阿久根睦……四九
本肇……五〇
岡田清之輔……五二
只木良信……五三
田久保茂樹……五三
矢野原乃武(内)……五五
桑原良一……五五
窪田主一(内)……五六
增田芳次……五八
山下憲治……五九
梶浦毅四郎……六〇
金野巖……六一
吉原大輔……六二
遠藤秀雄……六四
伊藤實……六四
竹內讓……七
片山武一……四〇カ
安達與五郎……五レア
久保山高敏……二レク
生駒寅彦……三レチ
大和田政實……一〇ツ
三宅等……六
佐藤イクヨ……七
池田初一……六
曾木時夫……七四
丸輝宏……七五
恒川亮彦……四六
小松崎鴻……四七
竹村慶治……四八
中島……四九
米山高實……五〇
佐竹秀一……五三
今居三郎……五四
朝岡唯夫……五五
橫清太郎……五六
山本俺一郎……五七
森十司……五八
森島錄雄……五九
粂木穗積……六〇
片山雄……六一
富井清……六二
三口龍生……六三
和田彦作……六四
山田金吾(耳)……四五
川端季雄……一八
岡崎源治郎……二〇
中山直秀……二一
米山直也……二三
草川正……二三
藤井清信……二四
黑澤潤三……二四
五……二五
清水春松……二五
權次郎……二七
島村操……二八
大野新吉……二九
木宣……二〇
深水重助……三一
村榮……三三
茂木穗……三三
白玖壽……三三
梅野二久次……三四
川島薰……三五
佐古博愛……三五
石田松雄……三六
四倉信雄……三七
筒井德光……三八
北方了嚴……三九
田上清貞……四〇
松尾義雄……四二
辻泰視……四三
佐藤勉……四四

皮膚科泌尿器科

花柳病科、性病科、生殖器科

大和田政實……一〇ツ
久保山高敏……二レク
生駒寅彦……三レチ
片山武一……四〇カ
安達與五郎……五レア
伊藤實……六レイ
竹內讓……七レタ
船……九レツ
津留壽……一〇レハ
林廣吉……一レア
荒……一二
瀧田實(外)……一三
黑田通……一三
西谷長三……一三
池上豐……一四
重松平吾……一四
森涼……一六レモ
竹之內辰四郎……一七レテ
加門英夫(外)……一八レカ

長尾慶吉……一九
長谷川宗憲……二〇
石丸一……二〇
布施四郎……二一
江原猪知郎……二三
森山儀六……二三
傍島亘……二四
山本俊平……二五
脇元秀義……二六
尾形貞男……二七
吳元錫……二八
阿久津勉……二九
新井嗣雄……二九
村上甫……三〇
森部庫司……三〇
窪田歷三郎……三一
武市利雄……三二
鶯海元則……三三
鈴木才助……三四
鶴井保……三五
三輪春雄……三六
瀧川浩一郎……三七
池田統治郎……三八
千本信次……三九
德田道太郎……四〇
村上立男……四一
藤田裕……四二

坂本久雄……四三
田谷利男……四四
中村敏郎……四四
山之內秀三……四五
伊藤嘉夫……四八
松本九郎……四九
石津俊……五〇
相羽昭……五一

眼科

林雄造……一
鹿兒島茂……二
得能孝平……三
足利陸朗……四
瀨木本雄……五
梶川甚一……六
矢田清一郎……七
末盛……八
竹內正夫(內)……一〇
佐藤達彌……一一
伊藤信次……一三
畑文平……一三
船石晉一……一四
緒方清躬……一五

中島實……一七
廣瀨季雄……一八
松岡喬……一九
岡崎源治郎……二〇
中山直秀……二一
米山直也……二三
草川正……二三
藤井清信……二四
黑澤潤……二四
五……二五
清水春松……二五
島……二七
村……二八
大野新吉……二九
木宣……二〇
深水重助……三一
村榮……三三
茂木穗……三三
白玖壽……三三
梅野二久次……三四
川島薰……三五
佐古博愛……三五
石田松雄……三六
四倉信雄……三七
筒井德光……三八
北方了嚴……三九
田上清貞……四〇
松尾義雄……四二
辻泰視……四三
佐藤勉……四四

齒科

口腔外科

小野寅之助……一
佐野秀道……二
山田越二(解)……四

星野行恒（耳）……四
沖野節三……五
松田義美……六
中村平藏……八

醫史學科

醫事法制學科

廖溫仁……一
山崎佐……三

生理學科

笹川久吾……一
閼德潤……二
馬淵秀夫……三
福原武……四
清野信昌……五
賀維彥……五
朴泰煥……七
侯宗濂……七

醫化學科

生化學科

戸田茂……一
隈川八郎……二
赤松茂……三
藤田秋治……四
和田長作……四
倉田庫司……五
李錫申……六
寺岡森太郎……七
安田守雄……八

藥物學科

原三郎……一
東龍太郎……二
吳湯……三
森田林次……四
邱賢添……五
藤井美知男……六
岡西爲人……八
矢尾太郎……九
小林芳人……一〇

解剖學科

比較解剖學科、組織學科
胎生學科、細胞學科

富田朋介……一
安達島次……二
小池敬事……三
望月周三郎……四
石澤政男……五
高木純五郎……六
江崎四郎……七
鄭壹千……七
小池上春芳……八
小野直治……九
高木耕三……一〇
稗田憲太郎……一二
濱崎幸雄……一三
本田蘭……一五
小杉虎一……一六
竹內甲平……一六
二階堂一種（法）……一七
渡邊建……一九
森繁春（法）……二〇
中留金藏……二一
波多野輔久……二二
殷同壽……二四

病理學法醫學科

小喜多晴雄……一
大島福造……五
山口左仲……五
本田郁也……七
江口秀雄……八
兒玉誠……九
久保久雄……二

衞生學細菌學科

微生物學科、免疫學科
血清學科、熱帶病學科

渡邊義政（細）……一
寺田正中（細）……二
椎葉芳彌（傳、細）……三
黑田昌惠（傳）……四
小島三郎（細）……四
大坪五也（細）……五
矢崎芳夫（細、衞）……六
細谷省吾（細）……八
平野林（軍防）……九

二宮敬治（細、內）……一〇
北野政次（細）……一一
田澤芳三郎（細、衞）……一二
荻野純三（細、衞）……一三
桐林茂（寄生蟲、細）……一五
木村律郎……一七
原田四郎……一八
春日健造（微、免）……二〇
及川周……二一
渡邊邊（微）……二三
松村藍……二四
井上康治……二五
芥川信……二七
丸山芳登（微、傳）……二八
木村眞之助……二九
田邊操（微）……二九
吉田章信……三一
岡田道一（小）……三二
飯村保……三三
代田稔（微）……三四
石川光昭（細、衞）……三五
上村行彰……三六
高木乙熊……三七
木村正一……三八
秋元稔……三九
水島治夫……四〇
岡田良一（寄生虫、細）……四一
川上六馬……四一
延川靖……四二
鈴木秀夫……四四
家原毅男……四四
吉植精逸……四六
門馬健次（寄生蟲）……四七
玉木緝熙……四八
新畑愼（小）……四九
西野陸夫……五〇
並河汪……五一
石橋衞……五三
中本覺二……五三
三浦運一……五四

目次

終

人名索引

（内）内科、（外）外科、（産）産婦人科、（小）小兒科、（耳）耳鼻咽喉科、（皮）皮膚科、泌尿器科、（眼）眼科、（齒）齒科、口腔外科、（醫史、醫法）醫史學科、醫事法制、（生）生理學科、（醫化）醫化學科、（藥）藥物學科、（解）解剖學科、（病、法）病理學科、法醫學科、（衞、細）衞生學科、細菌學科

（以上各科別頁に依る）

五十音順

氏名	各科別頁
ア	
阿久津勉（皮）	二九
阿久根睦（耳）	四九
阿曾三樹（内）	三五
阿部喜市郎（産）	一〇
阿部恭一（外）	六八
阿部謙渉（内）	三〇三
阿部政三（内）	二七一
阿部守（産）	一一〇
安達島次（解）	二
安達安（外）	一四七
安達與五郎（皮）	五
安藤克巳（内）	五七
吾妻俊夫（内）	四四六
相羽昭（皮）	五一
青井深（内）	三〇四
青木甲午郎（内）	九二
青山敬二（内）	三二
赤松茂（醫化）	三
赤松得二郎（外）	一二
秋葉隆（産）	三八
秋元稔（衞、細）	三九
秋山寅雄（内）	二一五
芥川信（衞、細）	二七
朝岡稻太郎（産）	四八
朝岡唯夫（眼）	五五
朝比奈德一（外）	一六八
朝山種光（内）	三一八
足利陸朗（眼）	四
東龍太郎（藥）	二
雨宮修象（小）	三六
新井寛治（内）	四五五
新井嗣雄（皮）	二九
荒井惠（内）	四四五
荒川信次（内）	三九四
荒木英一（内）	二九三
荒木齊道（内）	四一
荒木豐吉（外）	九七
荒瀧實（皮）	一
有馬一雄（内）	三四
イ	
井上一郎（小）	六三
井上健太郎（内）	一七三
井上康治（衞、細）	二五
井上高雄（内）	二四五
井上隆朝（内）	二五〇
井上猛夫（内）	一二三
井上秀夫（産）	五四
井上浩（内）	二九七
井上門司（内）	一〇五
井關包奐（内）	七六
井田正二（内）	二五一
井出欽一（外）	九九
井出ひろ（産）	八八
井林清治（内）	三三〇
井原義定（内）	一七〇
井村英次郎（内）	一三四
伊藤喜平（産）	三七
伊藤景一（小）	五六
伊藤謙（内）	八一
伊藤幸憲（外）	一七
伊藤幸雄（内）	二三五
伊藤信次（眼）	一三
伊藤節（内）	二九〇
伊藤肇（外）	二三
伊藤久榮（内）	三八〇
伊藤實（皮）	六
伊藤嘉夫（皮）	四八
伊東一生（外）	一四一
伊東常太郎（内）	一二四
猪木脩治（内）	二五三
猪原清（内）	四〇三
生駒寅彦（皮）	三
生地憲（小）	五八
五十嵐久雄（内）	二三四
飯尾秀平（産）	一四三
飯島近治（産）	七〇
飯島清（外）	一三三
飯田三郎（小）	七五
飯田博（内）	三五
飯野憲（産）	六一
飯村保三（衞、細）	三三
飯森正夫（外）	五八
家坂正清（内）	四一三
家原毅男（細、衞）	四四
池上豐（皮）	一四
池上芳次郎（内）	三七九
池田孝男（外）	六〇
池田東洋（内）	三六一
池田統治郎（皮）	三八
池田初一（耳）	七六
諫山直（内）	五二
石川一佐久（外）	三一
石川榮助（産）	四二
石川治（産）	六九
石川景親（内）	三三
石川昇（外）	二五
石川友示（内）	一七
石川光昭（衞、細）	三五
石澤政男（解）	五
石田稻男（内）	四五七
石田嘉四郎（産）	六四
石田宏（内）	四四二
石田松雄（眼）	三六
石津俊（皮）	五〇
石橋衞（細、衞）	五三
石原俊士（産）	二三
石丸一（皮）	一〇
石山暢昂（内）	一八九
石山福二郎（外）	八
磯田仙三郎（小）	五六
磯野隣夫（産）	一三七
磯部正雄（小）	二
一本杉虎二（内）	六四
一丸輝宏（耳）	七五
櫟本憲孝（産）	一三四
泉仙助（小）	七六
泉山幸吉（外）	三七
糸川欽也（内）	一二三
稻留藤次郎（小）	六一
稻見光（耳）	二四
今居三郎（眼）	五四
今川芳樹（内）	四五〇
今牧甲子男（外）	一四五
今吉政吉（外）	四二
今井登門（内）	三一
岩井眞金（小）	五四
岩澤治義（内）	二一三
岩島覺三（産）	九一
岩田清臣（外）	一三五
岩田三史（内）	一三一
岩田惣七（耳）	四二
岩田誠久（耳）	一七
岩田龍生（耳）	七一
岩藤良秋（外）	一五〇
岩淵要（小）	七四
尹治衡（外）	一三九
股同壽（病、法）	二四
ウ	
上田隼人（耳）	四〇
上野俊昌（内）	三六五
上村行彰（細、衞）	三六
植村操（眼）	二八
氏平繁（内）	三一三
薄元茂夫（内）	三七六
内田三千太郎（内）	一一
内野總一郎（産）	一一七
梅田薫（内）	二七二
梅田嘉四郎（内）	二〇
梅野正巳（内）	三〇九
浦上愛夫（外）	四五
卜部義雄（外）	四一
漆原滋雄（耳）	六五
エ	
江崎四郎（解）	七
江口秀雄（病、法）	八
江原猪知郎（皮）	二三
江守彌次郎（外）	一四一
遠藤仁一郎（内）	三三四
遠藤秀雄（耳）	六四
遠藤正人（外）	一〇二
圓德潤（生）	二
オ	
小笠原清（産）	七三

小川清次（内）……五六
小川篁（内）……二七九
小川東洋（内）……一六七
小倉清太郎（産）……一一一
小田要（内）……二四七
小田敬進（外）……一四〇
小田大吉（耳）……三一
小田壽雄（内）……二三四
小田美穗（小）……六一
小野健治（内）……一〇三
小野鑛造（耳）……九
小野寅之助（齒）……一
小野直治（解）……九
小畑郁（内）……五八
小原敏雄（内）……三四七
小原芳樹（小）……八〇
小山諒（内）……九八
織田良一（産）……三七
緒方清躬（眼）……一五
尾形貞男（皮）……二七
尾河順太郎（内）……一八一
於保泰造（内）……三九九
大井司（内）……三八六
大井不二夫（外）……一一二
大木常松（産）……四五
大久保九平（内）……一八
大鹿隆一（内）……二一七
大島福造（病、法）……五
大島芳生（内）……三三〇
大角眞八（内）……一四八
大關幸一（内）……四〇九
大園正人（外）……一一三
大竹藤一（内）……四三七
大武喜代治（外）……一四六
大塚喜久藏（産）……一一七
大月齋庵（小）……七
大槻正路（外）……一三一
大坪五也（細、衛）……五
大藤昌美（小）……一四
大沼貞藏（内）……一八三
大野新吉（眼）……二九
大野捷助（外）……一七三
大野忠（小）……四六
大野内記（小）……二三
大野良藏（外）……一
大庭榮雄（内）……三九六
大橋矢（内）……二三九
大濱喜作（小）……五〇
大平晶（内）……三五八
大堀泰一郎（内）……三〇三
大山恭次郎（内）……四一九
大村幸一（内）……九五
大和田政實（皮）……一
大脇和夫（小）……六〇
近江湖雄三（産）……三五
太田賢一郎（内）……一三〇
太田鑒吉（産）……五
太田耕作（産）……三四
太田作治郎（産）……四九
太縄壽郎（内）……一九
及川周（衛、細）……二一
岡壽郎（内）……一六五
岡通（内）……一五六
岡崎儀四郎（外）……五一
岡崎祇容（内）……二三八
岡崎源治郎（眼）……二〇
岡崎卓一（外）……一七六
岡崎正（小）……五三
岡田清之輔（耳）……五二
岡田強（内）……三一一
岡田實秋（外）……二六
岡田道一（衛、細）……三三
岡田良一（細、衛）……四一
岡西爲人（藥）……八
岡村舜三（産）……一〇四
岡本圭三（内）……二五五
岡本广太（内）……三三三
岡本壽太（内）……一八一
沖井磯吉（外）……一七一
沖野節三（齒）……五
荻野純三（細、衛）……一三
荻野朝一（耳）……二六
奥田喜久三（内）……一三九
奥田瑞穗（内）……一七九
奥田義正（外）……七九
奥藤重二（小）……五
奥村尙輔（内）……二八八
鶯海元則（皮）……三三
落合國太郎（内）……二六九
恩地功（小）……三一

カ

加地義雄（内）……三六
加藤勝三（内）……一七八
加藤清彦（内）……四三六
加藤清一郎（外）……一三六
加藤清吾（産）……一三六
加藤誠治（内）……四九
加藤傳三郎（内）……三四
加藤豐彦（外）……二六
加藤直吉（耳）……二八
加藤秀雄（産）……八三
加藤普佐次郎（内）……三八
加藤芳治（内）……九一
加門英夫（皮）……一八
賀維彦（生）……五
甲斐惣太郎（内）……七〇
鹿兒島茂（眼）……二

賈雨田（外）……八六
家弓茂吉（内）……一六二
河合信三（内）……二〇三
河合五郎（外）……九
河西澄（内）……三四八
河崎貫一（内）……一九五
河野敏之（耳）……三三
河野三千代（内）……一六三
河村敬吉（内）……二六八
海輪十二（内）……三九二
海輪利光（小）……四八
柿田俊光（外）……七三
陰山宲（外）……二八
笠井經夫（耳）……二〇
笠原親之助（外）……九二
柏木俊三（内）……二九九
梶浦毅四郎（耳）……六〇
梶川甚一（眼）……六
春日健造（細、衛）……二〇
片山一良（耳）……二九
片山國幸（外）……一三九
片山正一（耳）……四八
片山武一（皮）……四
片山雄（眼）……六一
勝田功夫（内）……三七七
勝沼六郎（内）……二九五
桂三友（外）……三
桂島忠良（小）……三〇
金井德二郎（内）……一〇
金子玄策（内）……三〇〇
金子愼吾（内）……三七
金子甚藏（小）……二六
金崎啓俊（内）……三八
金澤信太郎（外）……一六六
金澤哲郎（外）……一五五
叶山常吉（内）……四四〇
釜本四郎（産）……一一三
釜谷俊郎（内）……二七四
壁島美明（内）……一六二
上沼健衛（内）……二八六
神尾友修（耳）……七
神川一格（外）……九〇
神林悌一（耳）……四三
神林美治（内）……七七
神谷德雄（内）……二五一
龜尾丹一（内）……三〇八
龜田讓（小）……六七
龜谷敬三（外）……六一
茅野要治（内）……二六四
萱場次郎（内）……四三四
川井銀之助（内）……三六〇
川勝龍三（内）……二二
川上六馬（衛、細）……四一
川口浩（産）……八五
川崎禎太郎（外）……七五
川島薫（眼）……三五
川地義松（産）……七六

キ

木下正之（内）……三八
木下友敬（内）……七八
木谷裕寛（外）……九五
木村修三（内）……七三
木村正一（衛、細）……三八
木村眞之助（衛、細）……二九
木村直樹（内）……八五
木村律郎（衛、細）……一七
木村亮藏（内）……二六一
菊池武彦（内）……四四六
菊地正三（外）……一一一
菊地泰助（内）……八〇
岸裕雄（耳）……四八
岸芳男（小）……三五
岸田徵（内）……三七五
北井幾八（産）……九
北方了嚴（眼）……三九
北野伊八郎（耳）……四六
北野政次（細、衛）……一一
北村邦太郎（内）……一八四
北村信治（内）……三五九
邱賢添（藥）……五
清野信昌（生）……五
桐林茂（細、衛）……一五
桐原眞一（外）……一三四
金鈴植（内）……三五一
金東益（内）……三四四

ク

久野脩三（内）……一三三
久野順二郎（内）……四一三
久保德彌（小）……六一
久保久雄（病、法）……二一
久保田實（小）……二三
久保山高紋（皮）……二
久米久之（外）……七〇
空閑重秋（産）……一三八
工藤文雄（内）……三九三
日下仙次（内）……三〇三
草川正也（眼）……二三
窪川經廣（内）……三五四
窪田主一（耳）……五六
窪田歷三郎（皮）……三一
葛原輝（外）……一五七
熊埜御堂進（外）……一三六
隈川八郎（醫化）……二
倉上由一（内）……六二
倉島正平（内）……二七七

倉田包雄(耳)……三二
倉田庫司(醫化)……五
來須正男(外)……三六
黑川惠寛(內)……一三〇
黑川清之(內)……七四
黑澤潤三(眼)……二四
黑田倭民(外)……一〇八
黑田涌(皮)……一二
黑田昌惠(細、衛)……四
黑田稔(小)……四二
桑島要(內)……三四二
桑野佐源太(內)……三八五
桑原良一(耳)……五五

コ

小池敬事(解)……三
小池上春芳(解)……八
小泉透(內)……三八八
小今井本次(內)……二〇一
小喜多晴雄(病、法)……一
小口敏英(內)……六五
小坂禮二(小)……二五
小島克巳(內)……二七
小島三郎(細、衛)……四
小島讓(產)……七八
小杉虎一(病、法)……一六
小菅賢(內)……三四六
小關光尙(內)……三三
小辰克平(內)……二四〇
小寺彌彥(內)……一九一
小鳥井讓(內)……二〇五
小西正孝(小)……五七
小延俊雄(內)……二六
小林安宅(內)……一三五
小林幸治郎(內)……八四
小林大乘(外)……四六
小林藤治(內)……一五四
小林芳人(藥)……一〇
小堀鉀太郎(內)……三三
小松通允(小)……一七
小松崎鴻(眼)……四七
小松原謙三(內)……三七七
小峰茂之(內)……九
小屋經雄(產)……一〇八
小柳重禎(小)……三三
小山義作(內)……一八五
木場武雄(內)……四六一
兒玉周一(外)……二一
兒島俊亮(小)……四三
兒玉誠(病、法)……九
古澤平作(內)……四五八
古波倉正榮(內)……一四四
近衛忠實(內)……三九
五井義雄(內)……三七五
五島博(小)……六四
吳元錫(皮)……二八
吳場(藥)……三
後藤覺平(外)……一二五
後藤爲次(內)……三五六
後藤誠(外)……七七
高敬遠(產)……一四〇
高文龍(內)……四〇六
高龜良樹(內)……一〇七
高良武久(內)……一八七
侯宗濂(生)……七
黃演煥(產)……一三六
幸島春夫(內)……三八四
鴻上慶治郎(內)……五一
駒井一雄(內)……四二六
金野巖(耳)……六一

サ

佐伯貞七(內)……九五
佐伯正之進(外)……六三
佐久間兼信(產)……七五
佐久間太(內)……三一三
佐古博愛(眼)……三五
佐々木謙(內)……三八七
佐々木猛次(外)……一〇八
佐田正人(外)……七四
佐竹秀一(眼)……五三
佐藤秋夫(內)……三四六
佐藤秋素(外)……一六三
佐藤イクヨ(耳)……七七
佐藤英一(外)……九一
佐藤項(內)……三三一
佐藤要人(內)……一三九
佐藤幸三(內)……一
佐藤惇一(內)……一三五
佐藤千三郎(內)……二五九
佐藤隆一(小)……五七
佐藤達彌(眼)……一一
佐藤亨(內)……二七五
佐藤勉(眼)……四四
佐藤登(產)……四七
佐藤盛二(外)……五八
佐藤美實(產)……一五
佐藤義房(外)……一一七
佐野金吾(內)……八二
佐野伴治(小)……一一
佐野秀道(齒)……二
左座金藏(內)……二四四
崔日文(外)……三四
齋藤精一郎(內)……二
齋藤茂吉(內)……二三
齋藤周藏(內)……一三七
齋藤齊(內)……三九〇
齋藤弘(內)……三〇七

齋藤平義智(內)……二三
齋藤眞(外)……一三七
齋藤眞文(小)……六五
西鄉一惠(外)……一一三
坂上弘藏(內)……七
坂田敬之(外)……二四
坂田春男(內)……二七一
坂元直夫(耳)……六七
坂本久雄(皮)……四二
酒井潔(小)……九
堺純雄(產)……二四
堺田博雄(產)……一二四
榊原益次郎(小)……三四
櫻井菊三(產)……六八
櫻井虎雄(內)……三九七
櫻井喜吉(內)……一六〇
櫻井芳香(外)……一六四
櫻木茂(內)……三二一
櫻林格造(產)……一八
笹川久吾(生)……一
鮫島啓之助(內)……一五九
澤崎嘉衞(產)……一三九
澤田退藏(產)……一三〇

シ

志摩次郎(小)……七六
志村國作(外)……一三七
淸水亮(外)……一四
淸水能澄(內)……一八三
淸水春松(眼)……二五
柴生田鐵策(內)……一〇五
柴田博衞(內)……四四七
柴山義雄(內)……一五〇
椎名泰三(內)……一〇五
椎葉芳彌(細、衛)……三
鹽野正家(產)……九三
式場隆三郎(內)……二〇〇
重信正道(內)……四三一
重松平吾(皮)……一四
日域旭丸(外)……一七七
七田龍雄(外)……四
篠崎憲吉(小)……四四
篠田秀男(產)……一二四
篠原一幸(外)……一五六
澁谷創榮(內)……三三七
島權次郎(眼)……二七
島信(小)……五
島誠都(內)……三九七
島田廣(產)……三〇
下川繁次(外)……四四
下平淑(產)……一四一
下平尙(產)……八四
下村一郎(外)……五七
首藤守彥(外)……五
莊寬(產)……九四
城島千尋(外)……六四
城谷文四郎(內)……四四三
白井豹(內)……二五三
白川玖治(內)……二四三
代田稔(細、衛)……三四
神宮良一(內)……三一九
神座李蹊(內)……四五六
新藤輝雄(外)……一三八
新畑愼(衛、細)……四九

ス

洲崎敬三(小)……一九
洲崎隆一(產)……四一
須小明(耳)……七二
須之內權三(內)……一九三
須原耕三(產)……一一五
末岡悟(外)……八三
末松務(內)……二七六
末盛進(眼)……八
菅沼清次郎(內)……四
菅原正(內)……一二九
杉田博(小)……四一
杉野龍藏(小)……六三
杉本淸治(內)……三四〇
鈴江茂平(內)……九三
鈴木憲二(內)……三六三
鈴木孝二(外)……九四
鈴木才助(皮)……三四
鈴木定藏(內)……三三五
鈴木三郎(內)……四三〇
鈴木甚吉(小)……三
鈴木外男(產)……五四
鈴木達(內)……二五四
鈴木武美(內)……二七〇
鈴木秀夫(細、衛)……四四
鈴木正彥(內)……四四九
鈴木元晴(內)……一〇〇
鈴木保壽(內)……三三
鈴木芳夫(內)……一七
鈴木諒爾(外)……九
住田立(外)……一七一
住吉彌太郎(內)……六六

セ

瀨木嘉一(內)……三七〇
瀨木本雄(眼)……五
關市衞(外)……四八
關齋六(內)……四〇七
關忠英(內)……四二
關與一(小)……五九
關川一郎(耳)……一三
關口三郎(產)……八三
仙波嘉清(外)……一〇五

千賀春吉(内)……一五五
千本信次(皮)……二九

ソ

曾木時夫(耳)……七二
園田幸雄(内)……一〇二
傍島亘(皮)……二二
空地純一(内)……六一

タ

田上清貞(眼)……四〇
田口議一郎(内)……四七
田口熊雄(産)……一〇〇
田久保茂樹(耳)……五三
田澤芳三郎(衛、細)……二三
田代重(内)……七一
田所豐(産)……一〇七
田中一雄(内)……三七三
田中一弘(耳)……七三
田中吉左衛門(内)……三六九
田中健吉(内)……三七八
田中泰作(産)……九七
田中達三郎(耳)……一三
田中勉(産)……一二四
田中利雄(小)……二四
田中朝三(内)……八八
田中芳次郎(耳)……三九
田中義憲(外)……一四四
田邊操(細、衛)……二九
田原利崇(内)……四二
田平榮造(外)……一〇六
田村靜顯(内)……一三八
田村忠雄(内)……二〇八
田村實眞(内)……三九一
田谷利男(皮)……四四
田嘉德(内)……二三
多田饗(小)……一八
多田神庇(内)……二九六
戴一(内)……三六二
鯛瀨國三(耳)……四四
大藤敏……二七三
高岡重雄(内)……二七
高木乙能(衛、細)……三七
高木四郎(外)……二七
高木純五郎(解)……六
高木秀雄(小)……七〇
高木耕三(解)……一〇
高木愼(耳)……二五七
高楠了超(内)……四四七
高崎文雄(内)……六八
高階修(小)……三四五
高須勇(内)……二四
高須正末(内)……三六三
高田重正(内)……二一
高橋寛(小)……一四四
高橋喜一(内)……一〇一
高橋皓(内)……九七
高橋省三郎(内)……三五〇
高橋次郎(小)……五一
高橋保(小)……二八
高橋正義(外)……八五
高橋涉(外)……六九
高見亨(内)……三四九
高村弘量(内)……二七五
瀧川浩一郎(皮)……二七
瀧野憲照(内)……二三〇
竹居光積(内)……三二七
竹内甲平(病、法)……一六
竹内茂代(産)……二七
竹内信行(産)……四六
竹内正明(小)……六六
竹内正夫(眼)……一〇
竹內讓(皮)……七
竹田文雄(産)……一三二
竹之內辰四郎(皮)……一七
竹村慶治(眼)……四八
竹村鉦一郎(産)……一三三
竹村文祥(外)……一五二
竹森啓祐(産)……七九
武井竹雄(小)……四
武市利雄(皮)……三一
武田正房(産)……六二
武田義男(内)……四三一
武野一雄(内)……三一〇
武部俊雄(内)……七三
只木良信(耳)……五三
辰巳庄太郎(耳)……八
立石彌七郎(産)……一〇七
谷高三郎(内)……一六四
谷平(小)……八
谷澤貞次郎(内)……四一九
谷川和(産)……一七
玉木緝熙(細、衛)……四八
玉木梧郎(内)……三二七
玉田政助(内)……二六七
玉田壽次(小)……三八
垂井駿(産)……一三

チ

中條五六(内)……一八八
千葉叔則(内)……六
千葉盛枝(小)……五二

ツ

津下百太(内)……二九二
津田博通(小)……六五
津田稔(内)……二八〇
津野田誠吾(内)……五五
津留壽船(皮)……九

立木豐(耳)……四一
塚田洋(産)……七一
塚本登(内)……二三
塚本亮太郎(外)……九六
繼博(小)……六三
佃毅(内)……三八〇
土田誠一(内)……一九七
土屋直義(外)……一三
土屋均(内)……一九二
辻泰規(眼)……四三
辻川健次(内)……二〇七
筒井省二(外)……二六
筒井德光(眼)……三八
筒井龍雄(内)……四一七
堤貞雄(内)……四一
堤丈夫(外)……八二
堤辰郎(産)……二九
堤庸三(産)……二七
恒川亮彥(眼)……四六
恒次博四郎(内)……一四九
角田英(外)……一六一
角田靜男(外)……九六
角田博(内)……一三四
螺良四郎(内)……四四四
坪内直道(内)……三〇六
鶴井保(皮)……三五

テ

手島五洲(内)……三五二
鄭壹千(解)……一
寺尾敏行(産)……八九
寺岡森太郎(醫化)……七
寺師正樹(外)……七七
寺田正中(細、衛)……二
寺本嘉範(耳)……四二
寺章吾(小)……五九
田

ト

戸木田菊次(内)……四五二
戸田茂(醫化)……一
戸田亨(内)……一一九
戸早幾太郎(内)……二三
戸山昂造(内)……一四
戸道菅通久(内)……九
梅野二久次(眼)……一〇
得田慶市(内)……一四
得能孝平(眼)……三
得能倫二(外)……九六
德田道太郎(皮)……一三四
德橋豐信(産)……四四四
德丸喬(小)……三〇六
德富井清(眼)……三五
富澤鐘(内)……三八三
富島嘉門(小)……四七
富島壽(小)……一〇
富田定治郎(耳)……五
富田朋介(解)……一
富永讓(産)……五〇
豐島勝夫(内)……三九〇
豐島順吉(内)……四四八
豐田邦二(耳)……四五
豐田順爾(小)……一三
鳥居邦康(内)……二二六
鳥居惠二(耳)……六
鳥居武雄(外)……一二八
鳥居環(外)……八四

ナ

名倉英二(外)……三二
名取博三(内)……五〇
內藤民治(内)……二二六
內藤八郎(内)……一二七
內藤和三郎(小)……七二
內藤榮(眼)……三
直江六三郎(産)……八七
中井卓次郎(産)……五九
中井龍彥(内)……一六八
中尾幸夫(内)……三五五
中川潤一(産)……一八
中川雅美(内)……一二六
中澤裕康(内)……一一六
中澤房吉(内)……四四
中島明(外)……六四
中島駒次郎(内)……二八
中島定次(外)……一六七
中島靜夫(内)……一九七
中島忠(内)……二四五
中島慶(眼)……四九
中島實(眼)……一七
中條元一(内)……四〇八
中留金藏(病、法)……二二
中西春一(内)……五二
中根太郎(外)……一五九
中野理(産)……五三
中野秀孝(外)……一〇〇
中村愛助(外)……一六
中村男也(外)……七
中村嘉藏(内)……一一二
中村桂(耳)……二三
中村喜重(外)……一四二
中村榮(眼)……三
中村敏郎(皮)……四四
中村友輔(外)……一二三
中村英夫(内)……三二九
中村平藏(齒)……八
中村萬里(耳)……二一
中村みかる(産)……一〇二

中村善雄(内)……三八六
中本覺二(細、衞)……五三
中本完二(産)……一九
中本良春(小)……三七
中山喜美雄(内)……一四二
中山直秀(眼)……二一
中山幹(内)……四五九
中山元太郎(内)……三五七
長井忠外)……一四九
長尾慶吉(皮)……一九
長坂清人(外)……六五
長濱宗佶(小)……一八
長峰恒信(外)……一五三
永井靜(小)……一
永井力(産)……五六
並河汪(細、衞)……五一
成川權二郎(内)……二八三
松成清敏(外)……一三〇

二

二階堂一種(病、法)……一七
二宮敬治(細、衞)……一〇
二宮亮吉(産)……一六
二本松錠(内)……二八一
仁科信太郎(内)……三五五
仁藤隆作(内)……二五八
丹羽喜隆(内)……二六七
饒村佑一(産)……一三五
新谷二郎(産)……九三
新谷實男(内)……一九〇
西庵久二(小)……三九
西尾恒楠(内)……三六
西川方時數(内)……二一
西郡彥雄(内)……八
西田宗英(外)……六
西田次嚴一(小)……四〇〇
西田文治(耳)……三五
西田芳雄(内)……三
西谷長三(皮)……一三
西野陸夫(細、衞)……五〇
西端驥一(耳)……一九
西村義太郎(耳)……三七
西村俊一(内)……一四
西村利雄(内)……一一
西村福太郎(内)……三〇一
西元彥衞(内)……二〇五
西脇得三(内)……三四

ヌ

忽滑谷精一(産)……二六
布上正則(小)……四八
布瀨七一郎(小)……二九

ネ

根岸喜代助(外)……一八
根本璞(内)……二一〇
根本豐治(産)……七四
根本六郎(内)……二六〇

ノ

野木愛三(産)……六三
野口猪之助(内)……一〇一
野島泰治(内)……四一五
野副道彥(外)……三九五
野嶽利七(内)……一〇七
野谷昌臣(外)……一三七
野村仁(内)……二九
野村禎一(内)……二五
野村久中(外)……二五
延川靖(衞、細)……四三

ハ

羽鳥重郎(内)……三六七
波多野輔久(病、法)……二三
芳賀竹四郎(内)……一七二
長谷川宗壽(皮)……二〇
林廣吉(皮)……一〇
林雄造(眼)……一
林芳信(内)……四〇五
林良材(内)……四六
萩崎爲行(外)……九八
萩原良一郎(内)……六六
箱崎孝平(内)……三六三
橋本吉藏(産)……六九
橋本欽治(内)……一四〇
橋本久(内)……三一
橋本廣次(内)……三一六
橋本秀榭(小)……七一
畑文平(眼)……一三
八田俊之(内)……二三九
服部彌二郎(内)……一五一
花田清(耳)……三六
濱崎幸雄(病、法)……一三
濱邊正彥(内)……三〇五
早川朋光(小)……一三
早田五助(産)……五八
早野實(小)……二七
林一佐源次(内)……三一
林堅藏(外)……二三
林外男(耳)……一七四
林務(小)……二七
林文(外)……七八
林廣吉(皮)……一〇
林雄造(眼)……一
林芳信(内)……四〇五
林良材(内)……四六

原一雄(内)……二四二
原志免太郎(内)……一七五
原三郎(藥)……一
原田四郎(衞、細)……一八
原田達三(小)……六
原田綱橋(内)……三二
原田三杉(耳)……一六
原田三代三(内)……四五七
原田雄吉(耳)……六八
服卷勝見(内)……五九
針谷武夫(産)……五一

ヒ

樋口一成(産)……二二
樋口榮(内)……六八
日野三郎(内)……一一四
比企能達(内)……四一四
肥爪貫三郎(小)……二三
稗田憲太郎(病、法)……一二
平井進(内)……三八七
平川廣(内)……一五六
平田梅治(内)……四五三
平谷信三郎(内)……三一七
平野忠七(小)……六八
平野林(細、衞)……九
平松洋平(内)……二八七
平山利弘(外)……七六
廣川重男(内)……二六三
廣瀨秀雄(眼)……一八

フ

布施四郎(皮)……二一
富士原誠一(外)……一〇三
深町朗安(産)……一四三
深水重助(眼)……三一
福井正(政)憲(産)……一
福島慶之助(外)……一一六
福島四郎(産)……四五
福島正(外)……一〇四
福田十郎(小)……二六
福田正材(産)……六四
福田美信(耳)……三五
福田武生……四
福原文雄(内)……四二三
福谷溫(内)……一〇八
藤井明人(産)……八二
藤井清信(眼)……二三
藤井秀旭(小)……三
藤井靜雄(内)……一五三
藤井正雄(内)……三三四
藤井美知男(藥)……六
藤垣喜重郎(皮)……四五
藤崎公濱(内)……二一四
藤澤好雄(小)……一六
藤田秋治(醫化)……四
藤田九万龜(産)……一三〇
藤田小五郎(外)……二九
藤田繁雄(内)……四三
藤田宗一(外)……二〇
藤田裕(皮)……四二
藤野幸太郎(産)……一三三
藤原政雄(内)……三六二
藤卷要之助(内)……六〇
堀一眼)……一四
堀米(外)……六九
堀雄(内)……一六八
堀慎之(産)……一〇
堀新三(内)……三〇五
堀四郎(産)……七七
堀木勇治(小)……三一
堀内潔(内)……七二
細谷省吾(細、衞)……八
細見憲(外)……一〇
細見治(内)……四三六
細野尙是(産)……五八
細野行恒(商)……四
星野信夫(内)……三〇
星野信夫(生)……三
馬淵秀齊(内)……四八
朴泰毅(内)……一六九
保坂孝焕(生)……七
星騰吾(小)……二一
星直利(小)……五〇
星多閑(内)……三〇
馬島廣(内)……一三三
馬場武夫(産)……八七
前川齊(内)……一六九
前田實(内)……五六
前田和三郎(外)……一一

前原義雄(內)……二九一
槇清太郎(眼)……三六
牧野敏雄(耳)……二三
牧野寅三(內)……四三七
牧野內良(外)……八一
增田正德(外)……八八
增田芳次(耳)……五八
增原由一(產)……七七
增本誠一郎(產)……二〇
俣野純夫(小)……七四
町井秀成(外)……九三
松井權平(外)……一三〇
松浦海三(產)……五二
松浦光淸(內)……二六二
松枝新(內)……三三六
松尾弘(外)……一一九
松尾義雄(眼)……四三
松岡喬(眼)……一九
松岡元治郎(外)……三九
松岡祐次(內)……二三〇
松田正二(內)……一四六
松田孟吉(產)……一一八
松田義美(齒)……六
松永淸夫(內)……二一六
松永茂助(內)……一七八
松波賢吾(外)……一三三
松野孝一(內)……四四一
松野松治(內)……二八三
松村肅(衞、細)……二四
松本九郎(皮)……四九
松本淸治(產)……五一
松本操一(產)……二一
松本章太(內)……一四四
松本憲夫(內)……一三三
松森明(耳)……六六
松山俊嵐(內)……六三
的場克巳(內)……四五一
丸山芳登(細、衞)……二八

ミ

三井田續(內)……二〇九
三浦運一(衞、細)……五四
三浦信之(內)……二五七
三木良英(內)……二三
三口龍生(眼)……六三
三澤敬義(內)……一一八
三島肅三(產)……七三
三杉義利(小)……四五
三原吉裕(小)……七
三藤寬(外)……一七五
三村忠雄(外)……一四二
三宅等(耳)……七六
三宅坦(外)……一六九
三輪春雄(皮)……三六
溝口壽雄(外)……九四
水美登利(產)……九五
水島治夫(衞、細)……四〇
皆見規夫(內)……三七四
湊川孟猷(內)……三七九
南廣齋(內)……一〇三
南義雄(內)……三一六
宮川知平(產)……七四
宮城盛次(內)……二八九
宮崎松記(外)……一二四
宮崎森治(小)……七九
宮地仲一(內)……四三
宮路善久(外)……一九
宮下耕圃(內)……四〇
宮島靖(耳)……三四
宮田訂(內)……七九
宮田量之助(外)……五四
宮寺耕一(內)……二〇六
宮軒安太郎(內)……二四七
宮本種美(耳)……六四
宮本延(內)……四〇一

ム

向野定一(內)……三八一
村尾圭介(外)……二三
村尾千之(內)……一九八
村上鼎(內)……一九〇
村上幸次(耳)……三三
村上立男(皮)……四一
村上德治(外)……一三三
村上亘(皮)……三〇
村上正雄(產)……九六
村木金之助(內)……三八二
村田昇清(內)……一二七
村田廣次(小)……七五
村田文雄(外)……一六五
村手順吉(外)……七一
村松正雄(產)……一〇二
室勇三(內)……四三一
室橋民衞(小)……五三
室原農夫藏(產)……一三三

メ

目良亮三(外)……四七

モ

茂木宣(眼)……三〇
持田治郎(內)……四一八
望月周三郎(解)……四
物部馨(產)……六五
籾木穗積(眼)……六〇
百瀨丑之助(外)……五五
百瀨五郎(內)……三四三
百瀨宗(內)……二一

森十司(眼)……五八
森繁春(病、法)……二〇
森涼(皮)……一六
森牛兵衞(內)……一三四
森文香(內)……一四一
森岡信太郎(小)……七三
森川政三(耳)……二一
森島錄雄(眼)……五九
森田源平(產)……八六
森田澄一(內)……一六六
森田林次(藥)……四
森部庫司(皮)……三〇
森棟賢隆(產)……三四
森本正好(內)……一九四
森山儀六(皮)……二三
盛永新作(內)……二三六
門馬健次(細、衞)……四七

ヤ

八木義一(產)……一一三
八木金之丞(內)……九四
八木重喜(內)……二六五
八木忠亮(內)……二九八
八代武夫(小)……七〇
矢尾太郎(藥)……九
矢崎芳夫(衞、細)……六
矢田清一郎(眼)……七
矢野中(內)……八九
矢野豐(內)……四三九
矢野原乃武(耳)……五五
屋代周二(產)……一〇六
安田守雄(醫化)……八
安田陸郎(外)……一二四
柳金太郎(內)……一五二
柳榮(產)……八二
柳壯一(外)……二
柳井昌憲(產)……三九
柳澤朝一郎(內)……四二八
柳澤贊治(內)……一三六
柳澤德義(內)……三五九
柳下彥雄(內)……二九四
山內正(內)……一五七
山縣健二(內)……三五八
山縣汎(小)……七三
山川忠雄(外)……一〇四
山口競(耳)……四
山口左仲(病、法)……五
山口淸治(內)……二六
山口夷甫(內)……四二四
山口友孝(內)……一一〇
山崎佐(醫法)……三
山崎蓊(內)……九六
山崎庄吉(產)……三三
山崎達男(內)……四一四
山崎義男(產)……八
山下憲治(耳)……五九
山下秀雄(小)……五八
山田越二(齒)……四
山田一夫(產)……六
山田金吾(眼)……四五
山田康(產)……一三
山田尙允(產)……八一
山之內秀三(皮)……四七
山本俊平(皮)……二五
山本脩一郎(眼)……五七
山本誠一(內)……五四
山本淸太郎(內)……四一〇
山本哲(耳)……七〇
山本徹雄(內)……三六四
山本鼇(耳)……五〇
山元淸一(產)……一三一

ユ

湯淺大太郎(內)……一九九
行岡忠雄(外)……一五八

ヨ

四倉信雄(眼)……三七
橫井鎌吉(產)……五五
橫尾秋夫(內)……八三
橫田治郎(內)……八六
橫田道之助(內)……五
橫田素一郎(內)……三三二
橫地紀一(內)……一九六
吉植精逸(衞、細)……四六
吉岡都(內)……一四三
吉川吉次(小)……七一
吉川新次郎(內)……三八五
吉川春次郎(外)……六七
吉川弘一(內)……二九二
吉澤五郎(內)……二三九
吉栖生一(內)……二一八
吉住好夫(內)……一八六
吉田章信(衞、細)……三一
吉田定男(外)……一六九
吉田元昭(內)……三九八
吉富正一(外)……四九
吉野高善(內)……四二五
吉葉庄作(外)……一〇一
吉原大輔(耳)……六二
吉村藏(內)……三四二
吉村重雄(內)……二一七
米山高實(眼)……五〇

ラ

賴尙和(內)……三二一

リ

李祖蔚(外)……一三
李錫申(醫化)……六
劉四朗(外)……五三
劉陸一(內)……一四八
劉清井(內)……二〇四
劉先登(內)……二八五
廖温仁(醫史)……一
龍治節三(內)……一五五

ロ

盧基舜(內)……二八五

ワ

和田淺香(小)……五四
和田長作(醫化)……四
和田彦作(眼)……六四
和田彌三郎(小)……三〇
若井七郎(內)……三三一
若月館一(內)……二四八
若林英次(內)……一五八
若林宏(內)……四二〇
若山要二(外)……一三一
脇田政孝(耳)……一
脇元秀義(皮)……二六
渡邊一九(外)……一六〇
渡邊完(外)……三八
渡邊喜三(內)……一五
渡邊鍵(病、法)……一九
渡邊鍵太郎(內)……四五四
渡邊卓郎(內)……四三八
渡邊達三郎(產)……一三五
渡邊傳二(外)……九八
渡邊治雄(內)……七九
渡邊裕(內)……一三六
渡邊二三男(產)……一三
渡邊(細、衞)……一四三
渡邊義政(細、衞)……三三
渡部喜平(內)……一
鰐淵源(耳)……二〇七
……一六

索引　終

醫科續篇

內科

批判研究

博士人物

井關九郎著

胃腸病科、呼吸器病科、血行器病科、新陳代謝科、腎臟病科、神經精神病科、傳染病科、物理療法科、レントゲン科

佐藤幸三　△仙臺市北四番丁一一九に佐藤內科病院あり、元磯內科病院を繼承せるものにして、佐藤幸三博士の經營する所なり。歴史と共に內容の充實せる點に於て當市私立病院中の王座を占む。博士は東大系の內科學者にして恩師故隈川宗雄先生に就て醫化學を專攻し、眞鍋內科を經て靑山內科に入り、東北帝大にては山川章太郎教授の指導を受け學位は東北帝大より獲得せり。博く學識を有し、臨床に堪能にして多年の經驗に富む、佐藤內科病院の今日をあらしめたるもの如實に之を物語りて餘す所なし。

△博士は宮城縣立仙臺第一中學校、二高を經て、大正四年東京帝大醫科大學を卒へ、副手に次で助手として醫化學教

室に勤め、同六年青山内科に轉ず、同七年仙臺市礎内科病院副院長となり、同九年現職のまゝ内科研究生として東北帝大醫學部に學び、間もなく同醫學部講師となるに及びて前職を辭す、同十二年三月學位受領後依願解嘱、翌十三年より礎内科病院を繼承して開業今日に至れり。

△學位主論文は「葡萄糖靜脈注入による糖原生成に關する研究」にして、參考論文は(一)酸素作用法則より「ウオールゲムート」氏唾液及膵「アミラーゼ」定量法を批評す(二)「アミラーゼ」賦活抑制、破壞及保護作用に就て、以上井上文藏共著、(三)糖尿病患者の「トレランツ」に關する研究、坂口康藏共著、(四)葡萄糖療法の際高張葡萄糖液靜脈内注入の速度と血糖、尿糖との關係（天木順吉共著）なり。

感想に曰く「今私は私立常盤木學園高等女學校の校長をして居ります。治療醫學と教育とには極めて共通な點があり乍ら、その對照とする者が全く反對なのに面白味を感じて居ります。そして院長と校長とかけ持ちでやつてます」云々。その意氣と努力は敬服に値す。

△宮城縣名取郡六郷村大友幸三郎の次男、幼にして同村醫師佐藤正の養嗣子となる。明治二十二年生れなれば當年不惑に入る七歳、年壯の意氣益々壯んにして學識、手腕、人格共に圓熟し最も得意の時代に在り。性來眞面目にして一片の野心を有せず、今は治療方面と教育とに誠意、誠實を盡し、以て其の天職たるを樂しむところに黎明あり博士の生命あるを想はしむ。一面又た熱情の人にして同情に富み、自ら謙遜なる態度を持する所に其の高邁なる人格を窺はる。良い醫者で終始し又子供を善く教育し度いことが蓋し博士の抱負ならん。趣味としては一番冬季の運動を好み、近來ゴルフを樂しむ。

◇

齋藤精一郎

△ドクトル、メヂチーネ齋藤精一郎博士は、三高醫學部出身の一先輩にして内科學を專門とす、嘗て獨逸に私費留學しウユルツブルグ大學にて學位を得、同大學にては特にロイベ教授に内科學を、クンケル教授に藥物學を、フライ教授に生理學を專攻して造詣する所深く、内地にては久しく母校に職を奉じ、内科學教授として岡山醫專より岡山醫大に及び、附屬醫院にては内科醫長として活躍する所ありしも、退官後は奈良市多門町三十三番地に隱退して專ら靜養に努め、自適悠々の裡に日新醫學の推移を靜かに研鑽する處あり。

△秋田縣平澤町の人、明治六年生にして、同三十一年三高醫學部を卒へ、直ちに岡山縣病院に助手として勤め、同三十三年京都帝大醫科大學醫化學教室助手、翌三十四年任岡山醫專教授、同三十七年休職となるに及び私費獨逸に留學し、ウユルツブルグ大學卒業後ベルリン大學を見學し、同三十九年末歸朝と同時に岡山醫專教授に復任し、兼ねて岡山縣病院第二内科醫長を囑託せらる、大正七年四月文部省より向三年間科學研究費の支給を受く、同十一年四月任岡山醫大教授並に岡山醫專教授、岡山醫大附屬醫院内科醫長を命ぜらる、同十二年三月京都帝大より學位受領、同年十二月依願本官並に兼官を辭す。

△學位主論文『諸種ノ藥品ノ胃分泌ニ對スル影響』參考論文(一)胃潰瘍ノ胃分泌ニ就テ、(二)(三)膽汁分泌生理、(四)粘液疝痛ニ就テ、(五)篦形二口蟲卵内容及仔蟲ノ形態的性質ニ就テ、(六)腐蝕ニヨリテ生ジタル胃粘膜疾病ノ病的生理ニ就テ、(七)ザリー氏「デスモイド」反應ニ對スル實驗的批判的研究、(八)脂肪ノ分解及吸收、(九)麻痺筋ノ持續的收縮ニ就テ、(十)血色素ノ性質ニ對スル呼吸困難ノ影響ニ就テ、以上獨文。他に發表の論文夥多。著書としては、(一)消化器病學(上下)(二)「日本内科全書」中「腸病各論」其他。

△學者肌の人にして餘り社會的に活動するを好まず、毀譽褒貶など恬として馬耳東風に聽き流す方なり。昨夏（昭和九年）著者奈良に遊びたる時訪問す、座談時餘津々として盡きず。偶々感想を叩けば「自己の不才と病軀とを嘆ずるのみ」と、謙遜にして多くを語らず、而かも識見深遠頗る話題に富む、其の態度の悠々として迫らず、溫厚にして威

嚴の存する處に敬慕の念を深からしめたり。自重加餐を祈るや切也。

◇

菅沼 清次郎　△公立福島病院長として十年一日の如く、勵精以て地方治療界の爲め努力貢献しつゝあるは菅沼清次郎博士なり。博士は東大系の内科學者にして、「フイラリヤ」病研究家として特に著聞す。久しく長崎醫專教授として敎壇に起ち、又其附屬醫院に内科部長として診療にも從事せり。其間獨、佛、丁、米國等に留學して研鑽大に得る所あり。殊に呼吸器病に關する診斷は獨特の評判あるを聞くや既に久し矣。

△愛知縣縣八名郡舟着村の人、明治十五年生にして、一高を經て同四十一年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに文部省醫術開業試驗附屬病院（今の東京帝大附屬醫院分院）に助手として勤め、同四十三年十一月同院醫員となり、同四十五年三月文部省醫術開業試驗委員被仰付、大正五年七月任長崎醫專教授兼縣立病院内科部長、同七年より九年迄文部省理化學研究奬勵費下附の下に「フイラリア」病研究に從事し、同十一年四月内科學研究の爲歐米に留學を命ぜられ、同十二年四月東京帝大より學位受領、同十四年三月歸朝後願に依り職を辭す、翌十五年三月以來現職に就任今日に至る。主論文は『「フイラリヤ、バンクロフチー」ノ定期出現性問題ニ關スル研究補遺』にして、參考論文は(一)健康者及肺結核患者血液ノ瓦斯含量瓦斯結合能力及「アルカレツセンツ」ニ就テ、(二)大腸窒扶斯ニ就テ、(三)腦ノ轉移性散在性「メラノーム」ニ就テ、(四)蕁麻疹ト植物性神經機能トノ關係ニ就テ、(五)「フイラリア」病ノ症候學的補遺、(六)血液「ミクロフイラリア」ノ檢出測數法ニ就テ、等なり。

△眞面目なる學者にして、一面又良醫として其の今日あるは、既に博士の前半生史能くこれを語りて餘蘊なからしむ今は壯齡漸く熟して、一段の貫祿を加え、最も重望せらるゝ年輩に在り、切に自重加餐を祈る。趣味としては讀書を好み、多く内外の圖書、雜誌等を藏す。福島市杉妻町三に住む。

◇

横田 道之助　△日本赤十字社秋田支部病院長兼内科醫長としての横田道之助博士の令名は其地方に嘖々たる事既に久矣。博士は京大系の内科學者にして、一面又た東北帝大敎授熊谷（岱藏）博士の高弟とも見るべく、又藥物學に關しては同じく東北帝大敎授八木（精一）博士の指導を受くる所多し。學識豐富、實際的手腕の熟達せる點に於ては既に斯界に定評あり。

△博士は埼玉縣秩父郡横瀨の人、傳右衛門の二男、明治十四年生れにして、獨逸協會中學、一高を經て明治四十一年京都帝大醫科大學を卒へ、直ちに内科學敎室に勤め、同四十二年十一月札幌區豐水病院内科部長として就任し、大正三年五月日赤秋田支部病院副院長兼内科醫長となる、同九年十二月社命により東北帝大大學院に入學、同十二年三月大學院卒業と同時に復職し院長兼内科醫長となり、今日に及ぶ、學位は大學院卒業により、同年四月東北帝大より授與せらる。

△主論文は第一が「靜脈血壓ニ關スル研究」にして、(一)藥物ノ血壓特ニ靜脈血壓ニ及ボス影響ニ就テ、(二)人體ニ於ケル靜脈血壓並ニ藥物ノ之ニ及ボス影響ニ就テの二篇より成る。第二が「アコニチン」ノ腸運動ニ及ボス作用（以上獨文）なり。　參考論文は、(1)上腹部ニ來ル囊腫ノ診斷補遺、(2)多量ノ水攝收ノ人體ニ及ボス影響、附血壓亢進症ノ臨床的觀察（嵩敏共著）なり。

△學究的臨床家としての經歷は既に其の前半生史に盡きて博士の面目を語るに充分なり。今は年齒知命に入る五、元氣旺盛、學識、經驗、人格共に圓熟の域を超越して一段の重味を加ふ。居常の趣味としては園藝を嗜むの餘裕あり。地方治療界の爲め切に健康を祈り、益々努力盡瘁あらん事を望むや切なり。秋田市根小屋町八番地に住む。

◇

千葉叔則

△帝都杏林界に割據して以來未だ幾何ならざるも、近年千葉内科の存在を高め、打診の好評と共に民衆の人氣を集めつゝあるは、本所區向島二ノ四に開業せる千葉叔則博士なるか。博士は東大系の内科學者にして嘗て獨逸に留學し、ベルリン大學のフリードリヒ、クラウス教授に師事して内科學を專攻し、學位は母校より獲得せり。學位論文中の參考論文三篇に對し朝鮮醫學會より奬學資金を受けたる事は世人周知の如く、其乾熱「ワクチン」及び乾燥「ワクチン」に對する研究は、斯學に重要なる價値と其の存在を認められたり。

△兵庫縣養父郡高柳村八木の人、明治十八年生にして、一高を經て、大正元年東京帝大醫科大學を卒へ、翌二年六月任陸軍二等軍醫、同三年六月東京第二衞戍病院附、同四年九月東京第一衞戍病院附、同五年九月任一等軍醫、同年陸軍々醫學校入學（臨床細菌學專攻）、同六年八月任朝鮮總督府醫院醫官、兼京城醫專教授、同九年四月朝鮮醫師試驗委員囑託、同十年四月歐米出張、主として伯林大學にて研究、同十一年五月歸朝前職に就き、同十二年四月東京帝大より學位受領、同十三年四月市立釧路病院長として赴任し、昭和二年依願職を辭して以來、東京にて開業今日に至る。

△主論文の『「ワクチン」ニ對スル乾熱ノ適用ニ就テ』は、加熱「ワクチン」製造に際し從來の方法と異りたる乾熱を應用して加熱し、其の加熱時間と免疫亢としての價値を研究し、之を人體に接種して有利なりと認めたるものにして、即ち本論文の梗概なりとす。參考論文は(1)唐辛煎汁ノ生物ニ及ボス影響、(2)乾熱「ワクチン」ノ免疫力及ビ其毒性ニ就テ、(3)乾熱腸「チフス」「ワクチン」人體接種ニ依ル免疫力及ビ副作用ニ就テ、(4)乾燥「ワクチン」ニ對スル糖類及ビ鹽類ノ適用ニ就テ等なり。

△風姿雄々、立派なる體格の持主にして、體重二十二貫、蛋白も糖も出でず、兩三年前二度目の富士登山をして壯者を凌ぐの健康さを示せり。崇高なる氣品を備へ、緊張せる中にも圓滿さを藏して、常に靄々たる所に其の人と爲りを窺はる。年齒知命有一、意氣益々壯んにして一段の貫祿を加え、學識、經驗、人格共に圓熟す。學位尊重の氣風漸く廢頽せんとするの秋、學者相互の尊重心を向上する上に、甚だ多とすべきなり。

◇

坂上弘藏

△坂上弘藏博士の經營する坂上内科醫院は東京市麴町區土手三番町八番地に在り。呼吸器病科特に免疫療法科に獨特の評あるや久し。殊に最近坂上研究所を上落合に設立し、專ら免疫療法の實驗的研究をなし、之が發達普及に貢獻する所あり。即ち呼吸器、消化器病科、並に各科の患者に就て、主として免疫學的療法を行ふ、之れが博士の最も得意とする所にして、必ず細菌學檢査をなして其原因を確めたる上、每常自家「ワクシン」を製造して之を應用する點にあり、其設備は研究所と院内に於て之を整へ間然する所なし。

△博士は明治二十八年東京濟生學舍を卒へ、同年醫術開業試驗合格、同三十二年臺灣總督府臺南醫院勤務、同三十三年打狗に於て私立打狗病院を經營す、大正三年傳研にて研究、同年四月獨逸留學、伯林アウスグテー病院に於て病理細菌學研究、同年九月渡英、倫敦大學聖メーレス病院に於てライト氏指導の下に細菌學、免疫學、血液病理學、ワクシン療法研究、同四年七月佛國巴里及ボローンに於て研學、次で倫敦大學に於て熱帶病學研究、同五年二月米國にて研學、同年四月歸朝、同年八月星製藥會社細菌部に於てワクシン研究製造を擔任す、同六年一月京橋區南槇町にて開業、同十二年五月京都帝大より學位受領、翌十三年現住所に新築移轉し、昭和二年六月坂上研究所を設立す。

△主論文は『「オツエナ」ノ細菌學的研究』にして、參考論文は(1)各種細菌ニ對スル健常並ニ病者血清ノ殺菌作用、(2)「パラチフス」A、B、型菌ニ對スル健常並ニ病者血清ノ殺菌作用、(3)「インフルエンザ」病原ノ實驗的研究外六篇あり。

△博士曰く「免疫學的療法の發達は進歩せるが如くにして、其實は遲々たるものなることを嘆く。夙に提唱せる如く

免疫科なる獨立科目が治療界に於て認めらるゝ時期に到達せられざる限りは遺憾ながら、我邦治療醫學は發達せるものと賞讃すること能はざるなり」云々。又曰く「學界は卓越せる天才が現はれざれば到底行き詰りたる學界を開拓して進むことは不可能である。徒らに模倣的作業を繰り返すばかりでは進歩を見ることは出來ない」云々。更に又曰く、「相互の軋轢、衝突のみをやつて居る間は醫界の刷新は不可能である、絶世の偉人が出てゝ之を統括するにあらざれば次第に萎縮する」云々と。以て博士の抱負の一端を窺はる。

△新潟縣平民坂上武平の二男にして、明治十五年生、當年知命有四歳也。開業試驗出身の博士が、刻苦奮鬪、克く今日の成業と成功とを贏ち得たる輝しき閲歴は、既に博士の前半生史に光彩陸離たるものあり。其の篤學は生ける教本として範を示すに足る。殊に博士の長所と見るべきは、不撓不屈の精神にして、自己の目的、抱負を貫徹せずんば止まぬ氣慨にあり。讀書家にして多く内外の圖書を蒐め精研修養今尚卷を放たず、また書畫の鑑賞を業餘の趣味とす。

◇

西方時雄　△山梨縣立病院副院長兼内科醫長たる西方時雄博士は、東大系入澤内科に巣立ちたる、東京帝大派の大家にして、同地方内科の頭目として大衆より多大の信賴と尊敬を博せり。學位主論文は『「ウジムシ」ノ發育ニ際シ蛋白質ヨリ脂肪ノ發生ニ關スル實驗補遺』、參考論文は、(1)脚氣及動物「ビタミン」B缺乏症ニ於ケル血液脂質並ニ血清「リパーゼ」ニ就テ、(2)赤血球ノ浮游安定性ニ就テ也、其學問的批判は既に學界に定評あれば玆に贅せず。

△博士は仙臺一中、二高を經て、大正六年東京帝大醫科大學を卒業、直ちに同學醫化學教室副手嘱託、同九年一月より同大醫學部附屬醫院入澤内科に轉勤、入澤教授指導の下に專ら内科學の學理と臨床の實修に努む、同十二年七月學位受領、同年九月大震災に際しては米國寄贈の麻布高松宮邸内病院に内科醫長として特に派遣せられ、時の皇后陛下(現皇太后陛下)並に各宮殿下に親しく御説明申上げたり。其後東京市立病院に勤務し特に廣尾病院の設立に盡力同院開設以來内科醫長に就任、兼ねて東京醫學專門學校教授として内科を擔任す、昭和四年十月現職に就任今日に至る。

△宮城縣の人、明治二十三年生る、學究的溫厚の紳士にして、學識、手腕、人格揃つて圓熟の域に入り、元氣益々旺盛にして最も活躍の全盛時に在り。謙遜家にして穩健自ら持し、篤實謙虚、阿附迎合を好まず、人に篤く後進を待つに寛厚也。其職務に對するや勵精恪勤、一般診療の傍ら山梨縣の地方病日本住血病の研究に專念しつゝあり。業餘の趣味としては乘馬を好み、讀書殊に文學歴史に趣味を有し、專門書以外此等の文獻に書齊を埋むる有樣なり。甲府市百石町一〇二に住む。

◇

小峰茂之　△東京市瀧野川區西ケ原町に小峰病院及び王子腦病院あり、帝都私立病院中に卓然として頭角を拔く。兩院長たる小峰茂之博士は最も異彩に富む立志傳中の篤學者にして、元濟生學舍に入りて苦學力行、明治三十八年弱冠二十二歳を以て醫術開業試驗に合格し、翌三十九年選科生として東大精神病科に入り芳溪吳(秀三)博士の指導を受け、同四十年同精神病學教室介補となり、東京府立巣鴨病院醫員を嘱託せらる、同四十一年同病院を辭し王子精神病院長に就任す、同四十二年東京高等師範學校第三部低能兒醫務を嘱託大正二年迄勤務す。同八、九年米國に私費留學、費市ウイスター研究所に入りドナルドソン博士及び畑井教授に師事して中樞神經系統の生物學的研究を爲し、同十二年東北帝大生物學教室に於て研究を續け、東北帝大より學位を獲得せり。以上その學究生活の半面を物語るものなるが、而かも又た實際的方面より見たる博士は、明治三十七年王子腦病院を創立して以來、孜々營々其の運用宜しきを得、次で大正十三年小峰病院を增設し、今日の盛大を致せるもの、名醫博としてその經世的手腕の卓越せるものあるは特筆に値す。小峰病院は市電飛鳥山線通りに堂々の陣容をかまへ、結構宏壯にして内部の設備充實す。

神經科、腦脊髓科、癲癇科、X光線科、內科等々の各科に別れ小峰博士の外、醫博鈴木雄平、醫博三浦岱榮、醫博金子義晁、學士小峰茂三郎等の新進各々其の專門科を分擔す。

△學位主論文は『神經系ノ新陳代謝機轉第五編——日本產蛙「ラナ」「ニグロマクラダ」ノ四季並ニ雌雄兩性ニ於ケル中樞神經系ノ相對的重量ノ差異ニ就テ』にして原著は英文なり。參考論文は、(1)神經系新陳代謝機轉第三編及第四編、(2)數時間ノ身體的及感情的ノ興奮ノ下ニ置キタル鼠ノ腦內ノ殘餘窒素ノ分量ニ就テ、(3)精神病者血液ニ於ケル醱酵及溶血作用ニ於ケル實驗報、(4)「テタノリジン」及飯匙毒ヲ用ヒタル「ムフ」氏精神反應ノ比較實驗、(5)精神病者血清ノ沈澱反應の五篇より成る。出身地は神奈川縣足柄下郡下府中村にして、明治十六年生る。薄給に甘んじて學究に終始したる博士も、春風秋雨幾星霜、日夜倦まざる奮勵の効終に酬ひられて、今日の成功を贏ち得たるもの、百折不撓、努力奮鬪の賜ものと云ふべく、後學の採つて範とすべきなり。賦性恬澹無慾、其の人格の崇高にして溫情に富み、其の器の寬濶にして堅實なる、能く機を察し能く人を容れ後進を愛撫するの雅量を有す。其の專門に精通し、斯科の大家としての聲價は此に贅せずもがな、當世博士界の大立物として推奬するに吝ならざるなり。

◇

金井德二郎　△大阪市南區安堂寺橋通二ノ三二金井內科病院長金井德二郎博士は、大阪高醫出身の內科學者にして學位は京都帝大より獲得せる名醫博也。嘗て母校たる大阪醫大の第一內科教室及生化學教室に於て、多年此方面の研究に從事し、次で獨逸に遊ぶや伯林大學病理學教室に於てローナ教授の下に生物學に關する一般物理的化學を專攻し、傍ら第二內科クロウス教授教室に於てシトロン教授の內科學を見學す、猶キール大學にては生理學教室にてヌーバー教授の指導を受け血清免疫學に關する物理的化學を專攻せり。その今日の成功を見るも亦偶然ならずとせず。

△學位主論文は『腸「チフス」免疫ニ關スル生物化學的研究』にして、參考論文は、(1)腸「チフス」患者ノ血液ノ變化並ニ腸「チフス」ノ免疫構成及靜脈內注射療法ニ關スル實驗的研究、(2)「パラオキシフエニールブレンツトラベン」酸ノ生理的作用ニ就テ、(3)「パラオキシフエニールブレンツトラウベン」酸ノ生物的作用ニ就テ並に一般「アミノ」酸ノ生物的作用ニ關スル知見補遺、(4)震顫麻痺患者ニ河豚毒素「ヘバトキシン」及臭酸素「ヒヨスチン」ヲ應用セル治驗ニ就テ並ニ「ヘバトキン」ニ關スル實驗的研究、(5)脊髓性進行性筋萎縮症ノ一例並ニ其病理解剖學的變化ニ就テ外四篇あり。猶大正十二年以降發表せる論文中、(1)「チフス」血清及其分離蛋白體ノ免疫本體ニ關スル物理化學的研究(2)軍隊胸膜炎並「スポーツマン」肋膜炎の發病機序ニ關スル新學說ノ樹立、(3)動脈硬化症發症機轉ニ關スル生化學的研究等は博士會心の作と見るべき乎。

△群馬縣安中町の人、明治二十一年生にして、縣立高崎中學校を經て、大正元年府立大阪高醫を卒へ、直ちに同校病院內科に勤め、助手兼醫員となり、同五年大阪醫大醫化學教室に於て生物學研究を命ぜらる、同七年母校を辭し南滿醫學堂講師となり內科學を分擔す、翌八年之を辭し再び大阪醫大醫化學教室に入りて研究を續け、同九年論文提出に依り醫學士の稱號を受く、引續き研究科に入りて生物學の研究を續行す、同十年內科及生物化學研究の爲め歐米に留學し主として伯林大學に於て研究、次でキール大學に學び、學績三篇を發表す、同十二年米國に航し各地大學病院及研究所を見學して歸朝す、同時に堺市立公民病院長に就任、爾來同院の急速なる發展に對し盡瘁する所あり、昭和八年六月勇退して、自ら金井內科病院を大阪市の中樞船場に於て經營す。學究的溫厚の紳士にして、臨床家としての經驗に富み獨特の手腕を有し、人格崇高也。本邸は大阪市住吉區阿部野筋二丁目三四に在り。

◇

內田三千太郎　△組合立豐島病院長として、多年東京府下治療界の爲め盡瘁活躍しつゝあるは內田三千太郎博士

也。博士は新潟醫專出身の內科學者にして、特に傳染病を最も得意とす。恩師宮路（重嗣）教授に師事して細菌學を修めて後ち、約二年間北研にて研究し、新潟醫大より學位を獲得せり。後ち又た慶大內科にて研究を續け、最近歐米に於ける傳染病院並に結核療養所に關する施設、治療方法等を視察せり。

△學位主論文は「癩ニ關スル研究」にして、(1)癩患者ニ癩菌接種試驗、(2)癩血淸ヲ以テセル「ブルツク」氏反應並ニ沈降反應ニ就テ、附補體結合反應トノ比較、(3)癩ニ於ケル補體結合反應ニ就テ、(4)鼠癩ニ關スル報告、(5)鼠癩ノ動物試驗報告、(6)癩鼠ヨリ分離セル抗酸性菌ニ就テ、(7)鼠癩ノ傳染徑路ニ就テ、(8)鼠癩ニ於ケル二三ノ血淸反應並ニ「ツベルクリン」反應、附人癩ニ於ケルモノトノ比較、以上八篇より成る。參考論文は、(1)再び病理解剖ニ於ケル「ワツセルマン」氏反應ニ就テ、(2)病原「スピロヘータ」檢索法トシテノ檢尿ノ價値、(3)鼠「トリパーゾーマ」ニ就テなり。

△埼玉縣北葛飾郡富多村の人、明治二十四年生にして、大正三年新潟醫專を卒へ、助手として衞生學教室に勤め、翌年北里研究所に入り助手となる、同六年熊本私立回春病院研究室主任として就任し、同八年警視廳防疫醫となり細菌檢査所に勤む、同十二年十二月新潟醫大より學位受領、同十三、四年慶大醫學部內科學教室勤務、同十四年豐島病院組合立豐島病院副院長、次で院長となる、昭和七年五月豐島病院組合の命に依り渡歐、米國を經て同年十二月歸朝せり。賦性謹直、好學溫厚の紳士にして、崇高なる人格を備ふ、其の居常能く人に對する應答の禮を重んじ、人と接するに敢て城壁を設けず快活にして恬澹たる態度は賞すべきなり。埼玉縣浦和町一七七五に住す。

◇

渡邊裕

△岡崎市材木町に葆光堂渡邊內科醫院あり、院長渡邊裕博士の經營にして、入院ベツト數拾有餘、X光線、太陽燈、ソラツクス燈等々の設備整ひ內容充實す。博士は大阪府立醫大出身の內科學者にして特に呼吸器病及び消化器病を最も得意とす。京都帝大の重鎭松尾（巖）博士に就て內科學を專攻し、又た衞生學は京大系斯學の泰斗戸田（正三）教授の指導を受け、京都帝大より學位を獲得せる名醫博也。

△學位主論文は「氣溫ノ高低並ニ環境ノ理學的性質ガ消毒劑ノ効果ニ及ボス影響ニ就テ」にして、參考論文は、(1)藥物消毒ト細菌復活現象（無機ノ部）(2)同（有機ノ部）(3)同（有芽胞菌ノ部）(4)同（終篇）(5)醬味噌ノ殺菌作用ニ就テ(6)生菜果物並ニ食器ノ消毒ト其理論の六篇なり。

△將來の希望としては、(1)日本全國の小中學校に各校少なくとも一名宛の學校醫が勤務する樣になる時が俟たれる。(2)醫師の勤務勞役時間が八時間となる樣な時代が來ればいゝ云々。又

一、感想としては、(1)醫業が完全なる國家管理になればいゝが智的勤勞階級の最前衞として醫者が鐵火の洗禮をうけて居る間に、醫者の質がどんなに變るかは大きな社會問題だと思ふ。既に財を蓄へて不老所得で悠々自適の餘生を樂んで居る樣な連中が醫師會の牛耳を執つて居る間はまだ醫者全體としての眞劍さが足らないのだ。(2)象牙の塔から街頭への進出はいゝが、堂々たる大學しかも官立大學が、まだ眞價も認められて居ない業績を惡い意味の「ショーナリズム」と結合させて、大衆を眩惑させる事は苦々しい。それが病院の患者の吸收策だと見へすく樣な場合はとても鼻もちはならない。開業醫の廣告を取締ることなど思ひもよらない。云々。氣焰萬丈、その意氣々々。

△岡崎市渡邊越の長男にして、明治二十五年生る。大正六年大阪府立醫大を卒へ、京都帝大雇となり衞生學教室に勤む、同八年更に研究生となり同教室にて研究を續け、同十年專修科に轉學し松尾內科教室にて內科學を專攻す、同十二年十二月學位受領、爾來鄕里にて開業現在に至る。父祖十數代の遺業を繼承して現地に開業せる爲め、日常醫務甚だ多忙にして、一意倦まざるの熱意と努力とは酬ひられて今日の成功を來たし動かすべからざる地盤を有す。人と爲り直情徑行、權勢に媚びず富者に阿らず、特に社會の不正義に對しては敢然として抗爭し寸步も枉げざるの氣慨を有す。從つて人から賴まるれば（下手から出て）斷ることの出來ない質で、强いて言はしむれば之れが短所となるかも知れ

ぬかわりに、又その爲めに意外の邊に身を賭しても働いて吳れる大なる信者もあれば、亦それが長所ともならん。當に讀書を怠らず新智識の吸收に孜め、所謂鄕黨の智識的階級の指導者と目せらる。野外運動を好み、鄕里の中學、小學校の運動部の世話人たり。又學生時代より文筆を弄し音樂、繪畫、演劇等に趣味を有す。

◇

戸山昻造　△神戸市葺合區上筒井通五丁目に神戸昭生病院あり、院長戸山昻造博士は血行器科特に心臓病を最も得意とす博士は東大出身の內科學者にして、前の九大敎授今の東大內科敎授たる吳（建）博士の古參門弟中の一異彩たり。恩師吳敎授の東大より九大に轉ぜらるゝや、氏も亦從つて九州帝大に赴けり、當時吳敎授が九大醫學部の大立物として吳內科の盛んなる時代、博士は恩師に師事して臨床と學術の蘊蓄を究め、學位は大學院卒業を以て九州帝大より授與せられたり。その今日ある多年の經驗と相俟つて亦偶然ならざるを想はしむ。殊に其の最も得意とする血行器病特に心臓病の領域に至りては獨特の評判あることを聞くや既に久矣。病院は鐵筋コンクリート四層建にして地下室あり、總建坪坪數二百五十坪、暖房裝置は「ホットウオター」、地下室にはボイラ室、第二研究室、消毒室、暗室、倉庫等あり、一階診療室、治療室、第一研究室、電氣心働機室、藥局「レントゲン室」待合室等。二階及三階は一般病室及浴室、電氣浴治療室等にして病室は十四室あり、四階は圖書室兼院長室、「サレルーム」等にして屋上庭園あり、病室寢室等凡て心臓病の療養に適すべき試みとして、診療界の第一線に起てり。

△大學院卒業論文は「肺循環ニ關スル實驗的研究」にして、外に副論文として、(1)橫隔膜緊張ニ關スル化學的研究、(2)「アダムス、ストークス」氏徵候簇ニ就テ、(3)「ボツタリー」氏管ノ關係ニ就テ、(4)房室ノ自働ニ關スル一知見、(5)狹心症ノ疼痛ニ就テの五篇あり。他に心臓に關する論著夥多。

感想に曰く「現代醫業に於て切實に必要な事は深遠なる學理と親切なる診療の調和といふ事であります、其何れの一方に墮しても到底善良なる醫師といふ事は出來ません。現今凡ての世相が非常時に當つて特に我國に於ては醫業が苦境に直面してゐる今日、吾々醫業に携はる者は殊に誠心誠意學術醫業と實際醫學とを最も適切に實地應用することによつて其局面を展開することに留意しなければならぬと思ひます」云々。

△島根縣簸川郡大社町の人、明治二十二年生にして當年四十有七歲なり。鄕里の小中學校及び鹿兒島七高造士館を經て、大正五年東京帝大醫科を卒へ、東大副手として、三井慈善病院內科（指導者木村德衞博士及吳建博士）に勤め、同七年私立東京女子醫專講師を囑託せらる。同十年九州帝大大學院入學、吳敎授の指導を受け、同十二年十二月學位を受領す、互惠會神戸診療所長に次で、昭和三年現職に轉じ今日に至れり。將來の抱負としては「將來病院の設備をして一層心臓病の診療に適するやうになし、特に出來得るなら有馬溫泉地の如き眞に天然炭鑛泉を利用して心臓病恢復期の患者に對し「サナトリウム」を建設したし」云々。又た「各專門の開業醫が互に連絡をとり少くも內科、外科、產婦人科、耳鼻咽喉科、小兒科等に於て共同の診察券を發行しなるべく綜合的診察を完全にしたし」云々との意見をも聽く。學究的溫厚の紳士にして、謙遜克く自抑し人に對する甚だ親切なり、其の居常能く應答禮を重んじ、恬澹として能く人を容るゝの雅量あるは其の器の寬大なるを察するに足る。診療界淨化の爲め博士の向後の活躍に期待して止まず。兵庫縣御影町城ノ前に住す。

◇

渡邊喜三　△大垣市御殿町に渡邊病院あり、院長渡邊喜三博士の經營する所、內科を以て著聞す、特に其の最も得意とする呼吸器病に至りては獨特の評判あること既に久矣。博士は京大系の內科學者にして、母校より學位を獲得せる斯科界の老大家なり。

△學位論文は「紫外線ノ血淸ニ及ボス影響」にして、參考論文は、(1)實驗的家兎牛痘症ノ組織學的檢索、(2)食道癌ノ

病理解剖學及組織學並ニ臨床上ノ統計的研究、(3)岐阜縣ニ於ケル首下リ病、(4)本邦人ニ於ケル膽石ノ一二統計、(5)巨大ナル囊狀大動脈癌ヨリ小囊狀動脈瘤ヲ續發シ肋骨ニ壓迫萎少ヲ起シタル一剖檢例、(6)耳根治手術後急ニ死亡セル三症例、(7)「アメーバ」赤痢症二十九例ノ臨床的統計的觀察、(8)「アメーバ」赤痢症ノ一美濃國ニ於ケル「エンデミー」ニ就テ。(9)「クインケ」氏病、(10)唾石、(11)横隔膜下腸瘍等なり。著書としては、(1)肺病患者の自療自養、(2)膽石症及其療法、(3)人生二百年、(4)遺傳之研究等あり。

△「開業醫の反省」として其の感想を述べて曰く「人の生活には本業があり、其本業には精神が伴はねばならぬ、精神的バツクの無い本業は、其實其影共に甚だ薄しと考へられる。開業醫の本業は固より濟生救護の第一線に立つことであるが、夫れを全ふするには、理學的處置のみに滿足せず、其疾病に對する精神療法を等閑に附してはならない。理學萬能で教育せられた今日の醫者が、此通弊に罹つて居るのは、或は當今醫育の缺陷とも言へよう。醫者は屢々非醫者の跋扈は痛責するが、省みて斯かる非醫者にも乘ぜられるやうな、治療上の缺陷があるのではないか、夫れを反省することは可なり必要ではないか。特に精神的苦悶を出發點とせる疾患に於ては、其一點を看過して、どこに診斷があり、どこに治療があり得ようと迄自分は信じて居る。所謂開業醫今日の立場は容易なものでは無いが、然し個人的溫情を以てする開業醫の得色を發揮するならば、如何に僥季の世とならうとも、尙ほ開醫業は其位置の安全を見出し得るであらう」。云々。

△岐阜縣大鍛町渡邊吾作の次男、明治十二年生にして、東京靑山學院中學科、二高を經て、同三十九年京都帝大醫科を卒へ、副手として內科學教室、同四十一年助手として耳鼻咽喉科教室に勤む、同年辭して函館市渡邊病院（院長渡邊富藏博士）副院長となり、同四十三年まで勤務す、四十四年大垣市に於て私立渡邊病院を設立し今日に至る、其間大正十年より京都帝大大學院に入り淸野（謙次）教授指導の下に血淸免疫學を研究し、同十三年一月學位を授與せらる。

其の今日ある閲歷は旣に博士の前半生史これを語りて餘蘊なからしむ。殊に今は壯齡漸く加はりて學識、手腕、人格共に愈よ老熟して一段の貫祿を加え最も重望せらるゝ位地に在り。人と爲り溫厚篤實、その居常能く應答の禮を重んじ、人に對する親切にして眞摯なる態度は敬慕の念を深からしむ。

◇

鈴木芳夫　△石神研究所部長兼附屬大阪石神病院長にして、兼ねて大阪齒科醫專教授たる鈴木芳夫博士は、東京慈惠醫專出身の篤學者にして學位は東北帝大より獲得せる名醫博たる一人物也。嘗て米國に遊びジョンス、ホプキンス大學にてウエルヒ教授並にバーロース教授に師事して病理細菌學を研究中バーロース教授のワシントン大學に轉任せるに隨つて、同大學の病理細菌學教室に入り從來の研究を續け、次で費市ウイスター研究所及ヒツプス研究所にて血淸學及結核に就て專攻する所あり、其後再び歐洲各國の大學、研究所及結核療養所等の設備其他を視察するなど、其該博なる智識と臨床的手腕の熟達せる點に於ては斯界に旣に定評あり、殊に其最も得意とするは結核治療にして斯道の爲め貢獻する所多し。

△學位主論文は「組織培養法ニヨル動物抵抗力ノ研究」（英文）にして、(1)「ヂフテリア」毒素ノ影響ニ對スル胎鷄組織ノ齡トノ關係、(2)胎鷄心筋組織ノ「ヂフテリア」毒素ニヨル周期性收縮ノ觀察、の二篇より成る。參考論文は、(1)組織培養法ニヨル免疫問題ノ研究（三篇）(2)細胞發育ノ研究、(3)鼠ノ血淸中ニ於ケル自然溶血素ノ存在ト雌雄兩性トノ關係ニ就テなり、其他內外にて發表せる論著夥多。

△宮城縣米谷町の人、鈴木利吉の長男にして明治十三年生る。東京市順天中學校を經て東京外國語學校專科にて二年間獨逸語を學び、同四十年東京慈惠醫院醫專を卒業す、直ちに助手として母校醫院に勤め、同四十一年石神傳染病研究所助手兼附屬病院醫員となり、同四十五年京都帝大醫科講習科にて細菌學を修め、大正三年再び醫化學を修む、翌

四年米國留學の途に上り同七年歸朝す、同時に石神研究所部長兼附屬大阪石神病院副院長に就任し、同九年同院長となる、同年歐洲視察、同十三年二月東北帝大より學位受領、猶同年より大阪齒科醫專教授として醫化學を擔任し今日に至る。博士に面識ある著者をして言はしめんか、其風貌に接するや穩健にして溫威を滅し、言々句々眞摯にして親切、克く己を自抑し人を容るゝの態度は頗る快感を覺え、博士に對する敬慕の念を深からしめたるを記憶す。不鳴は其號にして俳句を能くす、又た繪畫に趣味を有し、時に植物を愛す。大阪市住吉區天王寺町二六八三に住す。

◇

大久保　九平　△德島市若林病院副院長大久保九平博士の名聲は四國治療界に重きを爲し、內科の大家として一流に在り。現に德島縣醫學會長にして昭和六年第二回四國醫學會長たり。博士は東大系大正五年組にして講師又は助教授として久しく教壇に起ち、東北帝大醫學部に於て其の前途を囑望せらるゝ處ありしも、一度象牙の塔を退きて現職に就くや、十年一日の如く臨床に精進して又た他事を顧みず、克く院長を輔佐し、院長若林（虎吾）博士の外科と對立して嘖々たる好評あるは、既に世人周知の如し。

△學位主論文は『血淸「プロテアーゼ」知見補遺、六篇』にして、參考論文は、(1)健康體ノ肋膜腔液ニ就テ(2)正常血淸自家融解知見補遺(3)血淸「プロテアーゼ」知見補遺なるが、學位は東北帝大より獲得せり。其他論著夥多。

△德島縣の人、明治二十三年を以て生る。縣立德島中學校、五高を經て、大正五年東京帝大醫科を卒へ、傳染病研究所にて細菌學講習修了の後ち同所の技手となり、同七年東北帝大醫科助手に任ぜられ內科學教室に勤め、同九年講師となり、同十年助教授に任ぜらる、同十三年三月東北帝大より學位受領の後ち依願免官となり德島市若林病院副院長として就任今日に至れり。其の人に接すれば溫乎として親しむべく、當世學者氣質に於て、學究的好箇の臨床家としての人格者たるを喜ぶ。趣味としては俳句を能くす、空平は其の號にして同好の間に知らる、業餘又た能く讀書して新智識の吸收に力め品格の陶冶を志す。年齒不惑に入る漸く六、圓熟せる手腕、識見共に潑剌たるの全盛時代に在り、猶春秋に富む前途は益々輝かし、幸に健康と共に自重加餐を祈るや切也。德島市富田仲ノ町一ノ五三に住す。

◇

太繩壽郎　△大阪市立刀根山病院長兼大阪市技師として太繩壽郎博士の社會的位置は、之を證明する表徵として餘す所なし。博士は大阪府立高醫出身の篤學者にして、大阪醫大派の醫博としての大なる存在を認めらる。殊に其の最も得意とする結核の領域に至りては斯界の權威たるは自他共に許す所なり。顧みるに學校卒業後の氏は海軍に出仕して多年海軍々醫界に奮盡活躍する所あり。現に海軍々醫少佐の印綬を帶び正六位勳四等を有す。其後療養界に精進するや、十數年一日の如く恪勤勵精し、斯道の發達振興の爲め誠心誠意以て努力今猶盡瘁しつゝあるは甚だ多とすべきなり。

△學位主論文は「結核菌ノ生物學補遺」及び「結核菌ノ葡萄糖形成ニ就テ」の二篇より成る。參考論文は、(1)「ワクチン」療法ニヨリテ治癒セル盲腸蟲樣突起炎ノ一剖檢例、(2)結核ト黴毒トノ重感染ニ關スル實驗的研究、第一回報告、第二回報告、(3)肺結核發病ノ近因トシテノ流行性感冒(4)結核免疫ノ過去及將來ヲ論シテ余等ガ蠟質ニ乏シキ結核培養ニ及ブ(5)結核免疫ノ研究、第三報、第四報、第五報、第六報等なり。

△秋田市手形谷地町の人、明治十四年生る。同三十八年大阪府立高醫を卒へ、同三十九年海軍少軍醫候補生となり、同四十年任少軍醫補奚海軍病院附、舞鶴海軍工廠附、朝日乘組に歷任し、同四十二年任中軍醫、同四十四年任大軍醫、海軍砲術學校附、新高軍醫長、鎭海防備隊附、第十三驅逐隊軍醫長、舞鶴海軍病院附に歷任、大正六年任軍醫少監、（八年軍醫少佐と改稱）同七年待命被仰付、同年任大阪市立刀根山療養所醫員、同十一年任同所醫務長兼大阪市技師、同十三年三月學位受領、同十四年同所長となる、次で官制改正の結果大阪市立刀根山病院長となり今日に至る。他に

大阪結核豫防協會理事其他の公職を有す。德望家にして其の學問、人格、聲望は頗る世に聳聞し今更吾曹の絮說を要せざるべし。人と爲り溫厚、謹直にして居常禮節を缺さず、寬厚能く人を容れ部下を愛撫す。趣味としては研究と療養そのものにありて、終始克く熱誠に其の事に精研沒頭して亦他事を顧みざるの概あり、惟ふに結核治療界の前途は多々益々博士の力に期待するものあるべし、爲國家健康を祈るや切なり。大阪市東區北新町一ノ三七に住む。

◇

梅田嘉四郎　△前の滿鐵安東醫院長にして、多年滿洲治療界の爲め努力貢献せる梅田嘉四郎博士は、京大系の內科學者にして今の名譽教授中西（龜太郎）博士の高弟として知らる、恩師に就ての逸詣は勿論、大學院に學ぶや森島（庫太）教授に師事して藥物學を專攻し、母校より學位を得たる名醫博也。會々健康を害して以來高松市四番町二九に閑居して專ら靜養に務めつゝあり。

△學位主論文は「摘出家兎腸ニ於ケル藥物學者研索ノ方法ニ就テ」にして、參考論文は、(1)バツクマン氏ノ所謂子宮「ヂアリザート」ノ作用ニ就テ、(2)「ヴイタミン」Bノ破壞ニ關スル實驗、(3)二三興奮性藥物ノ詣種摘出管狀臟器ノ緊張ニ及ボス影響ニ就テ、(4)心臟ノ藥物學ニ就テ、(5)嘔痺又ハ制止セラレタル喝管ニ對スル「ピロカルピン」及「バリウム」ノ作用ニ就テ、(6)「アルカリ」又ハ酸ノ輸入ガ藥物ノ致死量ニ及ボス影響ニ就テなり。

△京都府竹野郡溝谷村の人、明治二十一年生る。京都府立第一中學校、三高を經て、大正元年京都帝大醫科を卒へ、副手として中西內科に勤め、同四年辭して滿鐵に入り長春滿鐵病院長事務取扱兼醫長、同九年同院長兼醫長となる、同年同會社より歐米留學を命ぜられしも後任を得ざりし爲め翌十年京都帝大大學院に入學、同十三年二月大學院在學のまゝ渡歐、同年七月米國を經て歸朝す、同十三年五月學位受領、同年十月歸社の後滿鐵丸房店醫院長兼醫長に、次で滿鐵安東醫院長となり、昭和七年十二月病氣の爲め辭職內地に轉地療養中なり。幸に自重加餐を祈るや切也。

◇

百瀨宗　△東京市世田谷區羽根木町一八三一番地に新築成り、內科を標榜して新規開業せる百瀨內科醫院あり、院長百瀨宗博士の診療所にして、新裝せる結構と相俟つて內部の設備整ふ、蓋し附近稀に見る內科病院として他の追隨を許さず、博士の手腕、聲望を以てせば將來の發展大に期待せらるべし。博士は東大系の內科學者にして、內科の泰斗稻田龍吉博士の愛弟子として知られ、多年恩師指導の下に斯學の蘊奧を究め、後助教授として北海道帝大に在職中、論文を提出して同大學より學位を獲得せる名醫博也。久しく聲望を博せる市立釧路病院長を勇退して診療界に起つや、獨自の境地を開拓して其の羽翼を伸ばさんとす、前途の展開や頗る刮目に値す。

△學位主論文は「組織血液間ニ於ケル水分及食鹽代謝ニ關スル實驗的研究」にして、(1)「ビツキトリン」の淋巴並ニ血液濃度ニ及ボス作用ニ就テ、(2)「ノヴアズロール」ノ淋巴血液濃度並ニ尿分泌ニ及ボス影響ニ就テの二篇より成る參考論文には、(1)稀有ナル肝臟轉位ノ二例ニ就テ、(2)「チレオイヂン」ノ利尿作用ニ關スル臨床的知見、(3)アヂソン氏病四例ニ於ケル新陳代謝ノ研究、(4)「インフルエンザ」肺炎患者尿ノ化學的所見の四篇あり。

△長野縣松本市小瀨町百瀨精一郎三男にして、明治二十三年生る。長野縣立松本中學校、二高を經て、大正六年東京帝大醫科大學を卒へ、引續き同大學副手囑託として醫化學教室勤務、翌七年十二月同附屬醫院に轉勤し稻田內科に於て內科學研究、同十二年六月同大學助手、同十三年一月依願免官と同時に北海道帝大醫學部講師を囑託せられ內科に勤務す、同年七月學位受領、同十四年二月任北海道帝大助教授、醫學部第二內科勤務、昭和二年四月依願免官となり、同時に市立釧路病院長に就任す、同九年四月辭職、現住地にて開業今日に至る。學究的年壯の紳士にして、溫厚篤實毫も才氣を衒はず、人に對するに同情に厚く、親切にして應答の禮を重んず。今や年齒不惑有六、年壯鋭氣にして凜々としたる風貌は威嚴を存し、高邁なる人格を備ふ。研究以外、謠曲を業餘の趣味とす。家庭には妻銕子との間に三

男一女あり。

◇

三木良英　△陸軍々醫學校教官陸軍々醫監三木良英博士は、東大系の耆宿入澤達吉教授の愛弟子として知られ、大學院在學中恩師指導の下に內科學を專攻し、嘗て歐洲に留學するや、瑞西國ベルン大學生理教室にて內分泌學を、次で墺國ウヰーン大學實驗病理學教室にて心臟病理學を專攻し、歸朝後母校より學位を獲得せる軍醫界現代の一權威たり。

△主論文は「心室電氣心描線ノ期間ニ關スル實驗的並ニ臨床的研究」にして原著は獨逸文なり。參考論文も獨逸文の原著にて「前房收縮後ニ來ル休憩期ニ關スル實驗的研究」と題す。

△姫路市平野町の人、明治二十年生れにして、兵庫縣立姫路中學校、三高を經て、明治四十四年東京帝大醫科大學を卒へ、翌四十五年六月任陸軍二等軍醫、補步兵第二十聯隊附、大正二年八月補東京第二衞戍病院附、同三年九月東大大學院入學、入澤內科教室にて研究、同五年九月補步兵第七十一聯隊附、同六年十月青島陸軍病院附被仰付、同時に青島守備軍民政部御用掛被命、青島病院內科主任勤務、同七年一月支那膠海關醫務囑託、同九年一月醫學研究の爲め瑞西國駐在被仰付、同年三月より翌十年三月迄ベルン大學にて研究、同年四月より墺國ウヰーン大學に轉ず、同年九月獨逸駐在員被命、同十一年六月歐洲巡遊の後歸朝、補東京第二衞戍病院附、同十二年八月仁陸軍々醫學校教官、同十四年八月補東京第一衞戍病院附、兼陸軍々醫學校教官、參謀本部御用掛、同十五年九月學位受領、昭和九年任陸軍々醫監、次で現職に至る、正五位勳四等たり。賦性純眞謹直、几帳面なる質、人に對しては懇篤親切にして應答の禮意缺ぐことなし。讀書家にして研鑽今猶卷を放たず、時に散步を樂しむ。妻たかとの間に四男一女あり。東京市淀橋區西大久保三ノ八四に住む。

◇

多田嘉德　△京都市堺町四條上ルに內科專門を以て著聞する多田醫院あり。院長多田嘉德博士は京大系の內科學者にして、大學院在學中恩師松尾巖、淸野謙次兩博士指導の下に研鑽多年、肝臟及び腎臟の色素排泄機能に關する論文を提出して母校より學位を獲得せり。

△卽ち主論文は「肝臟及ビ腎臟ノ色素排泄機能」にして、(1)正常肝臟及肝臟ノ色素排泄機能並ニ其色素擴散度トノ關係ニ就テ、(2)總輸膽管結紮動物腎臟ノ色素排泄代償作用ニ就テ、(3)腎動靜脈結紮動物肝臟ノ色素排泄代償作用ニ就テ(4)血液內色素濃度ト排泄色素濃度トノ關係ニ就テの四篇より成る。參考論文は、(1)心囊尖ノ病理組織學的研究（第一報告）、(2)同第二報告、(3)猩紅熱、赤痢及ビ「腸チフス」患者ノ「アチドージス」ニ就テ、(4)肝臟及ビ膽道ノ機能檢査ニ適當ナル新色素ノ提供並ニ其臨床實驗、(5)肝臟機能檢査ニ對スル「フエノールテトラクロールフタレイン」ノ價値批判の五篇なり。

△香川縣大川郡志度町の人、明治二十八年生れにして、縣立高松中學、六高を經て、大正九年京都帝大醫學部を卒へ直ちに同學部副手囑託、同年十二月京都市立京都病院醫員兼病院看護婦產婆養成所講師囑託、同十年八月京都帝大大學院入學、同十三年十一月學位受領、爾來現住地に開業今日に至る。開業拮据旣に十有餘年を閱し、多年の聲望と共に牢固たる地盤を開拓して今や悠々たる位地に在り。業餘謠曲を語り、圍碁、將棋に趣味すと聞く。妻元子との間に二女ありて良家庭をなす。

◇

齋藤茂吉　△東京市世田谷區松原四丁目三〇〇に本院あり、赤坂區靑山南町五ノ八一に分院を有する靑山腦病院と云へば、誰しも領く歷史ある腦病院として帝都私立病院中拇指を屈せらるべし。院長齋藤茂吉博士の經營にか

ゝり、青山にある分院（其當時本院）は先年火災にて天を摩する煉瓦建の高閣も一朝にして全部烏有に歸せるも、日ならずして新築成り世田谷の本院と相俟つて、結構宏壯、腦病患者に相應はしき外圍の光景と內部の設備に間然する所なく、入院患者と共に日々外來患者の輻輳するもの多く頗る活氣を呈す、盛んなりと云ふべき乎。

△顧みて博士の學歷及び閱歷より語らしめば、博士は明治四十三年東京帝大醫科を卒へ、副手として附屬醫院に勤め、同四十四年東京府巢鴨病院醫員を囑託せらる、其間東大教授吳及助教授三宅兩博士の下にありて專ら精神病學、神經病學を研究す、大正元年助手となり、附屬醫院勤務を命ぜらる、同六年任長崎醫專教授、同時に縣立長崎病院精神科部長、長崎救護所顧問醫を囑託せらる、同十年精神病學研究の爲文部省在外研究員を命ぜられ、墺國維也納の神經學研究所に入り、オウベルシュタイネル、マーブルク兩教授指導の下に腦髓病理學の研究に從事し、尙維也納醫科大學ワークネル教授の下にありて臨床精神病學を見學す、同十二年夏獨國ミュンヘン大學に轉じ精神病學教室クレペリン教授、シビールマイエル教授の下に精神病學、腦髓病學の研究を續行し、傍らイツセリン教授に就きて心理學を專攻す同十三年夏より佛、瑞、英の精神病界を視察して翌十四年正月歸朝せり、爾來自營の青山腦病院に於て診療に從事し今日に至れり。其間大正十三年十月東京帝大より學位受領。主論文は『麻痺性癡呆患者の大腦「カルテ」』にして、獨逸文の原著なり。參考論文は、(1)精神病者ノ「エルゴグラム」ニ就テ、(2)緊張病者ノ「エルゴクラム」ニ就テ、他に獨文原著三篇あり。

△山形縣南村山郡堀田村守谷傳右門の三男、明治十五年生にして齋藤紀一（青山腦病院の創立者）の養子となる。學究的年壯の好紳士にして、溫厚篤實、克く其の今日を大成せる閱歷は博士の前半生史に盡きて躍如たるを見る。殊に其專門とする精神科、腦神經科の大家としての博士の獨步的境地より觀たる學問、臨床的手腕は既に語るに餘蘊なし而かも亦文學的半面より觀たる博士齋藤茂吉の名は詩歌界の名匠、アララギ派の巨頭として餘りにも著名にして、其著、(1)和歌評論集、(2)金槐集私鈔、(3)短歌私鈔、(4)續短歌私鈔、(5)歌集「赤光」、(6)あらたま、(7)選集「朝の螢」(8)齋藤茂吉選集、(9)齋藤茂吉等々斯界に嘖々たる定評あるは、既に世人周知の如し。最近山形縣上山に靜養中「あさけより日のくるゝまで見つれども藏王の山は雲にかくろふ」と。由來醫博界は醫文人に富む、博士の擡頭によつて文壇に又一大異彩を放てるは頗る刮目に値す。

◇

野村禎一

△大阪市住吉區播磨町西一丁目五九に野村醫院あり、內科殊に結核治療を以て著聞す。院長野村禎一博士は大阪高醫出身の篤學者にして、京都帝大より學位を獲得せる斯科界の名醫博として其の存在を認められ、多士濟々たる大阪診療界に重きを爲す一人物たるを失はざるなり。開業拮据既に十數年、斯間には診療の傍ら克く學術の研究に努め、精研相俟つて獨特の領域に邁進し、以て今日の地盤と聲望とを築き上げたるもの成功と云ふべし。

△主論文は「日本人ノ體格ト其作業能率ニ關スル研究」にして、參考論文は、(1)虎列刺保菌者ト豫防接種トノ關係ニ就テ、(2)虎列刺保菌者血淸ノ菌凝集試驗、(3)大正五年大阪市隔離所報告、(4)大正九年大阪市ニ於ケル虎列刺ニ就テ、(5)既往九ケ年間ニ於ケル大阪市內小學校教員身體檢査ノ成績他に三篇あり。

△山口縣玖珂郡本郷村武安文輔五男、明治十七年生にして現姓を冒す。山口縣立豐浦中學校を經て、同四十三年大阪府立高醫を卒へ直ちに助手として勤め、幾月ならずして翌年大阪市衞生試驗所技手に任じ、大正四年技師に昇任、同九年大阪市技師兼任、同十一年同所長代理（三ケ月間）を命ぜらる、同年より一ケ年間公務の傍ら大阪醫大研究生として寄生蟲に關する研究に從事す、同十三年大阪市立衞生試驗所相談部主任を命ぜらる、同十三年十一月京都帝大より學位受領、翌十四年依願辭職、先是大正八年より自宅にて內科一般の診療に從事し、昭和六年十月現住所に移轉し、今日に至れり。旅行好にして又た能く讀書す。人と爲り敦厚にして質朴の氣風を具へ、謙讓にして敢て學者たるの態

度を表はさず寛厚にして人に篤く、常に禮儀清節を尙び時務に缺くることなし。近來博士の人格に對し世論紛々たるの秋、世論を正しく導く上に野村博士の如きは、人格者として敬慕の念を深からしむるものあり。

◇

山口清治　△日本赤十字社哈爾賓診療所長として重大なる責任を負ひ、滿洲診療界の爲め奮盡活躍しつゝあるは山口清治博士也。博士は南滿醫學堂出身の內科學者にして、特に血行器系內科を最も得意とし、學位は京都帝大より獲得せり。指導教授は京都帝大教授尾崎良純博士なり。嘗て助教授として滿洲醫大に勤務中、米國及び獨逸に留學するや米國ハーバート大學ミーンス教授に就て研究する所あり、歸朝後教壇を去るに及び、現職に就任して以來專ら臨床に精進して益々獨特の手腕を發揮し、篤き聲望と相俟つて今や滿洲醫界に於ける中堅を以て囑目せらる。又以て滿洲醫大派の一勢力と見るべき乎。

△感想に曰く「インフレ景氣にもふさはしき博士の輩出を嘆じ、價値の向上を切望すると共に方面違ひの博士が患者を惑はすが如き近來の缺陷を補ふべき何等かの方策なきやを惟ふ」云々。同感に堪えず。

△東京市の人、山口孫太郎の長男、明治二十八年生れにして、東京芝中學校を經て、大正五年南滿醫學堂を卒へ、直ちに滿鐵大連醫院內科に勤め、同九年母校の給費生として京都帝大醫學部に留學を命ぜられ、藥物學教室に於て教授尾崎良純博士の指導を受けて研究に從事し、同十一年に至る、次で南滿醫學堂附屬醫院內科勤務を命ぜられ、同學堂講師を兼任す、同十三年十一月學位受領、同十五年滿洲醫科大學助教授、兼同大學附屬醫院副醫長を命ぜらる、昭和三年十一月より同五年六月迄米、獨に留學、歸朝後滿洲醫科大學助教授復任、同八年七月現職に赴任今日に至る。

△主論文は『腦下垂體製劑「ピツグランドール」ノ血管作用並ニ其「アドレナリン」トノ關係』にして、參考論文は、

(1)「ブルチン」ノ摘出腸管及子宮ニ對スル作用ニ就テ併セテ「ストリヒニン」ノ該臟器ニ對スル作用トノ比較研究、

(2)「ブルチン」ノ摘出心臟及血管ニ對スル作用ニ就テ併セテ「ストリヒニン」ノ該臟器ニ對スル作用トノ比較研究、

(3)「ヒスタミン」ノ血管作用ニ就テ他に六篇あり。居常克く部下を愛撫し、人と接するに快活にして同情に富む、應答には禮を厚うして時務を怠ることなし。スポーツを趣味す。家庭には妻喜代子との間に一男清志あり。

◇

小島克己　△神戸市湊區五宮町一八に小島內科あり、小島克己博士の診療所にして、一般內科の診療に必要なるレントゲン裝置及び細菌學的、醫化學的診療に必要なる諸設備を整へ居れり。博士は醫術開業試驗出身の篤學者にして、嘗て獨逸伯林カイゼル、ウイルヘルム研究所にて所長フオン、ワツセルマン教授及びフイツカー教授指導の下に細菌學を研究し、京都帝大より學位を獲得せる名醫博中の老大家たり。內科學者にして特に急性傳染病、病原細菌學は博士の最も得意とする所にして、既に斯界に大なる存在を認めらる。多年神戸市立東山病院長兼神戸市立衞生試驗所長として活躍し、公立病院にありては力めて新らしき題材を撰みて後進の誘掖に資する所ありしが、今や開業醫として眞摯なる方針の下に天職を完うせんとする博士の抱負や多とすべき也。感想に曰く「現代の學界は次第に診療の方面に其深さを加へつゝあるは尤も會心に値する次第なり。醫界殊に開業醫として日淺く特別の感想を有せず」云々。

△兵庫縣佐用郡久崎村醫師小島熊泉二男、明治十三年生にして、同三十五年醫術開業試驗に合格し醫師免許狀を得、同三十八年任豫備見習醫官、補步兵第三十九聯隊補充大隊附、同年任陸軍三等軍醫、補臨時陸軍檢疫部和田岬檢疫所附、同三十九年任兵庫縣防疫委員、同年任神戸市立東山病院醫員、同四十二年同院醫長、同四十五年任神戸市技師、衞生課長、大正八年同院副院長となり神戸市立衞生試驗所長を囑託せらる、同九年歐米各國へ出張を命ぜられ、主として獨逸にて研究、同十一年末歸朝復職す、同十三年十二月學位受領、昭和四年同院長となり、同八年以降開業今

日に至る。

△主論文「鳴疽菌研究ニ於ケル追加」は獨逸文の原著にして第一、二回報告より成る。參考論文は、(1)赤痢菌各型ニ關スル研究及補體結合ニヨル區別、(2)「コレラ」ニ於ケル補體結合並ニ「コレラ」便ヲ以テスル補體結合ノ火急診斷トシテノ價値ニ就テ、(3)細菌ノ「サプロフヰチスムス」及「バラジチスムス」ノ關係其他七篇。他に「バクテリヲフアージ」ニ關スル實驗報告あり。此の報告は博士が快心の勞作と見るべきものなり。

△高倉千草は其號にして文學的趣味に富む、又た謠曲（觀世流）を好み業餘の餘技とす。其の人座談に巧ならざるも謙讓にして質朴の風を具へ、居常禮儀を尙び言行を苟くもせず、寛厚にして人に篤く、時務に缺くる事なし、殊に其の眞面目にして誠實なるは博士の長所として、其の高潔なる人格を敬慕すべき也。

◇

中島駒次郎　△醫としての人格陶冶に務め、せめては現代科學の進歩に後れざるやう努力したいといふのが中島駒次郎博士なり。世人周知の如く東京市牛込區赤城元町九に博士の診療所あり、內科、小兒科、胃腸科を以て著聞す。博士は東大系靑山（胤通）內科の高弟にして恩師の指導は言ふに及ばず、嘗て獨、墺に遊びフライブルヒ大學藥物學教室にてストラウブ教授に師事して藥物學を、維也納大學生理醫化學教室にてクライドル及びフユルト兩教授に就き生理學及び醫化學を研究し、其後又東大生理學及醫化學兩教室にて研究を續け母校より學位を獲得せる名醫博也。

△主論文「小腸內ニ於テ各種鹽類ノ吸收ニ就テ」は獨逸文の厚著なり。參考論文は、(1)暗視野照對ニ依ル腹腔內ヨリ脂肪ノ吸收ニ就テノ研究、(2)大腸及直腸內ヨリ脂肪吸收ノ疑義ニ就テの二篇、何れも獨逸文なり。

△佐賀縣佐賀郡西川副士族中島久之助長男、明治十一年生にして、佐賀縣尋中、山口高校を經て同三十八年東京帝大醫科を卒へ、直に副手として靑山內科に勤め、次で衞生學教室、小兒科學教室及び駒込傳染病院等にて研究、同四十一年臺灣總督府醫院醫長を命ぜられ臺中醫院長として內科を擔當し、大正元年迄勤續す。同年私費歐洲留學の途に上り主として獨、墺にて研究、歸朝後大正三年大分縣立病院內科部長兼縣技師に就任、同六年辭職、東上自宅開業の傍ら東大醫學部生理學教室にて研究、次で同十年再び東大醫化學醫教室に入り研究を續け、同十三年十一月學位受領、爾來專ら診療に從事し現在に至る。讀書を好み殊に英、佛、獨語學の研究に多大の趣味を有す、就中獨逸語は達者にして同僚間に知らる。又時に和歌に親しむ。會々其の風貌に接せんか、眞面目にして多少神經質の人なるかの感あるも、一度び打解けて話をすればいゝパ、として能く談じ、其間には溫情能く人を懷かしむるの德を有す。

◇

野村仁　△大分縣中津市京町四丁目に在る野村醫院は內科、小兒科を以て著聞し、私立病院中斷然一頭地を拔くの概あり。院長野村仁博士の經營する所にして內容充實し、打診の評判良好なり。博士は京都帝大系の年壯學者にして、其專門とする小兒科は母校の恩師今の名譽教授平井（毓太郎）博士に負ふ所少からず。又內科は恩師辻（寛治）教授に師事して造詣する所あり。而して其の博士論文は恩師戸田（正三）教授指導の下に完成せり。

△主論文は「家屋ノ自然換氣ニ及ボス氣流ノ影響ニ就テ」三篇より成る。參考論文は、(1)氣體ノ擴張現象ニ就テ、(2)和室內ニ於ケル炭酸瓦斯ノ擴散率ト擴散量、(3)和室內氣ニ於ケル炭酸瓦斯ノ擴張ト換氣、(4)擴散量、擴散率並ニ所謂假換氣量ノ一般的算出法、(5)汽車及自動車ノ換氣ニ就テなり。他に論著澤山あり。

△大分縣高田町野村幸吉の長男にして、明治二十五年生る。縣立宇佐中學校、五高を經て、大正八年京都帝大醫科を卒へ、直に小兒科教室に勤め、次で辻內科に轉じ、同十年衞生學教室に轉じ助手となる、同十三年任神戸市技師、學校衞生主任に命ぜらる、同十三年十二月學位受領、同十四年依願辭職再び京大內科第一講座勤務、同十五年滋賀縣犬上郡豐郷財團法人豐郷病院長に就任す、昭和二年辭職同時に大阪逓信局醫務囑託を命ぜられ、神戸支所長を拜命す、

昭和四年依願辭職、頭書に開業今日に至る。一、信無き者は去るべし　二、百舌一誠に然かず、とは博士のモットーとする處、其の人思慮堅實、常に意を學術上の研究に注ぎて倦怠なし、而して其患者に臨むや、至誠以て仁術を天爵なすの概あり、其今日ある聲望の歸する處、また以て其性格の反映と見るべき乎。嚴父は南宗畫家にして應山と號す、博士又父の衣鉢を襲ぎて日本畫を能くし、藝術寫眞、書畫骨董等を賞玩す、白雨は其號なり。又遠足も趣味の一にして、殊に山岳を愛し森林に親しむ。好箇の臨床家として現代博士界の中堅たるを慶ぶ。

◇

星野信夫　△福岡市渡邊通り四丁目に星野病院あり、又市外西戸崎に分院星野保養院あり、何れも星野信夫博士の經營する所にして內科、レントゲン科を以て著聞す。特に呼吸器に至りては博士の最も得意とする所、斯界その人ありとの評判を聞くや既に久矣。博士は九大系の內科學者にして母校より學位を獲得せるが、斯間母校の恩師稻田（龍吉）、故井戸（泰）、吳（建）、金子（廉次郎）教授等の四博士に師事せり。

△學位主論文は『筋含有「クレアチン」量ニ就テ』にして、參考論文は、(1)「カブトガニ」ノ心臟自働ハ果シテ純神經性ナリヤ、(2)心筋「クレアチン」含有ニ就テ、(3)隨意緊張及榮養ノ二重支配　附腱反射ト交感神經、(4)「カブトガニ」心臟ノ筋性自働ニ就テなり。他に論著夥多。就中獨文の原著多し。

△岐阜縣海津郡東江村星野勘三郎二男、明治二十四年生にして、縣立岐阜中學校、八高を經て、大正六年九州帝大醫科を卒へ、副手として第一內科教室に入り、同十一年助手となる、其間稻田、故井戸、吳教授等に師事し、同十三年職を辭し日赤鹿兒島支部療養所長となる、同十四年一月學位受領、昭和二年鹿兒島縣より佛、獨、瑞、伊、英、米、各國に於ける結核豫防事務調査を囑託せらる、同年副手として再び九州帝大金子內科に入り、現職の儘歐米視察の途に上る、翌三年歸朝講師を囑託せられ、昭和五年二月職を辭し頭書の所にて開業現在に至る。學究以外の趣味としては運動と登山とにあり、殊に野球は最も好む所にして、中學時代より高等學校、大學を通じての選手たりし事を顧へば、其得意や思ふに餘りあり。年齒不惑に入る漸く五、立派なる體格の持主にして、筋骨逞しく元氣甚だ旺盛なり。人と爲り謙讓禮あり、人と接するに毫も學者として其才を衒はず、應接慇懃にして寬濕甚だ親切なり、自ら人氣を集め、其德望の歸する所知る可きなり。

◇

橋本久　△札幌市の核心地帶、大通西四丁目に橋本久博士經營の橋本病院あり。內科、小兒科、レントゲン科を專門とし、嘖々たる好評を聞く。博士は大阪醫大系の年壯學者、夙に結核に對する醫才炳乎として輝く。學位は大阪醫大より獲得せり。主論文は『「チフス」菌、「パラチフス」菌ノ動物體內進入ニ關スル研究』にして、(1)「チフス」及「パラチフス」菌ノ冷血動物體內進入ニ就テ並ニ該菌ノ冷血動物ノ通過後ニ於ケル生物學的研究、(2)家兎ニ於ケル「チフス」菌ノ腸管吸收ニ關スル實驗的研究の二篇より成る。外に參考論文として、(1)病的血淸特ニ熱性傳染病者血淸ノ一新沈降「アウスフロソリンク」反應ニ就テ、(2)凝集素產生ニ及ボス二三藥物ノ影響、(3)家兎輸精管腔ノ抗體吸收ニ就テ、其の他六篇あり。

△福島縣西白河郡釜子村の土豪橋本久七郎四男、明治二十五年生れにして、縣立安積中學校を經て、大正五年大阪府立醫科大學を卒へ、更に進んで病理學教室に入り研鑽を重ね、同年末一年志願兵として入營、同七年大阪市桃山病院醫員となる、同九年任陸軍三等軍醫、同年同病院より出張を命ぜられ慶大醫學部理學的診療科に於て、藤浪博士の指導を受けX光線學研究、同十三年任大阪市立桃山病院醫長、同十四年二月學位を得、同年高知縣幡多郡中村町町立幡多病院長に招聘せらる、同十五年札幌市創成病院長に就任、昭和四年二月辭職開業現在に到る。刀圭生活二十年の縮圖は又た以て博士の今日あるを窺ふに足らむ。

△博士は篤學努力の人、臨床家としての素質滿點、其の玲瓏たる人格と超凡の耆才とは兩々相俟ち、今や北海道杏林界に異彩を放つ。診療餘暇著すところの書「大衆醫學」（東京藥事新報社發行）は絶讃を博す。學生時代よりスポーツを好み、風流に通ず、近時ゴルフの技愈熟し、秘藏の愛管を唇邊にすれば哀々切々鬼神の涙を誘ふと。

◇

青山敬二　△吉田松陰は虚學を唾棄して實學を唱道せり、當代の醫學者此の慨なかるべからず。元大阪市刀根山病院副院長にして、現在にては有馬研究所に在りて終始結核研究に沒頭しつゝある青山敬二博士は、結核に關する我邦學者として錚々たるものなるが、虚學を唾棄して實學を勵行する一人者たる乎。學位論文其他にて研究の業績を發表せるもの既に多く、前の所長有馬頼吉博士並に現院長太繩壽郎博士と相俟つて、斯界の權威者として共に其存在を認められ、當世大阪醫界の一勢力と爲す。

△學位は大阪醫大より獲得せるが、主論文は「慢性肺結核成立要約ニ關スル實驗的研究補遺」にして、參考論文は、(1)大腸菌ニ因ル「バラオキシフエニールブレンツトラウベン」酸及無活性「バラオキシフエニール」乳酸ヨリ活性「バラオキシフエニール」乳酸ノ形成、(2)所謂盲腸炎ノ「ワクチン」療法、(3)「ワクチン」療法ニヨリ治療セル盲腸虫樣突起炎ノ一剖檢例、外九篇あり、他に論著夥多。

△大阪高醫の出身にして、大正四年卒業後、大阪醫大實驗診療科助手兼醫員拜命、同六年之を辭し大阪市立刀根山療養所醫員拜命、同九年醫學士（大阪醫大）認許、同十四年二月學位受領、同年歐米各國へ出張を命せらる、同十五年醫務長次で副院長拜命、昭和六年夏より辭職して有馬研究所に入り專ら結核研究に沒頭す。

△愛媛縣越智郡已削村の人、明治二十二年生にして當年四十有七歳也。結核研究は終生の仕事として終始し、以て貴き使命を果たさんとする學究の士なり。時に暇を得れば登山して剛健の氣を養ひ、業餘寫眞を樂しむの餘裕あり。愛煙家にして業暇その餘香に嗜む。人と爲り溫厚質朴にして、虚榮虚名を好まず、誠意摯實なる態度を持す。兵庫縣西宮市夙川に住す。

◇

小關光尚　△精神々經科に推奬すべき小關光尚博士は、現に大阪府立中宮病院長として濟々たる浪速醫博界に囑目せらるゝ一人物たり。大阪高醫出身の篤學者にして、恩師和田豐種博士の指導を受くる所厚く、嘗て歐洲に留學するや、墺國ウイン大學にてマールブルグ教授指導の下に神經病理を研究し、歸朝後論文を大阪醫大に提出して學位を獲得せり。

△主論文は「老人性精神病ニ於ケル大腦皮質ト病理組織的變化」を攻究せるものにして、原著は獨逸文なり。參考論文は、(1)ランゲ氏「ゴルドゾール」反應ノ本態ニ就テ、外獨逸文原著一篇あり。

△「最近精神病學の進歩により所謂三大精神病卽ち精神乖離症、躁鬱病、痳痺性痴病の治驗に成功せる經驗を應用し犯罪者、所謂保護少年少女等に對して醫學的見地より治療を加へて社會的貢獻をなさんと企圖し折角精進中に有之、近き將來に於て相當の成績を擧げんと努力致し居り候」云々とは、博士の感想の一片なり。

△大阪市私立桃山中學校を經て、明治四十三年大阪醫大の前身大阪府立高醫を卒へ、直ちに同校助手兼附屬病院醫員拜命、同七年十二月大阪醫大教授囑託、同九年五月任同大學助教授、同十二年三月學命に依り歐洲各國に出張を被命翌十三年十二月末歸朝す、同十四年二月學位受領、大正十五年一月職を辭し現職に就任今日に及べり。大阪市東區農人橋詰町小關尚一の三男、明治十九年生れにして篤學者たり、その閲歴は燦として輝く。所謂三大精神病の治驗に成功せる功績は偉大にして、猶殘されたる所謂保護少年少女等に對して醫學的見地より治療を加えての研究に對しては更に大に期待せらるゝものあり。研究以外の趣味としては寫眞を能くし又旅行を好む。家庭には妻志津子との間に一

男一女あり。大阪府北河内郡山田村に住む。

◇

加藤傳三郎　△在英多年、現に 247 Haverstock Hill Hampstead, London, N. W E に於て開業せる加藤傳三郎博士は、東大系の内科學者にして、恩師入澤達吉博士の指導を受くる所厚く、嘗て歐洲に留學するや、墺國ウイン大學にてウエンケバハ、エビンゲル、及シュルシンゲル諸教授の下に内科臨床を研究し、母校より學位を獲得せり。學位論文は「アナフイラキシー」と「ペプトン」中毒との症狀並に「アトロピン」「アドレナリン、アラビアゴム」「ゲラチン」及葡萄糖による兩者の防止作用及其際の血糖補體量の變化等を參考して「アナフイラキシー」と「ペプトン」中毒の異同を論ぜるものなり。即ち

△主論文は『「アナフイラキシー」ト「ペプトン」中毒トノ比較　附兩者ニヨル血糖ノ變化並ニ其本態ニ就テ』にして參考論文は、(1)血清過敏症ニヨル胃潰瘍成因ニ關スル實驗的研究（獨文）(2)血清過敏症及「ペプトン」中毒ノ際ニ於ケル血液脂肪類脂肪體量及血糖量ノ變化ニ就テなり。今や日本醫學の精華を海外に發揚する所に博士の面目の躍如たるものあるを覩はる。

△博士は一高を經て、大正五年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同學副手囑託となり入澤内科に勤務す、同六年十一月より翌七年三月迄、東京市立駒込及本所病院に於て臨時醫員として傳染病治療に從事す、同七年十二月より翌八年七月迄、私立東京醫專内科臨床講義並に内科講義擔當、同九年十月より翌十年十二月迄、私立東京女子醫專内科講義擔當、同九年九月任東京帝大助手、醫學部附屬醫院勤務、同十二年四月助手を被免再び副手となり引續き入澤内科に勤務す、同十三年二月より同十四年五月まで歐洲諸國に於ける醫學視察を爲し、文部省より歐米諸國に於ける醫學教育に關する調査を囑託せられ、斯間主として墺國ウイン大學にて研究す、歸朝後主として入澤内科の後なる臾内科教室に勤續す、同十四年二月學位受領、同年九月警視廳檢疫委員被命、昭和二年三月渡英、現住所にて開業今日に及べり。

△出身地は北海道小樽市稻穗町東三丁目にして、明治廿四年生る。其の今日ある閲歴は博士の前半生史に盡きて餘蘊なく、殊に世界的檜舞臺に活躍して日本醫術の進歩と其の實際的手腕を發揮しつゝあるは刮目に値す。年齡漸く不惑有五歲にして年壯の意氣に燃え、研究心潑剌として猶精研に餘念なく、治療方面にては今は腕の冴え盛にて學識、手腕、人格共に圓熟し最も得意の時代に在り。幸に健康と共に、日英醫學の提携上一層の努力盡瘁あらん事を望むや切なり。趣味としてに音樂と野球を好み、渡英以來專ら餘暇にゴルフを樂しむ。靄々たる家庭には良妻エンマ、エミリアあり。

◇

飯田博　△滿洲國安東滿鐵病院長飯田博士は、東大系の御大三浦謹之助（現東大名譽教授）博士の門弟にして恩師の指導を受くること多年、後に恩師三田定則教授指導の下に血清化學を研究し、母校より學位を獲得せり。專門に亘る學識、手腕共に圓熟の域に入り、高邁なる人格と相俟つて打診極めて好評也。

△主論文は「血液有形成分抗血清ノ細胞特異性特ニ其生命體内作用ノ比較研究」にして、參考論文は「腦脊髓液、滲出液、漏出液、尿、乳並膽汁ノ金「ゾール」反應ニ就テなり、他にも論著夥多あり。

△感想に曰く　一　短期講習會の設置　學校卒業者の大多數は、日夜の實地臨床等にて繁忙の爲め、兎角日進月歩の醫界の進運に稍もすれば遲れ勝ちになり易い。此等學校卒業者乃至實地醫家の時代に應じたる指導啓發に資する適切簡易なる講習機關が輕便に且つ諸所に開設され、又卒業者も時代に應じて屢々所謂色上げをする心掛けが必要である。從前より夏季講習會は各地大學に催さるゝが、夏期は臨床實地家の最繁忙期で時期として甚だ適切でない、九、十、十一月の候が可いと思ふ。

二　X線寫眞による專門的解說　病院に於ける病理解剖擔當者が、擔任臨床家に病理的處見の解說をして與れる事が診斷學上又診療上、臨床家側の稗益する處甚だ大なるものあるが如く、病院に於けるX線科擔當醫から、一週一二回宛、擔任臨床家がX線寫眞につき逐次詳細なる處見の解說を受ける事は、診斷上は勿論、前途の治療方針を建つる上に益する事多く、獨乙の大病院にも其例を見るが、大病院に於ては關係科の全臨床醫が、其等の解說を聽取する如き建前、之は必ず普及され度きものとの希望を有す。

△島根縣那賀郡江津町飯田源之丞次男、明治二十一年生れにして、島根縣立二中、六高を經て、大正二年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同學副手囑託、同附屬醫院三浦內科勤務、同六年一月福井縣公立三國病院長拜命、同九年十二月福井縣警察醫兼務、同十年十二月東京帝大醫學部法醫學教室に入り三田教授に師事す、同十二年十二月南滿洲營口滿鐵醫院長被命、同十四年二月學位受領、同年四月滿鐵撫順醫院長被命、昭和四年三月一ヶ年半歐米各國に留學を被命、同五年六月遼陽滿鐵醫院長に被任、同八年二月安東滿鐵醫院長に轉任今日に及べり。趣味としては寫眞、繪畫を能くし棲雲と號す、喫煙家にして煙草を嗜しむ。家庭には良妻しな子あり、因に帝大名譽教授俵國一工博とは近親の間柄なりと。滿洲國安東山手町三二に住む。(注意根室町立病院飯田博博士とは同名異人也。)

◇

加地義雄　△香川縣觀音寺町に杏華堂加地病院あり、內科を專門とし一流に在り。院長加地義雄博士は九州帝大系にして、吳建博士の高弟として知られ、恩師に師事する事多年、學位は母校より獲得せり。

△主論文は『黃疸出血性「スピロヘータ」病患者血液の化學的研究』にして、參考論文は、(1)實驗的肝臟障碍ノ血液殘餘窒素玆ニ尿中總窒素量ニ及ボス影響ニ就テ、(2)「アドレナリン」及ビ「ピロカルピン」注射ノ脊髓癆患者筋緊張ニ及ボス影響ニ就テ、(3)黴毒性腦海綿竇血栓ノ一例なり。

△香川縣三豐郡大野原村加地茂治郎長男。明治二十七年生にして、縣立三豐中學校、六高を經て、大正九年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに副手として第一內科教室に勤め、吳教授に師事する事四年半、同十四年二月學位を得、爾來鄉里香川縣觀音寺町に於て開業、加地病院長として內外一般の診療に從事し今日に至る。質素にして堅實を尙び、日常孜々として臨床に勵精し以て天職と爲すの概あるを見る。讀書家にして常に專門智識の吸收に餘念なきが如し。

◇

金子愼吾　△東京市世田谷區三軒茶屋町一五〇に新築せる金子內科醫院あり、院長は金子愼吉博士にして古き地盤を有し、新裝せる內部の設備整ひ、博士獨特の打診は多年の聲望と相俟つて、好評裡に門前常に賑ふ。博士は九大系內科の泰斗吳建教授の高弟にして、多年恩師に師事して造詣する所あり。所謂九大派の名醫博たる一人物也。

△主論文は「右心室內血壓ニ對スル種々ノ操作及藥物ノ影響ニ就テ」にして、參考論文は「脚氣に於ケル腱反射消失ト交應神經性緊張」なるが、他に論著夥多あり。

△埼玉縣秩父郡皆野町金子文之助二男、明治二十六年生にして、獨逸協會中學、一高を經て、大正九年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに副手として第一內科に勤め吳建教授に師事す、同十年黃疸出血性「スピロヘータ」病研究室主任補助兼務、同十四年三月迄吳教授指導の下に內科學を研究し、同年二月學位を得、同時に岩手縣花卷共立病院副院長兼內科醫長として就任し、次で同院長に昇任す、昭和二年辭職上京して世田谷病院の創設と共に內科、小兒科部長並に赤坂區田町土屋病院副院長として就任、翌年九月土屋博士卒去後同院長に就任、同八年一月世田谷病院長辭職、同年二月現住所世田谷區三軒茶屋町百五十番地に轉居開業、隣地に醫院新築中の處五月末完成移轉せり。猶宅診にてクマ子夫人は女醫として夫君を助け共に診療に從事しつゝあるは特筆すべきなり。

△讀書家にして研究以外政治に多大の興味を有し、一面には文藝を好み文筆の才あり、ペンネームを春午と號す、ま

た時に遂足を試み刀圭多忙の裡に清遊す。當年漸く四十有三歳、元氣旺盛、多量の分別を有す、臨床家としては最も重んぜらるゝ年恰好にて聲望益々厚し。資性謹直にして自ら抑遜し、恭謙克く己を持し人に篤く、應待甚だ親切にして溫情に富む。

◇

加藤普佐次郎　△東京市世田谷區北澤三丁目（守山公園の邊り）に內科、神經科を專門とする加藤醫院あり。私立經營としては結構宏大ならざるまでも、壯嚴にして落着きあり、加ふるに改築早々、觀るものをして快朗を覺えしむ。院長加藤普佐次郎博士は、千葉醫大系醫專時代の出身にして、九州帝大名譽教授高山博士に師事して多年研究する所あり、一面又た東京帝大臭教授、三宅教授等の指導をも受けて造詣する處深く、今や獨立の地盤を獲得して自由に獨特の手腕を振ひ、天稟の性格と相俟つて、近來著るしく人氣を高め、遠近の患者を吸收しつゝあり。

△愛知縣愛知郡日進村大字野方の人出原三郎の次男にして現姓を冒す、明治二十年生る。愛知縣立一中を經て、大正元年千葉醫專卒業後、直ちに九州帝大醫科大學法醫學教室助手として高山教授に師事す、同五年八月千葉病院腦病科に轉じ、同八年九月東京府立松澤病院醫局に入り、臭、三宅兩博士の指導を受け、同十四年三月東京帝大より學位を得、爾來鄉里にて開業一般診療に從事せるも、幾何もなく再び上京、牛込區若松町戶山腦病院長として就任、昭和四年之を辭して現住地に於て再び獨立開業せり。專攻は內科、精神病科なるも、神經科は特に博士の得意とする處なり。

△學位論文は「精神病者ニ對スル作業治療並ニ開放治療ト精神病院ニ於ケル之レガ實施ノ意義及方法」が主論文にして參考論文なし。其他論著夥多。

△忙中閑を得れば淨瑠璃を業餘の趣味とし、又た能く書見す、殊に世界大戰史は最も愛讀する方なり、亦た農村問題に就ても相當研究する處あり。現代醫界に對する感想を叩けば、其の一片を吐露して曰く『醫療利用組合を普及發達せしめ、醫療經濟を確立し、醫師は單なる技術者として雇はれること、航究運輸會社の飛行士の如くならしめ、最も重大なる役目をなすも、經濟財政上の責任に任ぜず、安心して醫術進歩の爲貢獻すべきなり。而して大正十四年醫育統一後大學を卒業せる學士諸君は、此の如き醫療經濟革新の時期に際會して大貢獻せらるゝ日本歷史上の役目を持つ』云々と。近來耳新らしき意見として傾聽すべき乎。性格は書生肌の磊落家にして、日常粗服を着けて毫も意に介せず、恬澹無然にして、毀譽褒貶の如きは馬耳東風、敢て之を顧みる風なし、居常能く學生を愛撫し克く指導に努む亦た能く人にも接し敢て城壁を設けず、談論風發、大に情味を覺えしむるは痛快なり。

◇

近衛忠實　△大阪市住吉區住吉町帝塚山に近衛內科病院あり、近衛忠實博士の醫院經營として其の設備は最も進歩せるものたるを失はず。特に血行器心臟疾患に至りては獨特の自信を有し、好評裡に堅實なる地盤を有す。博士は德島縣麻植郡西尾村近衛貫一三男、明治十九年生にして、三高を經て、大正二年京都帝大醫科を卒へ、同四年廣島市船入病院長となり廣島市衛生課長を兼任す、同五年末新潟縣中頸城郡立柿崎病院長に轉じ、同七年京都帝大大學院に入り微生物學を研究し、同八年滿鐵撫順醫院內科醫長に轉じ、同九年滿鐵遼陽醫院長となり、同十年滿鐵安東醫院內科醫長に轉ず、同十二年滿鐵を辭し再び京大大學院に入り松尾、森島兩教授指導の下に研究す、同十三年米子博愛病院長に就任し、同十四年山口縣宇部市沖の山同仁病院長に轉じ、同十五年之を辭して大阪市にて開業す。其間同十四年三月京都帝大より學位を授與せられ今日に至る。

△學位主論文は「惡血腫瘍ニ因ル血清ノ化學的變化ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)色素ノ腦脊髓液內移行ニ就テ、(2)發疹「チフス」患者血清ニ免疫反應ニ呈スル一桿菌ニ就テ、(3)發疹「チブス」ニ關スル研究、(4)不整脉ノ數例ニ就テ、(5)腸「チフス」ニ於ケル水癌の五篇なり。

△「眞面目に社會の動きを見て居ると志想的には自分と云ふものが赤くなつたり或は又右傾したり奔騰せる激流の中を浮沈して居る樣な感がある、然し一段高所から眺めて見ると夫れは單に狂氣じみた事に過ぎなかつたのが判る、五、一、五事件も人形芝居を觀て居る樣な氣になる、何でも平凡に轉向する事である、荒木サンの好戰主義もやがて平凡に轉向して來よう、平凡はつまらぬ事ではない最も良き事と信ずる、社會の平和夫れは平凡である、眠つて居るのでもよい神經過敏の社會は決して健康とは診斷されない」云々とは博士の感想の一片なるが、更に現代の醫師界に對しては『開業醫の將來は醫業多難の今日憂慮すべきものならん、國家は醫師の經濟的犧牲を强ひて諸種の社會政策を行はんとなせども、國民保健の基礎を危ふするものなきや』云々と、傾聽に値す。

△讀書家にして、殊に有史以前の人類史に多大の趣味を有し造詣する所あり、又音樂美術を愛好す、頃日義太夫に熱心なりと聽く。其專門的智識の深遠なると、玲瓏たる手腕とは言はずもがな、日常孜々として臨床に勵しみ、熱誠以て患者に親しみ、應待甚だ親切なるは益々其聲望を博する所以なるべし。性溫情に富み、高潔なる人格者たるを尊ぶ。

◇

宮下耕圃　△戸畑市明治鑛業株式會社醫長兼同會社豐國中央病院長たる宮下耕圃博士は、九大系稻田龍吉教授門弟中の一異彩として知られ、母校より學位を獲得せる內科專門の大家たり。多年筑豐に於ける炭礦界救治の爲努力貢獻し、孜々として今猶懸命に其職分に盡し以て天職と爲すの概あるを見る。地方治療界の多幸とする處、亦以て博士の勞を多とすべし。

△鹿兒島市士族宮下節藏長男にして、明治十六年を以て生る、縣立一中、七高を經て、同四十三年京都帝大福岡醫科を卒へ、直ちに副手として第一內科稻田龍吉教授に師事す、同四十五年福岡縣芦屋公立病院長に就任、大正二年之を辭し明治鑛業株式會社醫長として就任、次で同會社豐國中央病院長として兼任今日に至る。此間大正十一年現職の儘九州帝大醫學部專攻科へ學生として入學、宮入(衞生)、小川(細菌學)兩教授の指導を受け、同十四年三月學位を受領す。

△主論文は「腸窒扶斯の疫學及之ヲ基礎トセル其豫防ト撲滅ニ就テ　附腸窒扶斯ノ一傳染源トシテノ浴槽水ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文は、(1)糞便中ニ於ケル寄生虫卵ノ採取法及ビ寄生虫卵ノ比重ニ就テ、(2)「ヂプロゴノボールス、グランヂス」ノ一例、(3)腸窒扶斯豫防接種ノ反應ノ爲メニ勞働を休止スル炭坑勞働者ノ百分率ニ就テ、(4)腸窒扶斯ノ一小流行ニ於テサレタル二、三ノ觀察等。外に論著多數あり。

△感想に曰く「多年會社病院に勤務して、社費を以てする無料診療（近頃は低費診療）に從事して來たので、診療醫界の實情を深刻に觀察したことなく、從て今日之を批判する資格は私には無しと信じます」云々。生來多趣味、最近に於ける趣味の對象は刀劍、古畫、古陶磁など、古色蒼然たるものなら何でもゴザレ。但し堂に入つたほどの研究として何一つ無しとの噂。尤本人にいはせれば、堂に入らうが入るまいが、それは一切風馬牛、ただ極めて多忙な業務を果して後の三十分間、たとへば古陶破片をいぢりて、時代古色を賞味しつつきれいに一日の勞を忘れるよすがとするに過ぎずとのこと。

△賦性溫厚にして人情味に富み、居常人と接するに恭謙禮讓に篤く、親切にして能く人を愛し溫情の掬すべきものあり。大家としての聲價は既に其地方に著聞し、打診頗る好評にして多大の囑望を其一身に集め、至誠以て仁術を盡すに寧日なし、其の周圍に於ける聲望の歸するは亦以て其性格の反映と見るべき乎。福岡縣戸畑市千防町八丁目明治鑛業社宅に住す。

◇

荒木齊造　△福山市下魚屋町に內科、外科專門の荒木病院あり、院長荒木齊造博士の經營にして、多年其の地

方に聲望を扶植し、內部の設備と相俟つて牢固たる地盤を有す。特に其の最も得意とする腦脊髓神經病、流行性感冒肺炎に至つては博士獨特の評判高く、加ふるに德望家を以て聞ゆるは、博士の仁術に一段の光彩を放ちて見ゆ。博士も亦九大系の學流を汲む名醫博たるの一人物なる乎。

△學位主論文は「人間ニ於ケル隨意筋緊張ノ研究」にして、參考論文は、(1)「トルヂオンスデイストニー」(或ハ「トルヂオンススパスチス」)及ビコレノ筋緊張學方面ヨリノ觀察、(2)ゴルトン氏腱反射及ビ之ニ類似ノ腱反射ニ就テノ知見補遺竝ニ係留腱反射「アンハルテンデル、ゼーネンレフツクス」ニ就テの二篇なり、他にも論著夥多。

△廣島縣深安郡千田村の人、明治二十六年生にして、縣立福山中學校、五高を經て、大正九年九州帝大醫科を卒へ、直に第一內科教室に入り吳建教授の下に內科學を研究し、同十四年三月九州帝大より學位を受領す、爾來福山市にて開業一般診療に從事し今日に至る。

△芋山は其號なり。庭球、水泳、謠曲、南畫等を好む、殊に讀書は居常博士の最も趣味とする所にして文筆の才あり、不斷日新の醫學に遲れず、切磋卓勵の氣象に富み、至誠仁術を以て天職に任ずる好學の士なり。人と爲り篤實溫厚、寬裕にして能く人を容れ、常に慇懃同情を以てす、自ら人望の集中する所以、亦以て博士の德とすべし。

◇

關　忠　英

△長野縣松本市城西町にある關療院並に長野縣豐科町にある豐科療院は、何れも關忠英博士の經營主宰する所、特に內科を以て其地方を風靡し一流に在り。感想に曰く「現今の社會は科學者に對し餘りにも冷淡であることは科學發達の爲め慨嘆に堪へない、尤も昨今の樣に物質萬能主義に流れ、亦往々にして學徒の人格低下を叫ばれておる反影とは申しながら邦家の爲め悅ぶべき現象ではない、申す迄もなく、歐洲大戰前に於ける獨逸の隆盛は只科學の力であつた、從て科學者に對する社會の優遇は益々獨逸をして其大をなした所以だが、戰後に於ける科學者の沒落と國家の沒落とが相併行するのは能く味ふべき事實ではあるまいか。我々醫師は崇高なる科學の研鑽と高潔なる人格とを基礎とし患者の治療者となり、社會の善導者となつて、沒落せんとする社會を支援するの方法と自らを救ふの途とを講ずべきではあるまいか、空しく社會の風潮に乘じて所謂ギヤング式鬪爭に沒頭せんとする如きは、醫師自ら墓穴を掘ると撰ぶ所がないと云ふべきである」云々。

△長野縣南安曇郡溫村二木房藏次男、明治十七年生にして現姓を冒す。松本中學校を經て、同四十三年大阪高醫を卒へ、直に同校細菌學教室にて研究、同四十四年和歌山縣檢疫官又防疫官補として同縣細菌檢査部に勤め、大正三年之を辭し內科開業、同十一年迄診療に從事す、同十年大阪醫大にて規定の試驗に合格し醫學士の稱號を認可さる、同十一年獨逸に留學中ウイルヒヨウ病院醫化學教室及伯林衞生局細菌研究所に於て研究、此間傍ら伯林大學內科學第三室に於て內科實地研究、獨、墺、瑞、佛、米の醫界を視察して同十二年末歸朝す、爾來頭書の兩病院を經營し今日に至る、其間大正十四年三月學位を授與せらる。

△主論文は「膵液ノ血液ニ及ボス影響ニ就テ」にして其一、血球ノ沈降速度ノ本態ニ就テノ實驗的研究、其二、膵臟ノ血球ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究の二篇より成り、原著獨逸文。參考論文は、(1)「アナフイラキシー」ニ關スル研究補遺、(2)ワツサーマン氏物質ノ知見ニ就キテノ研究、(3)一新赤痢病原菌(和歌山型)ニ就テ、(4)蟾酢(蟾蜍毒)ニ就テノ研究豫報、(5)一新赤痢菌(和歌山型)竝ニ該菌ト糞便ヨリ得タル諸種細菌トノ比較研究ニ就テなり。學位は大阪醫大より獲得せり、博士も亦大阪高醫出身者中異彩に富む名醫博なる哉。

△學究的溫良の紳士にして、居常讀書を趣味とし、又音樂を好み風流の道に通ず。年齡知命に入る二、研鑽多年の造詣と精勵多年の修養とは、學問、經驗、人格併せて圓熟し今や一段の重望を加ふ。資性敦厚にして虛名虛榮を望まず禮節を尊び言行を苟くもせず、人に對しては情誼に富み、社交圓滿、天性刀圭家としての品韻を具へ、仁術以て天爵

を樂しむの人なり。大日本私立生命創造學會及び小喜多生命創造研究所創設主小喜多晴雄博士は義弟に當る。

◇

中澤房吉　△東北帝大助教授にして加藤内科に新進の中澤房吉博士あり、診斷學を擔任す。博士は東北帝大出身の内科學者にして、内科界現代の權威たる恩師加藤豐次郎博士に就きて斯學の蘊奥を究め、同時に八木精一教授の下に藥物學を研究し、母校より學位を獲得せり。主論文は猫及び家兎を用ひ腎臓血管運動神經に關し藥物學的研究をなし、腎血管擴張神經が血管收縮神經と共に内臓神經に含まれ、其源は胸髓下部及び腰髓上部の前根より發するものなるを確めたり、又迷走神經には何等腎血管運動神經の含まれざるを證せり。卽ち「腎臓血管ニ及ボス副交感及ビ交感神經毒ノ作用」(腎臓血管運動神經ノ本態ニ關スル知見補遺)(英文)これなり、參考論文は、(1)「カムフル」ノ循環系統ニ及ボス作用、(2)「カムフル」ノ循環系ニ對スル治療的効果、(3)「フロリヂン」ノ腸吸收ニ及ボス作用、(4)種々ノ養素ノ腸管各部位ニ於ケル吸收ニ關スル研究、(5)過敏症ニ關スル研究、(6)非經口的蛋白體療法ニ關スル實驗的研究、(7)「ヂギタリス」類ニ因リテ起ル心臓擴張靜止ノ本態ニ就キテ、(8)「ミヲクローヌスイビレビレー」ニ類似セル一疾患ニ就テなり。

△新潟縣柏崎町關福太郎次男、明治廿六年生る、幼時母方伯父中澤宗治郎の養子となる。新潟縣立柏崎中學校、二高を經て、大正八年東北帝大醫學部を卒へ、直ちに内科加藤博士の助手となり内科學を專攻する傍ら、藥物學教室にて八木博士より種々の研究方法を指導せらる、同十二年任東北帝大助教授、内科診斷學を擔當今日に至れり、同十四年三月學位受領、同十五年五月文部省在外研究員を命ぜられ、丁抹、獨逸、オーストリアに二年、就中、毛細血管生理につき現在世界の第一人者丁抹のアウグスト、クロー教授の許に約一年、此所に體液の物理化學の一面を研究、昭和三年歸朝爾來、體液膠質滲透壓の研究に沒頭、昭和八年、日本内科學會、恩賜金紀念賞を受く。志操堅實にして躬行實踐主義の人なり。寛厚能く人を容れ、親切にして能く學生を愛撫す。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、旅行、散歩運動等を好む。仙臺市本町通二三に住む。

◇

得田慶市　△横濱市中區常盤町六ノ八一に得田内科小兒科病院あり。院長得田慶市博士の開業拮据茲に十有一年を閲す、改善せる内部の設備整ひ、超然として一流に在り。博士は慈惠醫專出身の篤學者にして、嘗て米國に遊びボストン醫科大學及ペンシルベニア大學にて血清學を研究し、歸朝後東北帝大より學位を獲得せり。

△主論文は「血小板ノ研究」にして、(1)諸種實驗動物ノ血小板、(2)諸種疾病ニ於ケル血小板、(3)血小板ノ血清學的研究、(4)血小板ノ酵素の四篇より成り、外に參考論文として獨逸文の原著四篇あり。其の學問的價値は既に學界に定評あれば贅せずもがな、豐富なる學殖と共に、臨床的手腕は益々獨特の妙技を發揮し餘す所なし、今や其の今日の成功を贏ち得たるもの、博士の得意や想ふべきなり。

△明治廿年岡山縣眞庭郡美由村に生れ、横濱市中區住吉町六丁目醫師得田易の養子となる。東京郁文館中學を經て、大正三年東京慈惠會醫院醫學專門學校を卒へ、同四年三月任陸軍三等軍醫、同六年八月北米合衆國へ陸軍外國留學生として留學し、次で歐洲各國を見學し同十年五月歸朝す、其間陸軍二等軍醫に進級す、同年九月より東北帝大醫學部副手として熊谷内科教室に勤務、同十四年三月同大學より學位を得、同年四月より横濱市にて開業今日に至る。

△學究的溫厚の紳士にして、篤學者たり、其の今日ある閲歷は博士の前半生史に盡きて餘蘊なし。「醫は仁術也」をモットーとして、患者に對する誠實と親切とを盡し、飽迄信頼せしむるの德を有す。研究以外、スポーツに多大の趣味を有し、野球其他凡ての運動を好む、又時に芝居を樂しむ。

◇

林　良　材　△京都市御幸町三條上ル丸屋町に林内科診療所あり、京大派の一勢力家林良材博士の自營診療所にして、京都風の地味にして雄大なる構へに奥床しさを感ぜしむ、内容の設備と云ひ玄關子の取次と云ひ整然として親切なるは先づ好き印象を與ふ。博士診斷の手腕に至つては、外來患者の日々輻輳する盛況より見て批判の餘地なし「善人に非ざれば良醫たるを得ず」とは、博士の常に主張する所にして、自警の句として深く腦裏に銘して忘れず、自ら警しめ自ら勵ますところに反映する何ものか大なるものあらん。又た感想として聽けば「醫者と患者とは役者と觀客との關係に譬へたい。役者は自分の腕一杯の妙技を演出するのが本分で、特等席に向つては馬力をかけ、三等席に向つては力を抜くといふ樣な事は無い。觀客は夫々自分に應じた見物料を拂つて名優の妙技に恍惚たる事が出來る。それと同樣に醫者は自己の伎倆の最善を盡して患者に接し、患者はその身分に應じて可然謝禮を呈するといふ風に成りたいものだが、世態の推移に伴ひ斯樣な考へ方が段々實際的でないと云はれる樣になつた事は殘念である」云々。

△その學歷及び閲歷より觀たる博士は、三高を經て、大正五年京都帝大醫科を卒へ、引續き助手として附屬醫院に勤め、同七年之を辭して母校の大學院に入學、教授島薗、藤波、速水三博士の指導を受けて内科學及び病理學の研究に沒頭し、同時に副手として再び附屬醫院に勤め、同九年大學院退學と同時に再び助手に任ぜられ、同十一年醫學部講師となる、同十二年講師囑託を解き京都帝大助教授に命ぜられ、同十三年内科學第三講座分擔を命ぜらる、同十四年依願本官を辭し歐米漫遊の途に上り十五年歸朝す、其間同十四年三月母校より學位を得、歸朝後頭書の現住所に於て内科診療所を開設今日に至る。

△主論文は「部分的榮養障礙ニ關スル實驗的研究」にして三編より成る、參考論文は、(1)「インフルエンザ」肺炎ノ血液像ニ就テ、(2)腦脊髓液ノ「マスチツクス」反應ニ就テ、(3)先天性内皮細胞腫ノ一例等。著書としては「臨床藥物十講」あり。其他論著夥多。

△和歌山縣日高郡東内原村林治の長男にして、明治二十四年生る、當年四十有五歲。著者一度訪問したる事ありしも不在中にて面識を逸したるも、其居常能く時務に對する禮儀を重んずる人にして、恭謙克く己を抑し友情に篤く、又人に對する親切にして眞摯なる紳士的態度は甚だ多とすべきなり。讀書家にして文才に富み、殊に俳句を能くす、靜風は其號なり。子煩惱にして能く子供を愛す。自宅は左京區岡崎法勝寺一一五に在り。

◇

田口議一郎　△足利市永樂町に田口内科醫院あり、内部の設備の完備せる點に於て、將又診斷の的確にして親切なりとの評判に於て、獨歩の觀あり。院長田口議一郎博士は東北帝大系專門部の出身にして、京都帝大より學位を獲得せる篤學の名醫博なるが、嘗て獨逸に遊び、伯林大學にてビツケル教授指導の下に實驗生物學を研究し、傍ら内科の臨床的實驗に從事せるなど、多年蘊蓄せる學殖と臨床的手腕に對しては、既に批判の餘地なし。

△學位主論文は「胃腺ノ神經主宰ニ關スル實驗的研究」にして獨逸文を以て著はし、外に、(1)胃腸上皮ニ存スル「クローム」親和性細胞ニ就テ、(2)犬胃ニ存スル「スピロヘータ」ニ就テ、(3)腹部癌ノ際ウイルヒヨウ氏腺ノ現出及其診斷的價値ニ就テ、(4)結核患者血清並ニ結核免疫家兎血清ノ「チユス」菌凝集反應ニ就テ、(5)南滿撫順ニ於ケル回歸熱ニ就テ、(6)二三哺乳動物ノ腸腺ニ存スル顆粒細胞ニ就テの參考論文六篇あり。

△學歷及び閲歷より打診すれば、博士は東京獨逸學協會學校中學を經て、大正元年東北帝大醫學專門部を卒へ、直ちに東京市三井慈善病院醫員奉職、同四年一月京都帝大附屬醫院醫員介補被命、同年八月京都帝大醫科大學研究科に入學、佐々木教授指導の下に病的生理學を研究す、同五年東京市杏雲堂醫院奉職、同九年滿鐵撫順醫院醫員奉職、同十一年四月より翌十二年十二月迄獨逸留學、同十三年朝鮮總督府道慈惠醫院醫官、春川慈惠醫院内科長を命ぜらる、

同十四年四月學位受領、同年依願免本官、爾來足利市に開業今日に至る。東京府須田明三長男、明治二十三年生れにして、大正十三年選定相續人となり現姓を冒す。醫博佐々木政吉、醫博佐々木隆興、醫博内田孝藏等とは姻戚の關係あり。研鑽多年、學深遠にして實地の經驗に富み、其專門に精進する名博士としての名聲は既に其地方に嘖々たるを聞くや久矣。業餘の趣味としては散歩を最も好む風あり。學究的溫厚の紳士にして、自己の才學に衒ふ風なく、人に對して恭謙禮讓の德を備ふ。

◇

前川齊　△岡崎市蓮尺町に内科を標榜して開業せる前川内科醫院長前川齊博士は、京都帝大系の内科學者にして、大學院在學中恩師松尾巖博士に内科學を、故藤浪鑑及び故速水猛兩教授に就て病理學を研究して學位を得、實際的臨床方面にては、内科部長として小倉記念病院にて多年其腕を練り頗る經驗に富む。今や其獨特の手腕を發揮して餘す所なく、開業數年の今日頗る人氣を集め、打診の好評と共に益々向上發展の道程に在り。

△學位主論文は「諸種腹水症ニ於ケル腸間膜ノ病理」にして第一肝硬變症ニ於ケル腸間膜ノ組織所見ニ就テ、第二日本住血吸蟲病ニ就ケル腸間膜ノ組織所見ニ就テ、第三腹水ヲ伴ヘル腹腔諸臓器癌腫例ニ於ケル腸間膜ノ組織所見ニ就テ、の三篇より成る。參考論文は、(1)腸軸轉症ニ就テ特ニ其腸間膜ノ病理解剖學的研究、(2)結核患者血清ノ「チフス」菌凝集反應ニ及ボス影響ニ就テ、(3)骨髓巨大細胞並ニ同核ノ肺毛細管栓塞ニ關スル實驗的研究、(4)大正七年秋季流行セシ「インフルエンザ」肺炎患者ノ細菌學的所見の四篇なり。

△岡崎市前川榮二男、明治廿五年生れにして、愛知縣立第二中學、第八高校を經て、大正六年京都帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學附屬醫院中西内科に勤務、同九年小倉記念病院内科部長に就職、同十一年辭職、京都帝國大學大學院入學、同十三年在學の儘京都帝大醫學部内科副手の囑託を受く、同十四年大學院退學と同時に副手を辭し、再び小倉記念病院内科部長に就任、同年四月學位受領、昭和三年頭書の現住所にて開業今日に至る。年壯銳氣、學究的臨床家として最も重望せらるゝ腕盛に在り、今や學識、手腕、人格共に圓熟の域に入り、診療界のため益々活躍して大に將來に待つあらんとす、博士の得意や想ふべき也。業餘讀書清遊して新智識の吸收に力め、又旅行に趣味を有す。

◇

加藤誠治　△神戸市醫師會附屬ラヂウム治療所長として、昭和七年來此の方面の治療に活躍し、當地診療界の爲め今猶恪勤、盡瘁倦むことなきは加藤誠治博士也。博士は三高醫學部出身者中の古參にして、後身たる岡山醫專教授として母校の教壇に起ち、嘗て獨逸に留學するや、ウユルツブルク大學にて教授レーマン博士に師事して細菌學及び衞生學を研究し、歸朝後更に岡山醫大教授として拔躍せられ、學位は岡山醫大より獲得せる篤學の學者也。目下の專門は内科にして、特に呼吸器科を最も得意とする大家として定評あれば更めて批判の餘地なし。現に兵庫縣結核豫防會理事として又此方面にも盡力する所あり。

△學位主論文は『中樞神經系統ヨリ取リタル「リボイド」粒子ノ電氣的運動ニ及ボス破傷風毒素ノ影響ニ就テ』にして、參考論文は、(1)破傷風毒素「ヒョレスレテリン」「レチチン」等ヲ注射シタル動物ノ腦背髓ヨリ取リシ「リボイド」粒子ノ荷電ノ變化ニ就テ、(2)動物ニ因ル氣中塵埃ノ吸收ニ關スル定量的實驗のほか他に二篇あり。

△明治二十九年第三高等學校醫學部を卒へ、其後一年志願兵役を終へ、東京市長與胃腸病院醫員、傳染病研究所助手を歷て、同三十五年岡山醫專講師となる、日露戰役に際し同三十七年召集せられ廣島豫備病院に勤む、戰役中任陸軍二等軍醫、戰役の功に依り叙勳六等、同三十九年再び岡山醫專講師となり翌年同校教授に任ぜらる、大正二年官命にて滿二ケ年間獨逸に留學す、同十一年岡山醫大の新設と共に同教授（高等官二等）に進み、同時に岡山市立網瀨濱病院長囑託、同十三年退官、從四位勳三等たり、同十四年五月學位受領、同十五年岡山市立岡山病院長兼岡山市立半田

療養所長に任ぜらる、昭和七年現職に轉じ、同年兵庫縣結核豫防會理事を囑託せられ今日に至る。岡山市大供一〇一に本籍を有し、加藤壽の養嗣子たり。溫厚篤實なる學究的紳士にして、老來益々壯なるは多幸とする處也。業餘の趣味としては今猶讀書清遊旅行を樂しみ、また時に園碁に耽け其日の勞を慰す、目下の家族は長男圭典(學生)養父壽、養母花の三人にして妻無し、切角の自重加餐を祈るや切也。兵庫縣西宮市西宮北口に住す。

◇

名取博三

△京都市殷賑の地、大宮通り四條下ルに內科小兒科を以て著聞する名取醫院あり、院長名取博三博士の診療所にして、開業既に二十有餘年に及び、多年の聲望と相俟つて今や牢乎として動かすべからざる地盤を有し、嘖々たる評判を聞く、蓋し成功と云はざるを得ず。博士は金澤醫專の出身にして、京大敎授中西博士に就き內科學臨床を、同平井博士に就き小兒科學臨床を究め、同岡本及び小南兩博士の指導を受け、京都帝大より學位を獲得せる篤學の名醫博也。學位論文は腐敗の進行に對するカスペル氏の提案を組織の染色性に依り實驗的に證明し、且埋葬死體の疾病證明可能期間を研究せるものなり。

△顧みて博士の略歷を一瞥するに、明治四十一年金澤醫專卒業後、直ちに同校副手となり內科敎室勤務、同四十二年五月任京都帝大醫科大學助手、法醫學敎室勤務、大正元年九月同助手を辭し同大學附屬醫院中西內科に次で平井小兒科に勤務、同二年九月現住所に內科小兒科を以て開業す、その傍爾來絕えず法醫學敎室に入り岡本敎授の指導を受け、同十三年一月小南敎授指導の下に再び京大醫學部專修科に入學、同年五月同學部講師囑託法醫學擔任、同十四年五月學位受領、爾來專ら診療に從事し今日に至る。

△主論文は『腐敗ノ進行ト組織ノ染色性及疾病證明可能ニ就テ』と題し、外に參考論文には(1)織業ト手ノ特徵第一、二報告、(2)屍蠟及木乃伊形成ノ時期ニ就テ附　二三ノ實例、(3)「フルオレスチエイン」加里ノ皮下關節腔及腹腔內吸收ニ關スル食鹽水ノ影響ニ就テノ實驗的研究、(4)小兒ノ心臟發育狀態並ニ其發育ト年齡トノ關係ニ就テ、(5)新入學(七、八歲)兒童ノ種痘ニ就テ、(6)三價砒素ノ組織化學的證明、(7)「エレクロイド」銀ノ殺菌作用竝ニ臨床上一、二ノ治驗(8)結核喀痰ノ「ヂアツオ」反應ニ就テ、(9)銀「エレクロイド」ノ副作用ノ原因ニ就テ並ニ注射時ノ注意の八篇あり。聞說、開業醫にして幾星霜かの間開業の傍ら自ら足を敎室に運びて、努力研鑽の結果、學位を獲得せるもの京都にては名取博士を以て嚆矢とすと、其の學問的價値は言はずもがな、汗と膏とによりて玉成されたる價値は一層尊重すべき也。

△山梨縣八代郡右左口村の人、明治十八年生る。學究的溫厚の士にして、其の今日ある篤學は博士の前半生史に輝きて躍如たるものあるを見る。當年不惑に入る九歲、元氣旺盛にして常に研究心に燃え、今は腕の冴え盛にて學識、手腕、人格共に益々老熟の佳境に入り、最も重望せらるゝ年輩に在り。人と接するに少しも尊大振るなく、謙遜偏に恩師先輩のお蔭を說き、淡々として只管己れを虛うし、快活にして人を愛し、人に親まるゝの德を有す。

◇

鴻上慶治郎

△東京市四谷區番衆町三六に鴻上病院あり、院長鴻上慶治郎博士の經營する所、新築落成後未だ數年ならず、西洋風なる新裝の陣容結構にして、外構の壯美と相俟つて內容の充實を聯想せしむ。專門は內科にして特に呼吸器病科、血淸診斷などは博士の最も得意とする所。打診の好評は普く遠近に及び、今や私立病院中新興の一勢力として民衆の與望を負ふ。

△學位は母校たる東京帝大より獲得せるが、主論文は、「ゼラチン」ノ血淸學的研究」にして、參考論文は、(1)結核ノ補體轉向反應ノ理論及實驗的研究、(2)肺結核患者喀痰內「ヱオヂン」嗜好細胞增多現象ト豫後並ニ治療的ノ成果トノ關係及ビ有機砒素製劑「ヂソメアール」ノ治療的價値、(3)珪酸ニ關スル研究の三篇なり、他にも論著夥多あり。

△更に博士の學歷及び年歷より打診すれば、六高を經て、大正七年東京帝大醫科を卒へ、直ちに同大學附屬醫院分院

副手となり九年八月迄二木、鹽谷、兩博士に師事して內科を專攻す、それより東京市醫員となり、東京市立療養所に勤む、同十四年六月學位授與、昭和三年辭職、頭書の所に於て開業、鴻上病院を新築創設し今日に至る。愛媛縣新居郡船木村鴻上淺吉三男、明治二十三年生る。當年四十有六歳也。學究的溫厚の紳士、年壯の意氣に燃え、研究心甚だ旺盛にして手腕今や圓熟の域に入る。臨床家としては最も重望せらるゝ年輩にして、今が活躍の全盛時なるべし。生來几帳面にして眞面目の方なるが、其の臨床にのぞむや熱心克く誠意親切を以てす、居常又人に對するに應答禮を重んじ時務を缺ぐことなし。讀書家にして業餘書見を樂しみ、また趣味としては義太夫を好み、園藝にも親しむと云ふ。

◇

諫山直　△埼玉縣浦和市鹿島臺一九三五に開業せる諫山直博士は、東大系青山內科に巢立ちたる內科學者にして、學位は東北帝大より獲得せるが、嘗ては歐米に遊び、墺國インスブルグ大學生理學教室にて研究する所あり。即ち博士論文は斯間の苦心を物語るものにして、研鑽努力の結晶と見るべきものなり。主論文は(1)反射的興奮ノ場合及ビ間接的興奮ノ場合ニ於ケル筋肉動作電流ノ經過ニ就テ、(2)咽下動作後ニ於ケル咽下中樞ノ一超正常期ノ證明の二篇より成り獨逸文の原著なり。參考論文は、(1)兩棲類ニ於ケル淋巴腺ニ就テ、(2)血液ト組織トノ間ノ液交換ノ速サニ就テ(3)靜止セル蛙心室ノ興奮性ニ就テ及ビ「エルゴタミン」ニ因ル心室自動ノ衰弱ニ就テ、(4)氣管ノ一部ヲ逆サマニ癒着セシメタル場合ノ顫毛運動ニ就テ（以上獨文）外二篇あり。

△大分縣日田郡五和村諫山回春長男、明治十二年生れにして、福岡縣久留米尋常中學明善校、第五高校を經て、明治三十八年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに副手として附屬醫院青山內科へ勤め、後ち助手となる、同四十年十一月依願大學助手を辭し東京市に開業す、大正四年任神戸鐵道病院副院長兼內科醫長、同十年任仙臺鐵道病院長兼內科醫長、鐵道局技師、同十二年歐米各國出張を命ぜらる、同十四年歸朝復職し、同年五月學位を受領せり、昭和七年八月仙臺鐵道病院長の職を退き頭書の現住地にて開業今日に至れり。趣味としては音樂を好み、また時に旅行を樂しむ。福德圓滿なる風貌の裡に威嚴を藏し、舉措悠々として逼らず、人に對するに親切と同情と理解とを以てす、其の紳士的眞摯なる態度は博士の人格を聯想せしむ。

◇

中西春一　△名古屋市西區下園町三丁目に中西內科醫院あり、中西春一博士が開業拮据數年に及ぶ、新裝せる博士の診療所なり、打診の好評は日增民衆の人氣を吸收し、繁榮歳と共に益々向上發展の道程にあり。博士は愛知醫專出身の內科學者にして、母校の恩師八田善之進博士及び勝沼精藏博士に就きて內科學の蘊奥を究め、東京帝大より學位を獲得せる篤學の士也。五篇より成る鴻大なる學位論文は、博士會心の作にして如何に精研の該博なるかを語り、其の學問的價値は既に學界に定評あれば贅せずもがな、學理と共に臨床に多年の經驗を有し、いよ〳〵獨特の手腕を發揮せんとする、博士の前途や刮目すべき也。

△即ち主論文は『血液「カタラーゼ」ノ研究』にして、(1)健康人血液「カタラーゼ」及其一日中ノ動搖、(2)諸種疾患々者血液「カタラーゼ」(3)十二指腸蟲病患者血液「カタラーゼ」ニ就テの五篇より成る。參考論文は、(1)「インフルエンザ」肺炎患者ニ對スル健康人血(5)脚患者血液「カタラーゼ」ニ就テ、(4)飢餓ノ血液「カタラーゼ」ニ及ボス影響清療法ノ臨床的觀察、(2)稀有ナル脚氣ノ二例、(3)遊走肝の三篇なるが、他にも論著夥多あり。

△更に學歴及び閲歴を概括すれば、博士は名古屋市西區本重町四丁目中西五郎長男、明治廿六年生れにして、愛知縣立第一中學校を經て、大正六年愛知縣立醫專を卒へ、直ちに母校內科教室に入り、八田教授に次で勝沼教授指導の下に研究に從事し、同九年十二月愛知醫大附屬病院診療醫を被命、同十三年五月任同大學助手、其の間名古屋砲兵工廠醫

員及び日赤愛知支部診療所醫員を囑託せらる、同十一年十二月共立名古屋病院創立五周年紀念奬學資金二百圓を授與せられ、同十四年六月學位受領、翌十五年三月愛知醫大助手を辭し現住地にて開業せり。眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、信仰心に厚く諦めのよい人也。特に研究心に富み、豫防醫學の民衆化に關する研究並に喧傳に熱心努むる所あり。若し强るて短所を言はしむれば職業以外世事に機敏を缺くことなきか。默行はペンネームにして醫文士を以て知らる、多趣味の人にして和歌を能くし、謠曲、寫眞、玉突、乘馬等を好む。（昭和八年四月二十五日稿）

追　悼

中西春一博士は、此稿を草して後、昭和八年五月たま〳〵健康を害して以來、專ら療治に力められしも年末より病床の人となり、恩師八田善之進、同勝沼精藏兩博士、先輩桑原庄二郎博士及び主治醫大乃醫師等々良醫の投藥も、手厚き看護も其の甲斐なく、翌九年一月二十六日終に逝きぬ。嗚呼悲哉。學界への多年の貢献は言はずもがな、折角潑剌たる英氣と、練達せる手腕とを發揮せんとするに際し、餘りにも幼ない四人の遺兒を殘し、洋々たる前途を捨てゝ他界せられたるは、愁傷の極みにて惜みても猶餘りあり、爲學界返へす〳〵も悼惜に堪えず、玆に謹みて追悼の意を表す。

未亡人中西絹子は長男春樹（六歳）、長女千惠子（十四歳）、次女惠美子（十一歳）、三女小夜（九歳）、等四人の愛兒の幸福の爲め健氣にも專心教養に勵精せられつゝあり、切に健康と幸福とを祈る。住所は名古屋市東區萱屋町一ノ二十一なり。

◇

山本誠一

△東京市牛込區南町三一にある山本內科醫院は、山本誠一博士の診療所なり。開業玆に十年に垂んとする今日、內部の設備整ひ、打診の好評は多年の聲望と相俟つて益々人氣を溢り、繁榮歳と共に今や牢乎として拔くべからざる地盤を有す。博士は東大出身の內科學者にして、內科學界の權威稻田博士の愛弟子として知られ、母校より學位を得たる所謂東大派の名醫博たるに恥ぢず。

△學位論文は「體溫ト體水分トノ關係並ニ鹽類液ノ物質代謝ニ關スル研究」にして、參考論文なし。其の鴻大なる主論文は、如何に精研の該博なるかを語り、其の學問的價値は既に學界に認めらる。既にして其の蘊蓄せる學殖は言はずもがな、臨床に堪能にして多年の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して、其今日の隆盛を致せるもの、亦偶然ならざるを想はしむ。

△東京府立四中、四高を經て、大正三年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに陸軍見習醫官を命ぜられ、步兵第六十六聯隊へ配賦せらる、同五年四月任陸軍二等軍醫、補步第五十九聯隊附、同七年一月依願休職被仰付、同九年一月豫備役となる、先是同七年二月東京帝大醫學部藥物學教室副手囑託、林春雄教授の指導を受く、同十一年一月任同大學助手、同十三年五月より附屬醫院稻田內科に勤務、臨床醫學の研究を續け、同十四年六月學位を受領す、昭和三年稻田內科を辭し現住所に於て開業今日に至る。東京府士族山本誠喜長男、明治廿二年生る。學究的溫和なる紳士にして、福德圓滿なる風貌を備え、凛々としたるところに學者らしき威嚴を存す。博士の最も特徵とするところは、臨床に熱心にして眞劍なると、患者に對するに誠意誠實を以てし、飽迄親切を盡す點にあり。其の篤き今日の聲望を博せるも亦以て其の性格の反映なるを首肯せしむ。研究以外、運動に多大の趣味を有し殊に野球、ボート、狩獵、釣魚などを最も好む。立派なる體格の持主たる所以、亦こゝに存する乎。博士の長姉信子は上田鸞糸專門學校長針塚長太郎に嫁し、次姉幸子は御園白粉本舗先代伊東榮に嫁す、餘慶ある家柄と云ふべし。

◇

前田實　△横濱市神奈川區桐畑に在る横濱三島堂病院は、院長前田實博士の經營する私立病院にして、多年横濱診療界の爲め努力盡瘁しつゝあるは世人周知の如し。博士は神奈川縣都筑郡都田村川和の前田收治の長男、明治二十五年生る。新潟醫專出身の篤學者にして、大正七年同校卒業後、直ちに九州帝大醫科大學第三內科教室に入り醫務介補となり、傍ら翌八年より福岡監獄醫囑託、土手町分監勤務被命、同十二年九月大震災の爲約二週間日赤福岡支部臨時救護員を囑託せらる、同十三年「マラリヤ」研究の爲大學より二ケ月間臺灣屏東に出張を被命、同十四年福岡刑務所衞生事務囑託を辭す、同年六月九州帝大より學位受領、同年十月私費を以て歐米に漫遊、主として獨、佛、瑞西、墺、瑞典、諾威、米諸國に於ける大學或は公立病院を內科的に視察し、翌十五年七月歸朝、爾來頭書の三島堂病院院長として就任今日至れり。

△學位主論文は『鹽酸「キニーネ」溶血現象ニ關スル實驗的並ニ臨床的研究、附、黑水熱病理ニ關スル考案』にして第一緒論、第二材料及實驗方法、第三—六實驗的研究、第七、八臨床的研究、第九黑水熱發病論並に第十總括的結論より成る。參考論文に、(1)ワツセルマン氏反應ニ「アンチゲン」トシテ使用シタル澱粉粒ノ物理的性狀ニ就テ、(2)流行性感冒ノ臨床的觀察、(3)諸種疾患ニ於ケル赤血球ノ抵抗ニ就テの三篇あり。寫眞及びテニスに趣味を有す。

備考　醫學博士中同姓同名の前田實三名あり、一名は既に故人にして、他の一名は弘前市立病院產婦人科醫長たり、往々人違ひさることあれば參考の爲め玆に記す。

◇

小川清次　△東京市澁谷區金王町二に在る小川內科醫院は、小川清次博士の經營する診療所なり。博士は東大系の內科學者にして、恩師入澤達吉博士に就きて斯學の蘊奧を究め、同林春雄博士指導の下に藥物學を專攻し、母校より學位を獲得せり。主論文は副甲狀腺剔出「テタニー」の本態に就きて研究せるものにして、參考論文なし。

△新潟縣三島郡來迎村小川清吉の三男、明治廿四年生れにして、四高を經て、大正六年東京帝大醫學部を卒へ、引續き同大學附屬醫院分院勤務を命ぜられ內科學專攻、同十年九月より十三年五月迄同學部藥物教室にて藥物學專攻、同十三年六月より十四年一月迄入澤內科にて研究、同十四年一月より日本橋區靑物町日本橋病院副院長として就任、同十五年七月學位受領、次で現住所にて開業今日に至る。邦畫、邦樂を趣味とす。家庭には妻松枝との間に二男あり。

◇

安藤克己　△伏見病院長安藤克己博士に就ての認識を得んとするに當り、先づ其學歷より打診して博士のプロフエショナル經路を調べ見るに、博士は大正六年京都府立醫專を卒へ、直ちに同校附屬療院に勤め醫員となる、同年一年志願兵として步兵第五十四聯隊へ入隊、同八年除隊と同時に京都市私立朱雀病院勤務、同九年現職の儘京都帝大醫學部に入學、戶田正三教授の指導を受く、同十年任陸軍二等軍醫、同十二年朱雀病院を辭し引續き京大醫學部專修科生として、同十四年迄研究を續け、四月京大醫學部を退學と同時に京都府立醫大副手となり內科教室勤務、同年七月京都帝大より學位を受領す、爾來公立伏見病院長就任、同十五年京都府立醫大講師を囑託せられ今日に至る、以て其今日ある概要を知るに足るとせん。

△學位主論文は「塵埃ノ理學的性質ト結核症トノ關係」にして、(1)統計的觀察ト從來ノ所見ニ就テ、(2)塵埃ノ理學的性質が肺結核症ノ發現ト其經過ニ及ボス影響ニ就テ、(3)塵埃ノ理學的性質ガ腸及腹膜結核症ノ發現ト其經過ニ及ボス影響ニ就テの三篇より成る。參考論文は、(1)細菌性消化器病ノ飲食物ノ經傳染ニ關スル研究、(2)腸管局所免疫ニ關スル實驗的研究、(3)混合糞尿中ニ於ケル病原菌ノ自然消滅ニ關スル研究、他に三篇あり。他にも論著夥多にして枚擧に遑なし。岡山縣阿哲郡千屋村井原の人安藤匡太郎の長男にして、明治二十六年生る、當年漸く四十有三歲也。文學趣味の人にして北翠はペンネームなり、演藝に親しみ又屋外運動特に庭球を好む。學究的臨床家として其今日ある篤學

は博士の面目を語るに足る。春秋豐富なるの秋、猶洋々たる後半生史の成業は更に期待せらる。京都市伏見區桃山町宗和園に住す。

◇

小畑郁　△久留米市日吉町一丁目に內科、レントゲン科及び物理學療法科を以て著聞する小畑病院あり、院長小畑郁博士の經營にして、開業既に古く、拮据經營宜しきを得て內部の設備整ふ、多年の聲望と相俟つて今や拔くべからざる地盤を確持し、依然として一流の位地に在り。學系は九大出身の內科學者にして、恩師稻田龍吉博士及び吳建博士に就きて斯學の蘊奧を究め、後に又中山平次郎及び田原淳兩教授指導の下に病理學を研究して、母校より學位を獲得せる斯科界の名醫博也。博士は大正十一年以來吳教授の命に從ひて尿毒症の研究に着手し、尿毒症人體症例並に腎臟剔出輸尿管結紮等を應用せる實驗的尿毒症の病理解剖學的特に病理組織學的研究を試みたるもの、卽ち主論文にして、「尿毒症ノ病理解剖ニ就テ特ニ中樞神經系統ノ變化」と題す。參考論文としては「ハブ」毒注射ニ因ル實驗的家兎中樞神經系統ノ變化ニ就テの一篇あり。

△宮城縣遠田郡沼部村大澤の人、明治廿三年生る。宮城縣立仙臺第一中學校、二高を經て、大正六年九州帝大醫科大學を卒へ、直ちに第一（稻田）內科教室に入局、同九年一月退局、爾來久留米市にて開業、同十一年二月に至る、同年四月九州帝大醫學部第一（吳）內科に入局、內科學並に病理學教室に入り中山、田原兩教授指導の下に研究を續け、同十四年七月學位受領、同十五年一月辭職、爾來再び久留米市にて開業今日に至る。年齡漸く不惑に入る六歲、年壯の意氣と共に學識、手腕、人格いよ／＼玉成の域に入る。殊に臨床に甚だ熱心力め、眞劍にして誠實と親切とを盡す。一面又人と接するに穩健にして篤實、淡々として己れを虛うする奧床しき態度は、其の人格を敬慕せしむ。

◇

服卷勝見　△現代胃腸病界の大家として玆に服卷勝見博士を描出して品隲せんか、佐賀市松原町中小路に在る服卷病院こそ博士の經營する所、宏壯なる結構と共に內容の充實は好感を以て迎へらる。開業拮据こゝに拾年、旣にして胃腸病專門を以て王座を占む。蓋し其玲瓏たる手腕と相俟つて、性來臨床家としての特徵たる博士の德化に負ふ所大なりと云ふべし。

△感想を述べて曰く「勤勞醫者には取り分け何等の希望もない又何等の不平もない從つて感想などある筈がない、只々我を信ずる者は來れ信ぜざる者は空しく去るべし、此の信念で天職を遂行すべく自分の最初の病院名に「成蹊」と冠した譯けである、民間の草醫平々凡々十年一日の如く、昨日も今日も情誼の職務に之忠なりと働いて居るのみである。幸に健康充分であるから幸福である」云々。

△學位は九州帝大より獲得せり。主論文は『所謂「セクレチン」ノ動物實驗的、化學的、顯微化學的研究』にして前篇の『所謂「セクレチン」本態ニ就テ』及び後篇『十二指腸壁ニ於ケル「ヒヨリン」ノ顯微化學的研究』の二篇より成り、參考論文は、(1)「セクレチン」溶液ノ腸管蠕動ニ及ボス影響ニ就テ、(2)胃腸管各部、粘膜ノ「セクチン」含有ノ强弱比較試驗、(3)動物體內ニ「トリニユーム、クロクード」注射後各臟器ヘノ分布狀態ニ就テ、外五篇あり。

△博士は岡山六高を經て、明治四十四年東京帝大醫科大學を卒へ、同四十五年九州帝大醫科大學婦人科教室副手勤務大正二年第一內科へ轉勤、三年辭して鄕里佐賀縣牛津町に私立成蹊病院を開設す、同十年七月渡歐して伯林大學病理研究所實驗生物學教室に於て消化器學を研究す、同十一年八月より獨、佛、英、米、を見學して十一月歸朝す、同十二年九大專攻科學生となり、法醫學並に醫化學教室にて研究、同十四年退學、同年七月學位受領、同時に佐賀市松原町に開業今日に至る。

△佐賀縣小城郡井戸刈村服卷勝一の長男にして、明治十五年生れなれば、當年五十有四歲也。眞面目なる學究肌の人に

して、臨床に多年の經驗を有し、今や壯熟の域に入り、其の學識、手腕は言はずもがな、一段の貫祿を加ふ。謙遜家にして自己の才學を衒はず、至誠以て仁術を樂しむ德操の士也。今日の聲望あるは、又以て其人と爲りの一班を物語りて餘蘊なし。

◇

藤卷 要之助　△東京市小石川區丸山町二一に著名なる藤卷內科病院あり、院長藤卷要之助博士の經營する處、宏壯なる建物は優雅にして外觀の美を具へ、レントゲン科の併置と合せ內容の施設又た完備し、病室も十二名收容し得る設備あり。博士は新潟醫大系醫專時代の出身にして、研鑽多年、嘗て獨逸に留學して學術の蘊奧を究はめ、其の玲瓏たる手腕は壯來益〻圓熟の域に入りて評判高く、殊に博士の最も得意とする呼吸器病及び腹膜病に至りては、嶄然として斯科に頭角を拔き一流の位置を占む。

△新潟縣中頸城郡和田村の人、藤卷久助の長男にして、明治廿五年生る。新潟縣立高田中學校を經て、大正四年新潟醫專卒業後、新潟市布川內科病院勤務、同十一年歐洲留學、主として獨逸ハイデルベルグ大學にてクレール教授に師事して內科學を、ゴツトリーブ教授に就て藥理學を研究、同十三年八月歸朝、爾來母校の新潟醫大內科學教室及び藥物學教室にて研究を續け、同十四年七月新潟醫大より學位を得、同年九月より東京市本郷宇田病院內科部長、次で池袋驛前山手病院內科部長として就任せるも、辭して現住所に於て開業今日に至る。專門は內科にして殊に呼吸病、腹膜病を最も得意とす。主論文は『血液豫備「アルカリ」ニ關スル實驗的補說』にして原著は獨逸文なり。參考論文は(1)「チロキシン」利尿作用機轉ニ就テ（獨文）、(2)「チアン」及銅心臟毒作用ニ就テ（獨文）等。他にも自著論文夥多あり。

△博士は感想の一片を披瀝して診察室にて語る『自分は哲學が好きで、一般社會狀態にはあまり關心を持たないが、例へば醫師會淨化が叫ばれても、社會狀態の過渡期だからと云つて、社會が惡いのでなく、醫者自身に取つての反省を促したい、健全な物であつたならば、之を社會は歡迎し發展もせしめるのであるが、不健全なる物なれば改善を要することもあれば、又そのまゝ自滅するものもある。要するに醫師會淨化が叫ばれたとしてもそれは醫者個人に取つての自戒の念を促すものと見なければならぬ』云々。一服の清涼劑として傾聽に値す。

△讀書家にして居常能く文雅に親しみ、靜水の號を有す。殊に博士の哲學通に至りては有名にして造詣する所深く、談論風發、說く所該博にして熱心なり。又た精神統一のスポーツに多大の趣味を有し殊にゴルフは最も好む處にし、忙中閑を得れば、自らゴルフ場の陣頭に立ち、以て心身の鍛練に力むる處あり、聞說、同好の日野三郎博士とはゴルフ仲間にて唯一の友達なりと。博士曰く「不攝生した時は必ず負けるものである」云々。賦性溫厚の紳士にして、識見豐富、人に接するに敢て城壁を設けず、應接慇懃にして能く話し、又た患者に臨むに親切なるは、一般社會に歡迎せられ多大の信望を博する所以なるべし。臨床家として博士人物中の大物たるを敬慕す。

◇

空地 純一　△姫路市西紺屋町一三五に內科專門を以て斷然群を拔き、評判嘖々たるは空地純一博士經營の空地病院なり。開業拮据十年餘、繁榮歲と共に牢固たる地盤を有し、依然として一流の位地を確保す。博士は京大出身の內科學者にして、內科界現代の權威たる恩師辻寬治教授に就きて斯學の蘊奧を究め、殊に內分泌學を深く專攻して、母校より學位を獲得せる所謂京大派の名醫博たるに耻ぢず。主論文は甲狀腺機能と沃度新陳代謝に就て研究せるものにして、(1)沃度新陳代謝ニ及ボス甲狀腺並ニ副腎ノ影響ニ就テ、(2)脚氣患者並ニ犬「ヴイタミン」B缺乏症ニ於ケル甲狀腺機能ニ關スル實驗的研究補遺の二篇より成れり。參考論文は、(1)甲狀腺腫病患者ノ甲狀腺部ニ施セル溫並ニ冷器法ノ影響ニ就テ、(2)「アドレナリン」反應ニヨル甲狀腺機能亢進症ノ診斷ニ就テ、(3)バセドウ氏病ニ於ケル臟器製劑

ノ影響ニ就テ、(4)高度ノ筋無力症ヲ伴ヘル中毒性甲狀腺腫ニ就テ、(5)粘液水腫ノ一例　特ニ甲狀腺劑ノ影響ニ就テの五篇、其他論著夥多あり。

△姫路市の人、明治廿五年生れにして、兵庫縣立姫路中學校、七高造士館を經て、大正九年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに同醫學部副手として附屬醫院に勤め、專ら辻教授指導の下に內科學殊に內分泌學を研究せり、同十四年八月學位受領、同十五年五月日本內科學會幹事となる、同年七月依願副手解嘱せられ、鄉里姫路市にて開業今日に至る。

△感想に曰く「科學は飽迄信ずる者だ、而し同時に今少し精神的方面から病氣と云ふもの、病者と云ふものを考へて見る必要はないか——斯樣に思ひ始めてから所謂科學萬能を信じた時代に比べて如何によりよく面白く解決が附き始めたことを忝く感謝し乍ら只管に精進致して居ります」云々。學者タイプの風貌は何んとなく威嚴を有し、溫顏の裡に愛嬌を含む、學究的溫厚の紳士也。年齡漸く不惑に入る四歲、年壯氣銳にして多量の分別を有し、今は最も得意時代に在り。殊に博士の最も特徵とするところは、誠意誠實を以て飽迄患者に親切を盡す點にあり。人と爲り穩健篤實、寬厚能く人を容れ、謙遜にして己を虛うする淡々たる態度は、人をして其の人格を敬慕せしむるの德を有す。

◇

倉上由一　△東京市芝區三田功運町二一にて開業せる倉上由一博士は、元濟生學舍の出身にして、醫術開業試驗より奮起して志を立て、東大醫學部にては衞生學及び皮膚科學を專攻せる後、教授三田定則博士に就きて特に數年間新陳代謝に關する一般血淸學を研究し、次で長崎醫大教授淺田一博士指導の下に助手として勤務し、其の間數種の論文を發表して、長崎醫大より第一號の學位を獲得せる篤學の士也。主論文は「インズロトキシン」糖尿病の研究にして、先人未着手の領域に着眼して遂に豫期の好成績を得たるもの也。參考論文は、(1)實驗動物トInsulin (2)過血糖動物ニ於ケル解糖血淸ノ作用、(3)犬ノ膵臟剔出後「アドレナリン」注射後耐糖試驗ニ對スル血液含糖量ニ就テ、(4)犬ノ膵臟重量ニ就テ、(5)腎臟皮下ニ轉位後及動脈管鞘切除後物理學的刺戟ニ對スル腎臟機能ニ就テ、(6)腎臟動脈管神經切除後ノ腎臟機能ニ對スル種々藥物ノ影響、(7) 'ep on Shock ニ於ケル血液中ノ糖量及炭酸瓦斯量ニ就テ、(8)胃腸內ニ送入セル諸種「アルカリ」鹽及酸ノ血液及胃液ノ'h及血漿炭酸瓦斯量ニ及ボス影響 (9)日本人ニ於ケル處女膜ノ形狀ニ就テなるが、其他動脈硬化及血壓に關する論著夥多あり。專門は新陳代謝病科にして特に血壓亢進症(中風)、心臟、糖尿病、腎臟病の診療に獨特の手腕を有す。

△埼玉縣大里郡明戸村倉上伊十郎の長男、明治十七年生る。同三十五年より三十七年迄元濟生學舍に學び、同三十八年醫術開業試驗合格、同年より四十年九月まで東京帝大醫科大學選科生として實地研究、それより大正九年四月まで埼玉縣熊谷町にて開業、同年五月より十二年四月まで東京帝大醫學部血淸化學教室にて研究、同十二年五月より十四年六月まで長崎醫大助手として勤務、同年七月より十五年二月まで東京市養育院に於て臨床實地研究、其間十四年八月學位受領、同十五年三月より開業今日に至る。「現今の開業醫制度は近き將來に於て非常なる困難に遭遇の機運にある、それ故に吾々開業醫は國家的の見地より技術者として安全地帶の建設を望む次第である」との主論者也。立志傳的篤學者としての今日までの閱歷は博士の前半生史に光彩陸離たるものあり。人と爲り溫厚篤實、快活にして人を愛し人に親しまるゝの德を有す。讀書家にして文才あり、ラヂオ放送、新聞、雜誌其の他講演等にてよく聞く香保は、ペンネームなり。また化學實驗にも多大の興味を有し、俳句、落語、義太夫をも愛好す。

◇

松山俊胤　△東京市日本橋區濱町二ノ一七所在天佑堂病院は內科、小兒科を專門とし、院長松山俊胤博士の經營する私立病院也。開業拮据拾年餘、旣に牢乎として拔くべからざる地盤を有す。博士は東大系、恩師故青山胤通博士に次で稻田龍吉博士に就きて內科學を專攻し、母校より學位を獲得せり。その主論文は『「アルカリ」直腸注入ノ

胃分泌ニ及ボス影響』に就て研究せるものにして、臨床上に於ける「アルカリ」劑使用法の科學的根據を確定せるものなり。參考論文は、(1)日本健康者ノ尿及血液諸成分ニ就テ、(2)含水炭素同化力ヲ檢査スル一新法、(3)糖排出閾ノ變動ニ就テ、(4)普通食ヲ攝取セル健康者ノ食餌性血糖上昇ニ就テ等。他にも論著相當多數あるが如し。

△獨逸協會中學校、一高を經て、大正三年東京帝大醫科大學を卒へ、同大學醫化學教室副手を經て、同五年同教室助手となり、同六年同大學青山內科副手、同七年同稻田內科副手、同十年同稻田內科助手となる、同十二年日本赤十字社淺草臨時病院勤務、同十三年東京府醫師會淺草病院勤務、同十四年私立天佑堂病院開設、同年十月學位受領、以て今日に至る。明治廿一年東京市日本橋區浪花町に生る、松山秀雄の長男にして四弟あり。趣味としては園藝を好み、詩を能くし、論語を愛讀す。東京工業大學教授松井元太郎工博とは近親の間柄なり。

◇

一本杉虎二　△門司市丸山に風光明眉の地を卜して堂々の門戸を構へ、內科一般、物療科、傳染病科を標榜して、名實共に一流に在るは、一本杉虎二博士の經營する一本杉病院也。院內には施設完備し傳染病室も附屬せり。博士自ら臨床に當面し獨得の敏感、深重なる探究に、加ふるに細心なる檢査と、診斷の的確なるとは、患者に對しての親切誠實なる評判と相俟つて、開業漸く數年にして既に牢乎たる地盤を有するに至る、蓋し成功と云ふべき乎。學系は東大系なるも、學位は東北帝大より獲得せる名醫博也。

△主論文は「人體軟部組織ノ骨形成ト內分泌臟器トノ關係ニ就テ」にして、(1)軟部組織ノ骨形成ニ就テの三篇より成り獨逸文を以て著はす。參考論文は、行性筋肉骨化症ノ骨形成ニ就テ、(3)人體諸臟器內骨形成ニ就テ、(2)多發性進(1)「カルシユーム」新陳代謝ト上皮小體トノ關係ニ關スル實驗的研究、(2)「カルシユーム」ノ新陳代謝ニ關スル實驗的研究第一、二、三、四報告（以上英文）(3)多發性進行性筋肉骨化症患者ノ新陳代謝ニ就テ、なるが、指導教授は東北帝大教授熊谷岱藏及び木村男也兩博士に負ふ所多し。

△廣島縣佐伯郡大竹町の人、明治廿三年生る。大正六年東京帝大醫科大學卒業後、同七年一月任東北帝大助手、同九年三月任同大學學醫、同年六月辭職、同年十月日赤秋田支部病院內科醫長就任、同十二年二月辭職、同年四月東北帝大醫學部副手囑託、同十四年十月辭職、同時に旭川市竹村病院內科部長就任、同十四年十一月學位受領、昭和三年三月より現住地にて開業今日に至る。圓滿なる風貌は自ら其の性格を表示し、靄々たる溫容の裡に學者としての威嚴を存す。趣味としては圍碁を愛し謠曲を好む、また運動好にして殊にテニスに興味を有す。

◇

小口敏英　△水戸市南町四三七に在る小口內科醫院は、院長小口敏英博士の新裝せる診療所なり。開業拮据七年餘、打診好評にして繁榮歲と共に其の地方を風靡するの盛況を呈す。博士は千葉醫專の出身にして、慶大教授小林六造博士指導の下に細菌學を專攻し、慶大より學位を獲得せる篤學の士也。生體內に於て沈降素と沈降原が共存する事實はリノシエー及ルモアン氏が初めて著目せる所にして、爾來本問題の眞相を穿たんと欲して努力せる學者は少からずと雖も、未だ明確なる理解を與へたるものなし、博士は本問題の解決を企て各方面より研究せるもの、卽ち博士の主論文にして、「リノシエー、及ルモアン氏現象ノ本態ニ就テ」と題し、(1)生體內ニ於ケル沈降素ト沈降原ノ關係ニ就テ（第一回報告）(2)同（第二回報告）(3)血淸蛋白「フラクチオン」ノ免疫學的研究並ニ生體內ニ於ケル沈降素ノ中和現象ニ就テの三篇より成れり。參考論文は、(1)「イ」菌ト肺炎双球菌ノ家兎氣道內共棲現象、(2)「マウス」及ビ「ラツテ」ニ於ケル「イ」菌ノ菌力增强實驗、(3)家兎ニ於ケル「イ」菌ノ菌力增强實驗、(4)腫瘍ノ血淸學的研究(5)蛇血淸ノ溶血作用ニ就テ、(6)澱粉ヲ應用セル「コレラ」菌分離培養基ニ就テなるが、他にも論著夥多あり。

△茨城縣東茨城郡河和田村の人、明治三十年生る。大正八年千葉醫專卒業後、直ちに縣立千葉病院醫員を被命、同年

十一月母校細菌學實習補助囑託、同九年七月辭職、同年十二月慶大醫學部助手任命、細菌學教室勤務、同十三年四月同講師任命、同十四年十一月學位受領、爾來一二病院を歴任後現住地にて開業今日に至る。年齒未だ三十有九歳にして少壯の意氣に燃え、今は分別盛にて最も活躍の時代に在り。凛々としたる風貌と其態度の眞面目にして誠實なるは甚た多とすべきなり。運動に興味を有し殊に庭球を好む。

◇

住吉 彌太郎　△住吉彌太郎博士經營の住吉内科病院は、大阪市天王寺區堂ケ芝町一一八に在り、其の專門とする結核に至りては獨特の評判あるを聞く。博士は京都府立醫專の出身にして、嘗て墺國に留學するや、ウキーン大學細菌學研究所にてレーヴェンスタイン教授指導の下に結核を專攻し歸朝後、論文を京都府立醫大に提出して學位を獲得せる篤學の士也。

△學位論文は「咯痰中ノ結核菌ノ純培養ニ關スル研究補遺」が主論文にして、參考論文としては、(1)結核菌ノ分離培養法、外獨文原著三篇あり。他にも論著夥多。

△大阪府中河内郡楠根村の人、明治二十二年生る。大正四年京都府立醫專を卒へ、直ちに大阪回生病院(内科)奉職、同十一年二月渡歐、主として墺國にて研究す、同十五年一月學位受領、爾來頭書の住吉内科病院を大阪市に設立、内科一般特に結核を專門として診療に從事し今日に至る。年齒今や四十有七歳、學識、經驗、人格共に壯熟の域に入る蓋し臨床家としては最も重望せらる年輩にして篤き信望を博す。趣味としては小鳥や魚類の飼養を樂しむ。

萩原 良一郎　△臨海風光の地にして高臺の眺望と相俟つて、呼吸器科、血行器科の專門病院として理想的なる御殿山病院は東京市品川御殿山に在り。ドクトル、萩原良一郎博士の拮据經營既に十數年の歴史を有し、内部の設備充實して博士自ら臨床に起ち、醫局員の青年醫を指導して協力患者の治療に努力する處に民衆の人氣を吸收し、今日の繁榮を永えつゝある所以なりと斷定すべき乎。博士は慈惠醫專の出身にして、嘗て歐洲に留學するや、獨逸ミュンヘン大學にては病理學を專攻し、瑞西ベーゼル大學病理學教室にてはヘーデイソゲル教授に師事し、傍ら内科學教室ステーヘリン教授の指導を受けて研究に沒頭せり、次でベルン大學にてはザーリー教授に從ひ内科特に呼吸器病に關する研究を遂行せり。歸朝後なほ病理學の研究を續行して、慈惠醫大より學位を獲得せる篤學の士也。專門は内科にして、特に呼吸器科、血行器科、傳染病科は最も得意とする所なり。一面又た品川區醫師會庶務理事、東京府醫師會代議員たり。

△更に其の學歴及び閲歴を顧みるに長野縣立諏訪中學を經て、明治四十四年東京慈惠會醫專を卒へ、直ちに同會病院内科當直醫として高木兼二博士に師事し、同年更に東京病院内科醫局醫員となり、同博士指導の許に内科學を研究す大正元年傳研講習科修了、同時に一年志願兵として入營、同二年除隊と同時に獨逸に留學、同三年瑞西に轉學、ベーゼル大學にてドクトル、メヂチーネの學位を受け、同病理學教室有給助手として一ヶ年半勤務、同五年七月歸朝、爾來三井病院病理部及び母校病理學教室にて引續き研究をなし、傍ら東京品川に御殿山病院を設立經營今日に至る。其間大正十四年一月慈惠醫大より學位を受領せり。主論文は『加熱「ヂフテリー」菌及葡萄狀球菌注射ニ依ル睾丸ノ組織學的變化』にして、參考論文は、(1)急性傳染性疫患ニ際シ諸内臓器ニ出現スル「プラスマ」細胞ニ就テ(獨文)、(2)男子尿道結核ニ就テ、(3)肝臓ノ石灰變性ニ就テ(獨文)の三篇あり。其他臨床上の經驗を時々專門雜誌にて發表せるもの相當澤山あり。

△持論として感想の一、二を述べて曰く、(一)現代の醫人は思想の健實と人格の崇高なる點に於て、古人に及ばぬと思ふ、社會の變遷世想の推移に迎合の結果と云はんも、これが醫師たる使命の本分で、社會生活戰線の第一歩に立つ吾々として大衆をリードする見地より飽く迄輕躁浮薄に流れず思慮深遠の所謂ガッシリした人間として社會に立つの

が現代醫師の最大使命で極めて緊要なる事と思ふし、醫師にして誤認思想人の少なきは洵に慶賀に耐へぬ次第である。

(二)我國獨特の開業醫制度を發達し、社會の大勢に順應する醫人の生活を開拓せんと欲す、同業者一致協力、醫業の本旨を勵行し社會の福利民祉を增進するの必要を痛感す云々。長野縣上伊那郡美篶村春日昇の四男、明治二十年生にして、實家叔父の相續人となり萩原と改姓。常に醫業に親しみ好んで歐米の醫學臨床を通讀す、臨床の餘暇品川區醫師會經營の東海看護婦學校教務主務として講師を擔任し、懇切鄭重なる講義は明晰なる教授と相俟つて生徒の最も傾聽する所あり、又公共の念厚く町內小學校醫、町會長等の職を兼ね能く區內町內の爲めに盡瘁する所あり。醫界は益々多時多難なるの秋、健實なる思想と崇高なる人格に立脚する醫師としての博士は、熱心に至誠を基として職務に精勵する所あり、爲醫界甚だ意を强からしむ。只だ熱心なる餘り從業員や他人が不誠意、無責任なる行爲を爲すに對し、時々癇癪玉を起し怒責することありと聞く。讀書家にして宗教書を愛讀し、文筆の才あり、その尺牘雅健にして情味豐かなるは好感を抱かしむ。また外國語の會話に堪能にして在京歐米人との間に交際深く、其他遠足、植物栽培、玉突、乘馬、魚釣等々、多趣味の人と云ふべし。

◇

樋口榮　△群雄割據の速浪診療界に進出して大阪市東淀川區三國町に堂々の陣容を張る樋口病院は、私立病院中內科を以て最高の位地を占め嘖々たる好評あり。院長樋口榮博士の經營にして外構內容相俟つて整ふ。博士は醫術開業試驗出身の一異彩にして、多年北里研究所に於て細菌學の研究に沒頭し、慶大派の名醫博として其の存在を認めらるゝ異數の篤學者なり。其の臨床的手腕に至りては經驗豐富にして、今や獨特の診療振を發揮して餘す所なし。其の今日の地位と隆盛を來たせるもの、當世博士界中立志傳的成功の一人物として推奬するに吝ならず。特に昭和二年以來專ら醫學と教育の關係に就て今日迄研究を續け、既に纏めたる研究業績は多く社會、教育、精神等の專門雜誌に發表して斯界の指導啓發に努めつゝあり、尙將來も此の方面の研究を續行するの意氣込にて精研に餘念なきは甚だ多とすべき也。

△博士は大正二年醫術開業試驗合格、同三年開業免狀受領、同十一年北里研究所講習終了、同十二、三、四年間は北里研究所に於て專ら細菌學の研究に從事し、十五年三月慶大より學位を受領せり。同年七月より頭書の住所に私立病院開設、內科一般の診療に從事し今日に至る。

△學位主論文は「一種ノ枯草菌食餌ニ因スル家鷄及猿ノ脚氣樣疾患ニ就テ」にして、參考論文は、(1)「プロスニツク」稈菌免疫血淸ノ抗毒作用ニ就テ、(2)「チフス」菌毒素ノ家兎體重ニ及ボス影響ニ就テ、(3)新鮮臟器ノ肉汁水素「イオン」濃度ニ及ボス影響ニ就テ、(4)一非病原菌ノ利尿作用ニ就テ、(5)細菌餌食ニ因ル一種ノ末梢神經炎ニ就テ等。

△博士出身地は兵庫縣三原郡阿那賀村にして、明治十三年生る。今や齡知命に入る六歲、健康にして元氣益々旺盛なり。顧ふに氏の如きは、少壯笈を負ふて鄕關を出でゝより頂天立地、獨立貫行して醫術開業の免狀を得、既にして自己獨立の地盤を開拓してより、發奮更に醫術研究を志して、刻苦奮鬪、終に克く偉大なる研究業績を完成して、榮譽ある學位を獲得せるは、學界の美談として後進誘液の活資料たるに値す。而かも謙遜なる博士は、淡々として誇らず身を持するに自ら薄うして人に厚く、毀譽褒貶など毫も意に介せず、一意專心唯だ仁術の爲め、終始誠實と懇切とを盡し、平生刀圭甚だ多忙なるにも拘はらず、業餘猶學術の研究を捨てず、幾多の業績を發表して斯道の爲に盡し、以て希望ある將來に貴き使命を果さんとする抱負を有す。醫師界淨化の叫漸く酣ならんとするの秋、幸に健康と共に自重加餐を祈り、幷せて一層奮鬪盡瘁あらん事を切に望む。趣味としては圍碁を樂しみ、又能く讀書す、嗜好としては酒を好む。自宅は兵庫縣川邊郡川西町鶴之莊に在り。

◇

甲斐惣太郎　△神奈川縣小田原町十字三丁目に新築成り、彩光及び設備に萬全を期し明るく、病室よりも別莊に轉地した心地を患者に與へる樣工風し、尙レントゲン其他內部の設備に間然する處なく、湘南地方に於ける一流病院として名實共に具備せるは甲斐內科醫院なり。院長は甲斐惣太郎博士にして、氏が多年の宿望を具現化せる理想的の新醫院たるに耻ぢず。殊に小田原は熱海線の開通と相俟つて箱根を控へ、湘南に於ける保養地たる樞要の地なれば將來一層重大なる使命を有す。若し夫れ氏の玲瓏たる打診、特に博士の最も得意とする呼吸器病及び新陳代謝病の如き獨特の領域に至つては既に江湖に著聞す。

△博士は長崎醫專（大正六年卒業）の出身にして、卒業後縣立長崎病院竹村內科に勤め、大正六年九月より同九年三月まで東京帝大醫學部附屬醫院三浦內科に勤む。それより歐米留學の途に上り米國シカゴ大學に入學、傍ら理科大學に於て研究、卒業の後シンシナチー大學に轉じ、大學院醫化學教室にてマシウス教授に師事す、十年六月同大學マスター、オブ、アーツの學位を得、同年九月渡英、ケンブリツヂ大學に入りホプキンス教授に就き研究、十一年三月辭して獨、佛、瑞の各大學を見學し、十一年五月歸朝す、直ちに慶大醫學部醫化學教室に入り研究を續け、十五年二月慶大より學位を得、同年八月島根縣平田町平田病院長として就任、昭和三年十月之を辭して上京、同四年四月現住地に於て內科醫院を開業、同九年二月新築落成新醫院に移轉せり。

△主論文は「流血中微量「モルヒネ」定量法ノ研究」及『動物體內ニ輸入セラレタル「モルヒネ」ノ運命ニ就テ』にして、參考論文には、(1)酵素作用ニヨル蛋白分解狀態ノ觀察、(2)肺毒本態ノ生物化學的研究、(3)「トリプシン」ノ定量法、(4)燐脂體ハ酵素ノ性分ナルヤ、の四篇あり、其他の論著枚擧の遑なし。

△感想に曰く「現代醫師界に對しての注文は各位が眞面目に患者の立場となり策を用ふる事なく化學が率直に醫學に應用さるゝ事を希望し、決して山師的の心を以て不要の負擔を患者に負はしめざる樣醫師として眞實の使命を遂行されんことを希望す」云々と。又た語を改めて曰く、「自分は化學の畑に育ちたる頭を以て治療に對しての判斷も之を行使する事を勉め、無効のものと思はるゝ時は不用の金錢を使ふ事なき樣に充分に戒めて經濟國難に對する患者の惑はざる進行の道を示す事を忘れざる樣に心掛け近時流行する俗間の迷者に對して充分に注意を與へて居る」と。亦以て他山の石に値すべき乎。宮崎縣西臼杵郡諸塚村の人、明治二十七年生る、當年不惑有二歲也。年齡未だ少壯、漸く壯熟の期に入りて最も得意の時代に在り。殊に博士は患者に對し、親切と誠實とを以てし、診斷確實にして短時日に病を治すとは、土地の人の皆な稱する處にして極めて評判良く、又た博士自ら病を治するに、心と藥とを充分に働かせる事に專心留意するの用意あるは、特筆すべき博士の長所なりとす。以前は時々短氣を起したる事ありしも、近來にては勉めて之を自抑せる結果と、年齒と共に圓熟せる修養と相俟つて、絕えてこの事なきに至れるは欣幸とする處なり。著者は更めて敬意を表する者也。

◇

田代重　△青森市安方町一三六に內科專門を以て著聞する田代醫院院長田代重博士は、東北帝大專門部の出身にして、恩師八木精一博士に就きて藥物學を、同加藤豐次郎博士に就きて內科學を專攻し、東北帝大より學位を獲得せる篤學の士也。主論文は「血液尿毒窒素量ニ就テ」にして四篇より成り、外に參考論文數篇あり。其の學問的價値は既に學界に定評あれば贅せずもがな、學殖と共に臨床に多年の經驗を有し、今や獨自の舞臺に活躍して獨特の手腕を發揮する所、博士の最も得意とする時代なるべし。

△博士は大正六年東北帝大醫學專門部を卒へ、直ちに同大學藥物學教室副手、間もなく助手となり、同八年十二月加藤內科教室に轉じ加藤教授の指導を受く、同十五年三月學位を受領し、同時に同大學醫學部講師を囑託せらる、同年四月講師を辭し青森市濱町神病院內科長として就任す、昭和四年十二月之を辭し現住所に於て開業今日に至る。

△宮城縣栗原郡金田村字川口東町の人、田代重護醫博の兄にして、明治二十六年生る。「街醫者はやがて戸毎に、御用聞しなければならなくなるだらう。これは醫者自身がしかく導きつゝあるのだ、明治時代の醫制は「ユートピヤ」の感がある」とは氏が感想の一片なり。今は腕の冴え盛にて、年齢漸く不惑に入る三歳、年壯の意氣と共に研究心に富む前途は、猶洋々たり。趣味としては多種あれども徹せるものなく、研究と醫療そのものにあるが如し。

◇

堀内潔　△新潟縣柏崎町に堀内醫院あり、内科、小兒科を以て著聞す、院長堀内潔博士の經營にかゝり院内の施設完備す。博士は東京帝大系の名醫博にして、嘗て獨逸に留學して學理の深奥を究め、臨床的方面は多年の實驗と共に手腕今や圓熟の域に入り、打診極めて好評にして大衆より多大の信頼と尊敬とを受け、專門大家たるの存在を認識せらる。博士も亦博士人物界の中堅として、玆に之を推薦するに吝ならざるなり。

△長野縣更級郡上山田村の人、堀内堅之助の長男にして、明治十七年生る。麻布中學、四高を經て、明治四十三年東京帝大醫科大學卒業、直ちに同大學副手として附屬醫院に勤め、同時に東京市醫に任ぜられ養育院醫局に兼務し、橋本節齋醫長、伊丹繁博士の指導を受く、大正元年七月新潟縣吉田病院長として赴任、七年六月之を辭して新潟縣柏崎町に於て開業す、同十二年九月歐渡、伯林カイゼル、ウイルヘルム研究所勞働生理學教室にてアツラー教授の下に、同十四年四月迄物理學的化學研究、傍ら伯林大學第二内科クラウス教授の内科一般臨床講義を聽講し、フイツク氏に就て光線の講習を受く、此間英、佛、白、蘭、墺、伊、匈を視察す、同十四年七月歸朝以來柏崎町に於て再び開業今日に至る。此間十五年三月東京帝大より學位を受く。專攻は内科、小兒科にして最も得意とする所なり。主論文は「靜脈擴張神經ノ疑義補遺」にして原著は獨逸文なり。參考論文は「腎臓血管ニ對スル尿素ノ影響ニ就テ」獨逸文なり。

△讀書家にして文藝に趣味を有し、特に歴史を愛讀す、盈科、獨愼は其號なり。人格崇高、學究的溫厚の紳士にして、恭謙禮讓に篤く、人に對し患者を待つに誠實親切を以てす、其の藹々たる風貌に至りては、接する者をして快朗を感ぜしめ、敬慕の念を深からしむ。又た能く社交に務め慈善公共事業に盡す。

◇

武部俊雄　△東京市技師にして東京市電氣局病院に内科醫長たる武部俊雄博士は、東大の出身、恩師島薗順次郎博士に就きて内科學を、三田教授指導の下に血清化學を專攻し、大學院を卒業して母校より學位を獲得せり。學位論文は硝酸「ウラン」を注射して家兎に實驗的腎炎を起さしめ、健康時及び腎炎時の血清並に腎炎の爲めに生じたる腹水の三者に就きて免疫學的、酵素學的及び化學的檢索を行ひ、以てその性狀を比較研究せるものにして、主論文たる『「ウラン」腎炎ニケル血清並ニ腹水ノ血清化學的研究』即ちこれなり。參考論文は、(1)凝集素ノ結合及ビ分離ニ就テ、(2)異種性溶血素ニ對スル結合物質ニ就テ、(3)臓器「リパーゼ」ニ對スル鹽酸「キニーネ」並ニ「アトキシール」ノ作用、(5)「コロヂウム」囊ニ依ル葡萄糖食鹽並ニ諸種酵素ノ透析ニ就テの五篇なり。

△和歌山市新内の人、明治二十八年生る。大正九年東京帝大醫學部卒業後、直ちに同大學大學院に入り、法醫學教室にて三田教授の指導を受け、同十三年九月より島薗内科に轉じ、同十五年三月學位を受領す、其後同教室を辭し現職に就任し今日に及べり。貴公子然たる風貌に氣品を備へ、凛々としたところに學者らしき威嚴を存す。年齢未だ少壯にして潑剌たる研究心を有し、學を練り腕を磨くに餘念なく、至誠以て院是に從ひ努力精進を續けつゝあるは多とす。東京市外砧村成城學園住宅地に住む。

◇

木村修三　△金澤市河原町に内科專門を以て獨立開業せる木村修三博士は、新裝せる醫院の設備と、打診の好評と相俟つて今や牢乎たる地盤を有す。博士は東北帝大の出身、内科界現代の權威たる恩師山川章太郎博士に就き

て斯學の蘊奥を究め、母校より學位を獲得せる年壯醫博也。

△學位論文は高低種々の反應に於て血清の蛋白分解作用を檢査し、以て血清中諸酵素の種類を組織的に分類調査したるものにして、即ち、主論文たる『血清「プロテアーゼ」ノ複在並ニ各種血清「プロテアーゼ」ノ分離及ビ特性ニ就テ」(獨文)これなり。參考論文は(1)血清蛋白消化酵素ノ研究(第三回報告)血清「プニテアーゼ」ニ依ル消化產物ニ就テ、(2)血清「プロテアーゼ」ニ關スル研究(第九回報告)白陶土ニ依ル血清「プロテアーゼ」及ビ抗酵素ノ吸着現象なり。

△石川縣の人、明治二十六年生る。大正十年東北帝大醫學部を卒へ、直ちに慶大醫學部醫化學教室助手に任ぜられ、翌元年一月東北帝大醫學部に轉じ、山川內科副手囑託となり、同年十月助手に任ぜらる、同十五年三月學位受領、同年六月石川縣七尾町高島病院長に就任、昭和二年七月辭職、現住地にて開業今日に至る。氣品高き風貌を備え、靄々たる溫顏に學者らしき威嚴を存し、謹嚴そのものの性格を暗示す。研究は博士の最も趣味とする所にして、今猶業餘孜々として精研に餘念なきが如し。春秋猶豐富にして前途洋々たれば、今後の活躍と相俟つて博士の將來を語るに餘裕綽々たるものあり。

◇

黑川清之　△慶應義塾大學醫學部內科教室に新進の黑川清之博士あり。愛知醫專の出身、恩師大庭士郎(現名古屋醫大教授)博士に就き細菌學を、次で慶大教授草間滋博士指導の下に久しく病理細菌學を研究し、慶大より學位を獲得せる少壯醫博也。

△學位論文は最近剖檢せる胎兒より高齡に至る二百四十體より採り集めたる上皮小體總數八百十五個に就き詳細なる病理組織學的檢索を行ひ、形態學上より見たる上皮小體の正常組織學的變化と機能的意義に興味ある說明を與へたり。殊に疑義の焦點たる嗜酸性細胞に對しては著者の研究に基く著者の見解を述べ、從來の論議を一掃せり。而して特殊疾病に於ては特に各々其固有所見を詳論し、正常及び病理組織學的見地より生理的及び病理的機能の上に論及せるものにして、即ち「人體上皮小體ノ正常及ビ病理と組織學的研究」と題する主論文これなり。副論文としては、(1)同種族間移植ニ因ル上皮小體機能亢進ニ關スル實驗的研究、(2)初生兒甲狀腺ニ於ケル生理的上皮剝脫ニ對スル疑義、(3)稀有ナル癒合性重複體ニ就テの三篇あり。

△愛知縣海部郡十四山村の人、明治三十一年生る。大正九年愛知醫專卒業後、引續き愛知醫大細菌學教室にて研究、同年十二月慶大醫學部病理細菌學教室に入り研究、同十三年十一月同講師に任命さる、同十五年三月學位受領、爾來同大學內科教室にて研究中。學者肌の新人にして、年齒未だ三十有八歲、少壯の意氣と共に研究心に燃え、向學の精神鬱勃として禁ぜざるものあり、將來有爲の學究的新進人物として、潑剌たる前途を囑望せらる。謙遜家にして己れを虛うする淡々たる態度は、奧床し。東京市牛込區新小川町二ノ三に住む。

◇

千賀春吉　△愛知縣大濱町に於て開業せる內科、小兒科千賀醫院院長千賀春吉博士は、南滿醫學堂出身の一異才にして、京都帝大より學位を獲得せる篤學者として旣に斯界に定評あり。專門は內科及び小兒科にして、藥物學の造詣又た見るべきものあり。開業日猶淺少なるも、拮据勵精、打診の好評と相俟つて益々向上發展に赴き、猶洋々たる將來を囑望せらる。

△主論文は「實驗的過糖症及糖尿ニ際シ循環器系統ノ種々ノ部位ニ於ケル血糖量ニ就テ」にして、參考論文は、(1)肝靜脈、門脈、及耳靜脈ニ於ケル血糖量ニ及ボスいんしゆりんノ影響ニ就テ、(2)「カフエイン」「ラオブロシン」及「テオチン」過血糖症ノ比較研究、(3)瓦斯體ノ摘出腸運動ニ及ボス作用ノ檢査方法並ニ腸內瓦斯ノ摘出腸運動ニ及ス作用ニ就テ、外七篇あり。

△學歷及び閱歷を概括すれば、大正七年南滿醫學堂を卒へ、直ちに同附屬醫院奉天醫院內科醫員被命、八年十一月同

醫院辭任、九年七月滿鐵大連醫院內科醫員被命、十一年二月京大藥物學教室にて、專修科生として尾崎教授指導の下に藥物學研究、十四年三月大連醫院內科に復歸し、十五年四月學位を得、爾後大阪府立修德館、次で名古屋遞信局囑託醫を經て、昭和八年五月現地に開業して今日に至る。愛知縣人千賀松太郎の長子にして、明治二十九年生れ、當年漸く四十歳なり。其閲歷は博士の前半生史に精彩を放ちて見ゆ。今や年齒と共に壯熟せる手腕は、潑剌として社會の爲め盡瘁する所多し。精力家にしてスポーツマンのファンとして知られ、運動競技を愛好す。其居常人と接するに敢て城壁を設けず、愛想家にして甚だ快活なり、其態度の寛容にして紳士的なるは多とす。

◇

井關包奕　△沼津市八幡町井關病院長井關包奕博士の名聲は、既に江湖に著聞し、學究的その大なる存在は、當地方診療界に認めらるゝこと既に久矣。博士は名古屋醫大系愛知醫專時代の出身、恩師林直助博士の愛弟子にして、特に所謂黃病の研究家として學界に重きを爲す一人物也。その專門的學識の該博なると共に、臨床的手腕の圓熟せる点に至りては、著者の更めて批判を俟つまでもなし。官職としては陸軍一等軍醫(豫備)の印綬を帶び正七位たり。

△學位は京都帝大にて授與せられたるが、主論文は『支那山東省地方ニ流行セル所謂「黃病」ニ就テ』にして、其一支那山東省地方ニ流行スル所謂黃病ニ就テ其二、支那山東省地方ニ流行セル所謂黃病ノ研究補遺の二篇より成れり。參考論文は、(1)九州阿蘇地方ニ於ケル牛ノ有熱性「ピロプラスマ」病ニ就テ、(2)九州高原地帶ニ流行セル牛ノ有熱性「ピロプラスマ」病ニ就テ、(3)大分縣下ニ流行セル犬ノ「ピロプラスマ」病ニ就テ、(4)胸腺腫ノ一例、(5)肺炎治療血清ノ治驗ニ就テ、(6)所謂慢性「ペスト」ノ海猽脾臟所見ニ就テ、(7)大正十三年靜岡縣引佐郡東濱名村ニ流行セル「ペスト」ノ研究特ニ各種「メヂウム」ニ於ケル「ペスト」海猽屍體內ノ菌形並ニ其毒性ノ保存期間ニ就テの七篇あり他にも論著夥多あり。

△更に其の略歷を概括すれば、大正三年愛知醫專を卒へ、四年任陸軍三等軍醫、四年八月より六年一月迄陸軍々醫學校へ入學、七年任陸軍二等軍醫、十一年任陸軍一等軍醫、十二年愛知醫大病理學教室にて研究、十五年四月學位受領、同年沼津市立傳染病院長に任命せられ、次で辭職後現住地にて開業今日に至れり。德島縣勝浦郡勝占村大谷の人、明治二十四年生れなれば、當年四十有五歳也。漸く年壯にして愈々重望せらるゝ時代に入る。其の閲歷は博士の前半生史に盡きて餘蘊なし。學究的溫厚の紳士にして、清澹寡慾、快活にして能く人に親しみ、又人に對しての應答禮を以てし時務を缺ぐことなし、其眞摯にして寛容なる態度と、其の人格を尊ぶ。讀書家にして精研今猶卷を放たず、時に又圍碁を趣味し、酒を嗜しむ風あり。

◇

神林美治　△海軍々醫界近來博士人物に富む。玆に品隲せんとする神林美治博士は、海軍々醫大佐にして、海軍々醫學校教官として學生の指導に精進しつゝあり。博士は九州帝大系恩賜組の一秀才にして、小野寺教授の愛弟子として多年恩師の指導を受け、大學院卒業を以て母校より學位を得たる內科界の名醫博也。嘗て歐米を見學して日進醫學の新知見を博め、再び獨國に駐在すること二ケ年、內科學特に物理化學的方面を研究し、傍ら萬國赤十字會議、國際軍醫會議、赤十字社主催國際化學戰防禦會議、及赤十字條約改訂並に捕虜取扱條約會議等に日本政府代表として出席す。既にして該博なる學識を有し、臨床にも通曉して卓越せる手腕を有す。

△感想に曰く「私は學生指導の必要上、東京市築地病院(舊稱施療病院)の診療に從事して下の樣な感想を懷くことがある。外國と違つて日本は家族制度が確立してゐて、困り果てた末でないと此種の病院に來ない。然し昔の東京市が大東京市となり、患者の數が一倍增しても市の本病院に對する豫算は減るばかりで、又大富豪等の寄附も殆んどないのは、是亦外國と異る點であると」云々。

△博士は長野中學、第二高校を經て、大正六年九州帝大醫科大學を卒へ、恩賜の銀時計を下賜せらる。直ちに海軍に

出仕して後、海軍中軍醫に任官、十年六月より約一ケ年間、練習艦隊にて北半球を一週し歐米の醫學を見學視察す、十二年四月九大大學院學生を命ぜられ、小野寺教授指導の下に内科學を研究、十四年十一月大學院卒業、佐世保海軍病院部員兼教官に補せられ、十五年四月學位受領、昭和二年二月海軍省醫務局に勤務、次で獨國駐在二年、昭和五年現職に轉補今日に至る。

△主論文は「身體組織食鹽代謝ニ關スル研究」にして、參考論文は「氣溫及體溫ノ血液酸「アルカリ」平衡狀態ニ及ボス影響ニ就テ(2)炭酸曹ニ溶液注腸ガ血液酸「アルカリ」平衡ニ及ボス影響、(3)糖尿ニ性昏睡ノ一例(4)筋肉運動ト中性鹽特ニ食鹽トノ關係の三篇なり。其後に發表せる論著又尠からず。最近に至りては硫黄注射療法並に硫黄溫泉療法を完成し、更に環境條件の人體生理に及ぼす影響を研究し、異常氣壓下に於ける生體病理並びに生理の研究に對して學術振興會の補助を受く。

△長野縣更級郡稻里村下氷鉢の人、明治二十三年生る。賦性高潔にして篤實、恬澹として毀譽褒貶を意に介せず、人と接するに快活にして溫情に富む。趣味としては旅行、登山を好む。東京市杉並區馬橋二丁目一九〇に住む。

◇

木下友敬

△下關診療界は近來醫博人物の割據地たり。玆に品隲せんとする木下友敬博士は、内科を以て頭角を拔き、下關市東南部町木下内科醫院長として活躍する所あり。博士は九大系の錚々たる内科學者にして、吳教授及び金子教授の愛弟子として知られ、多年恩師の指導を受くる所厚く、母校より學位を得たる斯科界の名醫博たるに恥ぢず。該博なる學識は言はずもがな、經驗豐富にして卓越せる手腕を有し、打診の好評は益々人望を博し、今や内科の大家と仰がれ、一流に在るは博士界の爲め慶を强からしむ。感想の一端を吐露して曰く「今は開業醫受難の秋であると同時に又更生の機である。各々深く自ら慮り醫道百年の計を維新確立しなければならぬ。また醫政を單に爲政者に委ねるのは生命を非醫者に托するよりも危險である」云々。

△學歷及び閲歷を閲見するに、熊本第五高校を經て、大正十年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學醫化學教室に入り後藤元之助教授の下に研究、十一年十一月より第一内科教室に移り吳建教授の下に内科學專攻、十三年より傍ら九州齒科醫專に教鞭をとる、十四年四月吳教授東大に移られ岡山醫大金子廉次郎教授後任せらるゝに際し引續き同教授に師事せり、十五年四月學位受領、昭和二年より現住地に於て内科開業今日に至る。主論文は(1)副交感神經性過血糖ニ關スル研究にして第一回報告(2)同上第二回報告(3)同上第三回報告の三篇より成れり。參考論文は(1)沃度ノ一新比色定量法(2)小腦ト交感神經性筋緊張(3)膵臟結石症(4)家兎ノ血糖量ニ關スル研究の四篇なるが其他にも論著夥多あり。

△佐賀縣佐賀郡嘉瀨村平川貫一の次男にして、明治二十八年生れ、大正十一年佐賀市木下家に入籍す。臨床に熱心にして「醫は仁術也」をモットーとして克く誠實と親切とを盡す、其眞摯にして熱情あり溫味ある態度は、患者をして信頼と尊敬との念を起さしめ、其の溫厚篤實なる人格を敬慕せしむ。又氏は確に一つの思想家にして、特に其の熱辯は龍南以來の雄なり。醫政に精通し、地方醫師會に於ても一方の驍將として將來を囑望せらる。繁忙のかたわら常に讀書し、又文を能くす。開業醫にして中央醫界に向つて氏の如く屢々論說、研究の發表を怠らぬは蓋し稀なりと言ふべし。著書「臨床的尿檢査法」は實に該方面に於ける吾國唯一の著書なり。趣味は極めて廣く運動に、圍藝に造詣深く、殊に蓄犬に關しては最も古き研究家なり。又日本畫を能くし、艸堂と號し、既に自ら一家を成せるの感あり。

◇

宮田訂

△大阪市西區北堀江通五丁目四番地に宮田内科醫院あり、特に腎臟病及び膽石症を以て著聞す。院長宮田訂博士は大阪醫大系の内科學者にして、母校より學位を得たる篤學の名醫博として既に定評あり。主論文は「臟器及臟器分泌物質ノ血液凝固ニ及ボス影響ニ就テ、附血液凝固時間測新法」にして、參考論文は(1)血液「トリプ

ターゼ」及「トリプシノゲーン」ノ研究(其一)血液「トリプターゼ」及「トリアシノゲーン」定量法ニ就て、附血液中ニ存スル種々ノ物質ノ「トリプシン」作用ニ及ボス影響(2)同上(其二)種々ノ條件ニ於ケル血液「トリプターゼ」及「トリプシノゲーン」量ノ消長(3)同上(其三)血液「トリプターゼ」及「トリプシノゲーン」ニ及ボス膽汁ノ影響ニ就テ(4)同上(其四)血液「トリプターゼ」及「トリプシノゲーン」ニ及ボス脾臓ノ影響なるが、他にも論著多數あり。

△更に博士の今日ある學歴及び閲歴を公開すれば、大正八年大阪醫大を卒へ、同六年四月より九年三月迄、大阪市立刀根山療養所にて有馬博士に就きて結核病學研究、同九年四月大阪藥專講師、同十年四月大阪醫大副手、同十五年三月大阪藥專教授(藥物學擔任)となる、同年四月學位受領、先是宮田内科醫院長として一般の診療に從事し今日に至る高知縣香美郡佐古村の人、明治二十四年生る。年壯の意氣益々壯んにして、學究的臨床家としての手腕今や壯熟の域に入る。臨床に臨むや終始患者本位を主義として克く誠實と親切とを盡す。文學趣味豊富にして殊に和歌を能くす、香山は其號なり。

◇

菊地泰助　△神奈川縣小田原町新玉四丁目六四二に内科を以て斷然頭角を拔く菊地内科醫院あり。院長菊地泰助博士は東大系大正七年組の一異才にして、内科界の耆宿稲田教授の高弟として知られ、恩師の指導を受くること多年、後に大學院を卒業して母校より學位を得たる所謂東大派の名醫博たるに耻ぢず。主論文は「ヴイタミン」缺乏症の研究にして參考論文なし。本論文は猿三十七頭を用ひ「ヴイタミン」B缺乏食飼養試驗を行ひ其十九頭に於て「ヴイタミン」B缺乏症の發生を見以て其臨床的、病理解剖的及び藥理學的觀察並びに檢査を行ひたり、其結果によれば猿「ヴイタミン」B缺乏症に於ける病的變化は從來他種動物「ヴイタミン」B缺乏症に於て見られたるものと相似たる所多けれども亦人類脚氣に近似せる所少からず大凡兩者の中間に位し嘗て人類脚氣動物「ヴイタミン」B缺乏症の異を論ずるに當り每に其主要なる相違點なりとして取扱はれたる變化に於ても寧ろ人類脚氣に近き所見少からざるを認めらる。其他にも論著尠からざるものあり。

△神奈川縣足柄上郡岡本村菊地吉之助の四男、明治二十五年生る。神奈川縣立二中、一高を經て、大正七年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに稲田内科に入る、同十年七月より十一年十二月迄大阪市高村内科院の留守經營を依囑せらる、同十二年一月東京帝大醫學部藥物學教室に入り大學院學生として研究に從事す、同十四年三月大學院卒業、同年七月東京市立病院に勤務す、同十五年五月學位受領、昭和二年八月以來現住地にて開業今日に至る。學究的溫行の紳士にして、博く學識を有し臨床の經驗に富み、今や手腕漸く圓熟す。殊に博士の特徴とするところは、臨床に熱心にして克く誠實と親切とを盡し、患者をして信賴と尊敬との念を起さしむる點にあり。其の篤き今日の聲望あり成功を贏ち得たるもの亦た偶然ならざるを思はしむ。年華不惑に入る三歳にして、春秋猶豊富なれば洋々たる前途は益々輝かし。

◇

伊藤謙　△京都市六角高倉東に内科專門を以て著聞し、好評嘖々超然として群を拔く伊藤内科醫院あり、院長伊藤謙博士の開業既に十年餘に亜んとし、結構奥床しく内部の設備整ふ。特に呼吸器、結核、腹膜炎、並に高血壓等は最も得意とする處にして、多年の聲望と相俟つて今や堅實なる地盤を有す。博士は京大系の内科臨床家にして、恩師賀屋隆吉博士、同島薗順次郎博士及び眞下俊一博士等に就きて斯學の蘊奥を究め、猶大學院在學中、森島庫太、尾崎良純兩教授指導の下に藥物學を專攻し、母校より學位を獲得せる京大派の名醫博として重きを爲す一人物也。

△顧みて其の今日ある經歴を概説すれば、三高を經て、大正四年京都帝大醫科卒業後、副手として賀屋内科に勤務の傍ら、同五年八月現職の儘京都市立京都病院醫員となり、同年十月より島薗内科へ轉勤、同七年八月より九年三月迄京都市囑託醫拜命、同十一年八月内科教室を辭し、同年十二月京大大學院に入り藥物學教室にて研究、同十五年一月

より更に眞下内科教室にて研究、同年六月學位受領、同年九月より現住所にて開業今日に至る。

△主論文は『抱水「プロマール」ト抱水「クロラール」トノ藥物學的比較研究』、參考論文は(1)「コフエイン」ハ交感神經麻痺毒ナリヤ(「コフエイン」ト「アドレナリン」トノ拮抗作用ニ就テ)(2)右旋性及不旋性樟腦、右旋性「ボルネオール」(龍腦)並不旋性「インボルネオール」ノ藥物學的作用ノ比較研究(3)血管並ニ脾臓ニ於ケル「アドレナリン」興奮ニ對スル「アトロピン」ノ拮抗作用ニ就テ(4)摘出蛙心臓ニ及ボス强直性電氣的刺戟ノ作用並ニ之ニ對スル藥物學影響ニ就テ(5)末梢(大耳殼)神經電氣刺戟ニ因ル家兎耳殼血管ノ興奮ニ對スル諸種藥物ノ影響ニ就テの五篇とす。

△「現代の治療があまりに物質的、機械的に流れるかと思はる……例へば注射－×線－太陽燈等々……點を顧慮し、病者自己の自覺(氣持ち)をも尊重して精神的にも治病効果に努力したきものと思ふと同時に常に親しき健康相談相手ともなる樣心得たきものと思ふ」云々。とは、博士の持論なり、以て他山の石とすべく傾聽に値す。猶病院又は病室臭少なき靜養所を設けて見ては等との考へもあるが如し。滋賀縣愛知郡豐椋村伊藤謙次郎の長男にして、明治二十四年生る、當年不惑に入る五歳也。年壯の意氣旺盛にして、學識、手腕、人格共に圓熟して一段の重望を加ふ。殊に熱心にして眞面目なる臨床家としての評判高く、患者に接するに熱誠克く眞實と親切とを盡す點は、博士の特徴として傳へらる。一面又人に對するに恬淡として衒はず、一度び其の磬咳に接せんか、舉措悠揚として迫らず、快活、懇切にして溫情に富み、人を愛し人に親しまるゝの德を有す。研究以外の趣味としては繪畫彫刻を好み、俳句を樂む、幽鶴子は其の雅號なり。因に和辻春次、伊藤秀、伊藤弘、村上清等の醫學博士とは親戚の間柄なりと。

◇

佐野金吾　△大分縣杵築町に佐野病院あり、内科特に胃腸病專門を以て著聞す。院長佐野金吾博士は東大系の内科學者にして特に胃腸病を最も得意とす。愛知醫大のミハエリス教授に就きて醫化學を研究し、又九大教授小野寺直助博士に就きて内科學の蘊奥を究め、學位論文はミハエリス教授指導の許に完成せるものにして學位は慶大より獲得せり。其の學問的價値は既に學界に定評あれば敢て贅せずもがな、蘊蓄せる學殖と共に臨床に多年の經驗を有し、開業拮拮十年餘の今日、益々獨特の手腕を發揮して日增遠近の人望を吸收し、超然として一流に在り、其の今日あるは蓋し成功と云ふべき乎。

△博士は五高を經て、大正八年東京帝大醫學部を卒へ、同九年一月より麴町區内幸町胃腸病院勤務、同十年五月歸國開業、同十三年五月より愛知醫大醫化學教室にて研究、同十四年二月九州帝大醫學部小野寺内科教室勤務、同十五年六月學位受領、同年七月再び現住地にて開業今日に至る。

△主論文は『水素「イオン」濃度ニ伴フ「アミノ」酸ノ溶解度ニ就テ(獨文)にして、參考論文は『水溶液並ニ「アルコホル」溶液中ニ於テ水素「イオン」濃度ニ伴フ「ウリココル」ノ溶解度ニ就テ』なり。何れも博士の會心の作と見るべき乎。

△大分縣速見郡東村の出身にして、明治二十五年生る。學究的年壯の紳士にして學者タイプの風貌に氣品を備え、年壯の意氣益々壯んなるを見る。眞面目なる臨床家としての學識、手腕、人格は歳と共に圓熟の域に入り、今は其の最も得意とせる領域に就ての自信を有し、打診の的確なると飽迄誠意、親切を盡す點は博士の特徴として傳へらる。蓋し其の今日の評判を博し聲望ある所以にして、斯間克く德操の堅持を心掛け、自ら品性の陶冶に力むるに餘念なきは見逃すべからず、甚だ多とすべきなり。趣味としては業餘能く讀書し、又た旅行を好む風あり。因に醫博佐野彪太とは義弟の間柄なりと聞く。

◇

横尾秋夫　△東京市芝區二本榎本町一五にて開業せる横尾秋夫博士は、内分泌作用を認められたる松葉腺の作用を一層緊密に知らんとし、甚だ密接なる關係を有すと考へられたる松葉腺及び睾丸の重複剔出試驗を施行せり。

是れ即ち博士の學位論文にして、「松葉腺及ビ睾丸ノ重複剔出ニ依ル實驗的研究」と題する主論文之れなり。參考論文は(1)諸種細菌毒素注入ニ入ル甲狀腺ノ組織學的變化ニ就テ(2)遺傳黴毒兒肝臟ニ於ケル組織學的變化ニ就テ(3)原發性腎臟癌ノ病理(4)馬尾神經叢ニ發生セル神經纖維腫ノ一例並ニ其發生ニ就テ(5)子宮癌ニ因スル腎盂水ニ就テ(6)乳腺ニ發生セル血管內皮細胞腫ノ一例の六篇なるが他にも論著夥多あり。

△島根縣松江市母衣町士族横尾俊夫の弟、明治二十九年生る。大正七年岡山醫專卒業後、直ちに任同校助手、同八年十月日本醫專附屬醫院醫員となり、同九年四月日本醫科醫專教授囑託、同十年一月泉橋慈善病院醫員となる、同十一年七月東京女子齒科醫專教授囑託、同十二年三月任岡山醫大助手、同十五年七月學位受領、同年十月再び泉橋慈善病院醫員となり、昭和二年七月大日本紡績株式會社附屬病院長に就任、數年後辭して開業今日に至れり。學者タイプの風貌は廣き額に天才的なるを示し、凛々とした兩頰に微笑みを浮べて溫情を藏す。今は分別盛にて學識、手腕、人格共に具備して最も活動の盛期に在り。拮据黽勉、專心斯道の爲め努力精進しつゝあるは甚だ多とすべきなり。

◇

小林幸治郎　△神戸市兵庫區小物屋町に著名なる小林內科病院あり、院長小林幸治郎博士の經營にして、昭和八年夏內部の大改造を施し純日本室四、純洋室四其他の設備整ひ、多士濟々たる神戸診療界に卓然として重さを爲す。博士は京大出身の內科學者にして、特に消化器を最も得意とし、內科界現代の權威たる恩師松尾巖博士に就きて其の蘊奧を究め、母校より學位を獲得せる京大派の名醫博也。研鑽多年の經驗に富み、圓熟せる手腕は愈々其の妙技を發揮して餘す所なく、玲瓏たる打診の好評と相俟つて益々人望を博し、繁榮歲と共に年功の地盤を築きつゝあるは頗る囑目に値す。

△主論文「胃ノ色素分泌並ニ吸收機能ニ就テ」(英文)第一篇「胃ノ色素分泌機能ニ就テ」、第二篇「色素ヲ以テスル胃ノ機能的診斷法」、第三篇「胃ノ色素吸收機能ニ就テ」參考論文(1)色素ノ物理化學的性狀其一色素ノ荷電ニ就テ(2)同其二色素ノ擴散度ニ就テ(3)同其三色素ノ類脂肪溶解性ニ就テ、(4)膽道疾患ニ於ケル膵液分泌機能ニ就テ、(5)膵液分泌ニ對スル硫酸「マグネシウム、ペプトン」及鹽酸「ピロカルピン」の影響十二指腸「ゾンデ」ニ依ル膵臟炎ノ一新療法の六篇なり。

△兵庫縣美囊郡別所村小林幾松の三男、明治二十八年生る。三高を經て、大正十年京都帝大醫學部卒業後、直ちに松尾內科に勤め、一年志願兵として同年十二月姫路歩兵第三十九聯隊入營、同十二年四月除隊と共に松尾內科に復歸、同年九月大學院に入り松尾、正路兩教授指導の下にて內科學一般研究、同十三年四月任陸軍三等軍醫、同十五年七月學位受領、同年八月京都市立病院副院長として赴任す、昭和四年一月辭職以來現住地にて開業今日に至る。

△當年漸く不惑に入る一歲、少壯の意氣潑剌として多量の分別を有す。眞面目なる學究的好紳士にして、溫厚誠實。臨床家として、今は腕の冴え盛にて最も得意時代に在り。診療に臨む態度の眞劍にして熱情あり溫味ある點は、其の篤き今日の聲望を博する所以と思はる。一面又人と接するに恬淡として尊大振るなく、快活にして人を愛し同情に富む、其の高邁なる人格は親しむべく、人をして敬慕の念を深からしむ。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、又圍碁、謠曲などを能くす、忙中また閑あるかな。

◇

木村直樹　△千葉市横町に神經科及び精神病科專門の木村病院あり、木村直樹博士の開業拮据數年に及ぶ診療所也。新裝せる內部の設備は整ひ、博士獨特の打診と相俟つて好評なり。博士は千葉醫專出身の篤學者にして、恩師松本高三郎博士に就きて精神病學を專攻し、千葉醫大より學位を獲得せる年壯醫博也。

△學位論文は腦脊髓液に關する博士の幾多の研究業績中の一節に過ぎざれども、「膠樣金反應知見補遺」てふ主論文

卽ちこれなり。參考論文は、(1)精神病者肝臟機能ノ研究、(2)蜘蛛膜下腔內異物吸收排除機能ニ就テ、(3)早發性痴呆睪丸內鹽基性嗜好異性染色顆粒細胞ノ意義ニ就テ、(4)精神病者腦脊髓液內「リバーゼ」ノ研究、(5)「レントゲン」線照射ノ腦脊髓ニ及ボス影響、(6)精神病者ニ於テ對腦脊髓液膠樣金反應ニ就テなり。他に論著夥多。

△山口縣萩市南古萩の人、明治二十四年生る。大正三年千葉醫專卒業後、翌四年六月任陸軍三等軍醫、同七年七月任二等軍醫、同九年八月依願休職被仰付、同十年四月豫備役に編入せらる、同時に千葉縣立病院腦病科司療醫を被命、同十二年四月任千葉醫大助手、同十五年七月學位受領、昭和二年一月千葉醫大講師囑託、次で現住地にて開業今日に至る。博士の年齡當に四十有五歲、年壯の意氣と共に今は最も腕冴えて活躍の盛期に在り。人と爲り溫厚眞實、學者タイプの風貌は凛々として、高邁なる品格を備ふ。因に松本高三郎醫博及び故篠原昌治醫博とは近親の間柄なりと聞く。家庭には良妻八重子との間に一男二女あり。

◇

横田治郎　△滋賀縣膳所町別保に於て横田病院を自己經營し、兼ねて膳所隔離病院長として令名を馳せ、治療界に奮鬪しつゝあるは横田治郎博士也。京都府立醫大系醫專時代の出身にして內科、外科を專門とし、特に胃腸科（內科的、外科的）は博士の最も得意とする所なり。横田病院は近江八景粟津の松原近くにして、眺望絕佳、日當り良く極めて閑靜なる所にあり。總二階建にして階下は全部外來診療所、手術室、レントゲン科室、浴室、醫務室等に充て、階上全部病室なり。診療科目は內科、外科、眼科、レントンゲン科等に別たれ、各科專門醫之を擔當す。博士はその院長として自ら任じ、これを統帥して遠近の好評を博す。

△來歷より見たる博士は、滋賀縣師範附屬小學校、縣立膳所中學を經て、大正七年京都府立醫專を卒へ、直に日赤三重支部山田病院內科、小兒科、產婦人科に勤め、同八年一月日赤滋賀支部病院外科、皮膚科に轉勤す、同八年四月日赤救護看護婦養成所講師囑託、同九年二月之を辭して日本郵船會社入社、船醫として南米、北米、印度、比律賓、歐洲各地の醫科大學又は病院等見學す、十一年十二月より十二年九月まで東京市神田區にて開業、同十一年十二月より十五年一月まで慶大醫學部醫化學教室に於て照內教授指導の下に醫化學研究、同十五年一月より同五月まで慶大病院皮膚泌尿器病科にて研究、同年七月學位を得同時に大阪診療所長として赴任、同十二月東洋レーヨン株式會社附屬病院外科部長に轉任す、同時に勤務の傍ら滋賀縣膳所町に横田病院開設一般診療に從事せるが、爾來自家經營の病院擴張院務多忙に付昭和二年六月より東洋レーヨン附屬病院外科部長辭任、同七年四月更に膳所町隔離病院長に就任す。

△主論文は、(1)胃腺分泌機能ニ及ボス植物性神經毒ノ影響、(2)迷走神經刺戟ノ胃腺分泌機能ニ及ボス作用、(3)髓內鹽素減退時ニ於ケル鹽酸「ピロカルピン」ノ胃腺分泌機能ニ及ボス影響の三篇より成り、外參考論文三篇あり。その他自著論文多數あり。

△博士は滋賀縣滋賀郡膳所町別保の人、明治二十八年生る。今や圓熟の期に入りて快腕を發揮し全盛時代也「許すならば今少し輕費にて加療致し度、將來は施療式にまで進み度い考へである」と博士の抱負の一端を覗ふ時、又た博士の患者に對する態度を想像する時、該博なる博士の篤實溫厚にして親切仁愛の念を追想せん乎、須く尊敬すべき也。

生來博士は頗る健康體の人にして昭和四年急性蟲樣突起炎が穿孔の急性腹膜となり、一度死の豫告を受けたるも幸に全治、翌五年十月蟲樣突起炎再發の際は手術を受け全治、同七年三月急性肺炎にて之れ又危篤を報ぜられ、翌八年五月にはやるもやつたり急性膵漕炎といふ珍らしい病氣となり、開腹手術を受けるなど、四年間に重症三度、醫者は如何に自體經驗を尊ぶとは云へ、死の宣告を受けること三回に及びたるとは、眞に同情すべき事なるにも拘はらず、奇蹟的にもそれが全治して、今は以前の健康に復し元氣甚だ旺盛なりと、聞くから愉快にして博士の健康を祝福すべきなり。幸に自重加餐を祈るや切也。

◇

田中朝三　△横須賀海軍病院第二部長たる海軍々醫少將田中朝三博士は、千葉醫專及び海軍々醫學校出身の內科學者にして、殊に臨床細菌學者として知られ、嘗て米國に留學するやシカゴ大學及びメーヨー、クリニツクにて研究し、東京帝大より學位を得たる名博士たるは既に世人周知の如し。多年海軍々醫界に活躍して功績を擧げ、至誠一貫、盡忠以て今猶斯界の爲め奮盡しつゝあるは大に人意を强からしむる處なり。學位主論文は「家兎傳染性呼吸器病ノ研究」にして、原著は英文なり、參考論文は、(1)家兎「ナナツフルス」ノ解剖的研究特ニ其病原並ニ實驗的プアイフエル氏菌肺炎ト人類「インフルエンザ」肺炎トノ關係ニ就テ、(2)諸種動物ヨリ分離セル出血性敗血症菌屬ノ比較研究、(3)「スナツフルス」ノ豫防及治療ニ就テ、(4)一種ノ非酸性赤痢菌ニ就テ（以上英文）(5)プアイフエル氏菌ノ生物學的性狀ノ研究外五篇あり。其他論著夥多。

△更に其の略歷を閲見するに、明治四十二年千葉醫專を卒へ、四十三年海軍々醫學校乙種教程を卒へ爾來海軍に出任大正七年十二月より十年十二月迄海軍々醫學校にて內科學及細菌學專攻、十年十二月佐世保海軍病院部員兼教官、十一年十二月海軍々醫學校教官、十二年米國駐在被仰付、シカゴ大學にて細菌學、メーヨー、クリニツクにて內科學研究、十二年任海軍々醫中佐、十四年渡歐、歐洲諸大學、病院見學の上同年七月歸朝、海軍々醫學校教官被仰付、東京市施療病院醫員囑託、十五年海軍省醫務局兼教育局々員、海軍々醫學校教官被仰付、同年四月日赤顧問囑託、同年十月學位受領、昭和二年特命檢閲使附被仰付、同年任海軍々醫大佐、補佐世保海軍工廠醫務部長、佐世保海軍共濟組合病院長兼務、同三年十二月海軍省醫務局に轉任（首席局員として）、同七年十二月聯合艦隊附軍醫長兼第一艦隊軍醫長に轉任、同八年十一月任海軍々醫少將、補横須賀病院第二部長以て今日に至れり。

△埼玉縣入間郡大家村の人、明治八年生る。眞面目なる學究的紳士にして、該博なる學識を有し、思慮あり識見に富む。今は海軍々醫界の最高幹部に列し參畫宜しきを得、非常時に際せる帝國海軍の將來に大に待つあらんとす。人と爲り淸廉潔白にして志操堅實、謙遜自抑人に厚く部下を愛撫す、凛々しき風貌の裡には威嚴を存し溫容を藏す、其篤實高邁なる人格は自ら人をして仰景せしむるの德を有す。博士や猶春秋に富む。爲國家幸に自重加餐を祈るや切也。

◇

矢野中　△東京市淀橋區戸塚町三丁目に矢野內科醫院あり、矢野中博士の經營する處、結構宏壯、內容の施設完備す。博士は新潟醫大系醫專時代の出身にて、嘗て獨逸、瑞西にも留學して學理の深奥を究はめ、多年の經驗と共に玲瓏たる手腕を有し、今や呼吸器及び消化器の大家と仰がれ、日々往來する患者の診療に親切を盡くし殆んど席暖まるの暇なく、天禀の德望と相俟つて好評嘖々たるものあり。而も立志傳的博士の生立を回顧すれば、感慨無量にして轉た懦夫をして立たしむるの概あり。卽ち博士は代々醫を業とせる家庭に生れながら父は四歲の春死亡、三十一歲にして寡婦となれる母の手にて同胞六名養育せられ、男兒四名は悉く醫師となれるが、第四男なる博士は、父歿後種々損害及び日淸戰爭後の不況時代にて、女子獨りにて旁苦せる母の辛苦を見るに忍びず、早く上京して惡戰苦鬪を續け、小學校卒業以後は自給自足にて苦學獨行し、遂に克く今日の位置と成功とを贏ち得たるもの、後學の採つて以て模範とすべき博士人物中の異彩たるを特筆すべきに値す。

△博士は愛媛縣西宇和郡日土村（今は本籍を現住所に移す）の醫師、亡達の四男にして、明治二十年生る、日土尋常小學校、日比谷中學校を經て、大正三年新潟醫專卒業後、直ちに陸軍見習醫官を歷て、翌年六月任陸軍三等軍醫、近衞步兵第一聯隊附に補せられ、五年九月爲病依願本職を免ぜらる、六年六月恩賜財團濟生會病院醫局に入る、七年五月同病院を辭して牛込區早稻田町にて開業、九年九月慶大醫學部助手となり病理學教室に勤め、十二年二月渡歐、獨逸ラライブルグ大學アショウフ教授の許にて病理解剖學研究、十三年四月同大學レキサー教授の許にて外科學研究、

八月以降瑞西チエーリツヒ大學に轉じ、ネーゲリー教授の許に内科學及び血液學研究、十四年二月歸朝、慶大醫學部を辭して爾來千葉縣八日市場町にて開業、其間大正十五年九月新潟醫大より學位を得、其後上京現住所に於て醫院經營今日に至る。專門は内科にして特に呼吸器及び消化器に興味を有し最も得意とす。

△主論文は『胃潰瘍ノ治癒機轉ニ關スル實驗的研究』(獨逸文)。參考論文は、(1)家兎ニ於ケル實驗的痔瘻性心内膜炎ノ一例、(2)「フイラリアイムシチス」ヲ宿セル犬ノ腎臓所見並ニ該成熟蟲仔蟲及卵ノ毒力ニ關スル實驗的研究等。

△現代醫界に對する博士の感想としては、曰く『醫師過剰の結果種々な淺間敷現象が起ることは寒心に堪えません。醫業報酬規定撤廢と云ひ、實費診療所や、羊頭狗肉の診療所簇出と云ひ、凡ては醫師過剰、生活不安定から來る現象と思はれます。醫師も世人も斯かる重大事に對して何故斯く無關心なのでしよやうか。老病死の三大不幸中絶對な人命を救ふ醫業が現在の樣に不統制のまゝで放置出來るでしよやうか。生産能力を失つた病者から治療費を徵收するやうな慘酷な行爲をせねば醫者の多くは生活が出來ないやうな今日の制度で醫者の良心は苦しくないでしようか。私は凡ての官營を廢しても醫業を官營に仕度いと思つて居ます。勿論實行は頗る困難なる理想ではあります、然し出生と同時に保健税の義務を親權者に負はしめ、萬一疾病に罹る時は隨時隨所に無料にして完全なる治療を受け得る制度とすることを得たならば何んなにか幸福なる社會が出來るかと思ひます』云々。近來此樣の說が大分高唱せらるゝ傾向あり、此の問題の將來も亦た醫界淨化の上には最も有力なる懸案の一題材たるべし。博士は安價なる自惚に自個陶醉し得る樣なる小器に非ずして遠大なる抱負は窃かに期する處のものありと雖も今は語らず。賦性敦厚にして質朴の氣風を具へ、謙讓にして敢て人に誇らず、不斷精勵以て自ら切瑳修養して主角を沒し、人に接し事に對しては誠意親切を以てす。多趣味の人にして哲學、文學、繪畫、演劇、音樂、銃獵等を嗜む、殊に其の文雅に於ける素養は他と規を異にし、能文能筆を以て聞ゆ。博士の創製にかゝる高級滋養强壯劑「ヴキタホルモ」は諸方面より絶大の禮讃と好評とを博す。孤獨八年の後昭和七年四月子爵京極高備長女萬喜子を嫁り、家庭の和氣靄々たるを慶ぶ。

◇

加藤芳治　△名古屋診療界に於ける私立病院中の王座を占むる東區下竪杉ノ町二丁目松波病院に副院長として加藤芳治博士あり。愛知縣立醫學校出身の内科學者にして、愛知醫大より學位を獲得せる名博士として錚々たるもの也。明治四十三年以來松波病院に勤め終始克く臨床に勵しみて、多年の經驗を積み、至誠一貫能く院長松波寅吉學士を輔佐して、令弟松波兎逸博士と共に大に向上發展に努め、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なく、打診の好評は院長の篤き聲望と相俟つて益々人氣を博し、盛大なる松波病院の今日をあらしめたるもの、博士の力亦與つて大なるを想はしむ。一面又愛知縣醫師會代議員、愛知縣醫師會健康保險部理事、名古屋市醫師會理事等に參與し斯界のため盡力する所あり。

△博士は明治三十四年愛知縣立醫學校を卒へ、直ちに一年志願兵として守山三十三聯隊へ入營、三十五年豫備見習醫官拜命、三十六年愛知縣立岡崎支病院奉職、三十七年任陸軍三等軍醫、次で動員第三師團第二野戰病院附拜命出征、三十八年名古屋豫備病院附被命、同年任陸軍二等軍醫、三十九年愛知縣立岡崎支病院辭職、同年四月召集解除と同時に傳研に入所して細菌學を專攻す、同年十二月長松病院に奉職、四十三年松波病院に轉じ今日に至る、其間四十四年愛知醫專醫學士の稱號を受く、大正七年動員第三師團患者輸送部附被命出征、八年召集解除、同年任陸軍一等軍醫、叙正七位勳五等、十三年五月より十五年九月迄愛知醫大細菌學教室にて研究、同年九月學位を受領せり。主論文は「臓器ノ免疫機能ニ關スル實驗研究」にして、參考論文は、(1)網狀内皮細胞作用ノ變化ガ血糖量ニ及ボス影響ニ就テ、(2)「トルイレンヂアミン」(TDM)血清ノ研究補遺、(3)過「コレステリン」血清ノ「チフス」菌凝集反應ニ及ボス作用ニ就テ、(4)血球破壞ト免疫體産生トノ關係ニ就テ、(5)硫酸「マグネシユーム」ニ關スル知見ノ一、二外六篇あり。

△感想に曰く「古來より國家、民族の興亡は醫學の發達如何によりて左右せらるると云ふも過言にあらず、幸に我國醫學の向上進歩は洋々として目覺しき發展を見、皇威の宣揚旭日昇天の勢ひなるは同慶の至りに堪えない、然れども時代の推移と共に醫界も亦益々複雜となり、動々もすれば醫業の統制將に亂れんとす、卽ち健康保險に關する醫療問題の全般的改正、擴張、結核國策、醫療救護施設醫療組合、醫藥分業等續々として擡頭し既に醫業の革命時は來たれり、此新時代の過渡期を如何にして打開するか、一言するに吾人は傳統的崇高なる醫學の使命を忘れず、互に警鐘を打ち、相戒め、その醫育又醫業の統制發達を圖り以て和協團結一致して國民保健上使命の天職を完ふす可く又一面廣く社會の趨勢を展望考究し其機宜を過たざる覺悟を要するにあり」云々。

△博士の出身地は愛知縣東春日井郡味岡村にして、明治十三年生れなれば當年知命有六歳、健康にして益々元氣なり。眞面目なる學究的溫良の紳士にして、好個の臨床家として多年の經驗に富み、今は手腕愈々圓熟して老大家の貫祿を有す。殊に勤勉勵精の人にして、熱心親切なる醫師としての評判高く、診療に臨むや其の態度の眞摯にして熱誠あり溫情ある點は、博士の最も長所と見らるべきなり。其の今日ある閲歴は博士の前半生史に歴々たるも、而かも其の篤學は博士の面目の躍如たるものあるを思はしめ、猶將來を語るに餘裕綽々たるものあり。幸に健康と共に自重加餐を祈りて止まず。名古屋市東區研屋町三ノ七に住む。

◇

青木　甲午郎　△横濱市鶴見區鶴見千百二十四番地（鶴見區役所前）に內科、外科、整形外科を以て著聞する青木病院あり、院長は內臟外科及び胃腸病科を最も得意とする、青木甲午郎博士にして他に醫師四名あり。收容定員十八名、手術室、レントゲン科、太陽燈、其他內部の設備完備せる點に於て、名實共一流病院たるに耻ぢず、嘖々たる名聲を博す。博士は慈惠醫專の出身にして、慈惠醫大より學位を獲得せる篤學の名醫博也。學位論文は「ハイデンハイン氏催淋巴物質第一級本態ニ關スル生化學的研究」が主論文にして、恩師永山武美博士に負ふ所少からず、外に參考論文の一篇「酵素作用ニ及ボス燐脂質ノ影響　附類脂體ノ影響」あり。其他の論著枚擧に遑なし。

△栃木縣下都賀郡生井村青木儀一郎の長男、明治二十五年生る。東京府立三中を經て、大正九年東京慈惠醫專を卒へ同年任陸軍三等軍醫、補東京第二衞戍病院附、十年依願豫備役編入、同時に任鐵道醫、東京鐵道病院勤務、傍ら慈惠醫大醫化學教室にて研究、震災時は約一ケ年慶大醫化學教室にて研究、十五年學位受領、十五年より昭和三年迄歐洲十數ケ國の醫事衞生を視察す、歸朝後直ちに御茶水病院長に就任、辭職後東京市本郷區駒込林町にて開業、次で現住地に移轉開業今日に至る。醫師會の統制のないのに常に憤慨して居る一人にして「幹部は西へ會員は東へ。强化され統一された醫師會が生れてはじめて醫業統制も醫師の向上も期待され得るであらう」云々との持論を漏らし居れり。

△當年不惑に入る漸く二歳、少壯の意氣益々壯んにして研究心に燃え、臨床家としては多年の經驗を有し、今は手腕愈々冴えて圓熟の域に入る。殊に臨床に熱心克く勵精し、患者に對する態度の眞劍にして熱情あり誠實あり、親切にして溫情の掬すべき點あるは長所とす。讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、またゴルフに趣味を有す。

◇

鈴江　茂平　△德島市佐古町十五丁目に內科專門を以て名聲を博し、當地方診療界に拔くべからざる地盤を有する鈴江病院院長鈴江茂平博士は、京都帝大系の內科臨床家にして、大正十年京大醫學部を卒業するや、直ちに第三內科教室に入り島薗教授の指導を受け、同十一年一月生理學教室に轉じ正路教授の許に研究し、同十五年八月再び第三內科教室に轉ず、同年十二月京都帝大より學位を受領し、昭和二年四月現住地にて開業以來今日に至る。

△主論文は、「赤血球膜ノ物理化學的性質ニ關スル研究」にして五篇より成る。參考論文は、(1)血淸ノ光線屈折率ニ就テ、(2)血淸ノ表面張力ニ對スル加熱並ニ鹽類ノ影響、(3)指示藥ノ恆數ノ測定の三篇なり。德島縣名東郡國府町の人、

明治二十五年生る。今や壯齡漸く熟して最も得意時代に在り、手腕、聲望相俟つて大家たる位置を確保す。

◇

道菅通久　△東京市蒲田區新宿町一二五七に內科專門を以て開業せる道菅通久博士は、東大系の內科臨床家にして、物療科界の御大恩師眞鍋嘉一郎教授指導の下に久しく物理的療法を研究し、又愛知醫大教授ミハエタス教授に就きて生化學一般並に膠質化學を研究し、母校より學位を獲得せる少壯醫博也。開業後將に拾年に垂んとし、既にして堅き地盤を有し盛況に在り。

△主論文は諸種の「リオフイール」膠質の物理化學的性質に對する諸種電解質の作用を檢し膠質の安定性に關して研究せるものにして、「諸種膠質ニ對スル電解質ノ作用ニ就テ」と題し原著は獨逸文なり。參考論文は、(1)難溶性膠質物ノ荷電ニ就テ、(2)膜ノ電氣現象並ニ「イオン」透過性ニ關スル研究の二篇、何れも獨逸文の原著なり。

△廣島縣山縣郡戸河內町の人、明治二十九年生る。大正九年東京帝大醫學部卒業、引續き同學部副手囑託、物療內科に於て眞鍋教授の指導を受く、同十二年二月愛知醫大醫化學教室に入りて研究、同十四年六月再び東京帝大醫學部副手となり物療內科教室に入る、同十五年十二月學位受領、其間淺野同族株式會社囑託を受く、昭和二年一月同教室を辭し現住地にて開業今日に至る。

◇

八木金之丞　△靜岡市車町五二に八木內科醫院あり。院長八木金之丞博士は愛知醫專出身の內科學者にして、特に病理學の造詣深く、愛知醫大より學位を得たる少壯醫博なるが、久しく教授として臺北醫專の教壇に起ち、熱誠克く學生の指導に盡す所ありしが、一度び象牙の塔を勇退して以來、診療界に活躍して獨特の手腕を發揮し、希望ある將來に向つて發展しつゝある前途は囑目すべきなり。主論文は「マリー氏小腦性遺傳性運動失調症知見補遺」にして、參考論文は、(1)トムソン氏病症狀ヲ呈セル「ヒステリー」ノ治驗、(2)腦脉絡叢上皮細胞內ノ黃褐色々素小體ニ就テ　附間質ノ石灰沈着ニ就テ、(3)側腦室脉絡叢上皮腫ニ就テ、(4)腦脉絡叢內ノ骨樣組織形成ニ就テ、(5)熱帶地ニ於ケル腫瘍ノ研究外七篇あり。

△新潟縣三島郡寺泊町に本籍を有し、明治二十九年愛知縣中島郡一宮町八木常藏の長男に生る。大正九年愛知醫專首席卒業、直ちに母校勝沼內科教室に入り研究、同十年六月渡臺、同年八月任臺灣總督府醫院醫官補、高雄醫院內科勤務、同十一年一月依願免本官、同年二月臺灣總督府醫專病理學實地指導事務囑託、同十三年四月任同校助教授、同十五年十二月學位受領、昭和二年二月任同校教授、其後職を辭して以來現住地にて開業今日に至る。

◇

大村幸一　△東京市芝區田村町二ノ一五に大村內科醫院あり、院長は大村幸一博士にして、專門は內科、特に呼吸器病科を最も得意とす。山口縣防府町宮市の人、大村寅之助の長男にして、明治二十七年生る。山口縣防府中學、六高を經て、大正七年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに副手として稻田內科に勤め、稻田龍吉教授に師事す、十年七月米國政府醫術開業試驗に合格し布哇ヒロ市に於て開業、十三年一月再び東京帝大醫學部法醫學教室に入り三田定則教授の許に血淸化學を研究、十五年十二月東京帝大より學位を得、同年四月より東京市芝區內に於て內科醫院を開設し今日に至る。主論文は「網狀織內皮細胞ノ機能ニ關スル實驗的研究」にして、參考論文なし。本論文は家兎に就きて網狀織內皮細胞の有する多くの生理的機能の中、抗原攝取及び抗體形成の兩作用を研究せるものにして學界に貢獻せる處大なり。

◇

佐伯貞七　△市立靜岡病院長として名聲を博し、多年診療界の爲め努力奮勵しつゝある佐伯貞七博士は、京

都帝大出身の内科學者にして、母校の大學院を卒業して學位を獲得せる所謂京大派の名醫博として其の技倆を認めらる。嘗て歐米へ留學を命ぜられ各國を視察する所あり、歸朝後現職に就任するや只だ專心院是に從ひ、設備と内容の改善に精進して倦むことを知らず、圓熟せる手腕と、多年の聲望とは益々人氣を吸收し、大衆より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあるは、地方診療界の爲め甚だ多幸とする處なり。

△大學院卒業主論文は、「腎臟ノ機能的及形態學的研究」にして、(1)腎臟ノ色素排泄ニ關スル知見補遺、(2)「カフエイヤガカルミヤ」生體染色ニ及ボス影響、(3)異種血清ノ血管内注入ニ因スル腎臟機能障碎ニ就テの三篇より成り、參考論文は、(1)健康人血清ノ屈折率（體液ノ屈折率測定報告第二）(2)實質性腎臟炎患者血清屈折率及比屈折（體液ノ屈折率測定、報告第五）共著、(3)腦脈絡叢上皮細胞内ノ黃褐色色素小體並ニ石灰沈着ニ就テ、(4)理學的要約ノ藥物作用ニ及ボス影響、溫熱ノ影響、靑蛙ノ血管ニ就テノ實驗等四篇あり。其他の論著多數あり。

△博士は大正元年京都帝大醫科大學入學、在學中同二年一月陸軍衞生部依託學生を命ぜらる、同五年十一月同大學卒業後、直ちに任陸軍見習醫官、步兵第十一聯隊に配賦せらる、同六年六月任陸軍二等軍醫、補步兵第五十二聯隊附、同八年四月依願豫備役被仰付、同八年六月京都帝大醫學部副手囑託、同九年十月京都帝大大學院入學、同十五年十二月母校より學位受領、昭和二年九月獨、英、シュワイツ、佛、伊、米國へ留學を被命、翌三年夏歸朝、次で現職に就任今日に至れり。出身地は仙臺市光禪寺通にして、明治二十年生る、學究的溫厚の紳士也。賦性敦厚にして謹直、至誠唯だ是れ公に奉じ、仁術を以て天職と爲すの概あり。靜岡市安東三丁目六四に住む。

◇

山崎蓊　△臺北市榮町一ノ一に在る山崎醫院は、内科專門を以て著聞し、臺北診療界に於ける私立病院中の一流に在り。院長山崎蓊博士は岡山醫專出身の内科臨床家にして、嘗て獨逸に留學して研鑽大に得る所あり。歸途米國を視察し、歸朝後京都帝大より學位を獲得せる篤學の名醫博なり。主論文は、『犬蚤ニ於ケル「レプトモナス」「クテノツエフアリー」「トリパノゾーマ」「レウキジー」及ビ病原性「トリパノゾーマ」類ニ就テ』にして原著は獨逸文より成る。參考論文は、(1)昆蟲類ノ腸管内ニ於ケル鞭毛蟲ノ研究、(2)昆蟲類ノ腸管内ニ於ケル鞭毛蟲ノ研究、（第二回報告）(3)病原性寄生體傳播者トシテノ蚤ノ操作ニ就テ、(4)とりばのぞーまノ傳播徑路ニ就テ、(5)蛆蟲症ニ就テ、(6)臺北地方ニ於ケル人體的内寄生蟲卵特ニ篦形二口蟲卵ノ檢索、(7)篦形二口蟲病ノ病候並ニ治療ニ就テノ追加の六篇なるが、其後發表せる論著尠からず。

△廣島縣甲奴郡田總村の人、明治十七年生る。明治四十年十月岡山醫專卒業後、直ちに任同校助手、病理學教室勤務同四十一年十一月同校助手を辭し、同四十二年五月現住所にて醫術開業、大正十年四月渡歐、同年九月獨逸國漢堡熱帶病研究所に入所、ノホト教授に就き熱帶病醫學を、ライヘノウ教授に就き原蟲學研究、同年十月漢堡大學に入學、同十二年四月同大學退學及熱帶病研究所退所、同年五月渡米、北米合衆國に於ける各地の醫科大學を見學し、同年六月歸朝す、再び現住所にて開業、同十五年十二月京都帝大より學位を授與せらる。

△其の今日ある閱歷は博士の面目を語るに充分なり。經驗豐富にして今は臨床家として一段の貫祿を加へ、「醫は仁術也」をモットーとして熱心甚だ力め、患者に對する態度の眞摯にして熱情あり、誠實と親切とを盡すところに篤き聲望を博す。書（揮毫）に堪能にして自ら筆硯に親しみ、清軒を號とす。

◇

高橋皓　△函館市先年の大火災後會所町五五に新裝せる病院を新設し、從前通り内科一般の診療に誠心努力し、漸く復興の現實化に邁進し、年次堅實なる發展振りを示しつゝある高橋皓博士は、大阪醫大出身の内科學者にして、北海道帝大教授今裕博士に就きて病理學を專攻し、北海道帝大より學位を獲得せる年壯の名醫博也。學位論文

は「腦下垂體ノ機能ニ關スル組織化學的研究」が主論文にして「結核患者ノ甲狀腺機能狀態ニ就テ」が參考論文なり。其他論文中重要なるものとしては、(1)腦下垂體ノ分泌ニ關スル組織學的研究續報、(2)膵臓ラ氏島ノ細胞ノ還元作用（今裕共著）(3)家兎副腎剔出ニヨル爾餘内分泌臓器ノ變化ニ就テ、(4)腦下垂體ノ蛙「クロマトフオーレン」ニ對スル態度、(5)膵實質細胞ノ銀反應等あり、外に夥多あれども省略す。

△博士は函館中學校を經て、大正九年府立大阪醫大卒業後、同年九月より函館市立中の橋病院に勤務し、同十年十月北海道帝大醫學部副手囑託、附屬醫院第一内科勤務、同十一年四月助手被任、翌十二年五月助手を辭し、札幌市奥田病院長不在中留守院長として赴任す、同年十月北海道帝大醫學部病理學教室專攻生となり今教授の指導を受け研究に從事す、翌十三年五月任同醫學部助手、同十四年五月同學部講師となる、同十五年十二月北海道帝大にて學位受領、昭和二年五月町立岩見澤病院建設醫務囑託となり、同時に同大學附屬醫院第一内科に復歸し、同年九月町立岩見澤病院竣工と共に同病院に就任し副院長兼内科醫長となる、次で辭職後函館市惠比須町に私立病院開設、一般診療に從事しつゝありしが、昭和九年三月大火災にて病院全部烏有に歸して後現住所に移轉復興し病院を新設せり。出生地は秋田縣由利郡本荘町にして、明治二十五年生る、當年漸く不惑に入る四歳なり。學究的眞面目なる臨床家にして、多年の經驗に富み獨特の手腕を有す。爲人篤實溫厚、質朴の氣を具へ謙讓にして敢て學者たるの態度を示さず、寛厚にして人を愛し、患者に誠心親切を以てす、平生禮節を尚び時務に缺ぐことなし。運動に趣味を有す。

◇

小山諒

△東京市淀橋區戸塚町二ノ一〇八にて内科、小兒科を專門として私立病院を開設し、專心診療に勵精努力しつゝある小山諒博士は、新潟醫專の出身にて、慶大派の名醫博だる一人物として其の手腕を認めらる。玲瓏たる打診の好評は、篤實溫厚なる性格と相俟つて益々人氣を獲得し、既にして牢固たる地盤を有し、堅實なる發展と共に年次繁榮を增しつゝあり。博士會心の作たる學位論文は既に學界に定評あれば贅せずもがな、研鑽多年、學識と共に臨床の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なく、最も得意の時代に在るが如し。即ち、主論文は、(1)黄金色葡萄狀球菌ノ馬卵巢濾胞液ニ對スル凝固作用、(2)血液凝固機轉ト黄金色葡萄狀球菌ノ馬卵巢内濾胞液凝固作用ト比較研究補遺の二篇にして、參考論文として、(1)一九一八年ニ於ケル流行感冒ノ病原檢索、(2)各種動物血液成分ト「インフルエンザ」菌トノ發育關係、(3)膽汁ノ抗菌作用及抗毒作用、(4)「コレラ」恢復期患者血清ノ溶菌並ニ凝集作用ニ就テ、(5)哺乳兒流行性腦脊髓膜炎ノ一例、(6)「ヂフテリー」菌ノ二三ノ小實驗、(7)「ヂフテリー」毒素注射後家兎副腎内「アドレナリーン」量ノ變化ニ就テ、(8)「コレラ」感作「ワクチン」及「チフス、ワクチン」ノ保存期限ニ就テ(9)鹽化「アドレナリーン」ノ「ヂフテリー」毒素中和作用ニ就テ、(10)毒性異レル「コレラ」菌ノ抗體產生比較、(11)「フオルマリン、ワクチン」及「ヤトレン、ワクチン」ニ就テ等あり。内科、小兒科學を專攻し、特に血清細菌學の造詣深し。

△博士は東京下谷區練塀小學校より本鄕區京華中學校を經て、大正元年新潟醫專に入學、大正五年同校卒業後、直ちに北里研究所に入所、副助手に採用せられ肥田晉市博士の許に專ら血清細菌學を研究し、同九年同所正助手に任命せらる、學位論文を慶大醫學部に提出して、昭和二年一月學位を受領せり、其後北研を辭して前記の現住所にて開業、專ら内科、小兒科一般の診療に從事しつゝ今日に至れり。明治二十五年仙臺市にて出生、父德衞、母敏子、長男にして三弟一妹あり。篤學者にして其の今日ある閲歷は博士の前半生史これを語りて餘蘊なし。今や不惑に入る漸く四歳年壯の意氣旺盛にして研究心に富み、學識、手腕、人格共に圓熟して最も重望せるゝ時に在り。趣味としては旅行を好み、和樂を愛す。其の眞摯なる性格と相俟つて共に語るべきは、患者に對し誠心親切を以てし、學者として敢て尊大振らず、淡々として己を低うする奥床しき態度にあり。

◇

鈴木元晴　△京城帝大助教授にして理學的診療科を擔任し、兼ねて京城醫專教授としてレントゲン學を講じつゝある鈴木元晴博士は、愛知醫專出身の篤學者にして、慶大より學位を獲得せる新進の名醫博として其の存在を認められる。殊に博士の最も得意とするレントゲン學に至りては該博なる學識を有し、學位論文以外幾多の業績を發表して學界に重要せらる。今や朝鮮醫學界に於ける斯學の權威として重きを爲す一人物たるは頗る矚目に値す。即ち、主論文は「腰薦部ニ於ケル畸型的發育ト神經痛樣疼痛ノ臨床的意義ニ關スル「レントゲン」線學的研究」にして、參考論文は、(1)「レントゲン」線放射睾丸機能ノ藥物學的研究、(2)生理的見地ヨリ觀察セル脛骨結節ノ「レントゲン」線像並ニオスグート、シエラツテル氏病ノ疑義ニ就テ第一、二、三回報告なるが、他に論著夥多あり。

△豐橋市西八丁の人、明治廿八年生る。愛知縣立四中を經て、大正四年愛知醫專を卒へ、直ちに東京市順天堂醫院レントゲン科入局、同五年十二月より六年二月迄東京市養育院內科見學、同六年二月順天堂を辭し同年六月鄕里豐橋市にて開業、四十一年四月任朝鮮總督府醫院醫員、同十五年四月兼任京城醫專教授、昭和二年一月學位受領、同年六月任朝鮮總督府醫院醫官、次で現職に任ぜられ今日に至る。年壯の意氣と共に研究心に燃え、向學の精神鬱勃として禁ぜず、研學切磋甚だ勉むる所あり。眞面目なる學究的學者タイプの人にして、凛々しき風貌に威嚴を存し、慧眼にして機敏さを表示す。志操堅實、清淡にして名利を求めず、研究と學生の指導とに趣味を集中して亦他事を顧みざるの概あり。敎壇に起つや諄々として說くところ熱あり力あり、其の態度の眞摯にして誠意あるは學生間に敬慕せらる所以一面又人と接するに恬澹として衒はず、謙遜にして克く自抑し、寬厚能く人を容れ部下を愛し學生を指導す、以て其の性格の一斑を窺はれ、同時に其の高邁なる人格を尊ばる。年齡不惑に入る五歲なれば、春秋猶豐富にして、精研に餘念なき前途は洋々として益々輝かし、幸に健康と共に切に自重加餐を祈る。京城府竹添町金華莊に住む。

◇

野口猪之助　△東京市澁谷區代々木初臺町五八四に野口內科醫院あり、院長野口猪之助博士は正五位勳三等豫備海軍々醫大佐なり。博士は藥劑師試驗に、次で醫術開業試驗出身をスタートとして、海軍々醫學校に次で獨逸に留學し、生物化學、藥物學及び內科學を研鑽大に得る所あり、歸朝後金澤醫大より學位を獲得せる篤學の士にして、今や獨自の舞臺に活躍して餘生を診療界の爲め盡しつゝあるは多とすべきなり。

△主論文は「タカジアスターゼ」に關する研究にして、外に參考論文として、(1)鑛物新陳代謝ニ就テノ檢査、(2)腎疾患ニ於ケル鑛物新陳代謝ニ就テノ檢査、(3)腦下垂體後葉「エキス」及「ノバズロール」ガ生蛙腎ニ對スル毒作用ニ就テの三篇あり。

△明治十九年東京府西多摩郡平井村に生る。同三十九年私立東京藥物學校に入學し、在學中同四十年內務省藥劑師試驗に合格し藥劑師となる、同年より更に醫學の研究に志し、同四十二年內務省醫術開業試驗に合格し醫師となる、其間私立日本醫學校に入學し醫學一般を修業せり、同四十三年十二月より四十四年十二月まで海軍々醫學校普科學生被仰付、同四十四年十二月任海軍少軍醫、大正二年任海軍中軍醫、同四年任海軍大軍醫、同十年任海軍々醫少佐、昭和二年任海軍々醫中佐、同五年十二月任海軍々醫大佐、其間佐世保海兵團附、軍艦秋津洲、鹿島、駒橋乘組、臨時南洋防備隊附、第三驅逐隊軍醫長、軍艦滿洲軍醫長、橫須賀海軍工廠附、軍艦對馬軍醫長、佐世保海軍病院附、橫須賀海軍病院附、上海海軍陸戰隊軍醫長兼第一遣外航隊軍醫長、海軍水雷學校兼通信學校醫長等に歷任し、大正九年海軍々醫學校高等科學生被仰付、翌十年同課程を終る、同時に軍艦韓崎軍醫長を經て橫須賀鎭守府附被仰付、同十二年二月より同十三年三月まで伯林カイザー、ウヰルヘルム研究所生物化學敎室にてノイベルク敎授に就き生物化學研究、同十三年四月より同十四年三月までウユルツブルグ大學內科敎室、モラウヰツツ敎授に就き內科學研究、同十四年四月よ

り十月までミュンヘン大學藥物學教室ストラウブ教授に就き藥物學研究、滯歐中及歸路歐米各國を視察し、同十四年十二月歸朝、同十五年二月横須賀海軍病院部員兼看護術練習所教官被仰付、昭和二年一月學位受領、同五年十二月豫備役被仰付、爾來現住地にて開業今日に至れり。

△其の今日あるは博士の前半生史これを語りて餘蘊なし、殊に久しく海軍々醫界に活躍して貢献せる多年の功績は言はずもがな、其の立志傳的篤學者としての存在は特筆に値す。凛々とした風貌は威嚴を存し、溫容の裡に謹嚴そのものの性格を表し、人格高潔なり。平和なる家庭には妻文子との間に二男一女あり。

◇

小野健治

△滿洲醫界の現狀は多士濟々として人材に富む、小野健治博士の如きは內科界に逸色せる一人物として推奬措く能はず。現に鐵嶺滿鐵醫院長兼醫長たるの外、鐵嶺地方委員會議長、滿洲青年聯盟支部長、鐵嶺新潟縣人會長、鐵嶺運動協會名譽會長、滿鐵社員會長、鐵嶺連合會長等々の名譽職を其の双肩に負ふて活躍し、獨り治療界のみと言はず、凡有る公共事業に參與して指導の任に當り、滿洲の開發上貢献する所大なり。以て其の高き聲望と共に人格の反映する處、亦た偉大なるものあるを想はしむ。

△博士は八高を經て、大正五年九州帝大醫科大學を卒へ、直ちに附屬醫院小野寺內科教室に入りて研究、七年十月瓦房店滿鐵醫院長兼醫長となり、十三年十一月母校の大學院に入學す、十五年十一月より滿二ヶ年間歐米各國へ留學し(滿鐵より)、昭和二年一月大學院卒業に依り九州帝大より學位を受領す、歸朝後同年九月より頭書の現職に就任す。

△主論文は「莫爾比涅ノ作用ニ關スル知見補遺」にして、參考論文は、(1)諸種疾患ニ於ケル腦脊髓液ノ殘餘窒素量ニ就テ、(2)「ヒョリン」ノ瓦斯代謝ニ及ボス影響ニ就テ、(3)莫爾比涅及ビ「ヒョリン」ヲ同時ニ連續作用シタル場合ニ於ケル赤血球沈降速度並ニ血液粘稠度ニ就テの三篇なり、尙其後學界に發表せる論著尠からざるものあり。

△「豫防醫學に對する智識を吸收し罹病諸原因の研鑽に努め以て疾病の根本的禍根を除艾されたし」云々とは、博士の感想の一片にして、又た希望としては「多數の綜合的病院の出現を希望し患者は是によりて各專門家の治療を受け時間と經費の輕減を計り得べし」云々と。可能性あるものとして之れが實現を期待し度し。出生地は新潟縣相川町にして明治二十二年生れなれば、當年四十有七歲なり。年齒漸く壯熟して最も得意時代に入る、學究的溫厚の紳士にして臨床家としての特徵を具備し、又た活動家として民衆の信望と尊敬とを一身に集めつゝあるは多幸とす。讀書家にして殊に文學趣味に富む。草堂は其號とす、學生時代純文藝雜誌「エニグマ」を同志諸君と發行し、其他各種の雜誌に寄稿し、新聞に長篇小說を執筆したることもあり、猶ほ批判的立場に於て政治に興味を感じ學生時代遊說したることありと聞く。滿洲國鐵嶺宮島町三ノ四に住す。

◇

南廣憲

△大阪帝大醫學部講師として再び小澤內科に勤務の傍ら、大阪市天王寺區國分町市電停前に夜間診療所を設け內科一般の診療に精進しつゝある南廣憲博士は、大阪帝大系の內科學者にして、內科の泰斗小澤博士に多年師事して造詣する所あり、一面又た竹尾結核研究所に久しく職を奉じ、病理細菌部主任として佐多博の下に活躍し、此の方面の研鑽亦淺からず、殊に結核に對する治療は博士の最も長ずる所にして斯界に定評あるを聞くや旣に久矣。思ふに多年包藏せる學識と共に實際的手腕は、今や益々發揮し得る自由の立場に至れる博士の得意や想像に餘り、市民治療界淨化の爲め博士の精研努力に俟つや切なり。

△學位は大阪醫大より獲得せり。主論文は「結核免疫(過敏性)ト網狀織內細胞系統トノ關係　附重金屬鹽類ノ結核感染並ニ免疫(過敏性)發現ニ對スル關係」を詳論したるものなり。參考論文は、(1)人型死結核菌ノ各種動物ニ對スル抗原的作用、(2)人型死結菌ノ生結核菌接種ニ對スル免疫作用、(3)「チフス」及「パラチフス」診斷液ノ擺擇及優劣、

(4)死「チフス」菌內服ニ因ル腸管局所免疫ノ發生ニ關スル知見補遺、(5)腸窒扶斯死菌內服ニ因ル全身免疫ノ發生竝腸管局所免疫ノ發生ニ關スル實驗的研究、(6)及ビ(7)死「チフス」菌ノ經口的抗原作用、(8)腸「チフス」菌ノ內服ニ因ル腸管局所免疫ノ發生及其効果の三篇なり。他に論著夥多。　現代の學界乃至醫界に對して一片の感想を述べて、曰く「現代醫學の研究の大多數は動物實驗による原因論多く從つて治療的方面の實績極めて寥々たるものなり治療的方面の進歩も乍遺憾、昔となほ懸隔なきに近し、希は今後の研究は人類を基礎とせる治療的方面の進展に見んことを」。

△出身地は新潟市學校町通り二番町の人にして、明治十六生る。大正八年大阪醫大を卒へ、直ちに同大學病理學教室副手となり、大學附屬竹尾結核研究所にて結核を專攻す、同年末一年志願兵として入營、同十年春除隊と共に竹尾結核研究所に歸任して結核の研究を續行す、翌十一年任豫備陸軍三等軍醫、更に大阪醫大助手となる、同十二年より十四年まで大阪血清藥院々長代理を兼任す、同十三年大阪醫大試講（結核病學）囑託、同十五年以來同大學病院小澤內科に轉勤し、傍ら竹尾結核研究所病理細菌部主任を兼務す、昭和二年二月學位受領、同年中所長佐多博士洋行中所長代理を命ぜらる、翌三年竹尾結核研究所を辭し專ら大阪帝大附屬醫院小澤內科に、同五年秋內科學試講に任ぜらる、越えて七年二等軍醫に昇進す、翌八年四月一日講師に任じ更に勤務中、八年五月帝大醫學部講師の傍ら市立堺市民病院長に就任せり。翌九年九月より堺市民病院を退職し、專ら大阪帝大醫學部講師として再び小澤內科に勤め、傍ら頭書の場所に夜間診療所を設げ一般診療に從事しつゝあり。讀書家にして書見を業餘の趣味とし、又運動を好み、時に暇を得れば旅行を樂しむ。體軀肥大にして、風采雄々しく、滿面常に溫笑を以て人に接する態度と、居常能く社交禮節を重んずる慣習は、博士の爲人を物語るものにして、臨床家としての博士の將來を卜するに足らん。自宅は阪急沿線箕面終點に在り。

◇

椎名泰三　△千葉市新町に結構宏壯、施設完備、堂々たる私立病院として一頭地を抜く椎名病院あり。內科の大家椎名泰三博士の獨力經營に成り、約一千坪の土地を抱擁して建坪約五十坪の診療所（レントゲン室、檢査室其他）と三棟の病室と、二棟の一人專用の獨立病室（二十人の患者を收容し得）等あり、外に傳染病隔離病室の設備もあり、庭廣く、樹木多く、空氣淸爽、日當り善く、極めて閑靜にして理想的諸般の設備整ふ。專門は內科にして殊に博士の最も得意とする呼吸器病、消化病に至りては、評判嘖々として博士獨特の手腕を發揮して餘す所なく、日々患者の輻輳するもの多く益々殷盛を極む。著者は其の成功を祝福するに吝ならざる者なり。

△更に來歷より見たる博士は千葉醫專の出身にして、大正四年卒業後直ちに縣立千葉病院第一內科研究生となり、五年三月同醫員に任ぜられ七年四月迄勤む、翌月より千葉市井上病院（院長井上善次郎博士）に轉勤、十四年九月千葉醫大藥物學教室に入り、十五年十月專攻生となり研究を續け、昭和二年二月千葉醫大より學位受領、四年八月井上病院を辭して千葉市に內科醫院を新設開業せり。主論文は「和漢藥ノ研究」にして、第一篇「鼠李子及其有効成分ノ研究、附下劑ニ對スル二十日鼠ノ感受性ニ就テ」第二篇『白南天實「アルカロイド、ドメスチン」ノ藥學的研究』より成る。

△千葉縣印旛郡久住村小泉の人、明治二十六年生る、當年不惑に入る三歲なり。學識、手腕、人格共に漸く壯熟の域に入り、臨床家としては益々重望せらるゝ年輩にして最も得意時代に在り。加ふるに天資溫厚篤實なる性格と相俟つて人望を集め、克く今日の位置と隆盛とを贏ち得たるもの成功と言はざるを得ず。而かも猶春秋豐富にして洋々たる前途は、向後の活躍と相俟つて更に將來の大成を期待せらる。私宅は千葉市千葉二六四一に在り。

◇

井上門司　△神戸市須磨區須磨浦通四丁目一八六に井上門司博士經營の井上內科院あり。多士濟々たる神戸

診療界に進出して以來開業既に十數年を閲し、今や卓然として群を抜き牢固たる地盤を有す。博士は京都府立醫專出身の内科臨床家にして、特に結核を最も得意とし、學位は京都府立醫大より獲得せる名醫博たるに恥ぢず。主論文は「結核血清診斷ノ實驗的研究」にして、參考論文は、(1)結核菌及類似抗酸性菌ノ發育ト水素「イオン」濃度トノ關係、(2)簡易ナル結核菌ノ一新集菌法ニ就テ、(3)異性抗原體ニ關スル知見補遺、本邦魚類ニ於ケル異性抗原ノ分布ニ就テの三篇なり。

△感想の一片を述べて曰く「我國に於て今日醫學の研究は空前の盛況を呈して居るが、醫政方面には大部分の醫師が無關心である、我國固有の美風たる開業醫制度は今や孤城落日の危機に瀕して居るに不拘、醫界を統制すべき一個の指導精神さへ樹立せられないのは何故であるか、實地を離れて醫學なし經濟を離れて醫業の成立しないのは言を俟たない、研究室に於ける醫學の研究と活社會に於ける醫業の實地とは相共に關聯してこそ始めて完全なる醫術の目的を遂行するを得るものと信ず。醫業國營又可なりである須らく速かに醫事醫政に關する講座を新設してこの方面への進出をはかり以て完全なる醫學と醫業の連鎖を實現致したい」云々。

△岐阜縣武儀郡上牧村の人、明治廿三年生る。大正二年京都府立醫專卒業後、呼吸器病專門須磨浦病院に赴任、同八年以降現住地にて開業今日に至る、斯間同十三年京都府立醫大研究科に入學、結核專攻、昭和二年二月學位を授與せらる。其の今日ある篤學と成業は博士の閲歴に盡きて躍如たるものあるを見る。今や年壯の意氣益壯んにして、呼吸器病の大家と仰がれ、多年練熟せる獨特の手腕を以て、診療に勵精努力し、誠實と親切とを盡して、患者より多大の信頼と尊敬とを受けつゝあり。讀書家にして書見を業餘の樂しみとする外、南宗畫を學び、天陽と號し、技既に素人の域を脱す。其他圍碁、音樂、演藝を嗜しみ旅行を好む。年齒不惑に入る六歳、猶春秋に富む前途は、博士の將來を語るに餘裕綽々たり、幸に自重加養を祈るや切也。

◇

高龜良樹

△結核療養界に於ける現代の權威として、關西醫界に學究的其の大なる存在を認められつゝある一人者として、茲に推奬品隲せんとするは高龜良樹博士也。氏は曩年自家經營の下に設立せる私立糸崎療養院を日本赤十字社廣島支部に讓渡して以來、日赤廣島支部糸崎療養院長として專念其の天職なるに甘んじ、今猶斯界の爲め奮鬪的努力を續け、以て自己の本分として自ら樂しむの概あり。博士は岡山醫專の出身、學位は東京帝大より獲得せる篤學の名醫博にして、研鑽多年、内科の造詣深く、殊に其の最も得意とする結核に至りては、餘りにも著名にして更めて批判の餘地なし。感想に曰く「病院に於ける患者の事務的取扱ひ振りには、もう飽き〳〵して來た。病院と云へば直ぐに冷かなる事務的取扱を聯想する。今の調子で進んで行くと、病院は早晩患者の怨府となるかも知れない。特に慢性病例へば肺結核の療養の如きは、事務的取扱では治療成績が擧らない。必ずや熱愛的でなくてはならない。熱愛的取扱とは、患者の心境を整理してやることである。茲に重點を置かなくては、病患部は治つても病人が治らない云々。

△略歴より見れば、明治四十一年岡山醫專を卒へ、直ちに山口縣立病院内科に勤め、四十三年四月より東京帝大醫科入澤内科教室介補として四十五年三月迄勤務の傍ら研究に從事す、大正二年四月廣島縣私立糸崎療院を設立し院長として院務管掌、一般の診療に從事す、三年四月より桂田富士郎博士に師事して病理學、寄生蟲學研究、十二年二月より大阪市立刀根山療養所に於て結核に關する研究を遂ぐ、同十三年二月前記私立糸崎療養院を日本赤十字社廣島支部に移管し、同時に院長として就任す。昭和二年三月東京帝大より學位を授與せらる。主論文は「蛔蟲仔蟲ノ宿主體内移行徑路ニ關スル智識增補」にして、參考論文は、(1)蛔幼蟲及成蟲ニ對スル「サントニン」ノ驅蟲作用ノ本態ニ關スル實驗的研究、(2)結核患者ノ血壓竝ニ結核治療上ニ於ケル血壓ノ意義、(3)結核患者ノ血壓ニ關スル智識增補、(4)結核

感染ノ副腎ニ及ホス影響ニ就テ　附結核海猽ニ於ケル副腎ト甲狀腺トノ交渉、(5)結核感染ノ膵臓ニ及ホス影響竝ニ之ト副腎及甲狀腺トノ交渉、外四篇あり。他に自著論文夥多。結核療養雜誌「更正」を月刊、斯道の啓發に努め、多年學界に貢獻する處あるを多とす。

△出身地廣島縣豐田郡久芳村にして、明治十七年生る、當年知命有二歲なり。讀書家にして文雅の嗜しみ深く、殊に俳句を能くす、友月は其號なり。溫厚篤實なる學究的紳士にして、思慮あり識見に富み、崇高なる人格を具ふ。其居常人と接するに紳士らしき態度と、寛厚にして威嚴を藏する容貌とは、自ら人をして敬慕の念を深からしむ處に、博士の德望の存在を窺はる、臨床家としては蓋し理想的人物の典型と云ふべき乎。尾道市久保町六四一に住す。

◇

福谷　溫　△福谷溫博士の感想が面白い曰く「小生は大學を出でて何もはつきりした理想もなく、唯、藤浪速水兩先生を慕つて病理學教室へ飛び込んだものの特に御指導を受けた速水教授御逝去の悲しい目に會ひ、又眞面目な學者の惠まれない半面にも心を擊れて、深い研究よりも、病理學の範圍に於て出來る丈け廣範圍の常識を養ひたい後來種々の論文を讀む時正しい批判がこれに加へられる樣になりたいと云ふ希望を抱く樣になつた。從つて、同教室の他の研究員の人々の指導を受けたり、病理解剖學、組織學、寄生蟲學、腫瘍學、細胞學、比較病理學、豫防醫學とあらゆる方面に興味を感じていつた。教室へ入つて約二年半の後、研究材料などまだ何等整理も出來て居ない時に教室の大火災で全部を失つて、灰の中から新調ツアイス顯微鏡の殘骸を引き出したのが唯一の思ひ出の品となつた。良い研究室を失つた爲豫防醫學の方面に教室外に研究題目を求める樣になつた。醫化學教室にも御世話になつた。その頃自然科學萬能の醫者を笑ふ聲を耳にして、餘暇を利用して他の科學の講演も努めて聽く樣にした。總合大學の御利益も多かつた。

臨床方面に轉向の氣分が濃厚になつてからは病理解剖には特に注意し、臨床から來た試驗切除片の組織診斷にも興味が湧いた。其頃から研究にも段々興味が深まつてゆくし、清野教授から御情ある御言葉を受けたり、南米、北米、學術視察の御供を藤浪先生から薦められたりして、臨床轉向はなか〳〵後髮を引かるゝ思が深かつた。思ひ切つて辻教授の御世話になつてみると、其處には全く別の愉快な天地があつた大學の浴場へ最後に入るのは自分と巡視と丈けの日が續いた。或日、君の樣に或程度病舍の責任を持つて居る者が日曜日まで病院へ來ては若い新進の速中が困るからと注意を受けた、しかし親しい病舍へ足が向く事が多かつた。大學の病舍は戀人の樣だつた。四年半近い時が病舍で流れた。ある事情で社團法人豐橋病院長を囑託せられた。市立病院長も引受けた。豐橋病院が市營になつて囑託は自然解かれた。それから後京大皮膚科で膀胱鏡に關する見學したり、特にX線方面の補足勉强もした。時世に合ふた病院の見學もして歩いた。夢の樣に時が流れる、それでも四年半位で何か小さいながら變化を持つて七轉八起をやつて來た。社會學一年生の今の身にも見學したい處、教へを乞ひたい師、讀まねばならぬ本、知らねばならぬ事、なか〳〵何時卒業が出來る事やら。ウイルヒョウ先生の樣な立派な學者であり且、社會醫學の上で街頭に立つても、珠玉の功績を殘されてゐる偉人の歷史に接すると、己が無力の恥しい存在に泣きたくなる。空ろな感想までに」云々。活けるが如く氏の前半生史が窺はれる、新味津々として盡きざる內に博士に就ての認識を得るに充分なり。

△顧みて博士の學歷及び閱歷を概述すれば、八高を經て、大正十一年京都帝大醫學部を卒へ、直に病理學教室に入り藤浪、速水兩教授の指導を受く、後ち清野教授指導の下に研究、其間同教室助手たりしも同十五年九月之を辭して內科教室に入り辻教授の指導をも受く、昭和二年二月病理學教室を辭して以來、專ら辻教授の醫局にて副手又は助手として勤務の傍ら研究、同年三月學位受領、約四年半の後社團法人豐橋病院長の囑託を受け赴任す、次で豐橋病院が市營となるに及び囑託を解かる。

△主論文は『日本住血吸蟲病ニ關スル實驗補遺』にして參考論文は、(1)同上日本住血吸蟲病豫防撲滅法追加、(2)同上日本住血吸中間宿主殺滅ヲ目的トスル土中埋沒法、(3)胃癌ニ續發シタル直腸癌特ニ蔓延徑路トシテノ腸間膜ニ就テ、(4)豚「ペスト」病理解剖、(5)家鶏肉腫濾過試驗の五篇なり、其後學界に發表せる論著又尠からざるものあり。豐橋市中八町福谷元次の長男、明治廿九年生る。年齢漸く不惑に達し、少壯の意氣に燃え、研究心潑剌として止まず、今猶孜々として研究に餘念し。曩年博士が千葉縣の新しき地方病地域に於て、初めて中間宿主を發見し且之に含蓄せる「セルカリア」を檢出し、以て本病の地理病理學上に貢獻せることは有名なり。豐橋市中八町の自宅に住む。

◇

山口友孝　△仙臺簡易保險健康相談所囑託兼東北帝大醫學部講師として活躍しつゝあるは山口友孝博士也。東北帝大出身の內科學者にして、母校より學位を獲得せる少壯醫博也。今や地方診療界に精進し、斯界の爲め努力勵精の傍ら、一面又講師として母校の研究室にあり。主論文は獨逸文の原著にて「水分代謝ニ關スル研究」と題し第一報血流遮斷ガ腎健康者並ニ腎疾患者ニ於ケル中間水分代謝ニ及ボス影響、第二報健康並ニ腎病犬ニ於ケル靜脈鬱血性浮腫ニ關スル實驗的研究、第三報腎健康並ニ腎病患者ニ於ケル靜脈鬱血性浮腫ノ生成ト其ノ吸收、第四報一、二ノ利尿劑ガ腎健康並ニ腎疾患犬ニ中間水分代謝ニ及ボス影響、第五報內分泌ガ犬ノ健康時並ニ腎病時ニ於ケル中間水分代謝ニ及ボス作用、第六報腎健康者並ニ腎疾患者ニ於ケル局所的呼吸困難ニヨリテ惹起セラレシ組織膨化ノ恢復、第七報脚氣並ニ實驗的人數ヴイタミン缺乏症ニ於ケル中間水分代謝の七篇より成れり。年齢未だ少壯にして、精研に餘念なき前途は洋々として更に其の將來を待望せらる。

△札幌市南二條西三丁目に本籍を有し明治廿八年生る。北海道廳立札幌第一中學校、二高を經て、大正十年東北帝大醫學部を卒へ、直に同學部副手囑託、內科學教室勤務、同年九月東北帝大大學院入學、同十五年七月大學院退學と共に副手解囑同時に東北帝大講師囑託、昭和二年三月學位受領、同年十一月講師を辭し秋田縣公立横手病院長就任、其後現職に轉じ再び講師として母校に勤務しつゝあり。少壯氣鋭にして頗る研究心に富み、研究と醫療とに今は趣味を集中して拮据黽勉甚だ力むる所あり。人と爲り穩健にして篤行、寛厚能く人を容れ、後進を親しみ學生を愛す。仙臺市北四番町九八に住む。

◇

西村利雄　△京都府立醫科大學講師として內科教室に西村利雄博士あり、兼ねて花園分院內科醫長たり。京都府立醫專出身の內科學者にして、京大教授戸田正三博士に就きて衞生學の蘊奥を究め、京都帝大より學位を獲得せる少壯醫博なり。學位論文は微量の酸化炭素を持續的に吸收せる場合血液像に如何なる變化を現はすやを檢し其結果を論究せるものにして、主論文たる「酸化炭素ノ持續的吸入ニヨル血液像ノ變化ニ就テ」卽ちこれなり。參考論文は、酸化炭素ノ持續的吸入時ニ於ケル血液像變化ト脾臟トノ相互關係ニ就テなり。爾來引續き研究に志し、發表せる論著また尠からず、今猶母校に在りて孜々として研學に餘念なき前途の展開は頗る刮目に値す。

△顧みて博士の學歷を概說すれば、京都府の人、明治廿七年生れにして、大正八年京都府立醫專卒業後、直ちに同校附屬療病院醫員として外科教室に勤務、教授河村叶一博士の指導を受く、同十年四月內科教室に轉じ校長兼教授小川瑳五郎博士の指導を受く、同十一年十二月同校を辭し京都帝大衞生學教室に入り教授戸田正三博士の下にて研究、昭和二年三月學位受領、同年始めより再び京都府立醫大內科教室に歸學して研究に從事し今日に至る。眞面目なる學究的好學の士にして、少壯の意氣に燃え、研究心潑剌たるものあり、其の眞劍にして熱心なる態度は、學者として執るべき賢明なる道たるべし。春秋猶豐富なれば、折角の自重奮勵を祈るや切なり。京都市鞍馬口室町西入に住む。

◇

中村嘉藏

△東京市京橋區京橋二丁目十番地京橋京二館に中村嘉藏博士の診療所たる中村内科あり。博士は慈惠醫專出身の篤學者にして、米國シンシナテイ大學のマスター、オブ、サイエンスを有し、慈惠醫大より學位を得たる内科界近來の名醫博なり。嘗て米國に留學するや研鑽大に得る所あり、其の學識の該博なるは言はずもがな、臨床的手腕は愈々圓熟の域に入り、今は最も得意時代に在るが如し。其の玲瓏たる打診の評判は益々良好にて民衆の信望を集め、漸次獨自の地盤を擴充しつゝある前途は、頗る刮目すべき也。

△主論文は『「セフアリンノ」研究』にして、(1)組織並ニ血液ノ「セフアリン」ノ定量法、(2)健康體ニ於ケル家兎並ニ人類ノ血液「セフアリン」量、(3)血液尿素ト血液「セフアリン」トノ關係、(4)血液「セフアリン」ニヨリ心臟病ト腎臟病トノ鑑別法の三篇より成れり。參考論文は「血液凝固ニ就テ」(1)「トロンビン」並ニ組織「フイブリヂン」ノ二種ノ血液凝固ニ顯微鏡的ニ差異アルヤ否ヤ、(2)組織「フイブリヂン」ノ血液凝固ニ對スル實驗並ニ市場ニアル血液凝固素ノ能力ノ比較の二篇なり。其他にも發表せる論著少からざるものあり。以て學究方面の一班を窺はる。

△顧みて博士の學歷より其の今日ある閱歷を語らしめば、博士は鹿兒島縣立一中を經て、大正五年東京慈惠醫專を卒へ、直に高輪病院勤務、同年十一月一年志願兵として近衞步兵第一聯隊に入隊、同七年五月除隊、後任豫備陸軍三等軍醫、除隊後東京慈惠會醫院外科助手勤務、同八年六月渡米、同九年シカゴ市アメリカン病院に次で、ミシガン洲バツトル、クリーキ、シサンタリアムにて研究、同十二年シカゴ大學藥物學教室テータム教授の下に血糖に就て研究、續いてオハヨー洲シンナテイ大學に入りミルス博士の下に血液凝固に就て研究、後に同大學醫化學教室に於てマシユウー教授、田代教授及びフオールジアー博士の指導を受け醫化學殊に物理醫化學研究、同十四年同大學のフエローに任ぜられ、同教室に於てグラジユート、ステウデントとしてマシユー、田代兩教授の下に血液中に於ける「セフアリン」の研究をなす、同十五年同大學にてM.Sc.の學位を得、同時に同大學院シグマ會員に選擧され、尙北米化學會員たり、同年十一月歸朝、昭和二年三月學位受領、同年四月東京慈惠會醫大附屬醫院醫員内科擔任を命ぜられ、辭職後頭書の場所に開業一般の診療に從事し居れり。鹿兒島縣川邊郡西南方村久志中村源次郎の五男にして、明治廿五年生る。其の篤學は、博士の前半生史に一段の精彩を放ちて見ゆ。今は年壯の意氣と共に手腕漸く圓熟して益々冴え、その熱心にして眞劍なると、親切にして誠實なるとは、篤き聲望を博し、人氣を吸收する所以と見るべきなり。讀書家にして文才あり、音樂を能くす、角力、水泳其他一般野外運動を好む。自宅は東京市澁谷區宇田川町三に在り。

◇

糸川欽也

△「人生は戰なり」をモツトとして、常に努力主義を以て終始奮鬪し、克く今日の成功を贏ち得たるは糸川欽也博士也。博士は斯界既に定評あるが如く、呼吸器科の大家として其名聲を謳はれ、打診の好評と共に近來の繁榮大に見るべきものあり。博士の經營する糸川病院は、もと青山（赤坂區青山南町四ノ三）に在りしも、開院數年ならざる内に年々歲々繁昌し、その結果最近日本橋區中洲町一三に移轉して更に診療の範圍を擴張せり。新病院は元中洲病院の跡（市電濱町中ノ橋にて下車）にて、交通便利、結構宏壯にして内部の設備とゝなひ、特に呼吸器科は博士の最も長ずる所にして獨特の手腕を揮ひ、肺臟外科は斯道の名醫井上啓太郎博士擔任す。今や兩々相俟つて益々人氣を高め、病室は常に滿員にて、院内は日々外來患者を以て殺到するの盛況を呈す。その今日ある博士の過去奮鬪の跡を顧みれば、全く努力主義の賜なるを痛感すると同時に、博士も又立志傳的篤學の士として推奬するも敢て過賞に非ず。

△顧みてその學歷及び閱歷より觀れば、博士は和歌山縣海草郡加茂村の出身、明治廿一年生にして、和歌山縣耐久中學校を經て、大正元年金澤醫專を卒へ、直に京都帝大醫科病理學教室に入り一ヶ年間研究、二年一年志願兵として步兵第三十七聯隊に入營、四年再び京都帝大醫科小兒科教室に入り一ヶ年間研究、六年任陸軍三等軍醫、六年より十一

年迄和歌山市にて醫術開業、十一年北研にて微生物學講習修了、十二年更に慶大醫學部病理細菌學教室に入り、川上教授指導の下に主として結核に就て研究を續行し、昭和二年四月學位を受領す、先是大正十四年日本結核病學會評議員に推選せられ、昭和二年慶大醫學部講師、並に日大醫學科教授に任ぜらる。昭和四年獨立して糸川病院を開設し現在に至る。專門は內科にして殊に結核を得意とす。以て博士に就ての認識を得るの資となすに足らむ。

△學位は慶大より獲得せるが、主論文は、「平透過性膜ヲ用ヒテセル結核菌ニ關スル動物實驗ノ成績」にして四篇より成る、參考論文は、(1)「ヴイタミン」Aノ結核「モルモツト」ニ及ボス作用ニ關スル實驗的研究、(2)猫「イラズ」中毒ニ於ケル病理學的所見ニ就テ、(3)稀有ナル心臟瘤ノ一例の三篇なり、其他にも論著多數あり。以て學究方面の一端を窺はる。一度び其の風貌に接せんか、舉措悠揚として迫らず、學者の通弊たる傲慢の態度なく、慇懃にして應待に如才なく、話上手にて魅力のあるところ頗る痛快にて、自ら敬慕の念を深からしむるものあり。多趣味の人、殊に文雅の嗜しみ深く、その號歌山は醫文士として同好の間に喧稱せらる、其他音樂、乘馬、テニス、圍碁等、敢て人後に落ちず、日常激務の疲れを清遊してまた此の餘裕あるは多幸とす。

◇

日野三郎　△東京市四谷區大番町三六日野胃腸科醫院は、院長日野三郎博士の私立醫院にして、帝都診療界に於ける胃腸病專門を以て大なる存在を認められ、好評嘖々裡に極めて堅實なる發展振りを示しつゝあり。博士は東北帝大(專門部)系の逸才にして、曾て獨逸に留學し、內外に於て既に斯學の蘊奥を究め、學識博く、實驗に富み、今や胃腸病科の大家として仰がる。久しく矢尾板胃腸病院副院長として院長矢尾板誠策博士を補佐し、日の蔭に從うが如く共に俱に唇齒輔車の關係を保ちて多年盡瘁活躍せる事は、既に世人周知の如し。

△米澤市の人にして、明治二十六年生る。米澤中學を經て、大正四年東北帝大醫學專門部卒業、直ちに日本橋區北村胃腸病院（現矢尾板胃腸病院の前身）に勤務、同六年七月傳研附屬醫院に轉勤、同七年八月より十一年六月まで名古屋金城病院內科部長に次で、愛媛縣新居濱町住友病院內科に勤務す、同年七月渡歐、主として獨逸ハイデルベルグ大學にて醫化學及び細菌學研究、次で消化器病學の諸大家を歷訪して十三年正月歸朝、直ちに矢尾板胃腸病院副院長として就任せり、其間傳研化學室研究生となり醫化學研究、昭和二年三月研究生退學、同年四月東京帝大にて學位を得、其後矢尾板病院を辭して獨立開業せり。專攻は內科にして特に胃腸科を得意とす。斯間には傳研の二木教授、林教授河本教授、八田教授等の指導を受けて細菌學、醫化學を研究し、又獨逸にてはコッセル教授兄弟に師事して醫化學、細菌學を造詣する所あり。主論文は『「アルギナーゼ」ニ關スル知見補遺』にして、外參考論文としては『「フエノールフタリン」ニ依ル潛出血證明法ノ臨床的價値』(矢尾板誠策共著)あり二篇より成る。他に論著尠からず。

△從來テニス、旅行、ザル碁等を趣味とせるが、最近趣味と健康上から專らゴルフを樂しみつゝあり。博士將來の希望としては『將來物質的に又時間的に餘りあらば中學校又は女學校の生理衛生の先生を無俸給で勤め最も活用し得る生理衛生を教へ次代日本人の體質體力向上に資すべく努力して見たいと思ふ』云々と。之れが實現を待望して止まず。又現代の學界及び醫界に對する感想を述べて曰く『政府は眞の學者を優遇し專心其の研究に努力し得る樣にすべきであり、醫師は其の多數國家に最も必要である中流智識階級のものである故思想國難の今日自ら人格を重んじ他を同化すべく心掛くるべきであらう』云々と、學位に伴ひ人格尊重問題の高調せる今日自他共に自重すべきを要す。溫厚篤實の士にして崇高なる人格を具へ、人に接するに敢て城壁を設けず、應接慇懃にして人を納得せしむるの魅力と德望とを有す。醫務たると學業たるとを問はず、總て何事に對しても極めて熱心家にして不遂成ば止まざるの概あるも、但だ惜むらくば近來往々にして體力の不足を感ずることあるやに聽く。幸に健康の增進に自重加餐を祈るをや切なり。

閒說、ゴルフを趣味し、同好の藤卷要之助博士とはゴルフ友達なりと。

◇

中澤裕康　△內科、小兒科專門（特に呼吸器科、心臟、腎臟、新陳代謝病科）標識の下に正々堂々と、大東京市の中央治療界に進出して、自己の手腕と大衆の信賴とに相俟つて活躍しつゝあるは中澤裕康醫博也。博士經營の中澤醫院は牛込區細工町に在るは世人の既に周知する處、今や牢固たる地盤を有し一流に在り。

△岐阜縣本巢郡根尾村字樽見の出身、中澤廣太郎の長男にして、明治三十一年生る。大垣中學を經て大正八年金澤醫專卒業、直ちに金澤市岡本病院に勤め、翌九年四月東京帝大附屬醫院及び泉橋病院に轉勤、十年五月より十五年二月までは慶大醫學部に勤務の傍ら研究に從事し、同年一月慶大より學位を得、同年五月より杏雲堂醫院に勤め、昭和二年九月日本橋區川瀨石町に開業、同年十月杏雲堂醫院を辭して專ら自院の診療に從事し後ち現住所に移轉今日に至る內科及び小兒科を專攻、特に呼吸器科、心臟、腎臟、新陳代謝病科を得意とす。

△學位論文は「モルヒネ習慣ノ原因」が主論文にして、要するに從來「モルヒネ」習慣の原因としては『臟器組織ノ「モルヒネ」ニ對スル分解力ノ增進スルコト及ビ感受性ノ減退スルコト』とを擧げたり、著者は本實驗により「モルヒネ」習慣により臟器組織の「モルヒネ」に對する感受性の減退せることを實驗的に證明し得たるのみならず『モルヒネ」習慣の一原因として更に『血淸（血液）ノモルヒネニ對スル吸着力ノ增進スルコト』も亦與ることを知り得たるなり。外に參考論文、(1)「モルヒネ」ノ作用機轉ニ關スル研究、(2)「ピロカルビン」ニ對スル血淸ノ減毒作用機轉ニ關スル研究、(3)「アルカロイド」ノ木炭ニヨル吸着ニ關スル物理化學的研究、(4)「ストリキニーネ」ニ對スル諸臟器組織ノ減毒作用及ソノ作用機轉、(5)「コカイン」ニ對スル諸臟器組織ノ減毒作用及ソノ作用機轉、(6)「カフェイン」ノ作用機轉ニ關スル研究、(7)「バリウム、イオン」ト動物諸臟器組織トノ親和力ニ關スル研究等あり。

△博士の希望として述べられたる談片を概括すれば、

(1)醫藥報酬料の規定を撤廢し醫師の自由裁量に任ずる事――官公立病院の治療費値下、官公立施療機關の增設、無產病院の設立等々と、昨今の世間の經濟狀態の窮迫から嘗ては生活安定を謳歌きれた醫界の黃金時代も夢の間に今や恐慌時代が現出して來た。從つて醫者仲間にも醫藥料規定を存置すべきか、又は全然撤廢して醫者の自由裁量に任すべきか、將又規定を存置し非劃一的のものに改善すべきかと云ふ事が刻下の重大問題として朝野に論議せらるゝに至り、又一部醫師會に於ては既に規定を撤廢し醫者の自由裁量とすることに決議せし所もあり、更に進んで患者の自由裁量に任せつゝある醫者さへあるやに漏れ聞く。按ずるに人心の動搖、經濟界の變化、時代の流れに必らずしも順應せるとも思はれざる報酬料の劃一規定をも實際に於ては過半の醫者からは實行して居られず、極言すれば患者を追佛ふ役にしか立たぬ、醫業報酬規定の如きは須らく撤廢して醫者の自由裁量に任すべきか、醫は仁術なりの精神からするも將又行きつまれる醫界の活路を拓かんとする目的よりしても最も妥當なる事と信ず。

(2)官公立の施療機關を廢し施療制度を擴張し輕費診療券（救護券の如き）を多數發行し診療一切を擧げて開業醫に一任する事――現在の官公立施療病院の樣子を見るに收容手續必ずしも簡略ならず、然かも之れに關係ある委員等の情實的弊害少からず眞に施療を必要とする者救はれずして、却つて施療の必要なきものを多大の經費を投じての實狀にして、斯の如き不合理なる診療の行はれて居ないとしても、未だ患者の全部を施療の恩典に浴せしむる事は不可能にして寧ろ官公立施療機關を廢し施療制度の普及を徹底的に圖り多數の輕費診療券を發行し、診療の一切を擧げて醫者へ一任すべきが能率的にも最も效果があると考へる。

(3)醫業類似行爲を嚴に取締り醫業を保護する事云々。醫療界廓淸の爲めの獅子吼として傾聽に値す、暫らく特筆して識者の賢斷に俟つ。

共存共榮に共鳴する慈心家にして、寬恕悠々、善く社會を理解し、亦克く人を容るゝの雅量を有す。蓋し現代的臨

床家としての大物なるを慶ぶ。野球、庭球、乘馬等を趣味とす。

◇

三澤敬義　△物療內科界の新進三澤敬義博士は、東大出身の物理療法並に溫泉學を最も得意とせる內科學者にして、物療科界の元老たる恩師眞鍋教授に就きて物理療法を專攻し、又血淸化學は恩師三田教授の指導を受け、母校より學位を獲得せる後、獨逸に留學するやハイデルベルグ大學サックス教授に就きて血淸學を、伯林ラケール博士に物理療法を專攻せり。今は東京帝大醫學部助教授として斯學に關する新知識を披瀝し、孜々として指導に將た精研に努力精進しつゝある前途は頗る囑目に値す。

△主論文は「類脂肪性豚赤血球溶血原ニ就テ」にして、參考論文は、(1)正常溶血素ノ本態ニ關スル知見補遺、(2)類脂肪性人赤血球抗原ニ關スル研究、(3)ボテロ氏癌腫血淸反應ノ本態ニ就テ、(4)同上第二回報告、(5)嗜眠性腦炎ニ首下リ症狀及ビ睡眠中ノ節序的筋肉痙攣ヲ遺セル一例なり。他の論著中、(1)溫泉ノ飲泉療法ニ就テ、(2)非チフス性疾患ノヴイダール氏反應ニ就テ、(3)發作性血色素尿症ノ血淸學的研究、(4)輸血に關スル研究(血液型決定ニ對スル血淸學的觀察)(5)ヴイダール氏凝集反應ノ分析的研究、(6)下賀茂溫泉ノ飲泉療法ニ就テ、(7)補體ノ所訓第四成分ニ關スル研究(獨文)(以下獨逸免疫學雜誌發表)(8)寒冷凝集素ニ關スル知見補遺(獨文)(9)フオルスマン氏抗原ノ吸着トソノ免疫能力(獨文)(10)リポイド抗原ノ無機性吸着劑ニヨル分離ニ關スル研究(獨文)、(11)補體結合反應ニ於ケル補體成分ノ作用機轉ニ關スル知見(獨文)、(12)各種動物血淸ノ耐熱性補體成分ノ含量(獨文)、等は博士の最も得意とせるものと見て差支なかるべし。

△福島縣郡山市中町の人、明治廿七年生れにして、福島縣立安積中學校、二高を經て、大正十年東京帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部副手囑託、同附屬醫院物理的療法研究所勤務、眞鍋教授指導の下に物理的療法專攻、同十二年十二月法醫學教室に轉じ三田教授指導の下に血淸化學專攻、同年七月依願東大副手解囑と同時に歸鄉郡山市太田病院內科勤務、昭和二年四月學位受領、同三年五月太田病院を辭し東大醫學部物療內科教室に勤務、同六年七月歐洲留學、同八年十月歸朝、同年十二月東京帝大醫學部講師囑託次で助教授に任ぜられ今日に至る。今は其の專門とせる內科、特に物理的療法に趣味を集中して精研に餘念なし。人と爲り穩健にして正直、功名利慾に恬澹たり、謙抑己れを虛うして人に厚うす。東京市小石川區原町一三ろノ一に住む。

◇

戸田亨　△神戸市葺合區生田町三丁目日本郵船病院長として戸田亨博士あり、其の嘖々たる名聲は、神戸診療界に聞くや既に久矣。博士は岡山醫專出身の內科學者にして、特に熱帶病及び船員病界のオーソリチーを以て著聞し、嘗て英國に留學するや、倫敦熱帶病船員病學校に、次で倫敦リシター研究所にて研鑽大に得る所あり、歸朝後京都帝大より學位を獲得せる篤學の名醫博なり。主論文は「床蝨ノ研究及び驅除法」にして、參考論文は、(1)商船內棲息ノ蜚蠊ト「コレラ」菌ノ關係、(2)血小板ト赤血球凝集屬トノ關係、(3)「メリオイドシス」ノ研究、(4)商船乘組員ニ對スル「マラリヤ」及「デング」熱豫防法、(5)「マラリヤ」最近療法ノ趨勢ニ就テの五篇なり。著書として「船醫」及び「船醫風景」の名著あり。博士の專攻は特に熱帶病及び船員病に關する研究にして、研鑽多年、學理と共に實地の經驗に懸命の努力精進を續け、今や獨特の手腕、學識を有して斯界に貢獻する所多し。

△廣島縣芦品郡有麝村の人、明治十七年生る。同四十年岡山醫專卒業後、同四十三年日本郵船株式會社入社今日に至れるが、斯間大正六年北里研究所入所、同十年四月英國留學、主として倫敦熱帶病船員病學校及び倫敦リスター研究所にて研究の後、獨、佛、米國に於ける熱帶病研究施設を見學し同十二年歸朝、同十三年より十五年まで大阪衞生試驗所へ入所研究、同十五年神戸郵船診療所長となり現職に任ず。昭和二年五月學位を受領せり。學生生活を離れて日

本郵船に入社以來、二十數年一日の如く至誠一貫、德操の堅持を守りて今日に至れるは、眞に忠勤の士に非ればこゝに至るを得ず。今や年齒知命に入る二歲、其の篤き今日の信望を負ひ重要せらるゝも亦偶然なるざるを思ふ。人と爲り敦厚篤實、一度び其の磬咳に接せんか、舉措悠揚として迫らず、應接慇懃、胸襟を披いて語る、其の熱情あり、淡々として己れを虛うする態度の奧床しさは頗る快感を與ふ。多趣味の人にして俳句を能くし、一外を其の號とす、運動殊にゴルフ、撞球、ブリツジを好み、又圍碁、將棋のよき相手たり。兵庫縣武庫郡住吉村山田に住む。

◇

黑川惠寛　京都市左京區吉田上大路町一に黑川漢方治療研究所長として黑川惠寛博士あり。多年の宿望たる皇漢醫道復興の爲め東洋醫學治療の旗幟新らしく堂々の陣を張れり。蓋しその「これを鮮明にしこれを學ばんとするは、竊かに醫道の眞風を慕ふからである。錄して志士に囑する所以のものは、唯、大道を惜むがためである」との博士の抱負にて、絕えて他意あるに非ざる也。博士は東北帝大出身の內科學者(特に肺癆科)にして、母校より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。更に顧みて博士の今日ある略歷を打診するに、滋賀縣師範學校卒業後、小學校教員たること一ケ年間、次で廣島高師(英語科)卒業後、中學校教員たること二年間、更に京都帝大文學部(社會心理學專攻)を卒へて東北帝大醫學部に學び、大正七年同大學卒業後、熊谷內科副手たること一年半にて獨逸に留學し、在外三ケ年、主としてカイゼル、ウイルヘルム實驗醫學研究所にて、主任ワツセルマン教授指導の下に細菌學、血淸學、化學療法一般研究、次でベルリン大學にて內科學實習の後歸朝せり、昭和二年六月學位を授與せらる。蓋し當世博士界中稀に見る所にして、素と小學校教員より發奮志を立て、研學切磋克く其の今日に至れる厚志篤學は、氏が學界の爲め大に氣を吐けるを壯とすべき乎。

△主論文は「諸種金屬粉末ノ溶血並ニ殺菌作用ニ就テ」にして獨逸文の原著なり。參考論文としては、(1)經口的並ニ經皮的免疫付與ニ關スル研究、(2)連鎖球菌ノ變易性ニ關スル研究、(4)生菌保育ニ關スル知見補遺、(4)鰹節、鯨肉、醬油、昆布等ヲ材料トセル細菌培養ニ關スル知見補遺等、何れも原著は獨逸文なり。要之、主論文は從來使用せられざりし金屬粉末によるも、よく吸着、溶血等の作用を惹起せしめ得ること。更に粉末態をなせる金屬を用ひて從來なされし金屬板金屬線によるよりは甚だしく强力、迅速に殺菌作用を將來せしむることに成功し、且昇汞との比較研究によりて極微動作測定の標準を定め終りに材料を再新することによりて該作用を强ひ得ることを立證したるものなり。

△感想に曰く「醫は意なり、愼思して、唯、「治」を誤らないことのみ努める。この「一治」を外にして他に醫道はない。治療に卽しない醫學は、單に、一科の醫學的生物學であらねばならぬ。輓近、治療それ自體を主題とする「治療醫學」が勃興する所以である。吾等は絢爛たる近世醫學進步の裡に坐してゐる。しかも、治療の關する限りに於て、そも幾許の恩惠に浴し得たか。癲は、黴毒は、肺病は、癌腫は。ビシヤーによつてフランスに、ウキルヒヨーによつてドイツに創說せられた固形的な、局部的な、主臟器的な、細胞病理學は、醫學のために將又人類福祉のために偉大なる貢獻をなした、それは事實である。と同時に、只管、この旺盛に眩して、その以前三千年間あらゆる人類の原理であつたいはゆる「體液病理」に基礎する醫學の全體、を弊履の如く棄て去つて顧みない者、その名は痴者。現代の生物化學は、さながらこの體液說を裏書するかのやうに、「生ける物質」は、悉皆、「膠樣質」であつて、液相にあるものだと敎へてゐる。いふまでもなく、皇漢醫學は「體液の醫學」である。科學の武器は分析であつたが、精神科學の大勢は、漸く「偏分析の羈縛から脫し、對象を一の統一」として如實に考察しやうとする。わが醫學はどうであらうか。こゝにも一大轉向を必須としないか。何はさて措き、餘りに病氣の癒らなさ過ぎる事實をどう觀るか最近、博士ツラフは、治療の本質を論じ、直接に現在の醫陷を指摘した後、『凡そ、人間を一の「統一體」と觀るのでなくば一般に、「治療」なる概念は考へ得られない。しかして、こゝに驚くべき事實は東洋の醫學において、旣に數千年以前

から、嚴として、吾等のいはゆる治療の原理、醫道の精神を掴んでゐることである』と嘆稱してゐる。皇漢醫學は、正しく、個體を「全一」と觀た體質醫學であり、また、一の尨大な治療醫學の體系である』云々。

△滋賀縣蒲生郡市原村の人、明治九年生る。學究的學者タイプの好紳士にして、其の今日ある篤學は博士の前半生史に輝きて躍如たるものあるを見る。殊に醫博としての氏が日頃倦むことを知らず、懸命の努力精進を續け、學を錬り腕を磨くに餘念なかりしは言はずもがな、今は一層自己の忍耐と體力に鞭うつて、何とか皇漢醫道の治療に一の定石を創せんと、實に奮勉苦闘を續けつゝあるは甚だ多とすべきなり。一面又た文學者としては社會心理學を專攻して造詣する所深く、學を修め行を正すに、常に精神の修養と德操の堅持とを守りつゝあるは氏が人格陶冶の要素ならん。其の著「獨逸學校改革の精神並に新學校政策研究資料」の如きは、該博なる精研を語るものとしてその一端を窺はる。賦性穩健篤實、敢て學者として衒はず、人に親切にして和氣溫情に富み、淡々として己れを虛うする態度の奥床しさは、人をして敬慕せしむの德を有す。

◇

久野修三　△東京市市ケ谷臺町一〇に久野内科病院あり、隔離室完備し、内科を以て著聞す。院長久野脩三博士の經營にして、開業拮据既に十數年に及び、今や牢固たる地盤を有し、嘖々たる評判を聽く。氏は東京帝大の出身にて、大正五年卒業後青山内科に次で稲田内科に勤め、前後七ケ年間主として内科臨床の實修と共に學術の研究に從事し、大正十一年より現住所にて醫術開業、翌十二年二月東京帝大にて學位を授與せられ今日に至る、又た東京醫學專門學校教授として内科學を講ぜり。學位論文は『「ニコチン」其他ノ菌排泄作用』なり。其の學問的價値は既に學界に認められ定評あれば贅せずもがな、研鑽多年の學識と共に、臨床的獨特の手腕を有す。愛知縣の出身、明治十九年生れにして當年不惑に達す、益々元氣にして今や手腕、聲望共に一段の貫祿を加へ、成功の位地にあり。

◇

井上猛夫　△東京市麻布區本村町四三にて、開業拮据既に十數年に及び、今や内科の大家と仰がれ、牢固として拔くべからざる地盤を有し、悠々たる心境を持して、誠心誠意仁術の爲め勵精努力しつゝあるは井上猛夫博士ならんか。學系は東大の出身にて、青山内科に次で、稲田内科にて巢立ちたる内科學者として知られ、嘗ては米國ロックフエラー財團フエローとして米國に遊學し、紐育醫科大學、エール大學、其他米國各地の官私立病院に於て内科臨床及び學術の研究を爲し大に得る所あり。學位は母校より獲得せる所謂東大派の名醫博たる一人物として數へらる。

△主論文は「石灰新陳代謝ニ對スル研究」にして、健體及び病體に於ける石灰新陳代謝の研究として五篇より成る。外に參考論文として、(1)「インフルエンザ」肺炎ノ研究、(2)「インスリン」ノ糖尿病治療上ノ價値、(3)糖尿病昏睡ノ療法の三篇あり。其の他論著尠からず。

△學歷は靜岡縣立靜岡中學校より八高を經て、大正五年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに副手として青山内科に入局、青山内科が稲田内科に變更さるゝに及び引續き稲田内科に勤務、次で助手となる、大正十年學位論文提出、同十一年日米醫學交通委員會の推薦に依り米國ロックフエラー財團給費留學生第一回派遣員として同年六月渡米、同十三年六月任期終り渡歐す、英、獨、佛、墺、チエクスラバキヤ、ポーランド、白耳義、和蘭、瑞西、伊太利等歐洲各地の醫界視察の上、同年十二月歸朝す、此間大正十二年十二月學位受領、同十四年一月より再び稲田内科に勤務、同年十一月より現住所にて自宅開業、傍ら築地聖路加國際病院に勤務、同十五年十二月再びロックフエラー財團フエローとして支那、米國、歐洲に内科殊にX光線及び物療方面の研究視察に向ふ、歸朝後再び開業に從事し傍ら引續き聖路加國際病院に勤務す。專攻は内科殊に榮養代謝科、レントゲン科、物理療法科を最も得意とす。靜岡縣の人、明治二十四年生れにして、今年齒漸く不惑に入る五歲、壯齡と共に學識、手腕いよ〳〵圓熟の域に達して一段の貫祿を加ふ。人

格高潔、功名榮達に恬淡として顧みず、誠心誠實以て仁術の爲め努力精進する人にして、溫厚篤實なる紳士としての品格を具備す。

◇

伊東常太郎　△東京池袋東口東に池袋病院あり、內科、外科、產婦人科を專門とす。院長伊東常太郎博士經營の私立病院にして、博士は其の得意とする內科を擔任し、外科及び產婦人科は各科專門醫之れに當れり。氏は山形縣の出身、明治二十年生れにして、大正二年東京帝大醫科大學卒業後、東大附屬醫院靑山內科にて研究、同七年九月兵庫縣西宮回生病院內科部長として赴任、同十年九月再び母校血淸學教室に入りて研究に從事し、同十三年十二月學位受領、同十五年十一月池袋病院開設今日に至れり。

△學位主論文は「金屬ノ所謂 Oligodynamische Wirkung ニ關スル研究」なり。其他論著夥多あり。圍碁を趣味とす。開業拮据十年餘に及び、旣にして牢固たる地盤を有し、評判良好なり。

◇

森半兵衞　△東京市本鄕區春木町三ノ二七森內科神經科醫院長森半兵衞博士は、東京帝大の出身にして、內科特に神經科の大家として其の存在を認められ、所謂東大派の名醫博たる一人物也。大正六年十二月卒業後直ちに東京帝大醫科大學副手として、附屬醫院三浦內科に勤務、次で大正十二年三月助手となり、翌十三年九月より島薗內科に轉勤す、同十四年四月同大學助手を辭し東京瀧野川小峯病院內科主任として就任す。其間大正十三年十二月東京帝大にて學位を受領せり、次で辭職後前記の現住所に於て開業今日に至れり。

△學位主論文は「體腔液、血液、乳糜尿並ニ乳糜ニ於ケル脂肪及ビ類脂肪體ノ研究」にして、外に參考論文として、(1)腸窒扶斯ノ血糖療法、(2)腸內容物排泄法ニ就テ、(3)體液內ニ於ケル脂肪體ノ研究、(4)腎炎患者血液ノ類脂肪量及ビ之ト尿中ノ重屈折性類脂肪トノ關係ニ就テ、(5)頭痛ノ療法、(6)脂肪新陳代謝就中肺臟ノ第二機能、(7)結核ノ療法等、其他臨床實驗上の業績報告多數あり。

△出生地は宮城縣名取郡岩沼町にして、明治二十三年森喜內の二男に生る。年壯銳氣、好學の紳士にして、臨床家としての特徵を具備す。平生刀圭多忙に處して餘裕あり、讀書研鑽、時にまた尺八の風流を樂しむ。

◇

佐藤惇一　△東京市日本橋區小傳馬町二ノ二に內科特に呼吸器病、腦神經病、深部レントゲン科を專門とする佐藤內科醫院あり、院長は佐藤惇一博士にして、なほ日本豫防醫學研究所を經營す。氏は東大系の錚々たる內科學者にして、大正五年卒業後、東大稻田內科及び精神病學教室助手勤務、同十年同大學藥物學教室にて中毒に關する研究論文作成、同十二年東京市臨時醫員囑託、同十三年三月東京市靑山及び廣尾病院內科醫長拜命、同十五年東京市より歐米に派遣、都市病院の視察研究を囑託せらる、主として佛國巴里醫科大學及びバストール研究所にて研究、昭和五年四月歸朝、翌六年四月より現住所に醫院開設、同時に日本豫防醫學研究所を同醫院に設立す、傍ら同六年十二月より國際聖路加病院內科部長として勤務す、斯間昭和二年三月東京帝大より學位を受領せり。學位主論文は「滿俺ノ藥理學的及毒理學的作用ニ關スル研究」なり。著書としては「滿俺ノ藥理學的研究」あり。運動を趣味とし乘馬の選手たり。東京の人、明治廿二年生れにして當年四十有七歲也。學究的好箇の臨床家としては旣に定評あり。今は牢固たる地盤を有し拔くべからざる盛況を呈す。篤實溫厚なる紳士にして高潔なり。

◇

小林安宅　△東京市麴町區富士町五ノ二三小林內科醫院長小林安宅博士は、東京帝大系の內科學者にして、大正九年卒業後直ちに入澤內科に奉職し、同十四年一月迄勤務し、それより同學部藥物學教室に轉じ、同十五年十一

月迄研究に從事し、同年十二月より牛込區築土八幡町にて開業す、昭和四年四月以降現住所に移轉開業今日に至る、斯間昭和二年四月東京帝大にて學位を授與せらる。主論文は『モルヒネ』ノ習慣ト其ノ麻痺及興奮ノ兩作用ニ就テ』なり。法政大學囑託醫にして、本郷區元町成器賽醫館にも出張す。趣味としては讀書を好み、スポーツを觀賞す。群馬縣の出身にて、明治廿八年生れ、當年漸く不惑に入る一歳、好學的少壯の紳士也。

◇

渡邊治雄　△別府市驛前電車通に渡邊内科あり、渡邊治雄博士の診療所也。博士は九大系の内科學者にして恩師稲田及び小野寺兩教授に就きて斯學の蘊蓄を究め、母校より學位を獲得せり。

△主論文は、(1)心臓諸部位の自働性ニ關スル實驗的研究、(2)二、三藥品ノ心臓各部ノ自働的搏動ニ及ボス影響、の二篇より成り、參考論文は、(1)「アラビヤゴム」漿の靜脈内活動ニ就テ、(2)結核性特發性氣胸ニ就テの二篇なり。研鑽多年、學理と共に實地の經驗に懸命の努力精進を續け、今や圓熟せる手腕は打診の好評と相俟つて益々得意の時代にあるが如し。

△函館市青柳町の人、明治廿三年生る。函館中學校、二高を經て、大正五年九州帝大醫科大學卒業後、直ちに同大學副手として稲田内科に次で小野寺内科教室に勤務、同十年三月別府市鳥潟保養院副院長に就任、同十三年一月辭任、同年三月九州帝大醫學部生理學教室副手囑託、昭和二年一月佐世保海軍共濟組合病院内科部長に就任、同年六月九州帝大にて學位受領、同三年十二月辭職以來現住地に於て開業今日に至る。臨床に多年の經驗を有し、今は分別盛にて手腕、人格共に壯熟して一段の重望を加ふ。讀書家にして研究以外には精神の修養と、德操の堅持とを心掛け、書見を業餘の樂しみとす、又運動に趣味を有し殊に野球、ゴルフを好む、嗜好としては酒を嗜しむ風ありしも、今日は多くを用ひず。當年漸く不惑に入る六歳、精力旺盛にして猶春秋に富む、幸に健康を祈り、益々活躍奮盡あらん事を。

内藤八郎　△名古屋市東區針屋町二ノ一九にて自宅開業、内科專門醫としての大なる存在を認められ、中京診療界に逸すべからざる内藤八郎博士は、獨逸協會中學より一高を經て、明治四十四年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學副手、病理學教室勤務、次で青山内科教室勤務、大正三年八月弘前市立病院醫長として赴任し、同九年二月福島市共立病院副院長兼内科部長に轉任、同十一年三月依願辭職す、爾來名古屋市にて開業今日に至る、翌十二年十二月東京帝大にて學位授與せらる。開業既に十數年に垂んとし、多年の經驗と共に手腕當に爛熟の域に達し、牢固たる地盤は今や拔くべからずして成功の位地に在り。

△學位論文は「靜脈ノ構造及靜脈硬變症ニ關スル知見補遺」が主論文にして、外に參考論文として、(1)多數ノ球狀結晶體ヲ含有セル腎小體囊胞ニ就テ、(2)胞腺肥大ニ就テ、(3)後發性先天性黴毒ノ一例ニ於ケル靜脈ノ知見補遺、(4)横隔膜緊張ト内臓交感神經、(5)横隔膜神經ヲ撚除セル家兎ノ病理解剖的所見、等五篇あり、其他發表せる論著尠からず。讀書家にして今猶業餘精研に餘念なきが如し。

△靜岡縣濱名郡亡醫師村尾春洋の男にして明治十九年生れ、同郷の醫師内藤誠之の養子となる。氏の實兄弟には醫學士村尾達彌、小澤徹二、村尾圭介醫博、醫學士磯部晋、村尾千之醫博あり、即ち兄弟の三博士たるは稀に見る所にして博士界の誇りとするに足る。村尾圭介博士は東京本郷元町成器賽醫館經營の衝に當り、村尾千之博士は神奈川縣鎌倉町に開業醫たり。

◇

村田昇清　△神戸衞生實驗所取締役技師長として、村田昇清博士の名聲は餘りにも有名である。而かも其の興學のスタートが醫師試驗より身を起して、頂天立地、春風秋雨の間、勤務の傍ら獨學を貫行して終に克く拾數に亘る浩瀚なる大論文を完成して、慶大醫學部へ提出の結果、見事教授會を通過し學位を獲得せる篤學に至りては、學界

の美譚として今猶人口に膾炙する所なり。蓋し斯間主として指導と薫陶と激勵とを受けたる故男爵北里柴三郎博士及び京都帝大教授清野謙次博士の恩惠の大なりしことは見逃すべからず。又嘗ては歐米を視察して研鑽大に得る所あり猶米國に於ける第十五回萬國民勢及衞生會議に出席し、日本を代表して大に氣を吐けることは特筆すべき也。其の專門は傳染病學なるが、特に博士の最も得意とするは傳染病の豫防治療にあり。今や其の該博なる學識と蘊蓄とを傾倒して、斯道の振興啓發の爲め熱誠克く力を盡し、專心同所經營の衝に當り、將來益々隆盛を見んとするもの博士の力與つて大なりと云ふべし。

△更に顧みて博士の學歷より略歷を概括すれば、高知縣立醫學校在學中、明治二十二年十月醫師試驗合格、高知縣立病院醫員、北里研究所助手、清國牛莊防疫團長、兵庫縣、關東都督府等の技師、衞生課長、醫院長、醫官歷任、歐米漫遊、米國第十五回萬國民勢及衞生會議に出席、大正十二年退官、高知市楠病院長、大正十五年二月慶大にて學位授與受領、目下頭書の現職にあり。

△主論文は『「コレラワクチン」注射ニ因ル全身諸臟器ノ變化』にして二篇より成り、參考論文は、(1)石灰乳ノ咯痰中結核菌ニ對スル殺菌試驗、(2)橫濱市ノ虎列刺ニ就テ、(3)實布垤里亞血淸治療成績ニ就テ、(4)癩ト結核トノ混合感染例、(5)癩患者ノ措置ヲ論ズ、(6)癩ト結核トノ混合感染例(其二)、(7)ペスト菌ノ低溫ニ對スル抵抗力試驗（日本文及獨文）(8)吐瀉病者ヨリ獲タル病原性「ヴイブリオ」(共著)、(9)兵庫縣ニ於ケル虎列刺豫防接種成績、(10)吐瀉病者ヨリ獲タル七種ノ「ヴイブリオ」(共著)、(11) Ueber die Shützimpfung gegen Cholera 1904 (12) Die epidemiologischen Beobachtungen der Pestseuche in der Sudmandschurei. 1912, (13)朝鮮ニ於ケル虎列刺ノ疫學的研究等なり。著書として「簡明衞生學」(明治三十五年)あり。

△博士の出身地は高知縣香美郡吉川村古川にして、明治五年村田歸本の長男に生る。其の今日の成功と聲望とを贏ち得たる輝かしき閲歷は、氏の前半生史これを語りて餘蘊なく、尠くとも立志傳的篤學の士として當世博士界中の美談とするに足る。顧ふに氏がその今日あるまでに、夙に學を練り腕を磨くに懸命の努力精進を續け、精研に餘念なかりしは言はずもがな、德操を堅持して其間に精神の修養を怠らざりし事實は見逃すべからず。今猶常に人格の向上尊重すべきを高調し、自ら品性の陶冶に務めつゝあるは甚だ多とすべき也。人格高潔にして、質朴敦厚、穩健自ら持し、人に篤く、後進を待つに寬厚にして親切を以てす。趣味は劍道、和歌、圍碁、農作等。飯尾純三博士は女婿に當る。私邸は神戸市須磨區寺畑町三に在り。

◇

菅原　正　△財團法人北海道社會事業協會附屬札幌病院長として、當地診療界に努力しつゝある菅原正博士は、東北大（專門部出身）系の內科學者にして、加藤豐次郎博士に就きて內科學を、佐武安太郎博士に就きて生理學を專攻し、東北帝大より學位を獲得せる篤學の士也。本院は中層階級以下の病苦に惱むものに、輕費診療を行ふ防貧を目的とする、醫療社會事業の機關として昭和七年三月創設開院し、翌八年十月增築成り現在に至れるが、御下賜金拜受の光榮に浴し、職員、從事員、協心戮力、能く聖旨を奉體し、設立の趣旨目的を銘記し、創業の勞苦を忘れず其の職責を竭し、常に社會大衆の利便と福祉を圖るを念として以て、本院の機能を發顯し社會ノ輿望に副はん事を期せり。主宰者としての博士の勞や多とすべき也。

△主論文は『血液內含有「アドレナリン」定量法としての猫奇異散瞳反應並に家兎小腸片法の比較』にして、參考論文は、(1)脚氣ニ於ケル血液ノ解離曲線ノ變化並ニ其ノ水素「イオン」濃度ニ就テ、(2)「ニコチン」ガ副腎「アドレナリン」分泌ニ及ボス影響、(3)知覺神經刺戟ガ副腎「アドレナリン」分泌ニ及ボス影響、(4)無繩縛、無痲醉、無開腹及ビ無痛ニテ犬副腎靜脈血ヲ採取スル一新法、(5)繩縛並ニ知覺神經刺戟ガ犬副腎「アドレナリン」分泌ニ及ボス影響、(6)

『アドレナリン」靜脈內注射ガ副腎「アドレナリン」分泌ニ及ボス影響、(7)鹽酸「グアニヂン」ガ犬副腎「アドレナリン」排出量及ビ血糖量ニ及ボス影響ニ就テ、(8)ペータ、テトラヒドロ、ナフチールアミン」ガ猫副腎「アドレナリン」分泌ニ及ボス影響、(9)猫、家兎、犬、豚及ビ牛副腎抽出液內「アドレナリン」定量法トシテノ比色法ト二三生理的法トノ比較、(10)犬及猫副腎ヨリ分泌セラレタル「アドレナリン」鹽酸「アドレナリン」溶液及ビ牛副腎髓質抽出液內「アドレナリン」ガ諸種中間體內ニ於ケル分解性ニ就テの十篇なり。其他論著夥多あり。

△宮城縣西原郡文字村の人、明治廿七年生る。宮城縣立仙臺第一中學校を經て、大正五年東北帝大醫學專門部を卒へ引續き同大學附屬醫院加藤內科勤務、同八年六月より鄉里宮城縣岩ケ崎町に醫院經營、同十二年五月東北帝大醫學部副手囑託、生理學教室勤務、同十五年十一月內科學教室轉勤、昭和二年四月青森縣八戸町八戸病院長兼內科醫長に就任、同年六月東北帝大にて學位受領、同四年三月札幌市創成病院長に轉任、同六年十一月財團法人北海道社會事業協會囑託、同七年三月同協會附屬札幌病院新設と共にその院長に任命引續き現職に在り。

△學者タイプの風貌は凛々として威嚴を有し、悲眼の裡に愛嬌を包む。勵精恪勤の士にして、臨床に熱心克く誠意誠實を以て當り、飽くまで親切を盡す點は、博士の特徵として傳へられ評判極めて良好也。人と爲り穩健篤實、眞面目にして溫情に富む、性來謙遜家にして自已の才學を衒はず、能く部下を指導し後進を愛撫す。家庭にては昭和八年三月愛妻を失ひたる後は、五男と共に團欒の裡に未來の希望に滿つ。札幌市南六條西十五丁目一三四九に住む。

◇

太田賢一郎　△東京市麴町區五番町四に內科專門醫を以て擡頭し、名聲嘖々たる太田賢一郎博士あり。氏は千葉醫專の出身にして、大正五年卒業後直ちに北研に入所、同十年六月慶大醫學部助手兼任となり、同十三年四月同學部講師を囑託せられ同年十二月慶大にて學位を授與せらる。

△主論文は『「やつで」ノ二新配糖體ニ就テ』にして、三篇より成る。參考論文は、(1)人體に於ける實驗的「アヴイタミノーゼ」に就て外八篇あり。以下業績の內參照せよ、(1)「クコリン」ニ就テ、(2)漢防已の「アルカロイド」ニ就テ、(3)「やつで」ノ二新配糖體ニ就テ、其一、化學的研究、(4)同上、其二、生理學的性狀（附）「やつで」の葉の藥効的研究、(5)漢防已のアルカロイドニ關スル研究、其一、クユリンニ就テ、(6)同上、其二、「デイヴエルヂン」ニ就テ、(7)「サポニン」質ノ溶血機轉ニ關スル知見、(8)人體ニ於ケル實驗的「ヴイタミン」B缺乏症、(9)人體ニ於ケル實驗的「ヴイタミン」B缺乏症患者ノ尿分析並ニ物質代謝研究、其一、(10)同上（其二）、(11)同上（其三）、(12)同上（其四）、(13)一二有機鹽基の「メチール」化ニヨル生物學的作用ノ變化ニ就テ、(14)所謂加熱非働性機轉ニヨリ血清ノ物理化學的變化ニ就テ、(15)結核新藥「サノクリヂン」ニ就テ、(16)輓近ノ脚氣療法ノ趨勢。其他略す。

△出生地は長野縣諏訪郡上諏訪町にして、明治三十一年太田太郎の長男に生る。音樂、乘馬、園藝等を業餘の趣味とす。研究室を勇退して以來、開業拮据、旣にして牢固たる地盤を有し、今や內科の大家をして人皆之を推す。

◇

岩田三史　△埼玉縣屈指の名門にして、川口市初代の市長たりし岩田三史博士は、出でゝは貴族院議員として議政壇上に雄を振ひ、又教授としては帝國女子醫學藥專の教壇に起つ、東奔西走、殆ど席を溫むるに遑なき活動振りは敬服に値す。博士は九大出身の內科學者にして又細菌學者たり、內科學は母校の恩師、內科界現代の權威たる小野寺直助教授に就きて其の蘊奧を究め、細菌學は斯學界の泰斗東大教授竹內松次郎博士の指導を受け研鑽大に得る所あり。

△主論文は「各種利尿劑ノ細菌ニ對スル利用」にして、參考論文は「免疫體ニ及ボス瀉血ノ影響ニ就テ」なるが、學位は東京帝大より獲得せり。

△埼玉縣川口市岩田武三郎の長男、明治卅三年生る。四高を經て、大正八年九州帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部小野寺内科に副手として勤務、同十年五月東京市順天堂病院内科助手勤務、同時に同附屬研究生として臨床の傍ら細菌學を研究す、同十二年九月大震災にて順天堂病院解散となるや東大黴菌學教室に入り竹内教授の指導を受け黴菌學專攻、昭和二年七月學位受領、爾來額田晋博士の經營する小川町病院副院長に就任同時に帝國女子醫學藥專教授に任ぜらる、昭和六年五月貴族院議員に擧げらるゝや前記副院長を辭し專ら政治に沒頭す、昭和八年四月川口市々制施行するや、衆望を背負ふて初代市長に選ばれたり。

△圓滿主義の人にして、和氣溫情に富み、謙抑偏に恩師の恩顧を說き、敢て學者として自已の才學を誇らず、淡々として只管已れを虛うする態度の紳士的にしてその奧床しさは、自ら人をして其の高潔なる人格を敬慕せしむ。運動に趣味を有し、柔道三段なり。自邸は川口市本町一町目に在り。

◇

松本憲夫　△大阪市東區粉川町弘濟病院長として松本憲夫博士の嘖々たる名聲は既に世人周知の如し。學系は京都帝大にして、錚々たる内科の大家として、現代浪速診療界に重きを爲す一人物也。

△學位論文は「細菌酵素ノ作用ニ對スル培養液ノ化學的要約ニ就テ」が主論文なるが、普通大腸菌の糖分解及び澱粉分解が如何なる要約の下に發現するかを種々なる培養液を使用して詳細論究せるものにして全編四報告より成れり。外に參考論文として、(1)細菌代謝作用ニ關スル研究特ニ養素攝取ノ偏向說ニ對スル疑義、(2)胞水及ビ腹水ノ「アミラーゼ」ニ關スル臨床的及ビ究驗的研究、(3)滲出性心囊水中ノ「アミラーゼ」ニ就テ等三編あり。卽ち本論文を母校たる京都帝大醫學部へ提出の結果、學位を獲得せり。

△學歷より云へば、三高を經て、大正四年京都帝大醫科大學を卒へ、直ちに副手として同大學外科教室勤務、翌六より鄕里宮津町に於て私立宮津病院を設立開業す、同九年三月再び母校副手として内科教室勤務、同年十一月大學院入學、同十三年二月學位受領、同時に副手を辭し高知市楠病院内科部長に就任す、同年十月大學院退學、昭和二年八月楠病院を辭し現職に就任せり。其の今日ある閱歷は既に氏の前半生史これを語りて餘蘊なし。出生地は京都府宮津町にして、明治二十三年生れの年壯也。賦性敦厚にして謙抑、善く母校の學風に遵據し、讀書靜修、力めて自ら品性の修養に懈らざる學究的紳士と云ふべきか。大阪市南區日本橋筋五丁目五六に住む。

◇

馬島廣　△札幌市北四條西五丁目に内科小兒科を以て著聞する馬島醫院あり、院長はドクトル、メヂチーネ馬島廣博士にして、開業既に古く、多年の聲望と相俟つて牢固たる地盤を有し、嘖々たる評判と共に門前常に賑ひ卓然として一流に在り。博士は慈惠醫專出身の篤學者にして、嘗て獨逸に留學するや、ウユルツブルク大學にてドクトルを得、歸朝後北海道帝大教授今裕博士に就き病理學を專攻し、北海道帝大より學位を獲得せる近來の名醫博也。博士の該博なる學識は言はずもがな、臨床に多年の經驗を積み、今や獨特の手腕を發揮して餘す所なく、其の今日の盛況を見る所以なるをおもへば、博士の得意や思ふべき也。

△學位主論文たる「腦下垂體前葉腺細胞ノ核分剖ニ就テ」は、腺細胞機能の本態に關して根本的解決を與へたるところ多く、學術上甚だ有益なる業績として、既に學界に其の學問的價値を認めらる。猶參考論文としては、(1)甲狀腺並に副甲狀腺ノ再生ニ就テ、(2)液體微細小滴ノ定量的吸收ニ就テの二篇あり。

△顧みて博士の今日ある學歷及び閱歷を考査するに、札幌師範附屬小學校より東京明治義會中學校を經て、明治四十一年東京慈惠會醫專を卒へ、同四十三年二月渡歐、獨逸ウユルツブルグ大學醫學部に學び、大正三年三月ドクトルの學位を得、同年八月戰亂の爲め和蘭に轉じ、同四年一月英國を經て歸朝、同年四月より小樽市に於て亡父の設立せる

愛生病院に義兄木村麟太郎學士と共に內科小兒科の診療に從事す、同五年二月より十三年六月まで札幌市に於て開業同十三年七月より北海道帝大醫學部病理學教室にて今教授の下に病理學研究中、昭和二年七月學位を受領す、爾來再び診療に從事し今日に至る。

△博士は明治十六年札幌市にて生る、亡醫師馬島讓の二男也。學究的溫厚の紳士にして、篤學者也。當年知命に入る三歲、精力旺盛、貴公子然たる風姿は氣品を備へ、溫容の裡に威嚴を藏す。顧ふに博士が其の今日あるまでに、日頃倦むことを知らず懸命の努力精進を續け、學を練り腕を磨くに餘念なかりしは言はずもがな、日夜精神の修養と德操の堅持とを心掛け、正邪相誡め自彊息まざりし事實は見逃すべからず。既にして學成り名を成すの今日、少しも已れの才學と成功とを誇らず、謙抑偏に先輩の助力を說き、淡々として只管已れを虛うして人を愛し、但だ熱心に己れの職務に誠實と親切とを盡し、以て「醫は仁術也」の本分を盡さんとする所に、博士の誠意と理想とを見出さる。

◇

井村　英次郎　△東京鐵道病院副院長兼第一內科醫長としての井村英次郎博士の名聲は、帝都治療界に聞くや既に久矣。學系は言はずもがな東大系にて、三浦內科に巢立ちたる內科學者として錚々たるものにして、殊に腦脊髓神經科の專門大家としての存在を認めらる。嘗て歐米に遊學するや、瑞西ベルン大學にてレオン、アツシヤ教授に就て生理學を、次で獨逸伯林大學にてレオノール、ミハエリス教授に就て物理化學を研究せり。歸朝後學位論文を完成し、母校たる東京帝大醫學部へ提出の結果、學位を獲得せり。

△學位論文は「反射蛙ノ筋肉ニ及ボス脊髓後根興奮ノ共同作用ニ就テ並ニ中樞內制止論ノ補遺」にして、原著は獨逸文なり。副論文なしと雖も、其他の論著中重要なるものを擧ぐれば、(1)鐵道院職員療養令第一條ニ所謂「職務執行上傷痍」ノ定義ニ就テ、(2)外傷性癡呆ニ就テ、(3)外傷性神經症ノ豫後ニ就テ、(4)外傷性神經症ノ療法等其他夥多あり。

△學歷より云へば、茨城縣立尋中より一高を經て、明治三十八年東京帝大醫科大學を卒へ、同三十九年一月より一ケ年間、母校の醫化學教室にて隈川教授に就て醫化學を研究し、次で同四十四年四月迄、三浦教授に就て內科學を專攻す、同年同月鐵道院常盤病院內科主任囑託、大正三年六月同院の東京鐵道病院と改稱せらるゝと共に、同病院內科醫長となる、同六年十一月同院副院長を命ぜらる、同九年一月鐵道院より歐米留學を命ぜらる、主として瑞、獨にて研究の外、歐米各國に於ける鐵道醫事衞生の視察を遂げ、大正十一年九月歸朝復職し今日に至る其間大正十三年三月學位を受領せり。其の專門に亘る學識と云はず、經驗と云はず、今や老大家としての域を脫せず、超然として一段の貫祿を有す。趣味としては花卉、園藝、寫眞などを好み、又た克く讀書精修す。出身地は茨城縣行方郡延方村にして、明治十一年田村玄碩の二男に生る。賦性敦厚にして篤實、學究的紳士としての人格者也。東京市澁谷區大山町一八に住む。

◇

渡邊　卓　郎　△鳥取縣米子博愛病院長として其の名聲を博し、多年當地診療界の爲に活躍しつゝある渡邊卓郎博士は、京都帝大醫科大學の出身にして、大正九年卒業後直ちに同大學醫學部附屬醫院辻內科に副手として勤務、同十年四月同學部微生物學教室へ轉勤、同十二年四月同大學院入學、教授淸野謙次及び辻寬治兩博士の許に微生物學、免疫學及び內科學を研究し同十四年二月に至る、其間同十四年一月京都帝大にて學位を受領せり。次で同年三月島根益田町益田病院內科部長として赴任し、其後現職に就任せり。

△主論文は「エムブリヲ血液ト成熟動物血液トノ血淸學的比較研究」にして四篇より成る。參考論文は、(1)平流電氣ニヨル細菌ノ電氣的移動ニ就テ、(2)平流電氣ノ免疫血淸及ビ細菌體ニ及ボス影響、(3)各種動物ノ血中かたらーゼニ就テ、(4)抗體產生ト血中かたらーゼノ消長並ニ其意義ニ就テ、(5)病原菌體ノ外界ニ於ケル抗滲透性發育能力ニ就テ、(6)

實驗的家兎牛痘症ノ組織學的檢索、(7)大正十年度京都府乙訓郡向日町字物集女及ビ同郡大枝村字西長野新田ニ於ケル腳氣病統計報告、(8)初生兒靨皮症(SKlerema neonatorum)ノ一例等。其他論著夥多あり。出生地は鳥取縣米子町にして、明治二十四年生る。寫眞及び遠足を趣味す。所謂京大派の名醫博たる一人物たるべし。

◇

柳澤贊治　△報知診療所內科部長として勤務の傍ら赤坂區青山北町一ノ八にて自宅開業、柳澤醫院長として活躍しつゝある柳澤贊治博士は、新潟醫專出身の內科學者として錚々たるもの也。大正六年新潟醫專卒業後、同年六月北里研究所に入所、副助手として同鄕の先輩草間滋博士に師事して病理學を、又た內科學は大谷博士に就きて專攻し同九年十月正助手を命ぜらる、同十四年三月慶大より學位を受領し、爾來慶大醫學部內科學教室に勤務す、次で昭和二年七月より現住地に開業の傍ら報知診療所に勤務し內科を擔任す。

△主論文は、(1)腸濾胞性潰瘍特ニ第一次的感染ニ關スル實驗的研究、(2)腸濾胞性潰瘍局所ニ對スル「ワクチン」ノ作用ニ就テ、以上二篇より成り何れも英文の原著なり。外に參考論文として、(1)「マウス」及ビ「モルモット」間ニ流行スル鼠「チフス」菌ノ一菌型ニ就テ、(2)「インフルエンザ」菌ト球菌屬トノ共棲ニ關スル實驗的研究、(3)同上第二報告、(4)免疫血淸及ビ免疫動物通過ニ因スル「チフス」菌性狀變化、(5)大正九年ノ流行性肺炎患者ノ咯痰ヨリ分離セル肺炎菌ニ就テ（共著）(6)「コレラ」感作「ワクチン」及ビ「チフスワクチン」ノ保存期限ニ就テ（共著）等あり、其他論著尠からず。讀書家にして和歌を能くす。出生地は長野縣諏訪郡北山村にして、明治二十五年柳澤又市の長男に生る、當年不惑に入る四歲也。開業拮据、今や相當の地盤を有す。氏が學問の崇高を禮讃して學究生活に餘念なき時代はいざ知らず、悠々の心境を持して只管診療界に精進奮鬪しつゝある今日にては、患者に親切なると同時に誰にも親切を盡す雅量があつて欲しい。春秋猶豐富なるの秋、折角の活躍を祈るや切也。

◇

齋藤周藏　△弘前市私立伊東病院長にして、一面には又弘前市醫師會長及び青森縣醫師會議員として活躍しつゝあるは、齋藤周藏博士也。嘖々たるその名聲を此地方に聞くや旣に久し矣。博士は東大出身の內科學者にして、青山內科に次で、血淸學教室にて三田定則教授指導の下に血淸學を研究せる結果、母校より學位を獲得せる、所謂東大派の名醫博たるに恥ぢざる一人物也。由來血淸學上非常に强大なる親和力を有する沈降原及び沈降素が生體內並に試驗管內に於て同一血淸內に共存するの事實は一種不可思議なる現象なりとせらる。博士の學位論文は卽ち本問題を捉へて論究せるものにして、

△主論文たる「沈降原沈降素ノ共存問題ニ就テ」之なり、參考論文なし。該博なる學識と共に臨床に多年の經驗を有し、其の卓越せる手腕は打診の好評と相俟つて益々遠近の人望を集中し、繁榮歲と共に盛況を極め、今や牢固として拔くべからざる地盤を有す。

△顧みて博士の今日ある學歷及び閱歷を公開すれば、青森縣立弘前中學校、二高を經て、明治四十三年東京帝大醫科大學を卒へ、翌四十四年大學院入學、細菌學及び醫化學專攻、大正二年一月同大學副手囑託、青山內科にて內科專攻同三年七月私立大日本救療院醫長就職、同四年五月より青森市にて開業、同六年五月弘前市私立伊東病院就職、同十三年一月東大醫學部血淸學教室にて研究、同十五年五月歐米視察、昭和二年一月前記伊東病院長就任今日に至る、同年七月學位を受領す。

△青森縣南津輕郡光田村の人、明治十七年生る。其の今日ある博士が、大學卒業後日夜倦むことを知らず、懸命の努力精進を續け學を練り腕を磨くに餘念なかりしは想像に餘りあり、今や年齒と共に學識、手腕、人格愈々圓熟の域を超越して一段の貫祿を加へ、最も重望せらるゝ年輩に在るは祝福すべき也。殊に眞面目なる臨床家として評判よき

は、診療に熱心にして克く誠實と親切とを盡す點にあり。性格よりすれば篤實溫厚、德操堅固、謙遜家にして敢て學者として尊大振るなく、恬淡として己れを虛うし能く人を愛し、理解あり同情に富む。若し强いて其の短所を指摘せしむれば、眞面目なる半面には或は社交に長ぜざる缺點なきか。研究と醫療そのものに對して趣味を集中して亦他事を顧みざるの概あり。當世博士界中逸すべからざる、學究的好個の臨床家として其の人格を尊重し、玆に推奬せる所以也。

◇

田村靜顯　△和歌山市九番町近藤病院長たる田村靜顯博士の存在は、當地治療界に於ける一重鎭たるを意味す。博士は京大派の內科學者として鏘々たるものにして、斯科の大家としての名聲は旣に江湖に著聞す。

△學位は母校たる京都帝大より獲得せるが、主論文は『「ヒノリン」ノ動物體內ニ於ケル運命ニ就テ』にして、「ヒナアルカロイド」の核をなせる「ヒノリン」が各種動物體內にて如何樣に解毒せられ、排泄せらるゝかを研究せるものなり。參考論文としては、(1)白米飼養鷄ノ筋及ビ血液脂肪並ニ「リボイド」含有量ニ就テ、(2)「ポリペプチード」ノ酵素分解經過知見補遺、(3)「ヒストチーム」ニ就テ、(4)「メチールヒノリン」ノ動物體內ニ於ケル運命ニ就テ等の四篇あり。

△學歷及び閱歷の概要を公開すれば、和歌山中學校より三高を經て、大正六年京都帝大醫科大學を卒へ、直ちに同大學附屬醫院島薗內科に勤務、同八年三月任同大學助手、同年十一月同大學院入學、島薗、前田兩敎授の指導を受け、大正十三年六月母校より學位を受領す、同年十一月より現職に就任今日に至れり。その今日あるも亦偶然ならざるを首肯せしむ。出身地は和歌山縣那賀郡東野上村大字動木にして、明治二十四年生れ當年正に四十五歲也。年壯の意氣と共に學識、手腕、いよ〳〵圓熟の佳境に入りて最も重望せらる。高邁なる人格を備へ、穩健にして溫情に富み、情誼に篤く、人に對する親切也。

◇

奧田喜久三　△東京下谷病院內科部長として活躍しつゝある奧田喜久三博士は、九州帝大醫科大學の出身にして大正三年卒業後直ちに副手として第一內科敎室に勤務、福田敎授の指導を受く、同七年八月助手に任ぜらる、同年十一月鳥栖鐵道治療所醫員を囑託せられ、同八年五月附屬醫院看護員養成科講師囑託、同年七月北里研究所に入所副助手を命ぜらる、同九年四月慶大醫學部看護婦養成所講師囑託、同年六月同學部助手、同年十二月講師に任ぜらる、大正十三年二月佛蘭西寄贈病院醫長事務を囑託せらる、翌十四年二月慶大にて學位受領、同年三月慶大醫學部を辭し小樽病院長兼內科醫長として赴任す、同時に鐵道囑託醫たり、其後辭職して現職に就任せり。

△主論文は、「凝集素產生ニ及ボス脾臟ノ影響ニ就テ」にして、參考論文は、(1)早期黃疸出血性「スピロヘータ」病解剖例ニ於ケル同病原體「スピロヘータ」ノ分布狀態、(2)「サルワルサン」及治療血淸注射試驗ヲ經タル海猽臟器內ノ黃疸出血性「スピロヘータ」ノ分布狀態、(3)鼠咬症患者ノ血液中ニ現出スル特種ノ免疫體（病原スピロヘータ」ニ作用スル）ニ就テ、(4)同上附鼠咬症病原體ト鼬咬症及猫咬症病源體トノ關係ニ就テ、(5)黃疸出血性「スピロヘータ」ニ對スル哺乳動物及ビ鳥類ノ感受性並ニ各動物ノ實驗的黃疸出血性「スピロヘータ」病ニ於ケル病原體ノ態度ニ就テ、外十篇あり。明治二十二年東京市麴町區永田町に生る、實父龍居五郎の三男にして奧田家の養嗣子となる。演劇及びスポーツを趣味す。其の專門的學識の該博なるは言はずもがな、經驗豐富にして臨床的手腕は今や圓熟の域に入りて一段の貫祿を加ふ。

◇

佐藤要人　△三菱合資會社醫務局に佐藤要人博士あり。東大派の少壯醫博たる一人物にして錚々たる內科醫

たり。大正二年東京帝大醫科大學卒業後、母校三浦内科教室に勤務、次で傳染病研究所にて研究の後、兵庫縣朝來郡三菱生野鑛山、病院に勤務、大正十一年六月より三菱本社醫局に轉任今日に至る。區醫師會醫政部調査委員たり、昭和二年七月東京帝大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は『「ヒドル」芳香體ノ藥理ニ就テ』なり。讀書を趣味とす。山形縣の出身にて、明治二十九年生れの當年四十歳也。赤坂區青山南町二ノ二三に住む。

◇

橋本欽治　△横須賀市若松町一一七に湘南内科病院あり、院長は橋本欽治博士にして、博士の經營する私立病院也。元深田町に在りし舊病院は昨春(九年二月)祝融の見舞ふ處となり、從來の醫院住宅全燒し、新たに若松町海岸に病院を新築し理想的の設備を以て事業を開始せるもの、即ち現在の病院是れなり。博士獨特の手腕は多年の聲望と相俟つて斷然群を拔き、今や一流に在り。博士は東北大系の内科學者にして、特に急性及び慢性傳染病を最も得意とし、恩師青木薫博士に就きて細菌學を專攻せる結果、學位は母校より獲得せる東北帝大派の名醫博也。

△主論文は『腸「チフス」菌の研究」にして、、(1)腸「チフス」菌ノ免疫學的分類、(2)「ウイダール」反應ノ分解、(3)新ニ得ラレタル腸「チフス」變異菌ニ就テの三篇より成り。外に參考論文として、(1)同名免疫血清中ニ於ケル「チフス」菌ノ個性、(2)大腸菌ノ腸内病源菌ニ對スル拮抗作用、(3)X「プロテウス」菌ノ熱ニ對スル試驗、(4)「プロテウス」菌ノ分類、(5)宮城縣ニ於ケル發疹「チフス」流行ニ就テ、(6)少量ノ糞便中ノ「チフス」菌ノ運命の六篇あり。著者によりて始めて三種の免疫學的に全く獨立せるな菌型なる事を明にせられたり。克く其の今日の成功を贏ち得たるもの、博士の得意や想ふべき也

△明治二十七年横須賀市不入斗町にて生る、父は八郎、母はタヘ子、其の長男也。五高を經て、大正九年東北帝大醫學部を卒へ、直ちに同學細菌學教室に入り助手に被任、同十一年七月同學辭職、直ちに東京小石川病院に就職、翌十二年三月副院長に就任、翌十三年五月同病院を辭し宮城縣防疫醫に任官、同縣細菌室を主宰する傍ら東北帝大醫學部細菌學教室に於て研究、同十五年五月防疫醫辭職、同縣防疫醫務囑託となり、同時に東北帝大副手囑託となる、昭和二年七月何れも辭職再び東京小石川病院副院長に復任す、同年八月學位受領、同三年三月辭職、一旦東京市外世田谷にて二ケ年醫院開業の後、昭和五年四月現住地にて湘南内科病院開設今日に至る。

△資性溫厚篤實、眞面目なる學究的紳士にして、好個の臨床家としての特徴を具備す。假堂は其の號にして、書畫を能くす。又弓術を好み、旅行を樂しむ。研究は最も趣味とする所にして、今猶精研に餘念なきは甚だ多とすべき也。多幸なる家庭は兩親健在にて、妻ミヅホとの間に一男一女あり。

◇

森文香　△長野縣上伊那郡伊那町に森醫院あり、院長は豫備海軍々醫森文香博士にして、内科、外科、耳鼻科を專門とし、新裝完備せる内部の設備と相俟つて、嘖々たる打診の評判は益々遠近の人氣を吸收し、今や當地方診療界に於ける一流の名病院たり。博士は愛知醫專出身の内科學者にして、母校の恩師後愛知醫大教授故酒井繁博士に就きて内科學の蘊奥を究め、愛知醫大より學位を獲得せる篤學の名醫博也。學位論文は諸種刺戟物質が腎臓機能に如何なる影響を及ぼすやに就て實驗を行ひ、且つ同時に其の組織學的研究を試みたるものにして、

△主論文たる「諸種刺戟性物質ノ腎臓機能ニ及ボス影響並ニ其ノ組織學的研究」即ちこれなり、猶參考論文としては(1)溫寒ノ急激ナル變化ガ腎臓機能ニ及ボス影響並ニ其組織學的研究、(2)所謂嚥下性心臓收縮異常疾速症ノ一例ニ就テ(3)不整脈ニ對スル「キニジン」ノ臨床的知見、外四篇あり。他に論著夥多。

△博士の該博なる學識は言はずもがな、多年海軍々醫界に奉仕して技を練り腕を磨き、其の卓越せる手腕は愈々圓熟

の域に達し、今は腕の冴え盛にして活躍する所あり、博士の得意や思ふべき也。

△顧みて博士の今日ある學歴及び閲歴を考査するに、大正四年愛知醫專卒業後、海軍に出仕、同四年十二月任海軍少軍醫、同六年十二月任中軍醫、同九年十二月任海軍々醫大尉、同十四年一月豫備役被仰付、同十二年二月より愛知醫大酒井内科教室に入り研究、昭和二年八月長野縣大町々立大町病院長として赴任、同年十一月學位受領、昭和三年五月同縣伊那病院長に轉じ、七年五月現住地にて開業今日に至れり。

△盛想として「思想の變化と醫師過剰により今後の醫業は一層多難なるべしと信ず、一方産業組合病院の發達と相待つて粗診粗療の恐れあり、當事者は須く醫業國營の如き醫師の生活安定を得せしめ以て進歩せる現代醫學を遺憾なく適用せしむる樣切に希望す」云々と述べ居れり。

△岐阜縣可兒郡伏見村の人、明治二十四年生る。篤學者にして其の今日ある閲歴は博士の前半生史に盡きて躍如たるものあり。殊に多年海軍生活に終始して、學を修め行を正すに極めて嚴肅なる修養を怠らざりし事實の見逃すべからざるものあり。當年不惑に入る漸く五歳、年壯の意氣益々壯にして志操堅實也。今は分別盛にて學識、手腕、人格共に壯熟して一段の重望を加ふ。性來謙遜家にして己れの才學を鼻にかけず、穩健篤實、和氣溫情に富み、能く人を愛し又人に親しまるゝの徳を有す。

◇

中山　喜美雄　△報知診療所の内科擔任中山喜美雄博士は、多年蘊蓄せる學理と臨床的手腕を發揮して、世の病者の爲めに献身的努力を拂ひつゝあることは既に世人周知の如し。學系は岡山醫專の出身にして、大正七年卒業後、瑞西ベルン大學に學び、内科の泰斗ザーリー教授並に生理學教授アッシャー博士に就て多年の研鑽を遂げ、大正十五年歸朝後更に慶大醫學部へ入り、田口博士の研究室に於て田口教授指導の下に糖尿病に就て研究を爲し、△學位主論文『糖尿病ニ於ケル「アセトン」體ノ病理化學的意義ニ關スル實驗的研究』を完成して、慶大醫學部へ提出の結果、昭和二年十一月學位を獲得せり。本論文の要點は從來糖尿病は尿の糖分にのみ重きを置いて居たのに對し、氏は呼吸器から排出される「アセトン」體が糖尿病に重大なる意義を持つてゐるといふことを研究せるものなり。氏は鳥取縣の人、明治二十八年生れにして、當年漸く不惑に入る一歳、學究的少壯の紳士也。精研に餘念なき前途の展開は更に大に期待せらる。折角の奮闘努力を望むや切也。東京市杉並區大寶寺六ノ三七六に住む。

◇

吉岡　都　△大阪市南區西清水町四三に吉岡醫院及び吉岡研究所あり、猶附屬病院として北區東野田町五丁目に櫻之宮病院の外、兵庫縣川邊郡東谷村に山間氣候療養所私立能勢病院あり。何れも院長吉岡都博士の經營にかゝり、既に古く、今や牢固たる地盤を有す。博士は大阪府立醫大の出身にして、大正五年八月卒業以來引續き母校の醫化學教室にて研究を續け、大正十四年二月大阪醫大より學位を受領せり。先是大正十二年一月以來吉岡内科醫院長として一般診療に從事すると共に、大正十三年三月以來私立能勢病院を經營せり。現在にては頭書の如く何れも院長及び所長として活躍する所あり。浪速診療界に於ける内科界の大立物として其の存在を認められ、所謂大阪醫大派の名醫博たる一人物たるを玆に推奬する所以也。

△學位論文は『「チスチン」ノ生理化學的知見補遺』が主論文にして、外に參考論文として、(1)「グルタミン」酸及「ピロリドンカルボン」酸ガ尿中窒素分配及血液形成ニ及ボス影響ニ就テ、(2)各種「アミノ」酸ガ血中殘餘窒素量ニ及ボス影響ニ就テ、(3)家兎尿中ノ窒素量ニ及ボス「アミノ」酸食餌ノ影響ニ就テ等あり。其他發表せる論著夥多、枚擧の遑なし。右主論文は蛋白礎石中唯一の硫黄含有「アミノ」酸なる「チスチン」に關する從前の諸疑問を解決せる一大論文にして、研鑽多年の結果博士會心の作と見るべく、其の學問的批判は既に學界に定評あれば玆に贅せず。博

士の出身地は大阪市にして、明治二十三年生る。學究的篤學の士として既に知られ、臨床の傍ら今猶精研に餘念なく幾多の業績を發表して學界へ貢献する所あり。而かも生來謙遜家にして少しも其の功に居らず、淡々として自ら持するに薄く、人に厚く能く後進を愛撫督勵すと云ふ。高潔の人にして敦厚質朴なる所に其の人格を窺はる。讀書家にして研究と共に品格の陶冶に餘念なきを想はしむ。

◇

松本章太　△内科松本醫院は東京市京橋區京橋一ノ一に在り、松本章太博士の經營也。氏は福島縣若松市の出身、明治九年生れにして、明治三十九年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに傳研技手となる、次で警視廳事務官就任大正二年警視廳技師となり間もなく警視廳細菌檢査所長に就任、同八年辭して現住所に開業の傍ら傳研にて研究す、其間傳染病研究所血清檢査委員被命、昭和三年一月東京帝大にて學位を授與せらる。

△學位主論文は『腸「チフス」患者ノ解熱後ノ排菌關係並ニ余ノ所謂糞尿排菌率ト本病トノ消長ニ就テなり。書畫、浪曲を趣味す。氏が開業の傍ら春風秋雨を物ともせず、幾星霜かの間、努力研鑽の結果、高齢をも忘れて終に克く學位を獲得せるは、臨床家としての其の篤學は敬服すべき也、今や老齢耳順に達し、猶矍鑠として誠心誠意以て仁術の爲め精進する所あり、既にして牢固たる地盤を有し悠々たる境遇に在るも亦偶然ならざるべし。

◇

古波倉正榮　△那覇市上ノ藏町に有名なる古波倉病院あり、内科、小兒科、レントゲン科を專門とし、超然として同地方診療界の王座を占む。院長古波倉正榮博士の經營にして、宏壯なる結構と相俟つて内容充實し、患者收容病床數二十四を有し、其他諸種の設備完全に整ふ。博士は熊本醫專出身の秀才にして、内科學を專攻し、又た細菌學の造詣深く、細菌學は名古屋醫大教授大庭士郎博士の下に專攻する所あり。學位は熊本醫大より獲得せる篤學の名醫博也。該博なる學識を有し、臨床に堪能にして多年の經驗に富み、今や獨特の手腕を發揮して益々遠近の人望を集め、打診の好評は博士の篤き聲望と相俟つて日增盛況を極め、年次成功の地盤を築きつゝあるは頗る刮目に値す。

△主論文は「實驗的ワイル氏病ニ於ケル皮膚ノ免疫ニ就テ」にして、參考論文は、(1)實驗的ワイル氏病ニ於ケル「スピロヘータ」侵入部位ノ出血ニ就テ、(2)實驗的ワイル氏病ニ於ケル腹腔局所免疫現象ニ就テ、(3)黃疸出血性「スピロヘータ」族ノ發育ト氣壓トノ關係ニ就テ、(4)實驗的胆囊内「チフス」菌出現ニ就テの四篇なり。

△學界に對し感想を述べて曰く「年々多數の研究業績發表せられ誠に意を强うするに足り又慶賀に堪えない、望むらくはモツト治療醫學方面に數段の努力あらん事を」云々と。又現下の醫師界に對しては「醫業難、何ぞそれその聲の喧しき。然り今や正に吾が醫業界の過渡期受難時代の觀がある。然し之に對應し之を打開するに最も必要なる團體としての『熱と力』!!之れが足りない。社會の推移、世界思潮の動向、經濟機構の變遷等あらゆる考察を怠らず、而して保健衞生!活眼を開いて吾々の尊い使命を自覺し高い理想を持して確固たる信念の下に、今や荒い風波にもてあそばれて、あてどもなく社會の大海をさまようてゐる所の醫業といふ一つ舟に乘つてゐる吾々五萬の醫師は一致團結堂々と前進すべきである。然らば必ずや光明の彼岸に達するであらう。それには各自がモツト〳〵熱と力を持つて、と只之れが今日の醫業界に對する所感であります」云々。著者曰く一服の清涼劑として確に傾聽に値す、要するに熱心努力の結晶は、醫業難を救ふ更生の活路たるべし。

△沖縄縣首里市山川町古波倉正青の三男にして、明治二十二年生る。同四十三年熊本醫專首席優等にて卒業、直に同校内科學教室に入る、大正元年末沖縄縣首里市に内科小兒科開業、同十四年名古屋醫大衞生細菌學教室に入りて研究、昭和三年三月學位受領、同年東京帝大醫學部稻田内科に見學、翌四年現在の那覇市に開業今日に至る。

△眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、其の輝しき閲歷は既にその前半生史に盡きて餘蘊なし、殊に其の篤學にして

沖縄健兒の爲め代表的學界に氣を吐けるは壯とすべく、博士の面目の躍如たるものあるを其間に窺はる。今は働盛にて手腕愈々圓熟の域に入り、終始努力主義を以て熱誠克く治療に從事し、患者に對しては能ふ限り誠實と親切とを盡す、其の態度の眞劍にして熱情あり溫味ある點は、特に博士の德とする長所と見るべきか。

◇

宇賀田　爲吉　△內科宇賀田醫院は、東京市赤坂區青山南町六ノ三八に在り、院長は宇賀田爲吉博士也。埼玉縣の出身、明治三十年生れにして、大正十一年東京帝大醫學部卒業後、引續き母校醫化學教室にて研究の後、新潟醫大講師として赴任し、次で再び東大醫學部稻田內科教室に勤務の傍ら研究に從事し、昭和三年四月母校より學位を受領せり、爾來現住所にて開業今日に至れり。

△主論文は『「パラメチウム」ノ發育ニ關スル生化學的研究』なり。讀書と運動を趣味す。

◇

松田　正二　△浪速診療界は近時頗る醫博人物に富む、而かも多士濟々として群雄割據の奇觀を呈す。此間に介在して獨立の地盤を築き、年次成功の域に向上發展しつゝある松田正二博士は、其の專門とする神經科（特に神經痛、ロイマチス、肛門病藥治科）を標榜して、大阪市西區信濃橋西ノ辻角に自己の診療所を設け、夙頓せる內部の設備と相俟つて日々診療に勵しみ繁忙を極めつゝあり。博士は米國クーバー醫大出身の錚々たる神經科學者にして、ドクター、オブ、メヂシンの學位を有し、大阪醫大より醫博の學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。

△學位論文は「類脂體ノ免疫原性及ビ抗原性ニ關スル血清學的研究」にして、其の學問的價値は既に學界に嘖々たる批判あれば贅せずもがな、學術の研究と共に、多年實地の經驗に富み、臨床に堪能にして卓越せる手腕を有す。其の圓熟せる打診の好評は氏が性格と相俟つて益々人氣を博し、繁榮歳と共に日增盛況を見るは、成功と云ふべし。

△感想に曰く「專門醫なるものは尠なくとも全科に對し普通醫の知る學說及び治療方法に通曉したるものが、特に自己の專門科に就て研究を重ね其の科に精通し始めて專門を標榜してこそ眞に其價値あるものなるも、專門家の或る者は自家專門科目に就ては相當熟達し居るも他の科に屬する疾患に對して殆んど無關心にて偏盲に陷りたる診斷を下し易くして、其治療を誤る事なきやを惧れしむるものあるを遺憾とす。專門を標榜せんと欲する醫師は須く全科に對する一般的知識を體得したる後にして貴ひ度い、亦は醫師が醫學校を卒業後特種の科目を二、三年間の研究實習を終へ專門家呼ばれして患者を診療するときは一方的の診療となり爲に患者疾患の總括的調和を失せしめ不幸なる經過を採り治癒を遲延せしむるが如き事例を往々耳にする處なるが故なり」云々。流石に老大家としての尊き體驗より得たる實驗談として傾聽すべきに値す。

△顧みて博士の今日ある學歷及び閲歷を公開すれば、氏は夙に米國に留學し、明治三十四年北米合衆國、クーバー醫科大學を卒業して、ドクターの學位を得、爾來引續き研究と臨床とに精進して專ら自己專門の領域に就て研鑽する所ありしが、同四十一年九月歸朝し、翌四十二年五月より金澤市にて醫術開業に從事す、斯くて大正十一年八月大阪醫大血清學教室に入り、故福原義柄教授の指導を受けて醫業の傍ら研究に從事し、昭和三年五月大阪醫科大學より學位を受領す、爾來現住所に於て醫術開業今日に至る。

△石川縣石川郡の人、明治八年生る、當年六十有一歳にして益々元氣也。學究的篤學の老紳士にして、其の閲歷は博士の前半生史に輝きて躍如たるを見る、殊に臨床の傍ら努力研鑽の結果、壯齡五十有四歳を以て名譽ある學位を獲得せる興學的精神と不撓不屈の氣慨に至りては敬服すべく、其の篤學は學界の美談として表彰に値し、頂門の一針として大に學ぶ可き也。今は手腕愈々老熟して一段の貫祿を加へ、精力旺盛にして壯者を凌ぎ、臨床に起つや、甚だ熱心にして、終始患者本位を主義とし「醫は仁術也」を平生のモツトーとして、克く誠實と親切とを盡す。其の態度の眞

摯にして熱あり力あるところ、好個の臨床家としての特徴を發揮し、人をして其の溫厚篤實なる性格と相俟つて崇高なる人格を敬慕せしむ。業餘の趣味としては苦學生への後援と笊碁を圍むとにあり。輓近博士に對する人格の尊重を高調するの今日、學德兼備せる博士の如きは、好個の臨床家として推奬し敬意を表すべき也。矍鑠たる博士の前途や猶春秋に富む、切に自重加餐を祈る。

◇

大角眞八　△東京市本所區猿江裏町に在るあそか病院長として令名ある大角眞八博士は、東大系の錚々たる內科學者にして、嘗て帝國學士院賞を授與せられたる名醫博として其の存在を認めらる。學歷は大正三年東京帝大醫科大學卒業後、傳染病研究所勤務、同七年東大物理學治療所にて研究、同八年高輪病院副院長就任、同十一年渡歐、同十三年歸朝、同十四年三月東京帝大にて學位を授與せらる、昭和四年四月帝國學士院賞受領、同五年あそか病院創立と同時に院長として就任今日に至れり。

△學位主論文は「結核補體結合反應ノ特異性ニ就テ」にして原著は獨逸文なり。外に鼠咬症の研究其他幾多の業績あり。神奈川縣の出身、明治二十年生れの當年四十有九歲也。私宅は品川區北品川一本木三四五にあり。

◇

劉　陸　一　△大阪市北野病院內科部長にして、京都帝大醫學部講師として內科學を講じつゝある劉陸一博士は、京都帝大の出身にて、大學院在學中、恩師辻寬治教授指導の下に內科學一般を研究し、母校より學位を獲得せる所謂京大派の名醫博たる一人物として囑目せらる。

△主論文は「甲狀腺ト臟器中ノ溶解性含窒素物量トノ關係」にして、(1)甲狀腺ト血液中ノ溶解性窒含素物並ニ糖量トノ關係ニ就テ、(2)甲狀腺機能ト各臟器組織內含窒素物トノ關係ニ就テの二篇より成り、參考論文として、(一)甲狀腺機能ト肝臟並ニ筋肉組織內含「グリコゲーン」「クレアチン」「クレアチニン」量ノ消長、(二)肝臟並ニ筋肉內糖原質含有量ニ及ボス「インスリン」及甲狀腺ノ影響ニ就テ、(三)甲狀腺ガ臟器組織自家融解作用ニ及ボス影響ニ就テ、(四)筋無力症ノ二例特ニ甲狀腺及副腎製劑ノ効果ニ就テ、(五)甲狀腺及「アドレナリン」ガ生體臟器內乳酸含量ニ及ボス影響等あり。

△學歷は大阪府立北野中學校より七高を經て、大正九年京都帝大醫學部を卒へ、同年七月同學部副手囑託內科教室勤務、同十一年六月京都帝國大學大學院入學、同十三年七月より十四年五月まで遞信省簡易保險醫務囑託、同十四年五月日本赤十字社香川支部病院內科醫長に就任、同年六月大學院退學、同年七月學位を授與さる、同年九月、日本赤十字社香川支部病院內科醫長を辭し、爾來再び京都帝國大學醫學部內科教室に在り。明治二十六年大阪市東區備後町二丁目五九に生る、故醫學士劉小一郎の三男にして、大阪華中堂病院長劉咸一學士の弟たり、劉四朗醫博の兄也。文學趣味の人にして殊に史蹟訪問を樂しみ、又た觀劇に親しむ。研鑽多年の學識と共に臨床の經驗に富み、卓越せる手腕は今や圓熟の佳境に入りて最も得意の時代に在り。賦性溫厚篤實、人格圓滿也。大阪市東區內淡路町二ノ一二に住む。

◇

恒次博四郎　△東京市赤坂區青山高樹町一四に恒次胃腸科醫院あり、院長恒次博四郎博士は、九大系の內科學者にして特に胃腸病の專門家として錚々たるもの也。大正元年九州帝大醫學部卒業後、引續き母校の稻田內科教室助手として同三年迄勤務の傍ら研究に從事し、同年四月より九年三月迄東京市京橋區采女町鈴木病院副院長として勤務の後、同九年四月より慶大醫學部病理細菌學教室にて同十四年六月迄研究、同十四年七月慶大にて學位を授與せらる翌十五年より現住地にて開業今日に至れり。

△學位主論文は『腸「チフス」菌及コレラ菌ノ家兎膽囊内移行ニ關スル實驗的研究』なり。テニス、圍碁を趣味す。岡山縣の出身、明治十五年生れの當年知命に入る四歳也。

◇

柴山義雄　△龍山衞戍病院に柴山義雄博士あり、東大系の逸才にして、卒業後專ら軍務に服し、現に陸軍三等軍醫正として活躍しつゝあり。博士の陣羽織は軍陣内科にして、今や斯界の一權威、而も洋々たる前途に向つて躍進を續け、現代軍務界に於て重要せらるゝ新智識也。學位は東京帝大より獲得せるが、指導教授は母校の恩師入澤達吉教授、三田定則教授、吳建教授にして内科を專攻し、特に得意とする軍陣内科にて立つ。

△學位主論文は「膵臓内分泌ニ關スル實驗的研究」にして參考論文はなし、その他自著論文中「諸種食餌並ニ藥物ノ膵臓内分泌ニ及ボス影響」は博士會心の著なり。

△飜つて博士のプロフエシヨンを顧みれば、大正九年東京帝大醫學部を卒業、同十年任陸軍二等軍醫、同十二年任一等軍醫、次いで昭和四年三等軍醫正に累進し、廣島衞戍病院を經て頭書の現職に在り、其間の官歷は敢て檢閲せざる迄もその今日ある博士の認識を得るに足る。

△大分縣大野郡大野町の人、今朝市の長男にして明治二十七年生れ、當年不惑に入る二の年壯也。篤實溫厚、一面軍隊的快刺たる氣魄に富み、應答克く禮を以てし、親しみの情自ら起る、必ずや長上を敬し同僚に親しみ、部下を愛するの情篤からん。幸ひ健康を祝すると共に國家の前途多事益々多望ならんとするの秋、切に自重加餐を祈り、倍々健闘あらんことを翹望して止まず。現住所朝鮮京城府漢江通二。

◇

細谷誠　△帝都醫博界は多士濟々として群雄割據の奇觀を呈す、而かも各科博士に就ての認識を得んとするも亦容易ならず。玆に描出して聊か品隲を試みんとする細谷誠博士は如何。現に副院長として歷史ある神經科、腦脊髓科、内科、性病科、專門の東京市淀橋區柏木三丁目に在る、山田病院及び築地診療所（京橋區築地三丁目）に在りて院長山田鐵郎醫學士を補翼し共に診療に從事しつゝあり。學系より見たる博士は、東京帝大系の内科學者として錚々たるもの特に神經、精神科、腦脊髓科を最も得意とし「腎臓ノ糖排泄機轉ニ關スル研究」を學位論文として提出し、母校より學位を得たる所謂東大派の名醫博也。經驗豐富にして臨床的手腕愈々圓熟し、打診の好評は既に斯界に定評あり。古き地盤の上に兩病院をして益々向上發展に導き、今日の繁榮を持續しつゝあるもの、博士の負ふ所亦た多大なりと云ふべし。

△顧みて其の學歷より博士の今日ある年歷を公開すれば、博士は一高を經て大正八年東京帝大醫科大學を卒へ、引續き東大醫學部入澤内科並に藥物學教室にて研究に從事し、大正十三年より山田病院副院長として勤務し今日に至る、其間昭和三年六月東京帝大より學位を授與せらる。

△讀書家にして書見を業餘の樂しみとし、研究と臨床そのものに趣味を集中して今猶精研に餘念なく、殊に勵精恪勤の人にして平生其の臨床に當るや、甚だ多忙にして席を溫むるに暇なしと雖も、終始熱心にして倦むことを知らず、患者をして信頼と尊敬との念を起さしむ。蓋し臨床家として其の態度の眞摯にして和氣溫味あるは、博士に對する人格の尊重を高調するの今日甚だ多とせざるを得ず。

◇

服部彌二郎　△東京市京橋區築地三ノ九に服部内科醫院あり。院長服部彌二郎博士は千葉醫專出身の篤學者にして、内科學一般及び生化學者として、東京帝大派の名醫博たるに恥ぢず。大正八年學校卒業後直ちに東京帝大醫學部内科學教室介補を命ぜられ、確居龍太助教授に師事して内科學一般を研究す、同十年一月より生化學の指導を柿内

三郎教授に受く、同十二年四月醫化學教室に轉じ生化學の研究を續く、同年十二月愛知醫大醫化學教室に轉勤、レオーア、ミハエリス教授に師事して物理化學一般の研究に從事す、翌十三年四月再び東京帝大醫化學教室に復歸し生化學の研究を續く、大正十三年一月以降東京市駒込病院醫局に轉じ、二木謙三教授の指導を受け一般傳染病學及び內科學並に臨床黴菌學を研究せり、同十四年六月東京帝大にて學位を授與せらる、其後獨立開業今日に至る。

△主論文は獨逸文の原著なるが『X 及 B「メチルグルコシード」ノ「タカ、インヴェルターゼ」ニ對スル關係』と題し二篇より成る。參考論文は、(1)本邦老人ノ榮養研究、(2)バジット氏（骨）病ノ一例附二、三ノ臨床知見補遺、(3) Chondrodystrophia foetalia ノ一剖檢例等。其他論著夥多あり。出身地は三重縣三重郡三重村山王一色にして、明治二十九年生る、當年漸く不惑に達せる少壯也。讀書家にして特に理化學に關する研究を好み、洋畫を能くし、洋樂を聽くを樂しみ、又た各種運動を好む。專門に至りては學問、經驗共に圓熟して今は最も得意の時代に入る。

◇

柳金太郎　△東京帝大醫學部講師柳金太郎博士は、當世博士界中に特筆大書すべき最も異彩に富む篤學の士也。氏は明治二十九年世のドン底なる下谷萬年町に生る、父は電氣工夫にて母も父を助け、生れながら家貧うして萬年小學校を卒ゆるや、近角氏の求道會館より豐山中學に通ひ、その明敏なる頭腦と好學の志を認められて一高に進み更に東京帝大醫學部へ進學して、大正十年大學を首席卒業するや、爾來母校の島薗內科に止まりて只管研究に沒頭し努力研鑽の結果。

△學位主論文「各種部分的榮養障碍並ニ人「ヴイタミン」B 缺乏症及ビ脚氣ニオケル基礎新陳代謝ノ比較」及び參考論文十篇を完成して、昭和三年六月母校より學位を獲得せり。其後引續き島薗內科に勤務し、講師として誠心誠意を籠めて專ら學生指導の任に當り傍ら今猶自己の研究に精進しつゝあり。年華未だ少壯にして潑剌たる前途の展開や頗る囑目すべき也。

△氏が苦學奮鬪の跡を顧みれば轉た感慨無量の感なき能はず、しかも小學より大學まで終始首位を通したといふ秀才振りは如何に頭腦の明晰なるかを物語るもの也。學位受領當時謙遜なる氏は語りて曰く「すべて人の力です、無條件に私を助けて勉强させて下すつたのですから、ほんとに苦痛の連續です、島薗內科になつてから特選給費生に選ばれたので全く助かりました、今でも父は電氣工夫をつゞけて私を食はしてゐてくれるのです。私としては病院の經營とか金まうけなどは不得手ですから、ずつと勉强をつゞけたいのですが、だといつていつまでも父を働かす譯に參りません、父は喜んで死ぬまで働くから勉强しろと力づけてくれますが」云々と。父の尊い愛を涙で語る態度の健氣さは純眞なる氏の性格を表はしたるものにして、其の人と爲りを窺はれ敬意を表せざるを得ず。體軀肥大にて短身の方なるも、學者タイプの風姿に威嚴を存し靄々たる溫容を藏す、誠に圓滿主義の學者也。スポーツに趣味を有しベースボールでもテニスでも何んでもやる方なり。前途有爲の少壯紳士、幸に健康と共に折角の精研奮鬪を祈るや切也。東京市小石川大塚上町一九に住む。

◇

藤井靜雄　△群雄割據の帝都診療界に進出して、四谷區舟町四〇番地に新裝せる陣容を張り、內科院長として獨自の手腕を發揮し、打診の好評は今や遠く北は北海道、南は臺灣に及び年次成功の地盤を築きつゝあるは、藤井靜雄博士也。東大の出身にて、恩師稻田龍吉教授に就きて、內科學の蘊奧を究め、十ケ年努力研鑽の結果、母校より學位を獲得せる所謂東京帝大派の名醫博なるが、特にその最も得意とせる血壓亢進症、腎臟病、心臟病、腦溢血、動脈硬化症等に至りては、博士獨特の評判嘖々たるを聞くや既に久矣。

△更に學歷より見たる博士は、山口縣立山口中學校及び第七高等學校造士館を經て、大正九年東京帝大醫學部卒業、

直ちに副手として病理學教室にて、病理學專攻する事滿六ケ年、二千人の屍體解剖にて研究を積み、其後稻田內科教室に轉じ、內科學一般の研究に從事し、昭和三年七月東京帝大より學位を受領す。其の間日本醫科大學教授を兼任し昭和四年現住地に町會有志の切望辭し難く一般診療を開始し今日に至れり。

△學位主論文は「血壓亢進症ノ病理並病理解剖學的研究」にして、外に參考論文として、(1)胸腺黴毒ニ就テ、(2)レクゼンハウゼン氏病ニ就テの二篇あり。猶其の後の論文及著書の內、(1)實驗的體溫上昇ニ於ケル腎臟ノ變化ニ就テ、(2)蛋白尿性網膜炎ニ就テ、(3)姙娠ト腎臟疾患ニ就テ、(4)高血壓病ノ知識、等は博士會心の作と見るべく、以て氏の學術方面に對する研究心の旺盛なる一班を窺はる。

△博士は山口縣豐浦郡豐田中村浮石、大內氏の家臣藤井治部之進信親を先祖に持ち、長州義民傳の主頭藤井角右衞門の八代目に當る、藤井喜左衞門の長男、明治二十七年生れにして、當年不惑に入る二歲也。少壯の意氣に燃え、研究心潑剌たるものあり。眞面目なる學究的溫厚の紳士にして、該博なる學識と共に、多年臨床的經驗を積み、今は働盛にて手腕漸く圓熟の域に入る。殊に患者に對する誠意、親切、熱情、等々は、淸廉なる人格と相俟つて評判良く、一面又た人に接するにも城府を設けず、恬淡として快活に人を容れ能く愛す、其の圓滿なる應待振りは親しむべく、人をして快感を覺えしむるの德を有す。蓋し博士の長所と見るべきは此邊の所なるべし。研究以外の趣味としては、尺八を能くし、古く大正七年免許皆傳師匠となり號を霞陵と呼ぶ、當邦樂界に躍進し、今日尙邦樂界の爲め盡す處あり。更に碁を好み、時に擊劍に興じて心身鍛錬を怠らず、學生時代武德殿に立ちたる剛健今尙續く。令夫人の常盤津も有名にして妙技其の極に達し、令孃の舞踊の天才と併せて博士に負ふ處亦多からん。

◇

小林藤治

△朝鮮淸津府明治町にて內科特に呼吸器專門を以て自宅開業せる小林藤治博士は、神奈川縣の出身明治二十一年生れにして、大正二年熊本醫專卒業後神奈川縣津久井郡に開業、傍ら東京市赤坂區靑山岩男博士に就て大正八年より十五年迄內科研究、尙大正十年より岡山醫大醫化學教室にて昭和三年六月迄研究、昭和三年六月より東京府下原宿町に開業、同年六月岡山醫大にて學位を授與せらる、同時に下谷區仲御徒町四ノ一〇に移轉小林內科醫院開設、其後現住地に移轉開業せり。

△學位主論文は「家兎實驗的鹼積黃疸及膽汁酸注入時ニ於ケル五單糖尿ニ就テ」なり。讀書家にして書見を業餘の趣味とし、書畫の觀賞を好む。

◇

龍治節三

△倉敷市榮町に龍治內科醫院あり、院長は龍治節三博士也。レントゲン、太陽燈、ソラツクス燈其他內部の施設完備し、超然として一流に在り。博士は岡山醫專出身の內科學者にして、特に呼吸器病を最も得意とし、母校の恩師篤教授、金子教授、稻田教授の指導を受くる所厚く、岡山醫大より學位を獲得せり。開業日淺少なれども、經驗に富む手腕は愈々其の精彩を發揮して餘す所なく、打診の好評は益々遠近の人望を集め、繁榮歲と共に成功の地盤を築きつゝあるを觀る。

△主論文は「箆形二口蟲病治療研究」にして三篇より成る。參考論文は、(1)箆形二口蟲病ニ於ケル補體結合反應診斷的價値、(2)箆形二口蟲豫防ニ關スル知見補遺、(3)箆形二口蟲病患者並ニ實驗的箆形二口蟲病家兎ニ於ケル血液處見、(5)「スチゴナール」ノ箆形二口蟲病ノ臨床的方面、(4)箆形二口蟲病ニ及ボス作用ニ關スル臨床的及實驗的研究、(6)「ハイデン」第六六一號（アンチモーサン）ノ箆形二口蟲病ニ對スル治療的効果ニ關スル臨床的觀察、(7)次亞硫酸曹達ニヨル腎抹能檢査法ノ臨床的價値ニ就テの七篇あり。

△岡山縣都窪郡福田村妹尾崎龍治彥一郎の三男明治廿八年生れにして、大正七年岡山醫專を卒へ、直ちに岡山縣立病

院内科、岡山醫專附屬醫院内科、次で岡山醫大附屬病院内科助手に任ぜられ、同十二年四月岡山醫大附屬産婆看護婦養成所講師囑託、同十五年五月岡山醫大内科學講師囑託となる、昭和三年十月岡山醫大より學位受領、翌四年九月職を辭し現住所に内科醫院を開設し今日に至る。讀書家にして書見を業餘の趣味とし、又旅行を好む。年齒少壯にして春秋猶頗る豐富なれば、潑剌たる前途は向後の活躍と相俟つて益々有爲多望なり。因に柳原英醫博は從姉妹婿、陶守三思郎醫博は妹婿の間柄なりと。

◇

岡　通　△兵庫縣御影町甲南病院にある岡通博士は、東京帝大出身の内科學者にして、大正六年卒業後直ちに東北帝大醫學部助手に任ぜられ、熊谷岱彌教授に師事す、同九年四月助手を辭し片倉病院副院長内科主任として赴任し、同十一年十二月職を辭し直ちに東北帝大醫學部講師を囑託せられ、翌十二年五月東北帝大助教授に任ぜらる、同十四年六月東北帝大にて學位受領、其後助教授を辭し現職に在り、其間海外に留學せり。

△學位主論文は「肝臓機能檢査法ニ關スル知見補遺」にして、獨逸文の原著三篇より成る、外に參考論文四篇あり。出生地は宮城縣宮城郡七北田村字新通にして、明治二十五年生る、當年不惑に入る四歳也。旅行、乘馬を趣味とす。人と爲り質朴敦厚にして、穩健自ら持し、人に篤く後進を待つに寛厚にして親切を以てす。兵庫縣武庫郡住吉村鴨子ヶ原一八四九に住む。

◇

平川廣　△埼玉縣武州病院長として平川廣博士あり。京都帝大派の名醫博にして、内科殊に胃腸病の大家としての名聲は既に江湖に著聞す。

△主論文は「細菌ニ及ボス色素ノ影響」にして、(1)細菌ノ生體染色ニ就テ、(2)生體染色陽性ナル色素培地ニ累代移植培養セラレタル病原菌ノ生物學的研究、(3)生體染色陽性ナル色素培地ニ累代移植培養セラレタル病原菌ノ血清學的研究、(4)色素ノ細菌發育ニ及ボス影響ニ就テの四篇より成る。參考論文としては、(1)細菌ノ色素還元作用ニ關スル研究(2)窒扶斯菌特異培地ニ就テ、(3)これら孤菌成分ノミヲ以テ培養世代ヲ重ネタル非病原性孤菌ノ研究、(4)大腸菌鑑別ノ補助劑トシテノ色素ノ檢索、(5)植物細胞ノ生體染色ニ就テ、(6)非特異性免疫現象ニ關スル研究、(7)狂犬病毒ニ及ボス色素ノ影響ニ就テ、(8)牛膽汁ヲ以テセル血清學的研究、(9)牛膽汁ニ培養世代ヲ重ネタル細菌ノ研究外多數あり。

△學歴は七高を經て大正十年京都帝大醫學部を卒へ、直ちに同學部松尾内科に入り内科を研究し、同十一年同學部微生物學教室に入り清野教授指導の下に血清學細菌學を研究し、同十四年四月再び松尾内科に入り松尾教授の指導を受く、同年八月母校にて學位を授與せられ、同年十二月同内科を辭し郷里鹿兒島市に於て醫業に從事す、其後現職に就任今日に至れり。出生地は鹿兒島縣川邊郡萬世町にして、明治廿八年生る。當年四十有一歳の働盛り也。旅行及びテニスを趣味す。壯鋭有爲の臨床家にして、謹嚴高邁なる人格者たるを喜ぶ、川越市六軒町一五七に住む。

◇

山内正　△愛媛縣新居濱町に山内醫院あり、内科專門を以て著聞す。院長は山内正博士也。岡山醫大出身の新進なる内科學者にして、恩師稲田進教授指導の下に内科學を、同奥島貫一郎教授指導の下に藥理學を研究し、母校より學位を獲得せる所謂岡山醫大派の少壯醫博也。開業日淺少なれば未だ理想的成功の域に達せざるまでも、經驗に富む新手腕を發揮して益々遠近の人望を集め、打診の好評と相俟つて年次堅實なる地盤を築きつゝあり、而かも年齒未だ少壯なれば潑剌たる前途は、向後の活躍と相俟つて更に大に期待せらる。

△主論文は「諸種哺乳動物膀胱ノ末梢運動神經主宰ニ對スル藥理學的研究」二篇にして、參考論文は「ヨヒンビン」ノ末梢性作用ニ就テ、外八篇あり。就中「ヨヒンビン」ノ藥理學的研究は博士の最も得意とする論文なり。

△愛媛縣宇摩郡土居村の人、山田遠助の二男にして、明治三十三年生る、大正十二年岡山醫大卒業後、引續き同大學藥理學並に內科學教室にて研究、昭和三年十月岡山醫大より學位受領、同五年六月より現住地に內科專門にて開業今日に至る。研究以外文學趣味豐かにして、殊に俳句を能くし十夜を號とす。月刊俳句雜誌「遍路」を編輯發行す。春秋猶頗る豐富にして、精研努力相俟つて醫療に餘念なき將來は益々輝かし。

◇

若林英次　△兵庫縣三田町五四に內科專門を以て著聞し、特に消化器病及び呼吸器病を最も得意とし、超然として同地方診療界を風靡する、若林內科醫院長として若林英次博士あり。京大系の內科學者にして、內科界現代の權威たる恩師中西龜太郎教授及び松尾巖教授に就て斯學の蘊奧を究め、學術研究の爲め嘗て歐米を視察し、母校より學位を獲得せる斯科界近來の名醫博也。其の專門に至りては、研鑽多年、學深遠にして、經驗に富み、今や玲瓏たる手腕を發揮して益々遠近の人望を集め、繁榮歲と共に成功の地盤を築きつゝあり。

△主論文は「實驗的肝臟機能障碍時ニ於ケル色素ノ排泄ニ就テ」にして四篇より成る、外に、參考論文としては、(1)結腸癌ノ統計的研究、(2)肝臟ノ囊樣腺腫ノ一例、其他共著二篇あり。

△感想の一片を寄せて曰く「醫者の生活難の叫ばれる現在に於ては同業者、一致的行動、鞏固なる團體をつくることが非常に必要である、どーも醫師團體は他の團體に比し一致的に活動する力が弱いようだ、それは今迄生活が比較的樂であつたためだ、この際一日も早く鞏固なる立派な團體をつくり醫權の擴張に力めねばならぬ、然らざれば非常な窮境に陷ることは明々白々だ、今の日本醫師會の有樣はどうだ、よい笑ひものだ」云々。

△更に學歷より見たる博士は三高を經て、大正四年京都帝大醫科大學を卒へ、引續き元教授中西龜太郎博士に就き內科學一般研究、同八年十月より自宅開業、同十四年十月京都帝大大學院に入學、教授松尾巖博士の指導の下に內科殊に消化器病に就き研究、昭和三年十月學位受領、同二年十二月歐米へ學術視察に赴き翌三年十二月歸朝、四年一月より自宅にて再び開業今日に至る。

△博士は現住地兵庫縣有馬郡三田町に本籍を有す、同郡長尾村、三谷定三郎の三男にして若林元益の養子たり、三谷家は地方の豪家にして歷代酒造業を營む、若林家は藩主九鬼子に仕へ醫を業とすること連綿として十二代、志州鳥羽の出身なり。博士は明治二十一年生れ、當年不惑に入る八歲、益々元氣にして精力甚だ旺盛也。學究的溫厚なる眞面目の紳士にして、好箇の臨床家としての特徵を具え、人格高邁にして篤實、人をして敬慕せしむるの德を有す、殊に博士の最も長所と見るべきは、健康と活動より發露する臨床に對する熱心と、眞劍にして克く誠實と親切とを盡す點にあり、多趣味の人にして長唄、社交ダンスを能くし、芝居、キネマ、野球、庭球等一般のスポーツに興味を持ち、又旅行を好む。

◇

鮫島啓之助　△東京市麻布區笄町一四にて自宅開業、內科專門を以て既に十數年の歷史と共に牢固たる地盤を有し、大衆より多大の信賴と尊敬とを受けつゝあるは鮫島啓之助博士なるか。從五位勳四等海軍々醫中佐にして、東大派の名醫博たる老大家として帝都診療界に其の存在を認めらる。學歷は五高を經て、明治三十六年東京帝大醫科大學を卒へ、直ちに任海軍中軍醫、同時に海軍々醫學校練習學生被仰付、同三十七年二月補橫須賀海軍病院附、同三十八年八月任大軍醫、補舞鶴海軍病院附、同四十二年二月より四十四年四月まで、東京帝大大學院にて修學、同四十四年四月補橫須賀海軍病院附、同年十二月任軍醫少監、大正三年十一月補海軍々醫學校教官、同五年九月補佐世保海軍病院附、同六年十二月任軍醫中監、同七年十二月病氣に依り豫備役被仰付、期間三十七八年戰役の功に依り叙勳五等

金六百圓授賜、次で大正三四年戰役の功に依り旭日小綬章及金四百圓授賜、退役後臺灣金瓜石田中鑛業所附屬病院長として大正十年七月まで奉職、それより東京帝大傳研に於て同十二年十二月まで實驗病理學研究、次で現住所に於て開業今日に至れり、學位は大正十四年八月東京帝大にて授與せらる。

△主論文は『「ヂアール」並に「ヴエロナール」中毒ニ關スル實驗的研究』にして、參考論文は「蟲卵沈着ニ因スル腸腺異所ニ就テ」なり。鹿兒島縣川邊郡萬世町小湊鮫島一の長男にして、明治八年生る、當年耳順に入る一歳、健康にして益々元氣也。其の專門に精通し、斯科の大家としての聲價は此に贅せずもがな、當世博士界中の老大家として其の健康を祝し敬意を表す。

◇

櫻井喜吉　△志立傳的篤學者にして、敬虔なる學究的臨床醫家として、玆に櫻井喜吉博士を推奬し聊か品隲を試みんとす。博士は五高醫學部出身の錚々たる內科學者にして研鑽多年の後、終に克く鴻大なる學位論文を完成し、京都帝大より學位を得たる斯科界近來の名醫博として其の存在を認めらる。現に京都市問屋町正面上ルに於て自宅開業し、內科專門を標榜して日々診療に從事す、特に其の最も得意とする呼吸器、神經系、新陳代謝病に至つては、玲瓏たる打診の評判高く、老熟せる獨特の手腕と相俟つて益々篤き聲望を博す。既にして牢固たる地盤は拔くべからずして悠々たる位地に在り。殊に特筆すべきは博士の潑剌たる興學心にして、春風秋雨、幾星霜かの間、開業の傍ら努力奮鬪、終始貫行、獨學にて終に克く研究の業績を大成し、高齡五十有九歳を以て榮譽ある學位を獲得せるは、當世博士界中稀有の美談として表彰に値す。而して又た其の篤學に據る尊むべき精神氣慨は頂門の一針として學ぶべき也。

△主論文は『「クリサロビン」ノ腎臓ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究』及び『「グリサロビン」中毒ニ因ル家兎肝臓ノ變化ニ就テ』の二篇より成る。外に參考論文としては、(1)「クリサロビン」ニ關スル研究（第一報）「クリサロビン」ノ刺戟性除去ニ就テ、(2)「クリサロビン」に關スル研究（第二報）「クリサロビン」ノ弱「アルカリ」ニ對スル變化ニ就テ、(3)吸收セラレタル「クリサロビン」ノ家兎血液像ニ及ボス影響ニ就テ、(4)腎臓障害ト赤血球灰降速度トノ關係ニ就テの四篇あり。猶他の論文中、(1)陰部濕疹及頭癬ノ療法、(2)火鉢煖室法ノ危險ニ就テ、(3)疫痢ノ治療法、(4)蕁麻疹ノ治療法ニ就テ等は博士會心の作と見るべき也。

△感想に曰く「醫師界に對しては近來文化の進歩に伴ひ種々の方面より業務上の壓迫を受け、特に社會施設とか、或は救療事業等なる美名の下に醫師にあらざるものが低廉治療を標榜する診療所を設け、所謂羊頭を揭げて狗肉を鬻ぐの徒續出して商業的醫業を營むの惡弊各地に蔓延し醫風日に頽廢せんとす。是れ國家の爲に寒心に耐へざる所なり、之れが對策として速に衞生局を設置する必要眞に迫れり。其他衆議院、府、縣、市會等に同業者を出來る丈け多く送つて此の弊風を除くに努めざれば醫師の社會上の地位は日に低下するに至らん」云々。醫師界淨化の叫び酣ならんとするの秋、一服の淸凉劑として三思傾聽に値す。

△京都市現住地に本籍を有し、明治三年生る。同二十五年五高醫學部（在長崎）卒業、同二十七年五月現住地に於て醫術開業の傍ら京都警察醫、檢疫官、貞敎小學校醫、恩給顧問醫、京都府衞生顧問兼細菌檢査所主任、京都府立第二高女校醫兼囑託敎授等の囑託を受く、今や殆んど公職を辭し臨床方面に力を注ぎ居るも、尙ほ學校醫の職にありて、現に市長を會長に推戴せる京都市學校醫會副會長たり。昭和八年の紀元節の佳節に當りて敎育功勞者として府知事より表彰さる。

△當年耳順に入る六歳にして、老齡猶矍鑠として意氣益壯也。顧ふに其の今日あるは博士の前半生史に輝きて躍如たるを見る、殊に三十數年間それは文字通り獻身的の奉仕に終始したる功績は偉大にして、就中學校衞生の上に大なる